史跡門田貝塚環境整備事業報告書

―史跡保存修理（一般）事業―

1998

岡山県邑久町教育委員会

史跡門田貝塚環境整備事業報告書

―史跡保存修理（一般）事業―

1998

岡山県邑久町教育委員会

序

邑久町は、岡山県南東部の瀬戸内海に面している人口約２万人の町であります。県下でも有数な穀倉地といわれる肥沃で広大な千町平野を中心に古代からの重要な遺跡・文化財も多く残されており、邑久郡の中心的位置を占めてきました。本町では「文化のかおり高い町づくり」のため、残された多くの文化財を後世に継承していくとともに、町づくりの核として位置づけ、文化財保護行政を進めているところであります。

このなかで、史跡門田貝塚は、昭和８年、地元の研究者である長瀬　薫氏により発見され、貝塚から出土した弥生時代前期の土器は瀬戸内海沿岸地方の指標とされ「門田式」として命名され学術的に重要な遺跡として知られていました。さらに昭和60年には、貝塚としては岡山県では２番目となる国史跡に指定されるに至りました。

このため、邑久町は史跡門田貝塚の活用を図るべく、文化庁・岡山県の補助を受け平成４年度から９年度までの６ヶ年にわたり環境整備事業を進め、このたび「門田貝塚史跡公園」として郷土の歴史学習の場・町民の憩いの場として現代に甦りました。

今後、「門田貝塚史跡公園」が多くの方々に愛され、広く活用されることを切に希望するところであります。

終わりに、多年のあいだ、史跡門田貝塚の保存のためにご協力を賜りました地権者や地元関係者をはじめ、環境整備を実施するにあたりご指導くださいました文化庁、岡山県教育委員会、史跡門田貝塚史跡整備委員会、邑久町文化財保護委員会、その他町内外の関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

史跡門田貝塚史跡整備委員会
委　員　長
邑　久　町　長
木　村　惠　昭

例　　言

1．本書は、史跡・門田貝塚（岡山県邑久郡邑久町尾張字門田220外11筆）の環境整備事業報告書である。

2．本事業は、文化庁ならびに岡山県から国庫補助金（史跡等保存整備・一般）、県費補助金の交付を受け、邑久町が主体となり、平成４年度から平成９年度にわたって実施した。

3．本事業は、邑久町教育委員会が実施した。この間、史跡門田貝塚史跡整備委員会での審議を経て、具体的な設計業務については、株式会社環境事業計画研究所に委託した。

4．本書の編集と執筆は、邑久町教育委員会社会教育課の馬場昌一が作成した原案に対して鎌木義昌先生をはじめとする史跡門田貝塚史跡整備委員会の委員の方々の教示助言を得て作成された。整備工事部分の図面については、設計監理受託者の株式会社環境事業計画研究所の協力を得た。また、空中写真の撮影は、倉敷ラジコンクラブ代表堀家純一氏によるもので、本書掲載にあたり快く写真を提供していただいた。

5．保存整備事業を進める上で、遺構の復元を図るため平成４年度確認調査を実施した。詳細な発掘調査報告書は過去の調査分の資料も含め現在準備作業中であり、本報告書では復元遺構に係る概略にとどめている。

6．第２図は国土地理院発行の１/25,000地形図「西大寺」・「備前瀬戸」に加筆したものである。

7．保存整備事業にかかる遺構確認調査の出土遺物、写真、実測図及び整備工事の設計図等は邑久町教育委員会に一括保管している。

8．今回の環境整備事業を進めるにあたり、文化庁文化財保護部記念物課加藤允彦文化財調査官（現：奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工学研究室長）、文化庁文化財保護部記念物課本中　真文化財調査官ならびに岡山県教育委員会の指導のもとに、後に述べる、史跡門田貝塚史跡整備委員会委員各位から指導助言を得たほか、下の方々及び機関の協力を得ました。記して感謝申し述べます。（敬称略）

秋山浩三、井上　弘、大久保徹也、大久保雅子、小郷利幸、岡本明郎、岡本寛久、亀田修一、鎌木英子、小林博昭、草原孝典、葛原克人、渋谷泰彦、武田恭彰、田所　真、谷山雅彦、中野雅美、中野倫太郎、正岡睦夫、村上幸雄、中山俊紀、仲井光代、堀家純一、福田正継、福本明、森　宏之、山本悦世、山磨康平

愛知県清洲貝殻山貝塚資料館、岡山県古代吉備文化財センター、小浜市教育委員会、倉敷埋蔵文化財センター、榊山建築設計事務所、生活パークオクヤマ本店、総社市教育委員会、千葉市立加曽利貝塚博物館、津山市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館、パリノ・サーヴェイ株式会社、東広島市教育委員会、福岡市教育委員会、北房町教育委員会、ゆめタウン邑久店

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次

第1章　はじめに
第1節　史跡門田貝塚の位置と環境…… 1
第2節　環境整備に至る経過…… 8

第2章　整備基本計画・基本設計
第1節　整備基本計画策定の経過 …… 15
第2節　基本計画の理念と方針 …… 16
第3節　基本計画の概要 …… 18

第3章　整備実施設計
第1節　整備実施事業の経過 …… 24
第2節　史跡門田貝塚史跡整備委員会 …… 40

第4章　整備工事概要
第1節　敷地造成 …… 44
1　敷地造成工
第2節　復元施設 …… 47
1　貝塚復元
2　溝復元
3　竪穴住居復元
第3節　園路広場 …… 82
1　自然土舗装
2　擬石平板舗装
3　カラー舗装
第4節　管理施設 …… 85
1　雨水排水施設工
2　給水設備工
3　電気設備工

第５節　休養・便益施設 …… 96
1　ベンチ
2　水飲み
第６節　教養施設 …… 98
1　史跡標柱
2　説明板
3　樹木ラベル
第７節　修景施設…… 103
1　植栽工

第５章　確認調査概要
第１節　調査経過…… 110
第２節　調査区の概要…… 115
第３節　遺構の概要…… 125
第４節　まとめ…… 131

第６章　環境整備事業のまとめ …… 137

付　　載
付載１　門田貝塚土壌花粉分析報告 ……139
付載２　建築材製品別樹種一覧表…… 155

挿　図　目　次

第１図　門田貝塚位置図（黒丸印）
第２図　門田貝塚の位置と周辺遺跡分布図（１/25,000）
第３図　発掘調査地点（「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告55」1983を一部改変）
第４図　史跡指定範囲・公有化図（１/1,000）
第５図　地域区分計画図
第６図　造成計画図
第７図　施設計画図
第８図　雨水排水計画図
第９図　給水設備計画図
第10図　電気設備平面図
第11図　植栽計画図
第12図　実施計画全体平面図（１/600）
第13図　敷地造成平面図（１/600）
第14図　貝塚・溝復元平面図（１/600）
第15図　貝塚・溝復元断面図（１/20）
第16図　溝復元通路部断面図（１/20）
第17図　柵工断面図（１/20）
第18図　横寺遺跡出土家形土製品（１/２）
第19図　竪穴住居１平面図（１/60）
第20図　復元住居柱配置図（１/60）
第21図　復元住居梁伏図（１/60）
第22図　基礎伏図（１/60）
第23図　基礎配筋図（１/60）
第24図　梁伏図（１/60）
第25図　小屋伏図（１/60）
第26図　下部垂木伏図（１/60）
第27図　上部垂木伏図（１/60）
第28図　Ｄ通矩計図（１/60）
第29図　４通矩計図（１/60）
第30図　Ｄ通矩計図（１/60）
第31図　４通矩計図（１/60）
第32図　復元住居床平面図（１/60）
第33図　復元住居屋根伏図（１/60）
第34図　自然土舗装詳細断面図（１/20）
第35図　擬石平板１・２平断面図
第36図　カラー舗装断面図（１/20）
第37図　雨水排水施設平面図（１/600）
第38図　給水設備平面図（１/600）
第39図　電気設備平面図（１/600）
第40図　排水管埋設工断面図（１/20）
第41図　皿型側溝断面図（１/20）
第42図　Ｌ型側溝断面図（１/20）
第43図　Ｕ型側溝断面図（１/20）
第44図　集水枡Ｂ断面図（１/20）
第45図　集水枡Ｄ平・断面図（１/20）
第46図　給水管埋設工断面図（１/20）
第47図　給水管（コンクリート巻）断面図（１/20）
第48図　止水栓断面図（１/20）
第49図　散水栓断面図（１/20）
第50図　電線管埋設工断面図（１/20）
第51図　分電盤（１/30）
第52図　照明灯（１/40）
第53図　引込柱（１/40）
第54図　ベンチ平・断面図（１/60、１/30）
第55図　水飲み平・断面図（１/30）
第56図　樹木説明柱正・断面図（１/40）
第57図　史跡標柱正・側・平面図（１/40）
第58図　史跡公園案内板正・断面図（１/40）
第59図　史跡総合説明板正・断面図（１/40）
第60図　貝塚説明板正・断面図（１/40）
第61図　住居・土器説明板正・断面図（１/40）
第62図　耐根シート設置平面図（１/600）
第63図　植栽平面図（１/600）

第64図　植栽枡平・断面図（1/60）
第65図　発掘調査区全体図（1/600）
第66図　T 1 平・断面図（1/60）
第67図　T 2 平・断面図（1/60）
第68図　T 3 竪穴住居 1 平・断面図（1/60）
第69図　T 4 平・断面図（1/60）
第70図　T 5 平・断面図（1/60）
第71図　T 6 貝塚平・断面図（1/60）
第72図　T 7 平・断面図（1/60）
第73図　T 8 平・断面図（1/60）
第74図　T10平・断面図（1/60）
第75図　T 6 貝塚・溝 1 出土土器（1/4）
第76図　T10溝 2 出土土器（1/4）
第77図　T 6 貝塚・溝 1 出土石器
（1/2・1/3）
第78図　T10溝 2 出土石器（1/2）
第79図　T10溝 2 出土石器（1/3）
第80図　T 5 溝 1 出土石器（1/3）

図　版　目　次

図版１　門田貝塚周辺の航空写真（１/10,000）　1996．５．26撮影

図版２　門田貝塚周辺航空写真（昭和38年頃）

図版３　長瀬　薫氏

図版４　邑久考古館内部（昭和33年）

図版５　門田貝塚航空写真（昭和57年）

図版６　基本計画鳥瞰図

図版７　１　竪穴住居１発掘調査状況（北から）　２　管理用通路橋施工状況（南から）
　　３　史跡標柱制作状況　４　磁器製総合説明板制作状況

図版８　１　耐根シート施工状況（西から）　２　素掘側溝・板柵枡施工状況（東から）
　　３　平成５年度工事完成状況（南西から）

図版９　１　雑割縁石施工状況（南から）　２　擬石平板舗装施工状況（北東から）
　　３　ベンチ基礎施工状況（南から）　４　皿型側溝施工状況（南から）
　　５　集水枡・排水管施工状況　６　植栽枡施工状況（南東から）
　　７　平成６年度工事完成状況

図版10　１　擬石平板舗装施工状況（北から）　２　カラー舗装施工状況（北から）
　　３　低木地被植栽工施工状況（西から）　４　高木植栽工施工状況（北から）
　　５　貝塚復元工施工状況（南東から）　６　大溝復元工施工状況（東から）
　　７　平成７年度工事完成状況（北西から）

図版11　１　自然土舗装施工状況（南から）　２　ロープ柵施工状況（北西から）
　　３　木製ベンチ施工状況（北から）　４　貝塚保護工施工状況（北から）
　　５　史跡標柱施工状況（西から）　６　磁器製土器説明板制作状況
　　７　平成８年度工事完成状況（北西から）

図版12　１　自然土舗装施工状況　２　芝生舗装施工状況
　　３　復元住居施工状況　４　復元住居施工状況
　　５　説明板設置状況　６　説明板設置状況
　　７　平成９年度工事施工状況

図版13　史跡整備委員会現地指導状況（平成９年６月２日）

図版14　１　施工前（北から）　２　施工前（北東から）
　　３　真砂土搬入状況（北西から）　３　真砂土搬入状況（北西から）
　　５　ブルドーザー敷均し状況（西から）　６　ブルドーザー敷均し状況（南西から）
　　７　振動ローラー転圧状況（北から）　８　振動ローラー転圧状況（西から）

図版15　１　貝塚復元施工前状況（南から）　２　コンクリート打設状況（南から）
　　３　調整モルタル打設状況（南から）　４　出土貝殻受取
　　５　骨材処理状況（リトリン処理１回）　６　骨材処理状況（リトリン処理２回）

	7	混練り状況	8	ミキサー混合状況（種石及び貝殻）
図版16	1	種石及び貝殻塗布状況（南から）	2	種石及び貝殻塗布状況（南から）
	3	表面遅延剤散布状況（南から）	4	養生状況（南から）
	5	洗い出し状況（南から）	6	表面保護剤散布状況（南から）
	7	貝塚復元完成状況（北から）	8	復元貝塚保護柵設置状況（北から）
図版17	1	溝復元施工前状況（南東から）	2	下地処理状況（東から）
	3	下地調整状況	4	調整モルタル打設状況（東から）
図版18	1	ミキサー混合状況	2	練り込み状況
	3	種石塗布状況（東から）	4	表面遅延剤散布状況（東から）
	5	洗い出し状況（南東から）	6	表面保護剤散布状況（南から）
	7	溝復元完成状況（南東から）	8	溝復元完成状況（南から）
図版19	1	建築材搬入状況	2	建築材搬入状況
	3	建築材加工状況	4	表面焼き処理状況
	5	柱の仕口	6	周堤壁板
	7	施工前（南から）	8	床面コンクリート打設状況（南西から）
図版20	1	周堤型枠設置状況（南西から）	2	周堤壁板取付け状況（南西から）
	3	柱の建て込み状況（南西から）	4	桁渡し状況（南西から）
	5	棟木の取り付け状況（南西から）	6	垂木の取り付け状況（南西から）
	7	周堤・小屋組み完成状況	8	足場の仮設状況（南西から）
図版21	1	葛弦巻き状況	2	エツリの取り付け状況
	3	屋根下地完成状況（北から）	4	茅すぐり状況
	5	化粧茅結束状況	6	化粧茅が葺かれた状況（北東から）
	7	軒付け状況	8	軒部分の茅葺き状況（北東から）
図版22	1	平葺き状況（北東から）	2	平葺き状況（南東から）
	3	カヤゴテの使用状況	4	茅葺き道具（カヤゴテ・軒打ち・針）
	5	棟部分の茅葺き状況（北東から）	6	棟部分の茅葺き状況（南東から）
	7	茅葺きを終えた状況（北東から）	8	置千木取り付け状況（南東から）
図版23	1	茅の刈り込み状況（北東から）	2	妻部分の茅刈り込み状況
	3	雪の中の復元住居（北から）	4	平部分の茅刈り込み状況
	5	足場の取り外し状況（東から）	6	刈り込み道具（ハサミ・ハサミ・ヌキ）
	7	茅葺きの完成状況（北東から）	8	茅葺き職人のみなさん
図版24	1	自然土舗装路盤工施工状況（北から）	2	自然土舗装表層工施工状況（南東から）
	3	自然土舗装表層工施工状況（北から）	4	自然土舗装表層工施工状況（南東から）
	5	擬石平板舗装施工状況（北西から）	6	擬石平板施工状況（北西から）
	7	カラー舗装施工状況（南から）	8	カラー舗装施工状況（南から）
図版25	1	排水管布設状況	2	排水管基礎砂埋戻し状況
	3	集水枡工施工状況	4	排水工管布設状況
	5	皿型側溝施工状況（南から）	6	U型側溝施工状況（西から）

	7	Ｌ型側溝施工状況（南から）	8	Ｌ型側溝施工状況（南から）
図版26	1	給水管埋設床掘状況（南から）	2	給水管埋設状況（南から）
	3	埋設テープ布設状況（東から）	4	散水栓 BOX 据付状況
	5	散水栓完成状況（南から）	6	水飲み自閉式水栓（西から）
	7	水飲み完成状況（西から）		
図版27	1	電線管埋設床掘状況	2	電線管埋設状況（北から）
	3	埋設テープ布設状況（北から）	4	引込柱基礎
	5	照明柱基礎	6	引込柱設置状況（南から）
	7	照明灯設置状況（南東から）		
図版28	1	木製ベンチ設置状況（北から）		
図版29	1	水飲み設置状況（北西から）		
図版30	1	図面上でのレイアウト	2	版下フィルムのチェック
	3	白磁陶板焼成	4	白磁陶板寸法チェック
	5	イングレ転写紙貼込み	6	イングレ窯焼成
	7	焼成後完成品	8	焼成後完成品
図版31	1	植栽枡完成状況（北東から）	2	パーク堆肥施肥混入状況
	3	ケヤキ植栽状況	4	植栽枡植栽完成状況（北東から）
図版32	1	現地指導状況	2	Ｔ６貝塚調査状況
	3	Ｔ10調査状況（南から）	4	調査作業員のみなさん
	5	現地説明会状況（西から）		
図版33	1	調査区全景（南西から）	2	調査区近景（南から）
図版34	1	Ｔ６貝塚断面（東から）	2	貝塚断面近景
	3	遺物出土状況		
図版35	1	Ｔ４溝１検出状況（西から）	2	Ｔ５溝１断面（北東から）
	3	Ｔ８溝１断面（南西から）		
図版36	1	Ｔ10溝２遺物出土状況（南から）	2	Ｔ７溝２断面（北から）
	3	Ｔ８溝２断面（南東から）		
図版37	1	Ｔ３竪穴住居１検出状況（北から）	2	Ｔ３竪穴住居１完掘状況（北から）
	3	Ｔ３竪穴住居１完掘状況（西から）		
図版38	1	整備竣工状況全景空中写真（堀家純一氏撮影）	2	整備竣工状況空中写真（堀家純一氏撮影）
図版39	1	整備竣工状況全景（南西から）	2	整備竣工状況全景（西から）
図版40	1	竪穴住居・貝塚復元空中写真（堀家純一氏撮影）	2	竪穴住居・貝塚復元空中写真（堀家純一氏撮影）
図版41	1	竪穴住居復元状況全景（南西から）	2	竪穴住居復元状況全景（南西から）
図版42	1	竪穴住居復元　外観（南西から）	2	竪穴住居復元　外観（南東から）
図版43	1	竪穴住居復元　内部	2	竪穴住居復元　内部
	3	竪穴住居復元入口部分（南西から）		

図版44　1　貝塚復元状況（南から）　2　貝塚復元状況近景（南から）
図版45　1　貝塚復元状況近景（北から）　2　溝１・２復元状況全景空中写真（堀家純一氏撮影）
図版46　1　史跡標柱・案内板設置状況（北西から）　2　史跡標柱正面
3　史跡標柱左側面　4　史跡標柱裏面
図版47　1　史跡総合説明板　2　史跡公園案内板
図版48　1　貝塚説明板　2　貝塚説明板
図版49　1　竪穴住居説明板　2　弥生土器説明板
3　樹木説明柱　4　樹木説明柱
5　樹木説明柱　6　樹木説明柱

第1章　はじめに

第１節　史跡門田貝塚の位置と環境

位置と環境（第１図）

史跡門田貝塚は、岡山県邑久郡邑久町尾張字門田217番地外11筆に所在する。

本貝塚の所在する邑久町は、岡山県の南東部の県下三大河川の一つである吉井川下流の東岸に位置する人口約２万人の町である。町の東部は、片上湾口の布浜地区や和気郡日生町との境になる瀬戸内海に浮かぶ邑久町最大の島である長島から西南西へ吉井川河口の岡山市と境となっている北島地区まで約20kmにわたり、南北は、長船町と牛窓町の境の本庄地区で約１kmを測る東西に細長い町である。

邑久町の地形は、東部と西部で様相を異にしている。東部は、丘陵地が多く200ｍ級の山々が連なり、長船町・備前市との町市境の丘陵が接し、南は、100ｍ級の山々が瀬戸内海に面している。一方、西部は、北と南の町境に100～200ｍ級の丘陵が広がるものの中央部の大部分は、いわゆる「千町平野」と呼ばれる、岡山県下でも有数の肥沃な沖積平野が広がっている。町の面積68.82km²のうち、約50％が山林で、農地は25％、宅地は約５％となっている。

吉井川下流域東岸の沖積地は、縄文時代後期以降の吉井川の活発化した堆積作用により急速な低微高地の形成によるものである。その沖積平野も山塊から派生した丘陵や独立丘陵によりいくつかの単位平野として小地域に区分出来る。北から、北側に熊山、南側に西大平山から派生した丘陵部に挟まれた南北約500ｍ、東西約3.0kmの細長く延びた、長船町長船から備前市大内にかけての香登平野。吉井川下流東岸平野の中央部に独立丘陵としてある甲山、桂山の北側までの南北約1.5km、東西約3.0kmの長船町服部・土師・磯上・牛文地区の長船平野。北を邑久町・長船町境の独立丘陵と南部を牛窓半島から児島湾口に延びる丘陵地帯に囲まれた、邑久町中西部の東西約3.5km、東西約5.0kmに及び、小単位平野の中で最大規模を測る千町平野の３つの沖積平野に区分される。門田貝塚はこの千町平野の中心部に所在する。

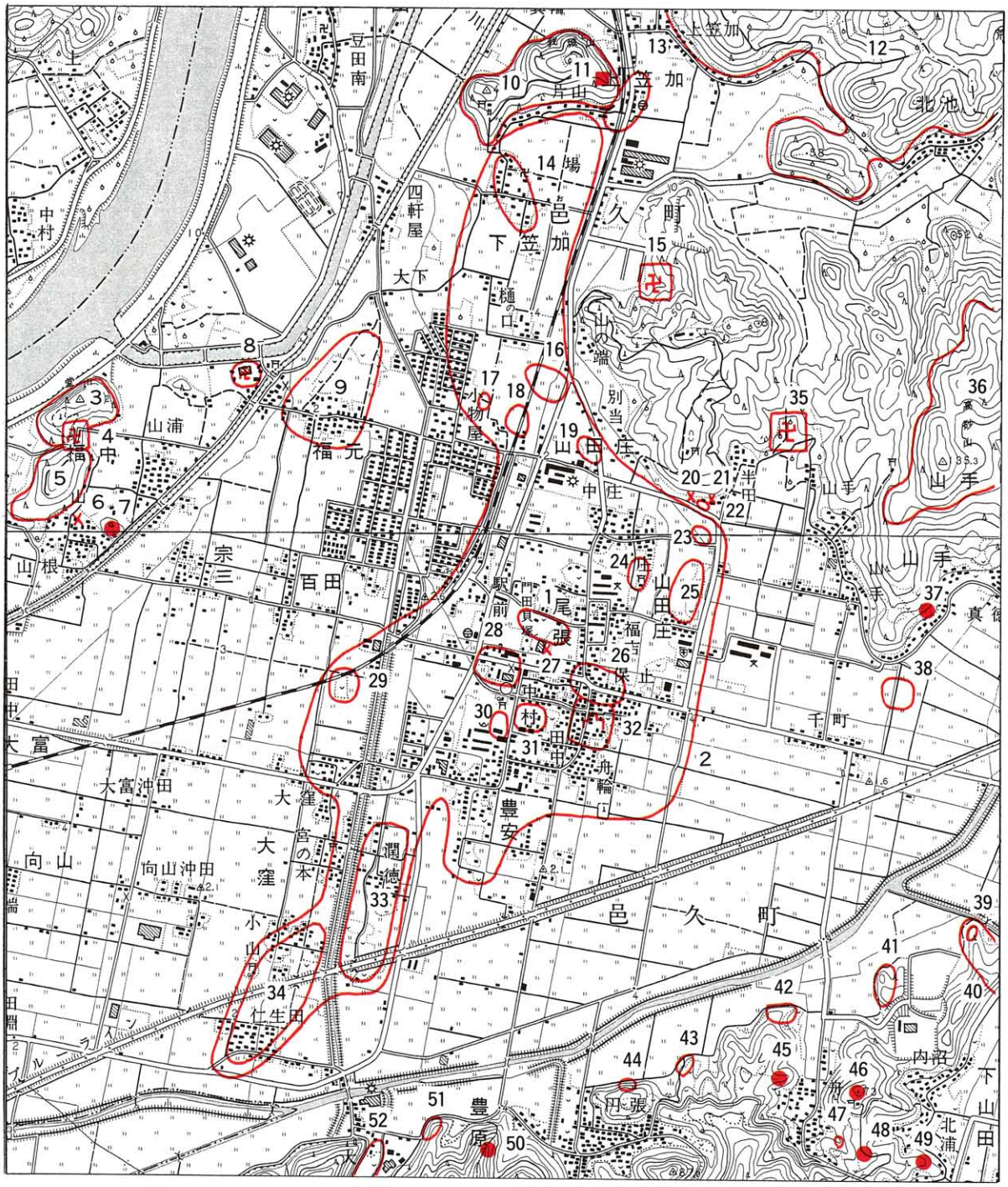
周辺の遺跡（第２図）

史跡門田貝塚の所在する千町平野周辺部で最古の遺物として、船原梶ヶ端貝塚[1]からナイフ形石器が出土しており、背後の低丘陵上に遺跡が想定されている。邑久町内では、才の峠遺跡採集のナイフ形石器に次ぐ旧石器時代の遺物である。

近年、内陸低位部での旧石器時代の石器の出土が知られるようになり、西谷遺跡（長船町西須恵）[2]、亀井戸廃寺（備前市佐山）[3]など、野営的な小規模遺跡の存在が確認されている。

後氷期における世界的な気候の温暖化に導かれ、縄文時代早期に急速に現在の千町平野のほとんどに海水が入り込み瀬

第１図　遺跡位置図（黒丸印）



1．門田貝塚
2．熊山田散布地
3．福中堂山古墳群
4．大平山善興寺廃寺
5．福山宮山古墳群
6．散布地
7．山根古墳
8．大山寺跡？
9．福元遺跡
10．峨城山古墳群
11．峨城山１号墓
12．甲山古墳群
13．国城遺跡
14．下笠加遺跡
15．南寺跡
16．熊山田遺跡
17．サアナ寺跡
18．サアナ貝塚
19．畑中遺跡
20．宮下貝塚
21．半田貝塚
22．半田散布地
23．半田前遺跡
24．品治遺跡
25．拝登遺跡
26．水南遺跡
27．歳森遺跡
28．堂免貝塚
29．百田遺跡
30．馬場崎遺跡
31．助三畑遺跡
32．尾張城跡
33．潤徳遺跡
34．仁生田遺跡
35．尾張廃寺
36．高砂山古墳群
37．真徳古墳
38．真徳貝塚
39．扇の端貝塚
40．扇の端散布地
41．鳥博遺跡
42．船原梶ケ端貝塚
43．円張東貝塚
44．蔵が端貝塚
45．舟原古墳
46．古墳
47．宮ノ前貝塚
48．幸田木古墳
49．幸田木古墳１号
50．猫の端古墳
51．大橋谷古墳
52．大橋貝塚

第２図　門田貝塚と周辺遺跡分布図（1/25,000）

図版１　門田貝塚周辺の航空写真（1/10,000）1996．5．26 撮影

戸内海に続く海となっていく縄文海進が行われる。

縄文時代前期になると、海を挟み北に宮下貝塚、南に大橋貝塚が形成される。さらに、中期末から後期初頭の山手貝塚、後期以前では真徳貝塚B[1]が形成されている。これらの貝塚の内、大橋貝塚[4]は、前期から後期初めまで長期に亘って居住が継続されている。貝塚の広がりも面積にして約3,000㎡と、吉井川東岸下流域で最大規模を測り、当地域での中核的集落であったと考えられる。

晩期になると、助三畑遺跡や堂免貝塚から晩期突帯文土器片の出土に見られるように、瀬戸内海の海水面の降下と旧吉井川の土砂の堆積により急激な陸化が進んでいき、しだいに微高地が形成され、沖積地へ人々の生活の痕跡がみられはじめ弥生時代をむかえる。

弥生時代になると、旧吉井川の堆積作用により下笠加から仁生田にかけて細長く弧状の自然堤防が形成される。この微高地は、中・小の支流によりいくつかに分断されるが、全域が熊山田散布地として連綿と前期以降集落が形成される。その中で中核的な集落として、史跡門田貝塚が存在する。数回に及ぶ発掘調査により数条の大規模な溝や貝塚の存在が明らかにされた。また、弥生時代前期後半の土器型式とされた「門田下層式」よりさらに古い前期前半の土器も出土し、集落の開始時期がさらに古く遡ることが明らかになった。[5・6]

熊山田散布地の所在する地域は、地理的立地の良さから近年各種開発に伴い発掘調査が行われ、畑中遺跡[7]・熊山田遺跡（吉井川水利事業）・歳森遺跡・堂免遺跡・熊山田遺跡（小林石油）等で弥生時代前期の遺構が検出されており、前期段階にすでに広範囲に集落が形成されていることが明らかにされつつある。熊山田遺跡（吉井川水利事業）では前期後半の舟形土壙から眉・耳・鼻を立体的に表現した人形土製品や微高地斜面の下層から前期から中期の土器に伴い木製鍬の未製品も出土し、初期農耕社会を考える資料として注目される。[8・9]助三畑遺跡では、中期中葉の竪穴住居・掘立柱建物や大規模な4条の溝が検出され遺構密度も高い。[10]

中期中葉以降、微高地周辺部の水田の拡大と人口増に伴い遺跡の分布は、微高地上から千町平野を望む丘陵上や丘陵裾部に拡大していく。これらの遺跡として真徳貝塚・蔵が端貝塚・円張東貝塚・船原梶ヶ端貝塚・扇ヶ端貝塚等があり、いずれも小規模な貝塚を伴っている。弥生時代を通じて、当地域は、安定した水稲耕作を生産力の基盤として、また後期後半以降、土器製塩も集落内で行われ、邑久地域の中心地として古墳時代に発展する母胎となる。ただ、千町平野東側部分は、千町平野中央部に自然堤防が形成され小河川の排水ができなくなり、中世段階まで後背湿地として取り残されることになる。

弥生時代の墓制については明らかでない点が多いが、沖積地の遺跡では、堂免遺跡から木棺小口溝を持つ土壙墓に近接する円形周溝（墓）が3基検出された。周溝は全周せず、2基の墳墓の周溝を一部共有するものや、周溝の一部が陸橋状になり切れているものがある。1基から中央部に組合せ式の木棺痕跡が検出されている。[11]また、門田貝塚や助三畑遺跡からは壺と鉢を合わせた壺棺が出土している。丘陵部では下笠加の峨城山1号墓から綾杉文・鋸歯文の施された特殊壺形土器が採集されており、吉井川東岸では唯一の特殊壺を伴う弥生墳丘墓として注目される。[12]

古墳時代の集落遺跡としては助三畑遺跡・門田貝塚・堂免貝塚で弥生集落の延長上で溝や井戸が検出されているが、5世紀後半以降の集落変遷については明確でない。

千町平野周辺部では、平野を望む独立丘陵の頂部から尾根にかけて小規模な円・方墳が群集して築造されている。その中で、最古に属する遺物として福中地区の福中堂山古墳から無茎定角式銅鏃が1

点出土している。福中堂山丘陵上には小規模古墳が数十基築造されており、かつて堂山Ｆ号墳からは銅鏃10点が出土したと伝えられておりこのＦ号墳からの１点とも考えられる。福中堂山古墳出土の無茎定角式銅鏃は、北へ約４㎞の岡山市浦間に所在する吉備最古の前方後円墳と考えられている浦間茶臼山古墳から出土したと伝えられる銅鏃と同笵品の可能性が高いという。(13)

千町平野北側の山手地区の標高135ｍの高砂山の山頂から南尾根にかけて約200基にのぼる低平な古墳群が築造されており邑久町内でも有数の前半期の群集墳を形成している。内部主体は、箱式石棺や小竪穴式石郭を主とし、副葬品として内行花文鏡２面、変形四獣鏡１面、捩文鏡１面をはじめ玉類、鉄器が出土している。

後半になると、邑久地域の前方後円墳築造系譜の最終段階となる２基の前方後円墳が千町平野北東の邑久町との境である長船町亀ケ原に築造される。１基は金鶏塚古墳で明治27（1894）年開墾により墳形が大破され石室から画文帯神獣鏡１面他が出土したと伝えられる。墳丘測量により墳長約35ｍの前方後円墳で後円部から採集された埴輪から川西編年Ⅴ期で６世紀前半と推定されている。もう１基は約30ｍ南に後円部を向け合う形で亀ケ原大塚古墳が築造されている。墳丘測量により墳長約40ｍの前方後円墳で埋葬施設として前方部に古墳主軸に直交する全長約７ｍの横穴式石室が築かれ、後円部にも横穴式石室が推定されている。詳細な時期については不明であるが概ね６世紀後半と考えられ邑久地域最後の前方後円墳で須恵器生産を掌握・管理していた首長の墓と考えられている。(14)

小古墳群として、高砂山南斜面をはじめ豊原・福中地区の丘陵端部の斜面に横穴式石室を内部主体とする小古墳が築造される。高砂山ではほとんどの古墳が無袖式の横穴式石室で、多くに須恵質の陶棺が納められている。６世紀後半～７世紀にかけての須恵器窯跡群の集中と重なり、長船町釜が原古墳群と共に須恵器製作工人集団の墳墓と考えられる。

水落地区の水落古墳からは、畑の開墾中横穴式石室に納められた須恵質の切妻形陶棺が出土し、身と蓋の妻部分に焼成前に「南」の文字が線刻されている。陶棺が小型化しており７世紀末頃のものと考えられる。以上、邑久地域の首長墓の造営には特色ある分布と変遷が認められる。このことは、邑久地域でも長船町沖積平野一帯と牛窓湾を望む海岸地域を中心とする二つの首長墓の展開である。これらの二つの地域に取り残された形で邑久町千町平野地域には前半期の前方後円墳が築造されていない。つまり、弥生時代以降の水稲耕作を生産力として邑久地域の中心地として発展して古墳時代を向かえた地域に前方後円墳が築造されていない点である。これらの古墳時代の勢力は、千町・長船平野を中心とした沖積平野での農業生産力と牛窓湾地域の臨海性の塩生産及び海上交通権ないし海運力を基盤として築造されたものであり、古墳築造にあたり邑久地域の複雑な歴史的展開の一環を示しているようである。

また、７世紀以降邑久郡地域で特筆すべき遺構として、恵まれた陶土と蒔材を背景に約110基もの須恵器生産遺跡である邑久古窯址群の存在である。邑久古窯址群の開始は、現在確認されている長船町木鍋山１号窯(15)の６世紀中葉から牛窓町寒風窯址(16)の７世紀～８世紀初頭をピークとして11世紀頃まで存続する。窯では須恵器だけでなく陶棺・鴟尾・瓦も生産されている。千町平野周辺では、本庄地区の横尾１・２号窯が存在し邑久古窯址群で最も南東に位置する窯址である。

奈良時代、尾張地域は『和名抄』『続日本紀』によると律令体制下で備前国邑久郡の中心地である尾張郷に属し、門田遺跡から大規模な掘立柱建物の一部と見られる柱穴群の検出や円面硯や須恵器、緑釉陶器の出土から同地に官衙的な施設の存在が想定されている。(17) 寺院として、山田庄半田地区の緩

やかな丘陵南斜面平坦部に尾張（半田）廃寺が想定されている。[18]ただし推定地での伽藍配置について不明である。周辺部から長瀬　薫氏により採取された軒平瓦の中に、本薬師寺や平城薬師寺の軒平瓦と同氾瓦である扁行唐草文があり、藤原宮造瓦用として本薬師寺の造瓦組織の一部が解体され大和以外の地に瓦製作依頼が行われ、当地での瓦生産の可能性も想定されている。[19]

千町平野地域で現在まで遺構が明らかに残っているものに条里制遺構がある。平野南部を流走する千町川周辺部を除きほぼ全域に条里地割りが残存している。当地の坪割りは「縦行き連続式」で左下を起点として上へ数える。条里地割の時期については、考古学的調査が行われていなく不明であるが、比較的陸地化が早かった尾張地域を中心に施行され、周辺部にあたったは中世段階までに開墾されたものと考えられる。

中世になると、建久4（1193）年、備前国は東大寺再建の造営国料となり、中世を通じ南都勢力の荘園が数多く存在している。尾張地域は、「尾張保」として京都加茂別雷神社領となる。北約5kmには、正安元（1229）年成立の『一遍上人絵伝』に描かれた「福岡の市」で有名な福岡や、南西約5kmには、吉井川の河口右岸に中世からの金岡庄の湊町、西大寺観音院の門前町として商工業の発展した金岡・西大寺地区に近い。このことにより、当地は、山陽道にも近く陸上交通や瀬戸内海沿いの海上交通や舟運による物資集散地近くの要所としての地理的要因と肥沃な千町平野を農業基盤として、集落の安定が見られる。このことは、門田遺跡、堂免遺跡、助三畑遺跡、熊山田遺跡等で青磁・白磁・瓦器の出土が知られる。特に助三畑遺跡の井戸から多量の吉備系土師質土器・備前焼・亀山焼の在地土器と共に畿内系土師器、東播系須恵質土器、和泉産瓦器、常滑焼の他青磁・白磁の貿易陶磁器、さらに、土器と共に養和元（1181）年の紀年銘題籤の共伴から中世の商品の流通交易関係や中世土器の併行関係を知る基礎資料となるものである。[20・21・22]

註

（1）平井泰男　「熊山田散布地ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』68　岡山県教育委員会　1988
（2）福田正継　『西谷遺跡』　長船町教育委員会　1985
（3）田代健二　『亀井戸廃寺確認調査報告』　備前市教育委員会　1984
（4）岡本寛久　『大橋貝塚発掘調査報告書』　邑久町教育委員会　1979
（5）近藤義郎　「門田貝塚」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986
（6）岡田　博　「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983
（7）平井泰男・光永真一　「畑中遺跡確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982
（8）福田正継　「熊山田遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14　岡山県教育委員会　1984
（9）『吉井川農業水利事業邑久用水路工事に伴う熊山田遺跡発掘調査実績報告書』　吉井川農業水利事業邑久用水工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会　1984
（10）『助三畑遺跡発掘調査現場説明会資料』　邑久町教育委員会　1982
（11）『堂免貝塚現地説明会資料』　邑久町役場庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会　1984
（12）邑久町立郷土資料館に保管
（13）宇垣匡雅　「吉備の前期古墳―浦間茶臼山古墳の測量調査―」『古代吉備』第9集　古代吉備研究会　1987
（14）平井　勝・宇垣匡雅　「岡山県長船町亀ケ原所在の前方後円墳―亀ケ原大塚古墳と金鶏塚古墳―『古代吉備』　第12集　古代吉備研究会　1990

(15) 江見正己　「木鍋山一号窯」『岡山県史考古資料』　山陽新聞社　1986
(16) 山磨康平　「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　岡山県教育委員会　1978
(17) 岡田　博　「官衙」『吉備の考古学的研究』(下)　山陽新聞社　1992
(18) 永山卯三郎　『岡山県通史』上編　岡山県通史刊行会　1930
(19) 山崎信二　「藤原宮瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」　奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集『文化財論叢Ⅱ』　同朋舎出版　1995
(20) 馬場昌一　「岡山県助三畑遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.4　日本貿易陶磁研究会　1983
(21) 馬場昌一　「岡山県助三畑遺跡出土資料」『第11回研究集会報告資料』　日本中世土器研究会　1992
(22) 橋本久和　「吉井川河口出土の大和型瓦器椀」『中世土器研究82号』　中世土器研究会　1996

図版２　門田貝塚周辺航空写真（昭和38年頃）

第2節　環境整備に至る経過

門田貝塚の発見

門田貝塚の発見は、邑久郡内を中心に考古学の研究活動を行った旧邑久考古館長長瀬　薫氏（明治26年5月8日～昭和45年2月14日）が残された原稿によると、[1・2]昭和5（1930）年4月に初めて長瀬氏により試掘（第1次調査）される。しかし、まだこの時点では貝塚は確認されていなく、遺跡が貝塚であるか、また、土地に降った雨水がただちに乾燥することから窯跡とも考えていたようであるが性格については不明であった。その後、昭和8（1933）年6月に試掘調査（第2次調査）が行われた。この時、遺跡を弥生時代の貝塚として確認し、小字名の「門田（かどた）」から門田貝塚と命名される。

門田貝塚の調査経過

門田貝塚の発見以降、長瀬　薫氏は、昭和9（1934）年2月、邑久村の農業倉庫建築で貝塚を発見し、水原岩太郎氏と共に大発掘（第3次調査）を行う。出土した土器・石器・骨角器・動物遺存体は2千点にも及びその資料報告が行われた。[3]翌年の昭和10（1935）年5月、さらに発掘を行う。（第4次調査）[4]これらの調査により得られた資料は、昭和11（1936）年1月24日に開設された岡山県最初の考古館である邑久考古館の基礎となった。[5]昭和25（1950）年3月9日～4月29日、長瀬　薫・川崎　務両氏は、貝塚の中心地を南北約22m、東西約16m、約330㎡を測る部分の発掘（第5次調査）を行ない、夥しい弥生土器と共に石器・骨角器・動物遺存体が出土した。弥生土器底部の籾圧痕から弥生土器は農耕文化という常識を実証すると共に多量の動物遺存体の出土から弥生時代においても農耕と共に狩猟・漁労が盛んに行われていたことを証明した。

昭和25（1950）年4月12日、ミシガン大学日本研究所リチャード．K．ビアズリイ氏により貝塚部分の小発掘が行われた。

昭和25（1950）年4月16日、鎌木義昌氏は、岡山県学生考古学会員と共に長瀬・川崎両氏の調査区一画の貝塚部分を発掘し、貝層の層位的な観察により甕のヘラ描き沈線文と櫛描文の時期差を示すものとして弥生前期後半の土器を門田（下層）式と弥生中期初頭の土器を門田上層式として呼称の識別を行った。[6・7・8]

昭和37（1962）年3月22日～30日、弥生前期に属する貝塚と居住地区との関係を明らかにするため邑久町教育委員会主催、長瀬　薫氏・近藤義郎氏調査担当による第1次調査にひきつづき、昭和41（1966）年3月8日～13日、岡山県教育委員会主催、近藤義郎氏調査担当による第2次調査が行われ、貝塚の形成状況、ピット群などが明らかにされた。貝塚は、幅4ないし5mで断面がU字形を呈する溝を埋めて堆積・形成されたもので、貝塚の厚さは中心部で約1m強を測り、貝層直下の粘土層から貝層直上まで、多量の弥生時代前期遺物を包含する。貝層は二条の赤褐色土層により大きく三分されていることが確認された。貝塚により埋められた溝の性格については限られた調査区のため人工的開削か自然河道の残存であるかは意見が分かれた。[9・10]

昭和57（1982）年5月10日～8月12日・11月24日～12月16日、周辺部の宅地化が進んでくるなか、岡山県教育委員会により将来の遺跡の保護保存を図るために遺跡の範囲確認調査が行われた。その結果、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出された。弥生時代前期では、すでに確認されている大溝のほかに同規模の溝がほかに数条存在することや、弥生時代前期後半の土器型式とされた「門田

下層式」よりさらに古い前期前半の土器も出土し、集落の開始時期がさらに古く遡ることが明らかになった。さらに、奈良・平安時代の掘立柱建物群の一部が確認され、円面硯や緑釉陶器の出土と共に古代の役所の存在が明らかとなった。[11・12]

註

（１）長瀬　薫　『邑久考古館の創設から今日まで』　1960

（２）長瀬　薫　『邑久考古館の設立』　1967

（３）長瀬　薫　「岡山縣邑久郡邑久村門田貝塚附邑久郡貝塚地名表」『考古学論叢』第４輯　1937

（４）長瀬　薫　「邑久郡の貝塚と古墳に及ぶ」『吉備考古』第32号　吉備考古会　1937

（５）邑久考古館は、邑久町山手に生まれた長瀬　薫氏（明治26年５月８日～昭和45年２月14日）が邑久郡を中心に研究活動を行い、門田貝塚、高砂山古墳群などの数多くの遺跡の発見や遺物の収集につとめ、昭和11（1936）年１月24日、洋服業のかたわら、邑久町公設市場の階上に、門田貝塚の出土品を中心に採集品約2,000点を展示した、岡山県最初の私設の考古館である。昭和41（1966）年10月８日、邑久考古館開設30周年を機に収蔵品約28,000点をすべてを邑久町に寄贈し、長瀬　薫氏は、町立邑久考古館長として協力者の川崎　務氏と共に岡山県考古学会に重きをなした。邑久考古館は開館以来５度の移転が行われ、昭和58（1983）年11月１日、旧邑久中学校校舎を改装した邑久町立郷土資料館が開館され邑久考古館の資料は、考古資料室へ受け継がれている。

（６）鎌木義昌　「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』第84号　吉備考古学会　1952

（７）鎌木義昌　「各地域の弥生式土器・中国」『日本考古学講座』４　1955

（８）鎌木義昌　「岡山県邑久郡門田遺跡」『日本考古学年報』３（昭和25年度）日本考古学協会　1955

（９）近藤義郎　「岡山県邑久郡門田貝塚」『日本考古学年報』19（昭和41年度）日本考古学協会　1971

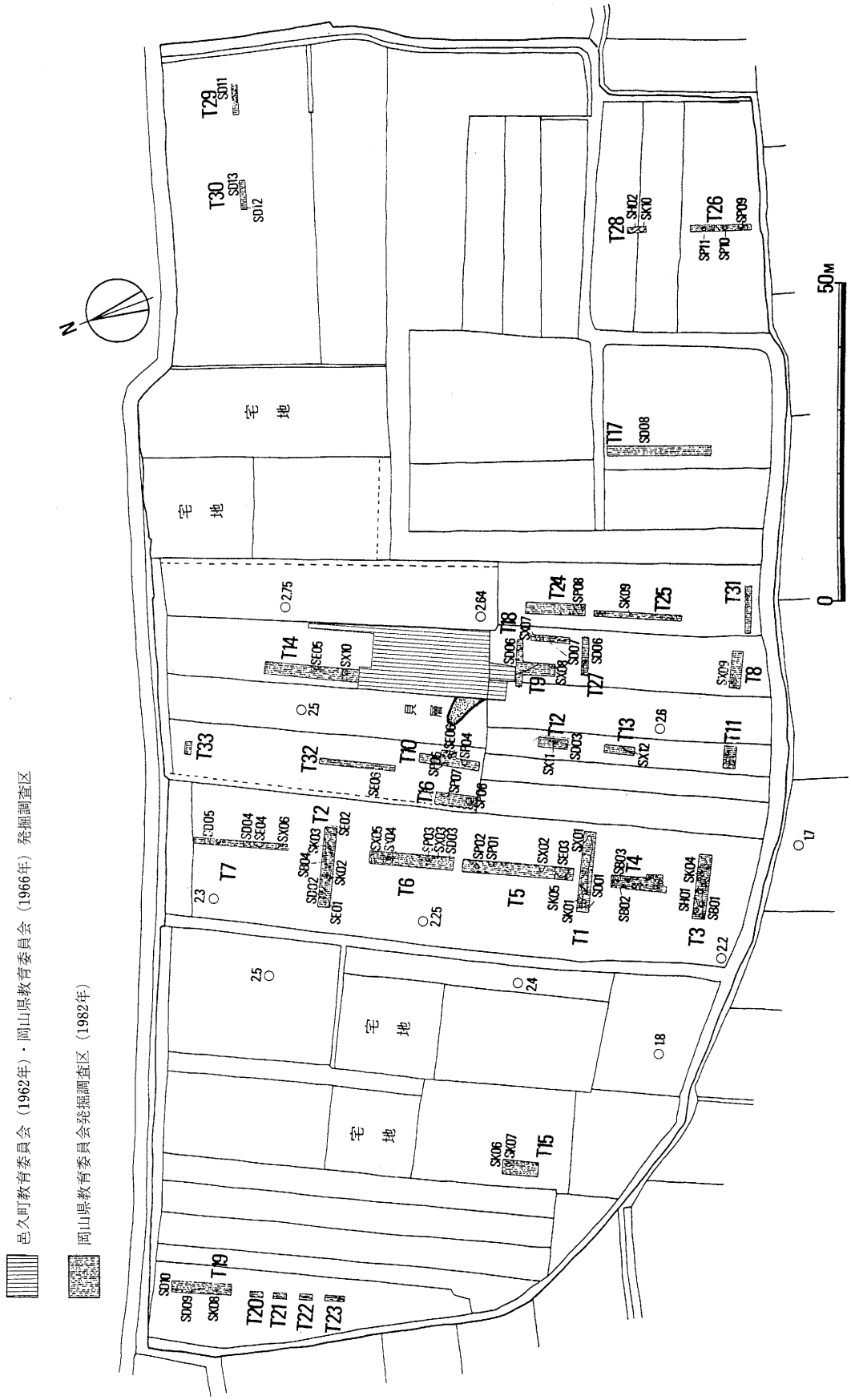
（10）近藤義郎　「門田貝塚」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県　1986

（11）岡田　博　「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983

（12）岡田　博　「官衙」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社　1992

図版３　長瀬　薫氏

図版４　邑久考古館内部（昭和33年）



第３図　発掘調査地点（「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告55」1983を一部改変）

史跡指定

昭和57（1982）年までの発掘調査の結果、ハイガイを中心とする貝塚から石器・骨角器などと共に出土する土器は、「門田（下層）式」として瀬戸内海沿岸における弥生時代前期後半の代表的型式とされた。また、遺跡は、弥生時代前期から鎌倉時代にかけて保存状態が極めて良好な複合遺跡であることが確認された。しかし、近年門田貝塚周辺部は、赤穂線邑久駅や主要県道に近く、大形店舗や宅地造成さらに交通網の整備に伴う開発が迫り、極めて保存が良好な複合遺跡である門田貝塚の早急な保護保存が望まれてきた。

指定申請範囲については、文化庁との協議の上、住宅部分に挟まれ後世、水田として利用するため地下げが行われていない貝塚中心地、5,219㎡の12筆（地権者９名）とし、昭和59（1984）年７月16日、門田貝塚史跡指定説明会を開催し、土地所有者に対して史跡指定についての同意を求めた。その後、研究者・地権者・地元の方々の深い理解と協力が実り、８月24日、地権者９名全員の同意を得た。昭和59（1984）年８月28日付けで、邑久町は、文部大臣森　喜朗宛に史跡名称天然記念物指定申を行った。昭和59（1984）年10月26日付けで、国の文化財保護審議会（小林行雄会長）は、門田貝塚を史跡に指定にする旨、文部大臣に答申した。その後、昭和60（1985）年３月６日付けで、文部省告示第29号で門田貝塚の史跡指定が官報告示され、同日付け庁保記第25の７号により土地所有者宛に文部大臣松永　光から門田貝塚の史跡指定が通知された。岡山県下での貝塚の史跡指定は、笠岡市西大島の津雲貝塚についで二例目となった。

庁保記第25の７号

秋山昌子ほか８名

文化財保護法（昭和25年法律第214号）第69号第１項の規定により、下記１の記念物を下記２によって史跡に指定します。

昭和60年３月６日

文部大臣　松　永　　光

記

1(1)名　称	門田貝塚
(2)所在地及び地域	別添のとおり
2(1)指定理由	
ア　基　準	特別史跡名称名勝天然記念物び史跡名称名勝天然記念物指定基準 史跡１（貝塚）による。
イ　説　明	門田貝塚は、岡山県東部を流れる吉井川下流域平野部の自然堤防上に立地する弥生時代前期から鎌倉時代まで続く大規模な複合遺跡である。発見された遺構や遺物は、各時代の人々の生活を復元する重要な手掛かりとなるものであり、特に著名な弥生時代の貝塚を伴う貴重な集落遺跡である。よって史跡に指定して保存を図るものである。
(2)官報告示	昭和60年３月６日付け文部省告示第29号

○文部省告示第二十九号

文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号）第六十九条第一項の規定により、次の表に掲げる記念物を史跡に指定する。

昭和六十年三月六日　　文部大臣　松永　光

名称	所在地	地域
門田貝塚	岡山県邑久郡邑久町尾張字門田	二一七番、二二〇番、二二一番、二二四番、二二七番
	同　字樋口	二一八番、二一九番、二二二番、二二三番、二二五番ノ二
	同　字西畑田	二一六番ノ一、二一六番ノ二

図版５　門田貝塚航空写真（昭和57年）

門田貝塚史跡指定地一覧：岡山県邑久郡邑久町尾張

字名・番地	地　目	指定面積	字名・番地	地　目	指定面積
門田217	雑種地	62 ㎡	樋口219	畑	180 ㎡
門田220	田	512 ㎡	樋口222	畑	196 ㎡
門田221	田	365 ㎡	樋口223	畑	330 ㎡
門田224	畑	511 ㎡	樋口225－２	畑	394 ㎡
門田227	畑	512 ㎡	西畑田216－１	田	1,825 ㎡
樋口218	畑	249 ㎡	西畑田216－２	畑	83 ㎡
			合　　計		5,219 ㎡

史跡の土地公有化

昭和60（1985）年３月６日の国指定により門田貝塚の保存が図られるようになったが、門田貝塚の位置する尾張地区は、官公庁、各種店舗の密集する邑久町の中心部にあたり、門田貝塚の西約400ｍにある邑久駅を中心に宅地造成が急速に進み、大型スーパーや各種店舗の進出も著しく市街化が進んでいる。特に瀬戸大橋の開通を迎え（昭和63（1988）年完成）開発は年毎に増加の傾向にあり今後も進むものと推察された。こうした情勢の中にあって、地権者が宅地として造成し居宅も建築する意向をもっていたが史跡指定のため、保留を要請し現在に至っているところや、スーパーが指定前に借り受け駐車場として埋め立て整地に入る直前、指定のため造成を中止させているところでは、宅地造成や駐車場設置許可を強く求めてきていた。また、農地として利用している地権者からも早急に買い上げて欲しいという意向が極めて強く、地権者一様に買い上げの意向はもっていた。

さらに、邑久町としても町の玄関口ともいえる邑久駅前の整備計画を樹立しており駅前に位置し極めて保存が良好な門田貝塚を早急に公有化して整備し、これからの保護保存と公開を図りたいと考えていた。このため、邑久駅前の開発が年毎に進むにつれ、昭和62（1987）年度指定地の土地鑑定評価を不動産鑑定事務所に委託した。それによると、地価は県の標準地地価公示価格の尾張地区の評価地によれば、昭和52（1977）年と10年後の昭和62（1987）年と比べ約50％の上昇をみていた。

以上のような状況の中、邑久町は、門田貝塚の土地公有化（先行取得）について昭和63（1988）年度事業として実施するため計画書を作成し昭和62（1987）年12月21日に岡山県教育委員会へ提出した。

昭和63（1988）年４月21日、文化庁において昭和63年度史跡等先行取得事業計画事情聴取が行われ、その後、「事前確認書を提出するように」との指示を受け、昭和63年８月22日付けで文化庁長官宛に史跡等土地先行取得償還事前確認申請書を提出した。その結果、昭和63年９月16日付け、委保第34号で史跡門田貝塚に対する史跡地の先行取得事前確認の通知が、文化庁長官植木　浩からあり、史跡指定地公有化事業の補助事業が採択された。

昭和63年12月８日、土地所有者と土地買い上げに伴う説明会を地元公会堂で開催した。その後個別交渉を行い、12月23日、邑久町所有地を除く８名の土地所有者と土地売買契約を締結し、平成元（1989）年２月28日、買収地の邑久町への所有権移転が行われた。

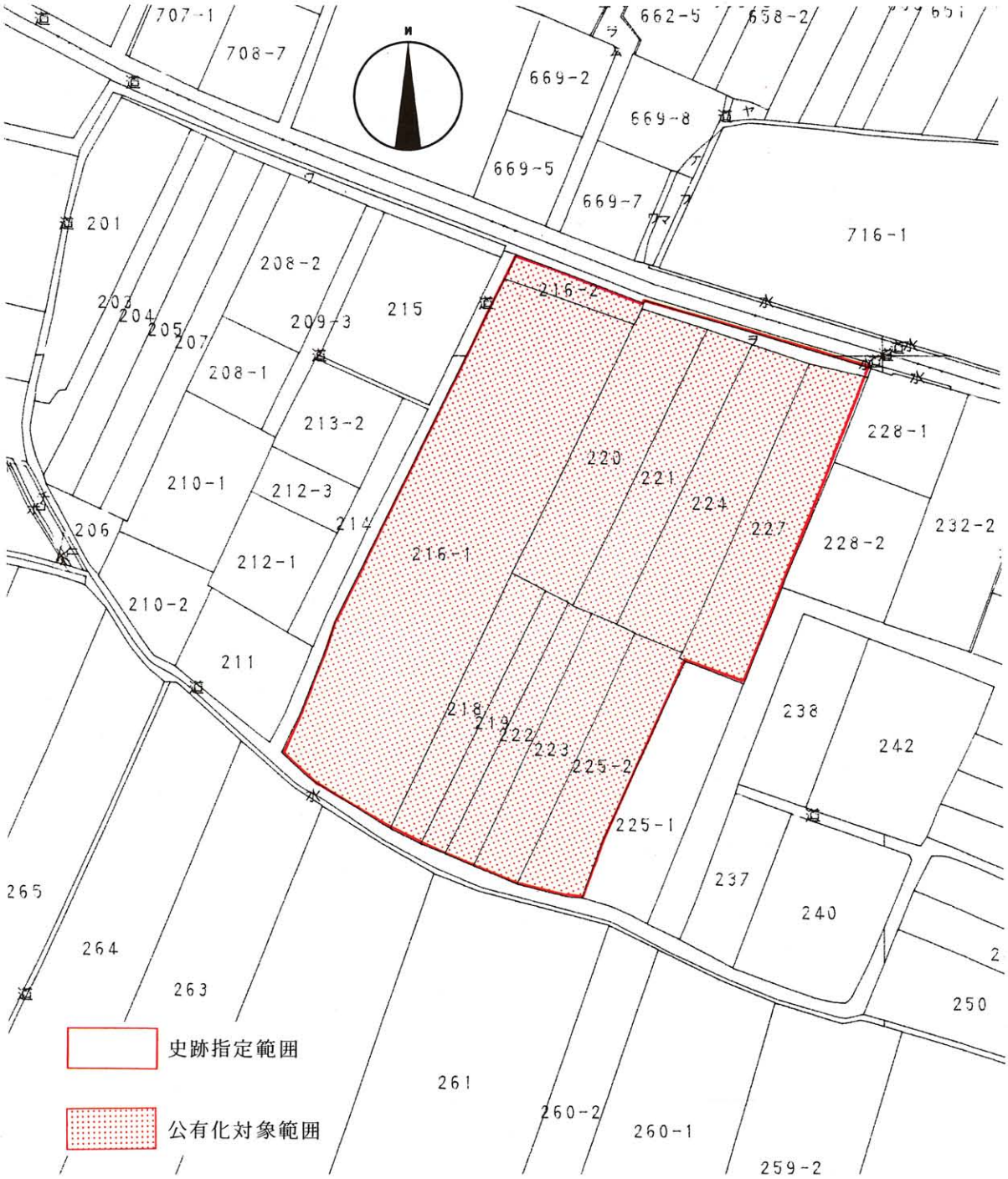
その後、平成元（1989）年５月26日付けで昭和63年度史跡等土地先行取得実績報告書を文化庁長官宛に提出した。

補助事業名	史跡　門田貝塚史跡等買上げ（先行取得償還）			
補　助　率	80％			
土地取得金額	126,000,000円			
資金調達実績	借入年月日	平成元年５月10日	借　入　先	株式会社中国銀行
	借　入　額	126,000,000円	利　　率	5.063％
	償還方法	半年賦元金均等払・２年間据置８年間償還		

この史跡等買上げ（先行取得償還）事業は、平成元年度から平成10年度まで実施されている。

門田貝塚史跡公有地一覧：岡山県邑久郡邑久町尾張

字名・番地	地目	指定面積	字名・番地	地　目	指定面積
門田220	田	512 ㎡	樋口222	畑	196 ㎡
門田221	田	365 ㎡	樋口223	畑	330 ㎡
門田224	畑	511 ㎡	樋口225－２	畑	394 ㎡
門田227	畑	512 ㎡	西畑田216－１	田	825 ㎡
樋口218	畑	249 ㎡	西畑田216－２	畑	83 ㎡
樋口219	畑	180 ㎡	合　　計		5,157 ㎡



第４図　史跡指定範囲・公有化図（1/1,000）

第２章　整備基本計画・基本設計

第１節　整備基本計画策定の経過

史跡門田貝塚環境整備基本計画・基本設計の策定

史跡地の公有化が進む中で、邑久町教育委員会では平成２（1990）年「史跡門田貝塚環境整備計画（案）」を作成した。この目的および基本理念はつぎのとおりである。

邑久町のかけがえのない歴史的遺産である史跡門田貝塚を、長く後世に伝えながら町民に公開していくため、史跡整備の要素である保存、研究、活用の調査を目指す。

これをふまえて次の理念に基づき整備を検討する。

① 史跡を将来に継承していくため、遺構等の保存を図る。
② 史跡の整備が単なる対処療法的な具体策にとどまぬよう、史跡の学術的、歴史的特色を正しく把握し、それをできる限り一般にわかりやすく表現していくことに努める。
③ 上記の条件を踏まえつつ、地域社会に親しまれる環境の創出を目指す。

事務局で作成した整備案をたたき台として、史跡門田貝塚の保存措置はもとより、文化財としての活用を図るため学識経験者・地元関係者を中心とした「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を平成元（1989）年12月13日、平成４（1992）年８月25日、平成５（1993）年３月２日に開催した。さらに、専門家を中心とした「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を平成２（1990）年９月12日、平成３（1991）年９月18日に開催した。さらに、平成３（1991）年11月19日、文化庁文化財保護部記念物課の加藤允彦文化財調査官に整備方法について現地指導をお願いした。以上の会での要望・指導を受け具体的な策定業務を株式会社環境事業計画研究所（所長：吉村元男）に委託し、平成４（1992）年３月31日、『史跡門田貝塚環境整備基本計画・基本設計説明書』を作成した。次節に基本計画書から一部を再録した。

門田貝塚の保存整備について意見を聞く会委員（専門家関係）

鎌木　義昌	岡山理科大学理学部　教授	（平成２～３年度）
近藤　義郎	岡山大学　名誉教授	（平成２～３年度）
河本　　清	岡山県古代吉備文化財センター　次長	（平成２～３年度）
岡田　　博	岡山県古代吉備文化財センター　係長	（平成２～３年度）
加原　耕作	岡山県教育庁文化課　課長補佐	（平成２～３年度）
伊藤　　晃	岡山県教育庁文化課　課長補佐	（平成２年度）
柳瀬　昭彦	岡山県教育庁文化課　課長補佐	（平成３年度）

第２節　基本計画の理念と方針

計画目的及び理念

門田貝塚は、弥生時代から鎌倉時代までの文化を伝える歴史的遺産であるとともに、邑久町しいては全国民の財産である。この歴史的遺産を保存はもとより、人々に広く公開していくことは公共機関の役割と考えられる。このことは、人々に文化とのふれあいの場を創出することであり、文化・貝塚の重要性を認識させることである。また門田貝塚周辺は、公園、緑地が少ないため、人々のやすらぎ空間としても整備が望ましい。これらのことにより、地域コミュニティの助長を促すとともに、邑久町への愛町心の育成を促し、邑久町のイメージアップが図れるものと考える。

基本方針

邑久町のかけがえのない歴史的遺産である史跡門田貝塚を後世に残していくためには、魅力ある史跡整備を行う必要がある。そのためには、整備が一般的な公園とは異なった空間であり、人々を魅了する空間でなければならない。その因子は、門田貝塚の特色を計画に反映させ人々に分かりやすく表現していくことである。

■原風景の創出

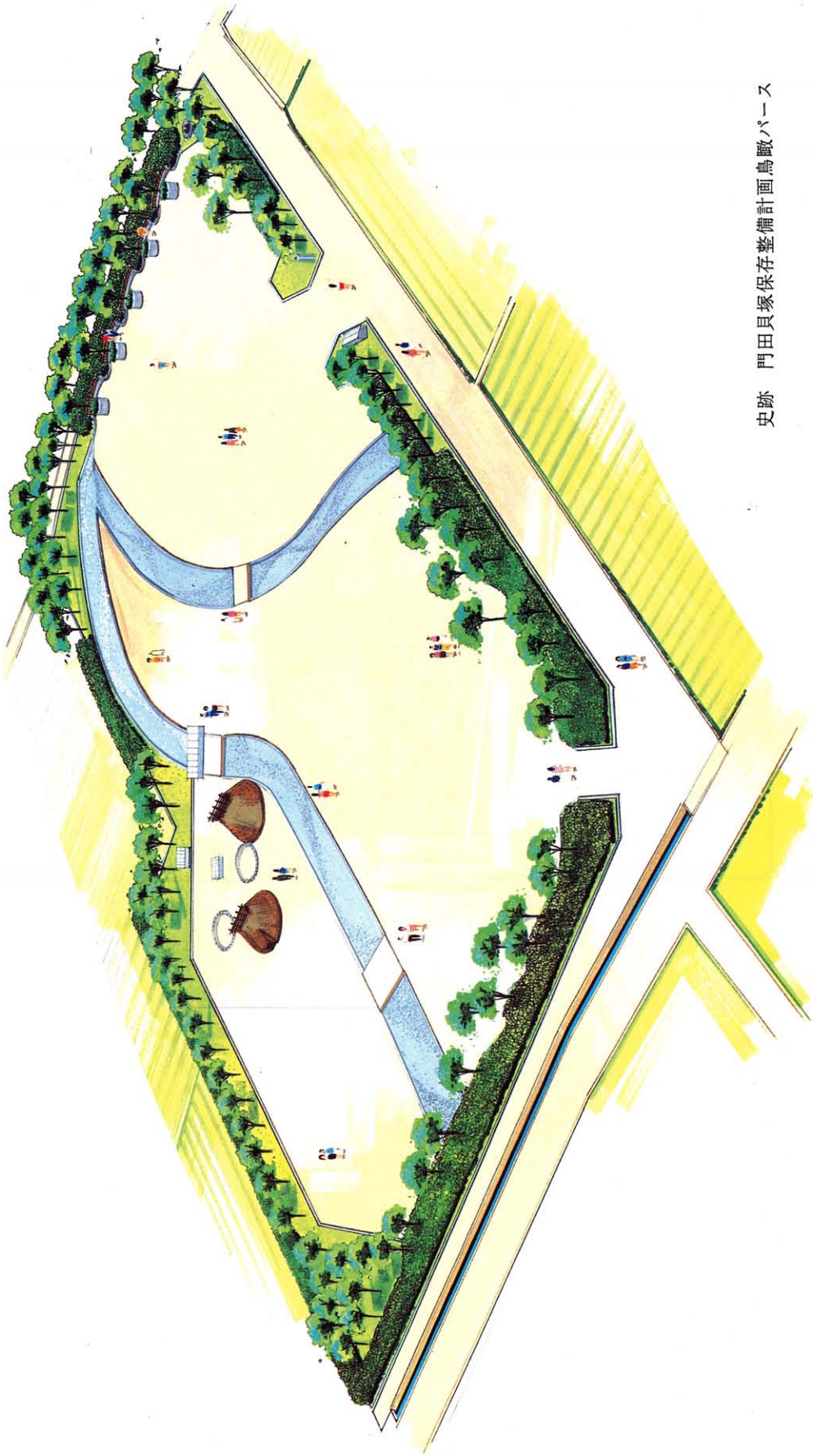
門田貝塚は、弥生時代前期の農耕集落遺跡でもあり、当時の生活・生産様式を伺うことのできる吉備地方を代表する遺跡である。この特色を生かし、遺跡の保護に十分留意しながら、可能な限り検出した遺構の復元整備を行い、往時の空間を創出していく。

■学習できる空間の創出

陶磁の門田貝塚の景観や全体的概要を写真や絵、文章などの案内・説明板を用い。当時の姿を想像させるような施設などを設置していく。

■遺跡への愛着心の創出

見学者及び地域住民の憩いの場となるように、ベンチや植栽などに風あいある物の導入を検討し、景観に配慮した空間を創出する。そのことによって遺跡への愛着心を促進することが可能である。



図版６　基本計画鳥瞰図

第３節　基本計画の概要

計画プラン

従来の史跡整備は、遺跡を忠実に復元することに重点がおかれていた。今回これらの史跡との区別化を図るために、遺構を復元していくとともに壁画を復元住居の借景にする等の環境、景観に配慮した、歴史的空間の創出を目指した。

地域区分

歴史を伝え、学習できる空間となるとともに、人々に親しまれる史跡となるために、基本理念・基本方針に基づき地域区分を行った。（第５図）

地域名称	整備内容	導入施設
住居復元展示地域	竪穴住居を復元設置することで当時の生活様式を再現し、当時の空間を体験・想像できるようにしていく。	復元竪穴住居 竪穴住居址 説明板
貝塚再現展示地域	発掘調査より得た資料を基に、きれいな真砂土舗装の中に貝塚を示す砂利敷きや貝の洗い出しを２本配置し、当時の生活様式を表現していく。	貝塚・大溝 説明板 案内板
植栽展示地域	弥生時代に生息したと考えられる植物を主に導入し、当時の自然環境を創出し展示して行くとともに、地域の緑地空間として、活用されるように整備を図って行く。	高・中木 低木・地被

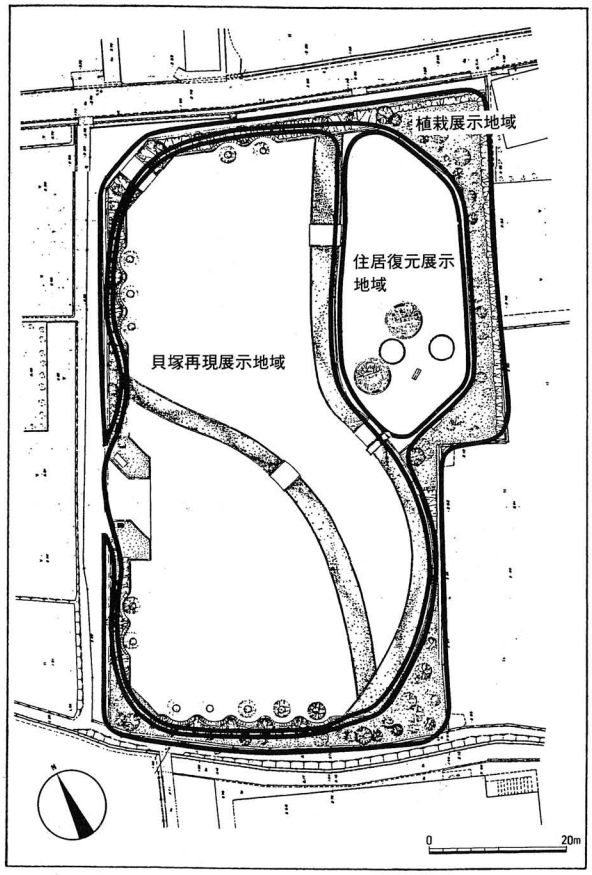
動線計画

史跡門田貝塚を有効に利用してもらうために、以下の点に留意しながら、計画を進めていく。

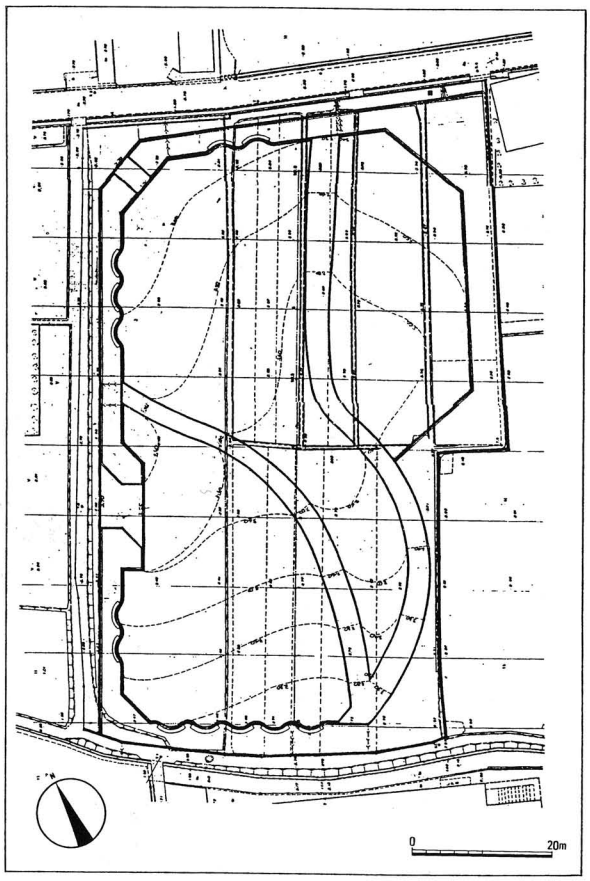
- 門田貝塚周辺には、公園・広場が乏しく、通路として広場を区切ることなく、有効に敷地を利用するために、自由な動線が可能である。
- 大溝が計画地を横断しているため、自由な見学が可能なように、見学通路を設けない。
- 管理車両が計画地内に進入できる入口を設ける。
- 身障者に対応する入口を設ける。

造成計画

遺構の保存を図っていくために、指定区全体に盛土していく。特に、復元住居を設置する場所や、引込柱などの必要構造物、高木を植栽する区域などは、遺構に影響を及ぼさないように、入念に盛土していく。排水管の埋設や、周辺地盤との取り合いなどで、現況地盤を掘削しなければならない場合については、遺構の確認調査を基に、問題のない位置に設置していく。（第６図）



第５図　地域区分計画図



第６図　造成計画図

遺構整備計画

これまでの発掘調査及び弥生時代の特徴等により、門田貝塚の特徴を示すために以下の遺構の復元・再現が望ましいと考えられる。

１）住居跡

イ．発掘調査結果

門田貝塚から弥生時代前期の住居の検出例はないが、昭和57（1982）年の岡山県教育委員会の調査で隅丸方形を呈する弥生時代最終末から古墳時代初頭の竪穴住居址が２棟分検出されている。また、昭和41（1966）年の発掘調査において弥生時代後期の竪穴住居址が数棟検出されている。

ロ．整備方針

これまでの発掘調査及び近隣遺跡の検出例などから、遺構の分布及び形態等を推定し、竪穴住居の復元展示を行う。しかし、当遺跡では、当時の住居の全貌を知ることのできる住居址が検出されていないため、前記した一部確認されている住居址を再発掘を行い復元住居のための資料を得る。住居は、集落のイメージを創出するために複数とする。また、どのように遺構が検出されたかを表現するために、石を用い住居址の平面プランをかたどる。

２）貝塚

イ．発掘調査結果

貝塚は、幅４～５ｍを測り、断面がゆるいＵ字形を呈する溝を埋めて堆積・形成されたものである。貝塚の厚さは、ほぼ溝の深さで、中心部で約１ｍ強を測り、貝層直下の粘土層か貝層直上まで、弥生時代前期の遺物を包含する。

貝層は、二条の赤褐色土層によって大きく三分されている。構成する貝類は、ハイガイ・シジミを主とし、カキ・ハマグリ・モガイ・アサリ・サザエ・ニシ・ホタテガイ・アカニシ・ニナ・カラスガイなどを含む。また、各所にシカ・イノシシを主とする獣骨・鹿角・魚骨・鳥骨を包含する。

ロ．整備方針

こらまでの発掘結果を基に、当遺跡の最大の特徴である貝塚を表現していくために、貝塚断面の写真や図版を説明板によって展示して行くとともに、貝塚の想定される位置に、貝の洗い出しや砂利敷き等によって埋蔵位置を明示していく。

３）大溝

イ．発掘調査結果

本貝塚の中心をなす幅４～５ｍの断面のゆるいＵ字形を呈する溝（岡山県教育委員会調査ではＳＤ06）は、曲折して伸び、その始点・末点とも不明である。また、人工的掘削であるか、自然の河道であるか、意見が分かれている。他に同規模の溝ＳＤ03・ＳＤ08がほぼ南東方向に流れると考えられる溝が検出されている。大溝の性格は、ＳＤ03検出時には、ＳＤ06と対になって、環濠を形成するのではないかと思われたが、それらの東方・西方でも弥生前期土器の出土量は変わらず、居住区はほぼ全面にわたることが確認され、用水であった可能性が考えられる。

ロ．整備方針

始点・末点の明確でない２本の大溝の流走方向をトレンチ調査により確認し、貝の洗い出しや砂利敷きによってその位置を明示する。

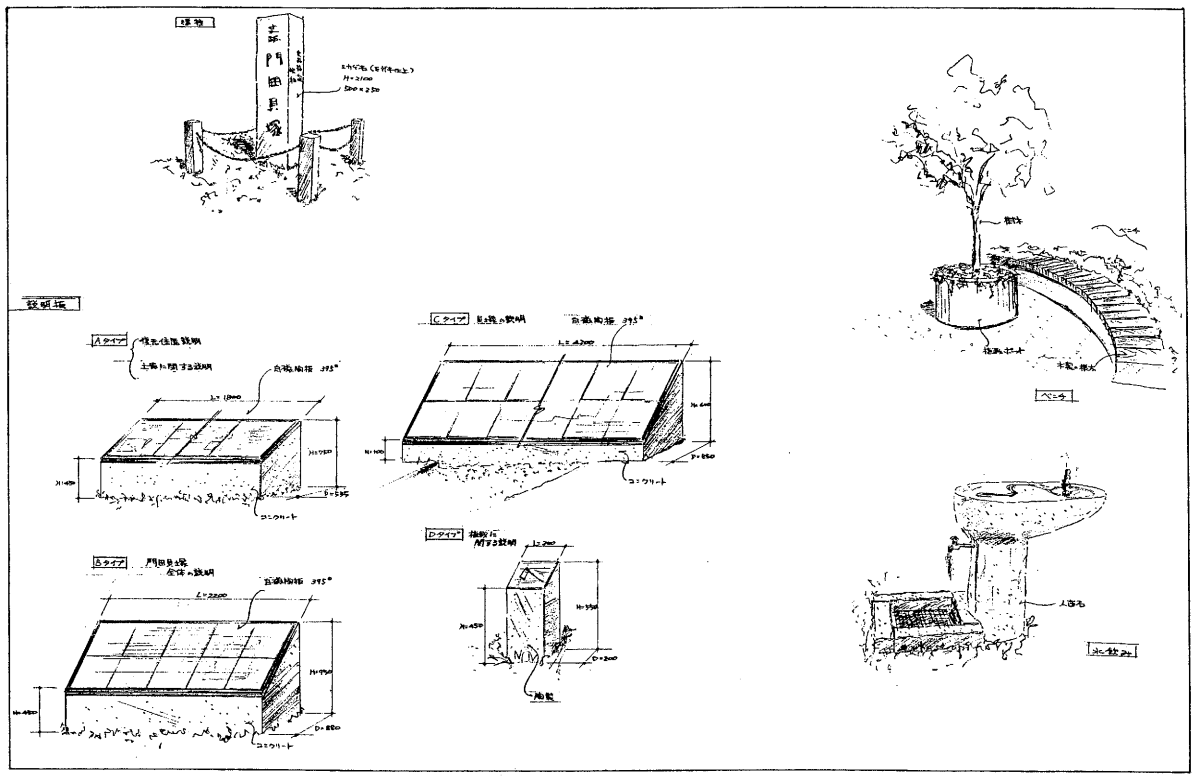
施設計画

１）案内板・説明板

門田貝塚の特徴・特色を理解してもらうために、発掘調査により得た資料等から、案内板・説明板による図版や文章を用いた人々に新しみやすく、理解しやすくなるよう努めていく。また、同時に、邑久町内に門田貝塚に至る経路や位置を知らせる案内板の設置、門田貝塚の概要を記したパンフレットの作成等の検討も必要と考えられる。（第７図）

２）その他の施設

地域の人々及び見学者に当遺跡を心地よく利用してもらうために、休息施設となるベンチや水飲み等を設置していく。くず入れ、灰皿等は原則的に持ち帰りとするため設置しない。



第７図　施設計画図

雨水・排水計画

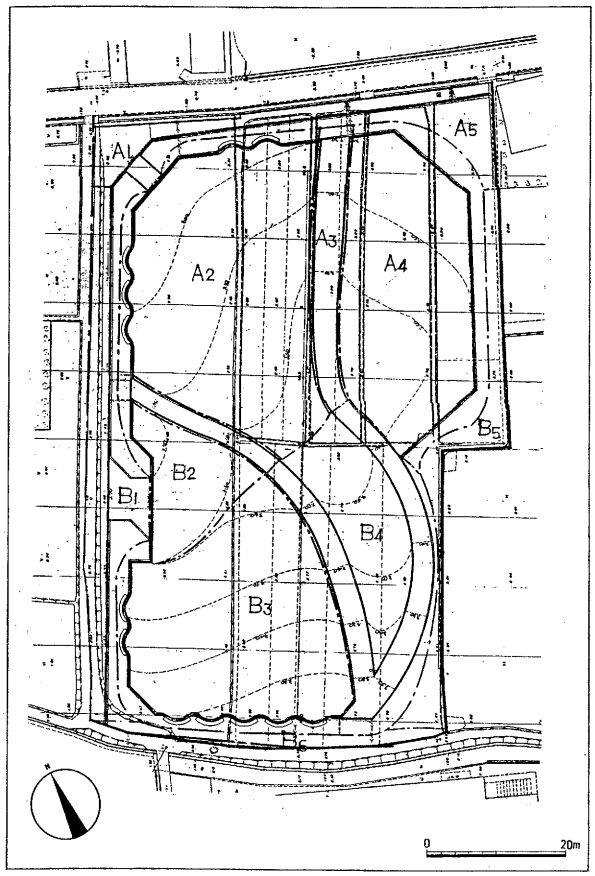
雨水排水計画を行う時に留意しなければならない点を以下に列挙する。

- 計画敷地内に流出する雨水については、すべて集水することを原則とする。
- 放流先については、計画地北側に接する水路及び南側に接するＵ字溝とする。
- 管種については、施行性に優れ、小管径では最も経済的な塩化ビニール管（ＶＵ管）を使用する。しかし、十分に土被が確保されない区間においては、コンクリート巻等の工法を用いる。
- 現況地盤を侵す場合については、遺構の確認調査を基に、問題のない位置に設置する。（第８図）

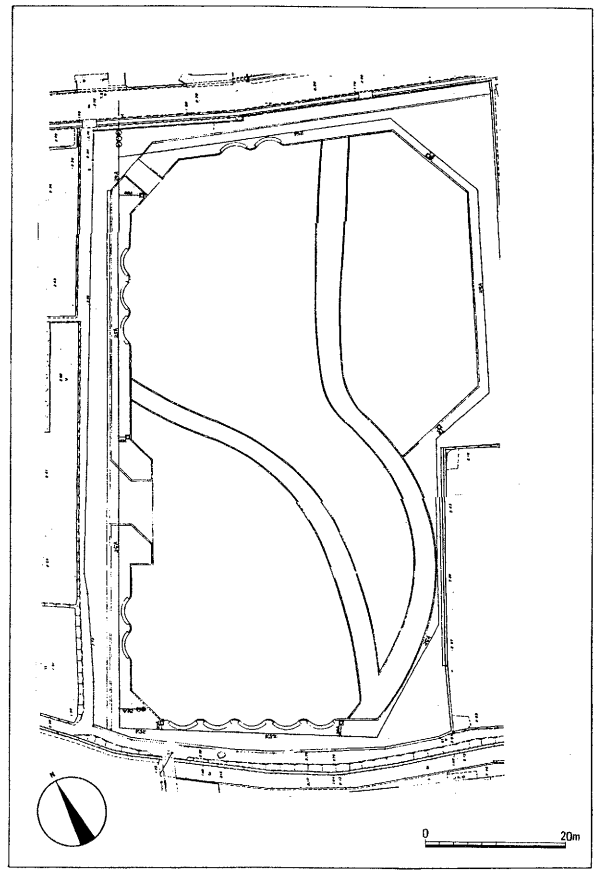
給水設備計画

給水設備計画を行う前に留意しなければならない点を以下に列挙する。

- 給水は、当計画地北側に接する道路（町道）に埋設されている給水管により、水道直結方式により供給を受ける。
- 散水栓については、概ね30ｍ間隔に配置する。
- 給水管は、施工性に優れ、経済的な HIVP 管を使用する。しかし、土被りが十分に確保できない区間においては、コンクリート巻等の工法を用いる。
- 給水管の埋設については、現況地盤を侵さないように注意する。現況地盤を侵す場合については、遺構の確認調査を基に、問題のない位置に設置する。（第９図）



第８図　雨水排水計画図



第９図　給水設備計画図

電気設備計画

電気設備計画を行う前に留意しなければならない点を以下に列挙する。

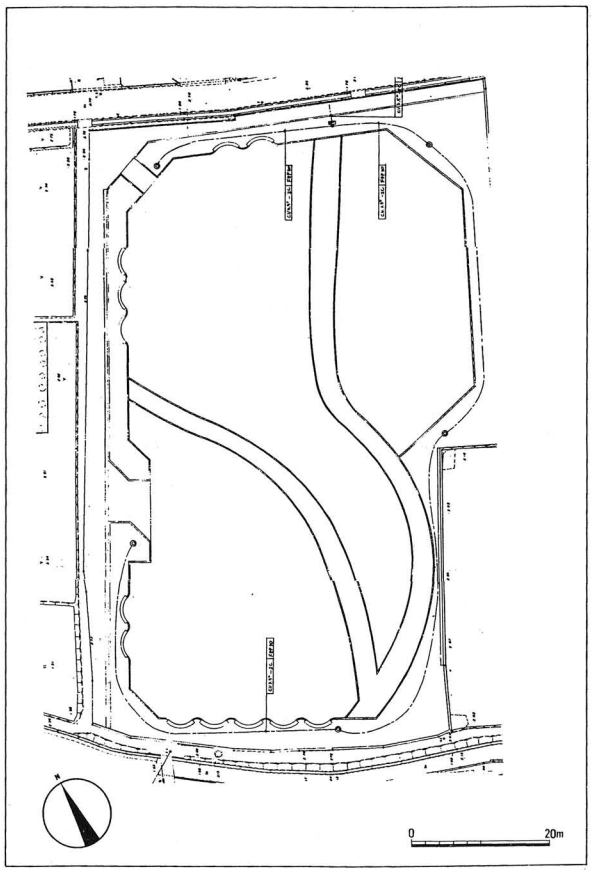
- 計画地の照明灯は周辺環境にとけ込んだ、落ち着きのあるものとする。
- 電源は、当計画地北側付近にある、中国電力電力柱より供給を受ける。
- 照度については、夜間の利用がほとんど考えられないため、0.5～2.0ルクスとする。
- 光源は、寿命とも優れている水銀ランプを使用する。
- 点滅方式については、デーライトＯＮ―タイマー― OFF とする。
- 電源施設の基礎部分については、現況地盤に影響がないように留意する。
- 配線は地下埋設方式とし、ケーブル防護管に波付硬質ポリエチレン管を用いる。電線管敷設時においては、現況地盤を侵さないように注意する。現況地盤を侵す場合については、遺構の確認調査を基に、問題のない位置に設置する。（第10図）

植栽計画

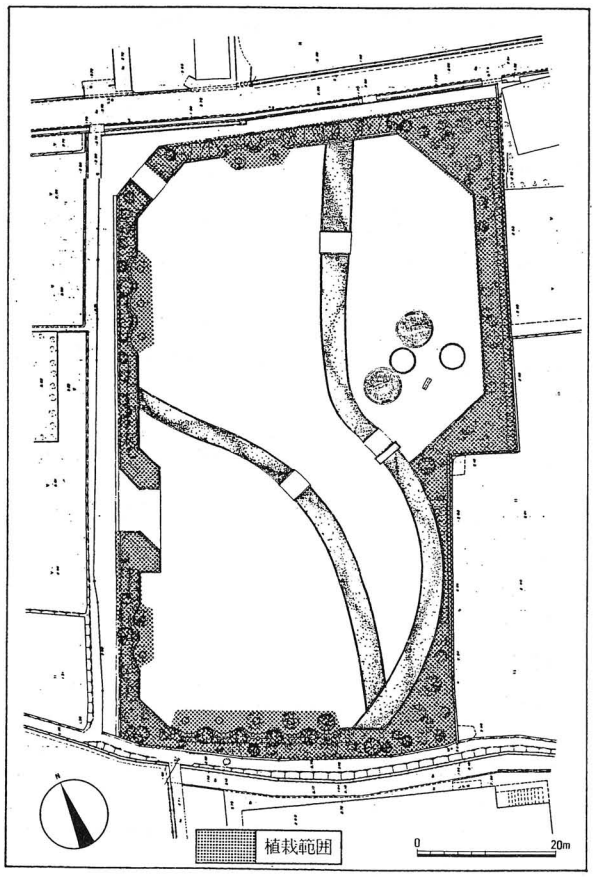
植栽は、弥生時代当時の環境を創出する重要な素材と考えられるため、当遺跡の整備に当たっては、弥生時代前期の自然特性を考慮し、当時植生したと思われる植物を主体に構成する。

以下に植栽計画を行う前に留意しなければならない点を列挙する。

- 高木植栽については、将来これらの樹木成長に伴う樹根の遺構に対する影響のないように、現況地盤に耐根シートを設置する。
- 樹種の選定は、福岡県板付遺跡の花粉分析の結果及び上東遺跡出土の木製品の樹種等を参考にする。
- 周辺民家等との緩衝のために周囲に植栽を施す。（第11図）



第10図　電気設備計画図



第11図　植栽計画図

第３章　整備実施設計

第１節　整備実施事業の経過

史跡門田貝塚保存修理事業の採択

平成元（1989）年２月28日、史跡の土地公有化を終え、その後、史跡の保存・整備のあり方を専門家・地元関係者と検討する会として「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を開催し、今後の環境整備の指針となるべき「史跡門田貝塚環境整備基本計画・基本設計書」の策定を進め、史跡門田貝塚の史跡整備を国庫補助事業として進めるために、平成３（1991）年５月30日、平成４（1992）年１月６日、平成４年度文化財関係補助金に係る事業計画書を岡山県教育委員会へ提出し、さらに、平成３（1991）年11月19日、文化庁文化財保護部記念物課の加藤允彦文化財調査官の来訪を受け環境整備の進め方について現地指導を受けた。

その結果、平成４（1992）年６月４日付けで門田貝塚史跡整備事業の内定通知を受け、史跡等保存修理・一般（史跡門田貝塚保存修理事業）の採択となった。補助事業は、当初、４ヶ年事業で計画を策定したが、遺構確認調査の結果や整備状況から最終的に平成４～９年度の６ヶ年で環境整備事業を実施した。

経費

史跡等保存整備事業・一般にかかる収支内訳はつぎのとおりである。

史跡等保存整備事業（一般）年度別収支内訳

収入の部　　（単位：円）

区　　分	平成４年度	平成５年度	平成６年度	平成７年度	平成８年度	平成９年度	合　　計
国庫補助金	4,500,000	10,000,000	10,000,000	12,500,000	20,000,000	14,000,000	71,000,000
県費補助金	1,500,000	3,333,000	3,333,000	4,166,000	6,666,000	4,666,000	23,664,000
町一般財源	3,000,424	6,667,632	6,812,210	8,652,967	13,352,260	9,334,358	47,819,851
合　　計	9,000,424	20,000,632	20,145,210	25,318,967	40,018,260	28,000,358	142,483,851

支出の部　　（単位：円）

区分			平成４年度	平成５年度	平成６年度	平成７年度	平成８年度	平成９年度	合計
主たる事業費	発掘調査関係経費		3,799,664						3,799,664
	報償費　委員謝金		77,000	42,000	21,000	7,500			147,500
	旅費　委員旅費		9,900	5,460	2,760	920	2,760		21,800
	消耗品費　樹木ラベル						129,780		129,780
	委託料	標柱	720,000						720,000
		白磁説明板	2,801,600			772,500	6,863,920		10,438,020
		実施設計監理	1,030,000	1,957,000	1,957,000	2,678,000	2,987,000	2,572,500	13,181,500
	工事請負費		504,700	17,914,790	18,102,250	21,807,160	30,034,800	22,801,800	111,165,500
	主たる事業費計		8,942,864	19,919,250	20,083,010	25,266,080	40,018,260	25,374,300	139,603,764
その他の経費	旅費　事務連絡		57,560	61,460	62,200				181,220
	需用費	消耗品費		15,450		39,381			54,831
		印刷製本費		4,472		13,506		2,626,058	2,644,036
	その他の経費計		57,560	81,382	62,200	52,887	0	2,626,058	2,880,087
合計			9,000,424	20,000,632	20,145,210	25,318,967	40,018,260	28,000,358	142,483,851

工事の施工業者名

設計監理受託者　平成４～９年度　株式会社環境事業計画研究所

施工請負者　平成４年度　有限会社野崎建設
平成５年度　株式会社八塔組
平成６年度　株式会社八塔組
平成７年度　株式会社八塔組
平成８年度　株式会社エイコー
平成９年度　株式会社エイコー

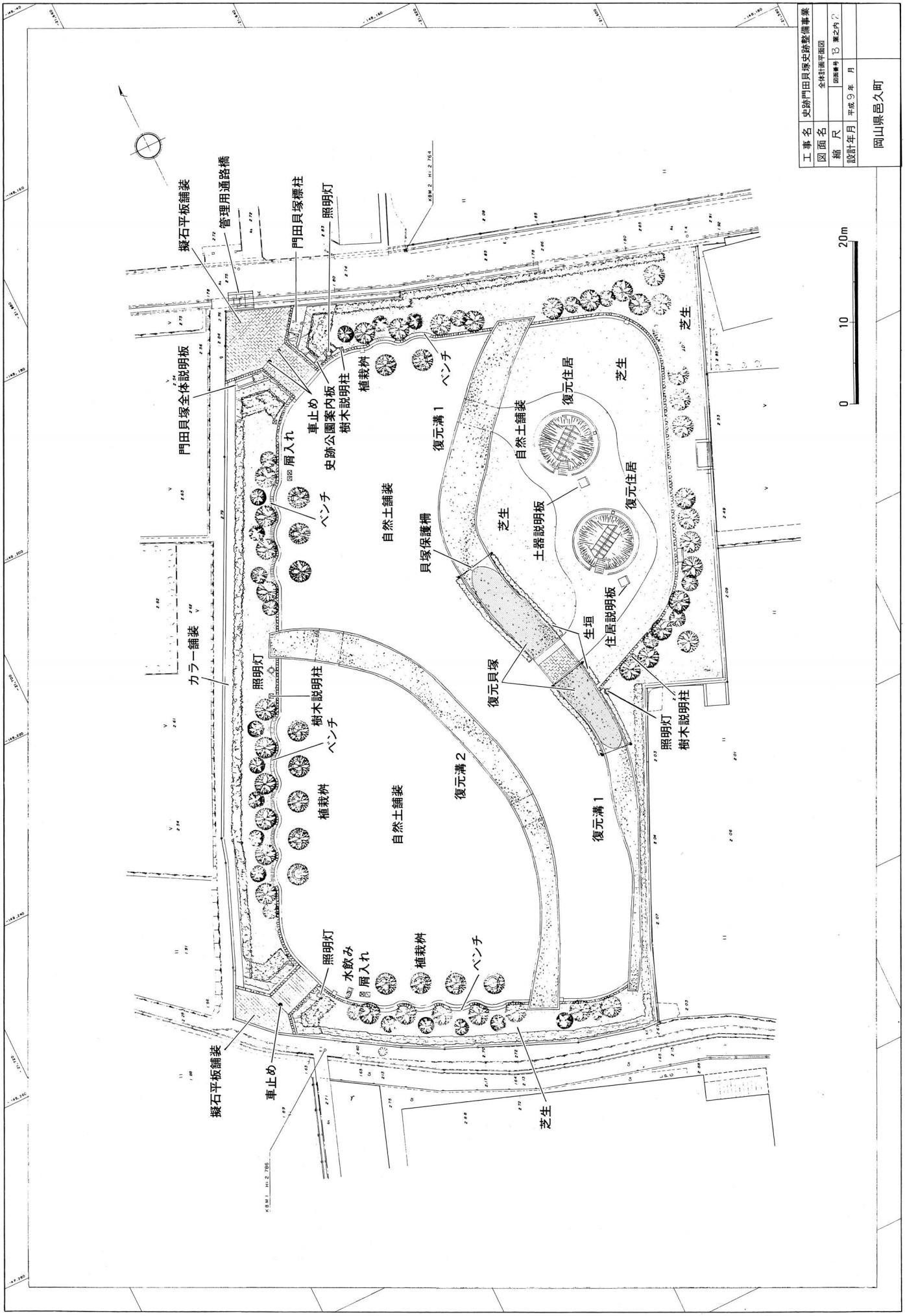
教養施設受託者　平成４年度　坂本石材株式会社
平成４・７・８年度
岩尾磁器工業株式会社
平成７年度　株式会社アボック社

特殊工事用材料の協力会社

平成４年度から平成９年度の施工工事に伴い、提出された工事材料使用願等により、特殊工事の協力会社は以下の一覧表のとおりである。

使用材料の名称	材料の規格等	製造会社又は製造元
真砂土		有限会社奥山建材
		イシコーポレーション株式会社
砕石	Ｃ―40	有限会社奥山建材
		丸紅産業有限会社
		株式会社ヒオカ砕石礦業所
生コンクリート	レディーミクソトコンクリート	大西屋生コンクリート株式会社
		岡山菱光コンクリート工業株式会社
グレーチング枡	ＭＤ55―66受枠共	株式会社全備
密粒度アスコン		日本鋪道株式会社
鉄筋		東京製鐵株式会社
硬質塩化ビニル管	ＶＰ150ｆ	株式会社ダイカロン化工
耐根シート	吹出し防止シート	アオイ化学工業株式会社
細砂		丸一砂利株式会社
擬石平板ブロック	稲田300×300×60 300×600×60	株式会社ヤマウ
擬石皿型ブロック	稲田300×300×110	
擬石縁石	稲田150×150×600	
擬石車止	稲田Ｅ型可動式 φ300×350	
コンクリート車止基礎	Ｂ型　φ290×300	
擬石縁石（１面）	稲田120×120×600	

擬石縁石（２面）	稲田120×120×600	
Ｕ型トラフ	ＰＵ―240	ランデス株式会社
排水管	ＶＰ―φ150･200 ＶＵ―φ100･150･200	旭有機材工業株式会社
グレーチング蓋	ＧＦ―Ｂ400	中部工機株式会社
	ＨＭ25-33･ＵＦ193-24	三重重工株式会社
アクリル系カラー舗装		株式会社ウエストックス
ケーブル	ＣＶ3.5―２Ｃ	株式会社東光電気製作所
安定器200Ｖ	Ｈ２・５ＲＣ２Ｂ４-１	
引込柱		
自動点滅器		
分電盤		
水銀灯灯具	Ｈ5050―ＯＤ	岩崎電気株式会社
水銀ランプ250Ｗ	ＨＦ250Ｘ	
ベースプレート		
真砂土専用改良材	オールインワン	東邦レオ株式会社
植栽樹木		株式会社山都屋 さんもく工業株式会社 光緑地産業株式会社
杉丸太		
張芝	野芝	鳥取県芝生産組合
高強度無収縮セメント系グラウト材	コンベクストラＧＰ	フェセ・ジャパン・リミテッド
左官用多目的接着剤	セボンド	
コンクリート床面強化剤	リトリン	
膨張性セメント・グラウト混和剤	コンベックス100	
セメント用急結急硬剤	クイックソークリート	
骨材露出仕上げ用表面遅延材	プレコＥＡＣ―Ｓ	
プレコ洗い出し工法モルタル添加剤	プレグラウトＧ―14	
高性能浸透性撥水剤	デックガードＰ20	
常温ガラスコーティング剤	ヒートレスグラス	株式会社大本
水飲み	人造石ＦＷ―46	株式会社ホクショウ
木製ベンチ		さんもく工業株式会社
屑入れ		株式会社フォレスト
カラー舗装	ウエスペープ３タン	株式会社ウエストックス
カラー舗装仕上剤	トップコート	
防腐・防蟻剤	サンプレザーＯＧ	株式会社ザイエンス
防火難燃材	ファイアープリペンダー	株式会社大本
茅葺き		山本屋根工事
土質改良材	ＳＬソイルサンド	ＳＬ化学研究所



第12図　実施設計全体平面図（1/600）

年度別事業概要

平成３年度

平成３年度は、環境整備事業実施に向けての条件整備として、史跡地の現況地形測量図の作成と、「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」で地元・専門家の意見指導を受けながら「門田貝塚史跡保存整備基本計画・基本設計書」を策定した。具体的な業務については業者委託とした。

平成４年度

国庫補助事業（史跡等保存修理・一般）の適用を受け、補助事業、単町事業と併用して環境整備事業に着手した。整備実施にあたり「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を発展的に解消し新たに「史跡門田貝塚史跡整備委員会」を発足した。平成４年度は、６か年事業の第１年度として、遺構復元を計画する貝塚・溝・竪穴住居の規模・方向の基礎資料を得るため９か所に調査区を設け、遺構確認調査を実施した。

また、史跡地管理用通路入口として史跡の北側農業用水路に管理用通路としての橋設置工事、史跡標柱・磁器製史跡総合説明板・磁器製樹木説明柱の制作業務委託及び実施設計監理業務委託を行った。

単町事業として、確認調査で検出した貝塚貝層の断面剝ぎ取り転写加工業務委託を実施した。剝ぎ取りを行った貝層断面は、平成10年４月から邑久町立郷土資料館２階門田貝塚資料室に展示予定である。

種別		対象	内容
補助事業	遺構確認調査	指定地	調査区：９ヶ所、調査面積：228.7㎡
			調査期間：平成４年10月26日～平成５年３月22日
	管理施設	旧地形	管理用通路橋設置：１ヶ所
			工期：平成５年３月８日～27日
	教養施設	指定地	史跡標柱制作：１基
			委託期間：平成５年１月11日～３月31日
		指定地	磁器製門田貝塚総合説明板・磁器製樹木説明柱制作：１基・８枚
			委託期間：平成５年１月18日～３月31日
	設計監理	工事の実施設計監理	
			委託期間：平成４年７月１日～平成５年３月31日
単町事業	付帯事業	展示関係	貝層断面剝ぎ取り転写加工
			委託期間：平成５年１月21日～３月31日

平成５年度

平成５年度は、６か年事業の第２年度として、遺構の保護と今後の遺構復元にあたり史跡地全域の真砂土による敷地造成工事、次年度までの間、造成真砂土の流出を防ぐため敷地の東西に素掘側溝を設け雨水を板柵枡に集め配管による排水を行う管理施設工事、植栽樹木直根により遺構の破壊を防ぐため造成斜面と高・中木の植栽予定地に造成工事を行う前に耐根シートを設置する敷地造成工事を行った。

また、工事実施設計監理業務委託を行った。

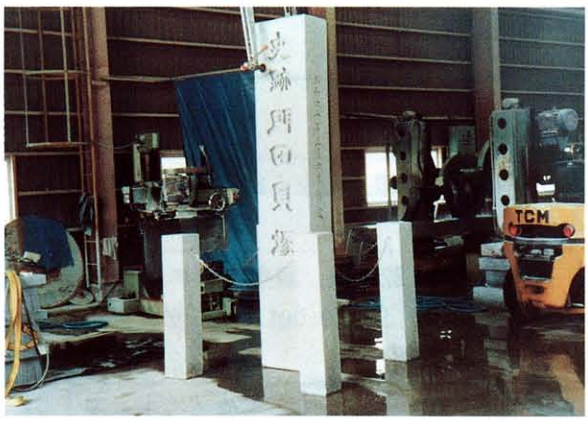
単町事業として、史跡地と隣地との境界設定のため、指定地の境界復元作業業務委託及び史跡地北側町道に埋設されている上水道を史跡地内へ引き込む工事及び、弥生時代の環境を創出するため当時生育していた樹種の選定のため平成４年度に確認調査を実施した大溝下層の土壌花粉分析業務委託を行った。

種別		対象	内容
補助事業	敷地造成	旧地形	搬入盛土：3,016.7㎡、流用盛土：50.9㎡
	管理施設	旧地形	排水：配管工：6.3m、素掘側溝：199.3m、板柵枡：２ヶ所
	修景施設	旧地形	植栽工・耐根シート：800㎡
			工期：平成５年11月29日～平成６年３月28日
	設計監理	工事の実施設計監理	
			委託期間：平成５年６月１日～平成６年３月14日
単町事業	付帯事業	整備関係	指定地境界復元作業
			委託期間：平成５年11月22日～11月26日
			水道引き込み工事
			工期：平成５年12月２日
			土壌花粉分析
			委託期間：平成５年７月１日～９月30日

図版７

１．竪穴住居１発掘調査状況（北から）

２．管理用通路橋施工状況（南から）



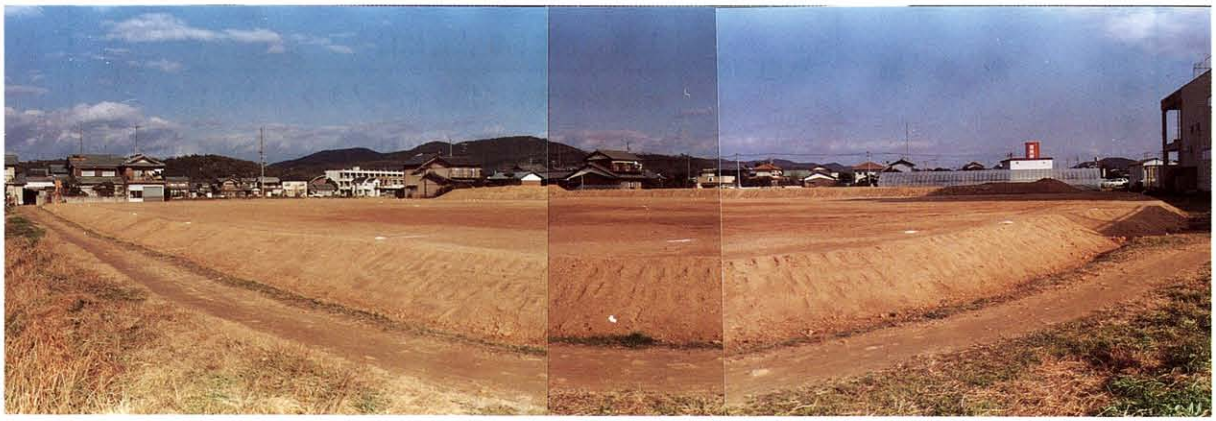
３．史跡標柱制作状況

４．磁器製総合説明板制作状況

図版８

１．耐根シート施工状況（西から）

２．素掘側溝、板柵枡施工状況（東から）



３．平成５年度工事完成状況（南西から）

平成６年度

平成６年度は、６か年事業の第３年度として、敷地造成工事、造成斜面部と広場部の境となる雑割縁石・史跡地東側に隣接する水田部分の高低差雨水排水を兼ねた擁壁工を中心とした園路広場工事、広場の北・西・南に設置するベンチの基礎工、水飲み工の休養施設工事、史跡地内の雨水排水をするたものＬ型側溝・皿型側溝・Ｕ型トラフ・排水管設置等の雨水排水施設工、散水栓を設け植栽樹木の給水管を地中に埋設する給水設備工、照明灯・引込柱の基礎と配管を地中に埋設する電気設備工の管理施設工事、高木を植栽するため広場に植栽枡を設け植栽樹木の根が地下遺構に影響しないよう植栽枡工の修景施設工事、貝塚復元を行う部分の基礎工である遺構復元工事を中心に行った。

また、工事実施設計監理業務委託を行った。

単町事業として、水道止水栓移設工事と史跡地北西に設置されているカーブミラーが北西入口エントランス中央部分にあたり西側農道部分への移設工事を実施した。

種別		対象	内容
補助事業	敷地造成	旧地形	土工：切土：75.9㎥、搬入盛土：80.9㎥、流用盛土：386.6㎥
	園路広場	史跡地	縁石工：雑割縁石：182.1m、擁壁工、スロープ工、土間コンクリート工：10.0㎡、擬石平板舗装工：9.0㎡
	休養・便益施設	史跡地	ベンチ工（基礎工事）：14ヶ所、水飲み：１ヶ所
	管理施設	史跡地	雨水排水施設工：Ｌ型側溝、蓋掛、皿型側溝、Ｕ型トラフ、浸透側溝、排水管、集水枡17ヶ所 給水設備工：散水栓７ヶ所、給水管 電気設備工：照明灯４ヶ所、引込柱１ヶ所、電気管
	修景施設	史跡地	植栽枡工：14カ所
	復元施設	貝塚	貝塚復元基礎工：115.0㎡
			工期：平成６年10月５日～平成７年３月28日
	設計監理	工事の実施設計監理	委託期間：平成６年９月２日～平成７年３月31日
単町事業	付帯事業	整備関係	水道止水栓移設工事
			工期：平成６年12月12日
			史跡整備事業に伴うカーブミラー移設工事
			工期：平成７年３月28日～29日

図版９

１．雑割縁石施工状況（南から）

２．擬石平板舗装施工状況（北東から）

３．ベンチ基礎施工状況（南から）

４．皿型側溝施工状況（南から）

５．集水枡、排水管施工状況

６．植栽枡施工状況（南東から）

７．平成６年度工事完成状況（南東から）

平成７年度

平成７年度は、６か年事業の第４年度として、敷地造成工事、北西と南西入口エントランス部分の擬石平板舗装・西側の管理用通路部分のカラー舗装工の園路広場工事、水飲み蛇口工・前年度配管した電気配管にケーブルを配管・外灯用照明灯４基の設置と電気引込柱１基設置の管理施設工事、周囲の造成斜面部分に用途別に樹木を配植する高木植栽工・入口部分の景観上や史跡境界部分に垣根上に配植する低木地被植栽工の修景施設工事、実際の貝殻を使用し貝塚の最終堆積状況を再現した貝塚復元工・白大理石を洗い出し工法により大溝２本を再現した溝復元工事を中心に工事を行った。

また、白磁製樹木説明柱３基の制作業務委託、工事実施設計監理業務委託を行った。

単町事業として、史跡地に接した西側と東側の農道部分の縁石・擁壁設置とカラー舗装工事と南側の農道部分の舗装工事を実施し史跡地周囲の環境整備を行った。

種別		対象	内容
補助事業	敷地造成	旧地形	土工：切土：23.0㎥、搬入盛土：180.0㎥
	園路広場	史跡地	舗装工：擬石平板舗装（車両進入部・一般部）、カラー舗装：109.5㎡、橋工
	管理施設	史跡地	水飲み蛇口工、電気ケーブル：142.8m、照明灯：４ヶ所、引込柱：１ヶ所
	修景施設	史跡地	高木植栽工：52本、低木地被植栽工
	復元施設	貝塚 溝	貝塚復元工：83.3㎡ 大溝復元工：388.6㎡
			工期：平成７年10月25日～平成８年３月28日
	教養施設	史跡地	白磁製樹木説明柱制作：３基 委託期間：平成７年12月１日～平成８年３月31日
	設計監理	工事の実施設計監理	
			委託期間：平成７年９月29日～平成８年３月31日
単町事業	付帯事業	整備関係	門田貝塚史跡整備付帯工事
			工期：平成７年12月１日～平成８年４月26日

図版10

１．擬石平板舗装施工状況（北から）

２．カラー舗装施工状況（北から）

３．低木地被植栽工施工状況（西から）

４．高木植栽工施工状況（北から）

５．貝塚復元工施工状況（南東から）

６．大溝復元工施工状況（東から）

７．平成７年度工事完成状況（北西から）

平成８年度

平成８年度は、６か年事業の第５年度として、広場平坦部分をセメント系硬化剤よる自然色土舗装の園路広場工事、復元貝塚の周囲にロープ柵と植栽帯を設け復元貝塚の保護を図る柵工・北西と南西部分の入口に車止めを設置・西側ベンチ部分に屑入れ設置の管理施設工事、住居の材料となった樹木の植栽・造成斜面前面の芝張りの修景施設工事、木製ベンチ14ヶ所の座板設置の休養施設工事、復元貝塚を破損から保護するため表面にガラスコーティングを行う貝塚保護工の復元施設、史跡総合案内板と貝塚説明板の基礎工事、史跡標柱設置、樹木説明柱設置の教養施設工事を中心に工事を行った。

また、用途別樹木の解説用として樹木ラベルの購入、貝塚・住居・土器について白磁陶板製説明板の制作業務委託及び工事実施設計監理業務委託を行った。

種別		対象	内容
補助事業	園路広場	史跡地	自然土舗装：2,149.0㎡、擬石縁石：54.4㎡
	管理施設	史跡地	柵工：ロープ柵、車止め：２ヶ所、屑入れ：４ヶ所
	修景施設	史跡地	植栽工
	休養・便益施設	史跡地	木製ベンチ：14ヶ所
	復元施設	貝塚・溝	貝塚保護工：82.0㎡
			工期：平成８年12月10日～平成９年３月25日
	教養施設	史跡地	史跡総合説明板基礎工：１ヶ所、貝塚説明板基礎工：１ヶ所、樹木説明柱設置：４ヶ所、史跡標柱設置：１ヶ所
			工期：平成８年12月10日～平成９年３月25日
			樹木ラベル購入：40枚
			貝塚説明板制作：10枚、住居説明板制作：４枚、土器説明板制作：４枚
			委託期間：平成８年10月１日～平成９年３月28日
	設計監理	工事の実施設計監理	
			委託期間：平成８年９月３日～平成９年３月31日

図版11

１．自然土舗装施工状況（南から）

２．ロープ柵施工状況（北西から）

３．木製ベンチ施工状況（北から）

４．貝塚保護工施工状況（北から）

５．史跡標柱施工状況（西から）

６．磁器製土器説明板制作状況

７．平成８年度工事完成状況（北西から）

平成９年度

平成９年度は、６か年事業の最終年度として、遺構の保護・遺構復元をするため敷地造成工事、復元住居周囲園路部分の自然色土舗装・復元住居周辺広場の芝生舗装・舗装端部工の園路広場工事、環境整備事業のメイン工事となる竪穴住居２棟の復元施設工事、史跡公園総合案内板、史跡総合・貝塚・住居・土器に関する磁器製説明板設置の教養施設工事、復元住居周溝からの雨水を排水する雨水排水施設工・上水道配管引込工・電気引込の管理施設工事、食用となった樹木植栽の修景施設工事を中心に工事を行った。

また、工事実施設計監理業務委託、「史跡門田貝塚環境整備事業報告書」の印刷製本を行った。

単町事業として、門田貝塚出土資料や平成４年度の確認調査時に行った貝層剝ぎ取りパネルを展示するガイダンス施設として邑久町立郷土資料館の１室を「門田貝塚資料室」として改造工事を行った。

種別		対象	内容
補助事業	敷地造成	史跡地	切土：2.0㎥、盛土：33.3㎥、搬入盛土：8.2㎥
	園路広場	史跡地	自然土舗装：208.8㎡、舗装端部工：77.5m 芝生舗装：446.1㎡
	復元施設	竪穴住居	復元住居：２棟
	教養施設	史跡地	住居・土器説明板：２ヶ所 磁器製陶板設置：24枚 史跡公園総合案内板：１ヶ所
	管理施設	史跡地	集水枡：２ヶ所、排水管：23.7m、給水管引込工 電気引込
			工期：平成９年10月31日～平成10年２月27日
	設計監理	工事の実施設計監理	
			委託期間：平成９年９月３日～平成10年３月31日
	印刷製本	環境整備事業報告書印刷製本	
			契約期間：平成10年１月22日～平成10年３月31日
単町事業	付帯事業	教養関係	邑久町立郷土資料館改造工事
			工期：平成９年12月22日～平成10年３月14日

図版12

１．自然土舗装施工状況

２．芝生舗装施工状況

３．復元住居施工状況

４．復元住居施工状況

５．説明板設置状況

６．説明板設置状況

７．平成９年度工事施工状況

第２節　史跡門田貝塚史跡整備委員会

本史跡の保存と活用を図るため専門家からの指導助言を受けるため「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を平成２・３年と開催してきたが、平成４（1992）年、国庫補助の史跡保存修理事業の採択を受け、今後の整備に伴う遺構確認調査の方法、整備内容や方法について専門的見地から指導、助言を得るため、「門田貝塚の保存整備について意見を聞く会」を発展的に解消し、平成４（1992）年８月28日、史跡門田貝塚史跡整備委員会（委員長：邑久町長木村惠昭）を発足し、以後整備完了まで継続した。また、必要に応じて現地指導をいただいた。

史跡門田史跡整備委員会設置要綱

（設　置）

第１条　史跡門田貝塚の史跡整備を実施するため、史跡門田貝塚史跡整備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（内　容）

第２条　委員会は、史跡門田貝塚の史跡整備事業の調査及び実施について、審議・指導する。

（組　織）

第３条　委員会は、学識経験者・行政関係者からなる委員をもって組織する。

２　委員は、町長が委嘱する。

３　委員の任期は、第２条の終了した日をもって終わる。

（委員長及び代理者）

第４条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、委員の互選により定める。

３　委員長は、委員を代表し、会務を総括する。

４　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指定する者がその職務を代理する。

（会　議）

第５条　委員会は、必要に応じて委員長が召集する。

（事務局）

第６条　委員会の事務局は、邑久町教育委員会社会教育課に置く。

２　事務局長は、社会教育課長とする。

（委任規定）

第７条　この要綱に定めるもののほか、委員会に関して必要な事項は、町長が別に定める。

附　則

この要綱は、平成４年８月28日から施行する。

この要綱は、史跡整備事業を終了した日に、その効力を失う。

史跡門田貝塚史跡整備委員会名簿

指導・助言　加藤　允彦　文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官（平成4～5年度）
　　本中　　真　文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官（平成6～9年度）

整備委員会
　委　員　鎌木　義昌　岡山理科大学理学部教授（平成4～6年度死去）
　　近藤　義郎　岡山大学名誉教授（平成4～9年度）
　　河本　　清　岡山県立博物館副館長～岡山県古代吉備文化財センター所長～くらしき作陽大学教授（平成4～9年度）
　　岡田　　博　岡山県古代吉備文化財センター課長補佐（平成4～9年度）
　　臼井　洋輔　岡山県教育庁文化課課長補佐～岡山県教育庁文化課課長代理（平成4～9年度）
　　柳瀬　昭彦　岡山県教育庁文化課課長補佐（平成4年度）
　　高畑　知功　岡山県教育庁文化課課長補佐（平成5～7年度）
　　平井　　勝　岡山県教育庁文化課課長補佐（平成8～9年度）
　委員長　邑久町長　木村　惠昭（平成4～9年度）
　　邑久町助役　金居　章甫（平成4～9年度）
　　邑久町総務課長　佐藤　　浩（平成4～5・9年度）
　　木村　末廣（平成6～8年度）
　　邑久町企画課長　日下　英男（平成4～5年度）、佐藤　　浩（平成6～8年度）
　　佐藤　伸一（平成9年度）
　委員長　邑久町教育委員会教育長
　　代理　石黒　　克（平成4年度）、有森　　剛（平成4～8年度）
　　岡村　三平（平成8～9年度）
　　邑久町教育委員会教育次長
　　奥田　辰男（平成4～6・8年度）

オブザーバー　株式会社環境事業計画研究所　吉村　龍二（平成4～9年度）
　　福島　三佳（平成7年度）
　　榊山建築設計事務所　榊山　　健（平成9年度）

事務局
　事務局長　邑久町教育委員会社会教育課長
　　横山　次男（平成4・8年度）、太田　勝昭（平成5～6年度）
　　奥田　辰男（平成7年度）、久保田　晴久（平成9年度）
　　邑久町教育委員会社会教育課
　　木下　督士・馬場　昌一（平成4～9年度）

整備委員会の開始日・議事等

名　　称	開　催　日	内　　容
平成４年度（1992） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成４年８月28日	• 史跡門田貝塚史跡整備委員会の設置 • 委員の委嘱 • 環境整備基本計画の説明 • ４年度整備事業の概要説明
	第２回 平成４年９月４日	• 植栽樹種の検討 • 貝塚復元方法の検討 • 復元住居の構造の検討
	第３回 平成４年12月15日	• 確認調査現地視察 • 門田貝塚全体説明板の内容検討
	第４回 平成５年１月30日	• 確認調査現地視察 • 門田貝塚全体説明板の内容検討
	第５回 平成５年２月24日	• 確認調査現地視察
文化庁文化保護部記念物課 加藤允彦文化財調査官来訪	平成４年11月13日	• 整備事業事業について指導、現地視察
平成５年度（1993） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成５年９月16日	• 確認調査概要説明 • 確認調査により位置の確認された遺構を基に全体整備図の作成・検討 • ５年度整備事業の概要説明
	第２回 平成６年３月９日	• ５年度工事概要説明 • 花粉分析結果による植樹樹木の検討 • 樹木、貝塚説明板の内容検討 • 復元住居構造の検討
平成６年度（1994） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成６年10月21日	• ６年度整備事業の概要説明 • 植栽配置計画の検討 • 樹木、貝塚説明板の内容検討 • 復元住居構造の検討
	第２回 平成７年３月27日	• ６年度整備事業の概要説明 • 樹木植栽計画の検討 • 貝塚説明板の検討 • 復元住居構造の検討
文化庁文化保護部記念物課 本中　真文化財調査官来訪	平成７年３月９日	• 整備事業について指導、現地視察

名　　称	開　催　日	内　　容
平成７年度（1995） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成７年12月４日	• ７年度整備概要説明 • 貝塚復元工法の検討 • 貝塚、土器説明板の内容説明 • 復元住居小屋組の検討
	第２回 平成８年１月31日 ２月１日	• 貝塚復元工事現地視察
文化庁文化保護部記念物課 本中　真文化財調査官来訪	平成８年１月17日	• 整備事業について指導、現地視察
平成８年度（1996） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成８年10月24日	• ８年度整備概要説明 • 復元貝塚保護柵の検討 • 貝塚、土器、住居の内容検討 • 復元住居防火対策の検討
平成９年度（1997） 史跡門田貝塚史跡整備委員会	第１回 平成９年６月２日	• ９年度整備概要説明 • 復元住居構造の検討 • 環境整備事業報告書目次の検討 • 復元住居防火対策の現地焼成実験
	第２回 平成９年８月18日	• 復元住居実施設計図の検討
	第３回 平成10年２月６日	• 復元住居施工現地指導
	第４回 平成10年３月19日	• 環境整備事業報告書内容検討 • ９年度整備竣工現地視察

図版13　史跡整備委員会現地指導状況（平成９年６月２日）

第４章　整備工事概要

第１節　敷地造成

１　敷地造成工

敷地造成の検討

史跡整備での一番の目的として、遺構の保護保存を第一に考え、史跡地全体に盛土造成を行うことを基本とする。ただし、盛土厚については、周囲との一体性をもたせて整備を行うものとした。

史跡地

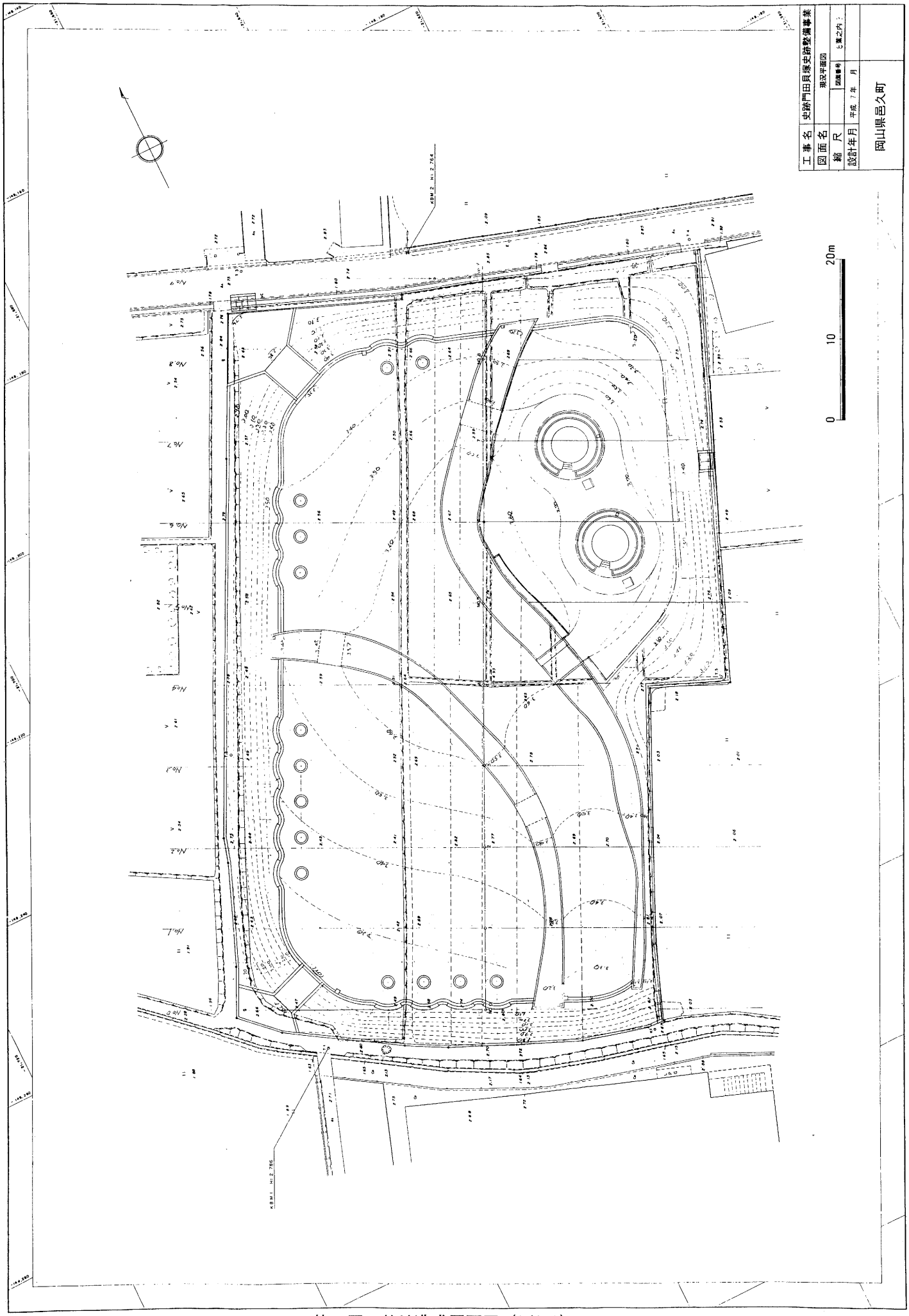
- 往時の地形復元をめざし盛土を行う。
  このため、確認調査で検出した基盤面の海抜高を確認すると、全体的に海抜約1.8～2.0ｍで基盤面が検出されているが、一部北側部分で基盤面検出高が低い調査区がある。しかし、全体に微高地内の安定した地点に史跡地があることが分かった。
- 史跡地北側に用水、西・南側に農道があり斜面勾配を緩くとり、史跡地との高低差は法面ですりつけて一体化をはかる。
- 史跡地東側の水田と史跡地部分の高低差が約70㎝あり境界部分は擁壁を設ける。
- 植栽計画地に耐根シートを設置し、樹木の直根の遺構への影響をないようにする。
- 造成敷地内に降った雨水を、すべて史跡地の北と南側の用水への排水計画をする。

遺構部

- 遺構復元にあたり切土は行わない。
- 竪穴住居の復元では、柱・床・炉穴・周溝の設置に伴い、造成部分の掘り込みが必要となるので旧地表に影響しない盛土厚の検討を行う。

敷地造成の概要

- 史跡地内の雨水はすべて北と南側の用水に排水するため、造成高は、史跡地中心部と復元住居計画地部分を最高造成高とし、現況地盤より約１ｍの盛土を施し南北へ水勾配をとった。
- 史跡地の公有化前は、畑・水田として使用されていたため、地盤が軟弱であった。そのため、盛土の搬入にあたり機械搬入に支障をきたす。このため、搬入に必要な幅員を確保するため、工事用搬入道として幅員幅の土壌改良を行い、搬入ダンプについても周囲の民家や北側町道に影響しないよう４ｔダンプによる盛土の搬入を行った。
- 盛土は真砂土を用い、重機による敷均しとブルドーザーによる転圧を交互に繰り返し、振動ローラーで最終転圧を行った。
- 史跡地東側の水田部分との境界部分については、Ｌ型側溝を兼ねた長さ76.3ｍの擁壁を設け、東側の民家と畑地に面した境界部分についても、Ｌ型側溝を兼ねた長さ23.2ｍの擁壁を設けた。（第13図）



第13図　整地造成平面図（1/600）

図版14

1．施工前（北から）

2．施工前（北東から）

3．真砂土搬入状況（北西から）

4．真砂土搬入状況（北西から）

5．ブルドーザー敷均し状況（西から）

6．ブルドーザー敷均し状況（南西から）

7．振動ローラー転圧状況（北から）

8．振動ローラー転圧状況（西から）

第２節　復元施設

１　貝塚復元

貝塚復元の検討

平成４（1992）年度、遺構の確認調査は、幅約４ｍの断面Ｕ字形を呈する溝を埋めて形成した貝塚中心部の貝層断面を再調査し貝塚の形成状況を確認を行った。また、貝塚中心部では溝の肩部よりさらに盛り上がり貝塚が形成され厚さは約１ｍに及んだ。この溝上部まで貝層が形成される範囲は、ボーリング調査により幅４ｍ、長さ約28ｍに及んだ。

確認調査の現地説明会を平成５（1995）年２月27日実施し、貝塚貝層断面の迫力から地元関係者からは、遺構の活用から貝層の露出展示整備を希望する声が上がった。

整備方法として、貝塚は、史跡門田貝塚の最大の特質であることを考慮して、貝塚の復元整備を検討した。

整備方法

	方　　法	問　題　点
Ａ案	幅約４ｍで断面が緩やかなＵ字形を呈する溝を埋めて堆積・形成された貝層断面の露出展示を行う。覆屋等の施設を設け、断面の保存処理を行う。	貝塚の保存・防災上かなり問題が残ると共に、溝底に溜まる水が汚泥することが予想され、維持・管理上も困難が予想される。
Ｂ案	幅約４ｍで断面が緩やかなＵ字形を呈する溝を埋めて堆積・形成された貝層上面の露出展示を行う。覆屋等の施設を設け、上面の保存処理を行う。	貝塚の堆積している姿を示すことができない。また、保存上問題が残り、維持・管理上も困難が予想される。
Ｃ案	発掘調査の結果に基づき、復元整備する。整備にあたっては、盛土を施し、遺構面が直接露出しないようにし、実物の貝殻を使用し貝塚の表現をする。	貝塚の本物の姿を示すことができない。

上記の３案などが考えられるが、門田貝塚の場合、貝塚が溝内に形成されており、溝下層は湧水の処理と露出面の保存上から検討が難しく、今後さらに検討・研究が進め最終的な案を採択する。計画としては、溝の復元との係わりから検討し、保存上最も問題が少ないと考えられるＣ案を採択することにする。

整備実施にあたり、貝塚は溝との関係で形成されており、遺構保護を第一に考え遺構はすべて地下に保存し、造成土上に確認調査時貝塚埋土から採集した貝殻を使用し、溝内の貝塚の最終堆積状況を復元し、貝塚の広がりを視覚的に認識できる形で整備を行った。

このため、貝塚復元のテストピースを作成し、溝内の貝殻の検出状況の表現、ベースコンクリートによる下地の凸凹状況、復元貝塚の土色について、史跡門田貝塚史跡整備委員会で検討を受けた。

復元貝塚の保護については、貝殻がそのまま露出した状態になっており保護策として、貝殻本体の

硬化処理と、復元後の表面の硬化処理を行った。さらに、復元貝塚内の進入により踏圧され破損を抑制するため保護柵設置の検討を行った。

保護柵の検討

設置規準として(1)～(8)を設定した。

(1)防護柵設置要項に準ずる（防護柵設置要項の防護柵設置に関する規定による）

(2)耐久性のあるもの

(3)維持しやすいもの

(4)経済性の良いもの

(5)内部の復元貝塚のが主体であるので、見通しの良い、存在感の薄いもの

(6)整備全体のバランスと調和するもの

(7)結界性の高いもの（踏み越え難いもの）

(8)安全性の高いもの

以上の８点を規準として各プランを作成し検討した結果、低木生け垣による植栽帯とロープ柵を併用した貝塚保護柵とした。

貝層断面については、平成４（1992）年度、確認調査時、貝層断面の剝ぎ取り転写を行い、邑久町立郷土資料館門田貝塚資料室に展示。

貝塚復元の工程概要

１．基礎工事

溝１・２の復元工事と同一工事として、基礎部分を溝の流走位置に復元溝のベースとなる100㎜厚の基礎砕石の上に、50㎜厚のコンクリート（160―８―25）打ちと、溝端部を溝状に表現するため溝底面より100㎜高くコンクリート打ちを行った。

２．下地処理

下地工事後、貝の洗い出しによる貝塚復元は次年度に行ったため、基礎コンクリートにクラックが生じ、幅1.5㎜以上のクラックに対して表面より≒3.0㎜斫り（Ｖカット）高強度無収縮セメント系プレミックスグラウト材（コンベクストラＧＰ）を流し込みクラック処理を行う。また、コンクリート表面にホコリ・ゴミ・油分等ないよう表面清掃を行い確認する。

３．下地調整

ベースコンクリートに、水１：左官用多目的接着剤（セボンド）２に混合された「セボンドプライマー」を水刷毛ローラー等にて、ベースコンクリートに擦り付けるように全面に塗布する。

４．調整モルタル

粒度調整された、１：３モルタル硬目にセメント用防凍急結硬剤（クイックソークリートＤ）をモルタル使用水10に対して１混和し、よく撹拌し平均で20㎜厚で、貝層最終堆積面のように、表面をランダムに凹凸させ最大40㎜程度の高低差がつくよう、モルタル塗りを行う。

５．貝塚復元用モルタル混練り

ａ）骨材処理

確認調査時最終した貝殻はほとんどがハイガイとシジミであるが、非常にもろく、粉状化を起こしているため、そのままの状態では外部用資材として使用できない。このため、遺物とし

ての貝殻を資材として、長期的に保護させるため貝殻の強化処理を前もって行わなければならない。処理にあたり、加工された貝殻は、変色をしてはならなく、出土時と同じ色・艶でなくてはならない。

出土した貝殻を水洗いし、表面の土・泥分等を取り乾燥させる。（処理剤を使用）貝殻の内部の粉状化を起こしているカルシウム分（遊離石灰）と化合して、安定した、非常に硬い弗化カルシウムの層を作る無機質強化剤（リトリン）粉末を、お湯で溶かし含浸させる。リトリン１に対し、湯４の配合溶液へ貝殻を約５分間浸け込み（溶液から気泡がでなくなるまで）空中にさらし、約24時間乾燥させ、同様２回目の処理も行う。

b）混練り

傾動型ミキサーの中に海砂５kgと、膨張性減水剤（コンベックス100）１缶（200ｇ）をよく空練りし、次にセメント１袋（40kg）と出土地の土色を出すため色粉（バイエル）黄土色・赤錆色・黒色を混合した物を、セメント重量の２％（800ｇ）に添加し空練りし、次にセメント用防凍急結硬剤（クイックソークリートＤ）の10倍溶液を混練り水として使用し、（W/C60％程度）モルタル状態になったところで上記５．ａ）の骨材処理された貝殻30kg・海砂より取り上げた貝殻（塩分を水洗いし、乾燥した物）１kg・白玉石（白大理１分目）５kgを入れ、均一なコンシステンシー（作業性）となるよう４～５分間、混練りする。

６．流し延べ

４．調整モルタル上に、５．で混練りされた貝殻グラウトモルタルを、静かに敷延してゆき、貝塚の検出された状態のように、貝殻の向き等に注意をはらいながら、作業を進める。

７．表面遅延剤の散布

敷き広められた、貝殻モルタルの表面の水引きの状態を見て骨材露出仕上げ用表面遅延剤（プレコ CCR レギュラー無色）をエアレススプレー又は、噴霧器等を使用し、均一に確実に≒３～４㎡/㍑（１㎡当り0.25～0.33㍑）散布する。

８．養生

骨材露出仕上げ用表面遅延剤を吹き付け後、直ちに0.2㎜厚程度のポリエチレンシートをかけて石土等で、両端を固定しその上からブルーシート等で養生掛けする。

薬品効果の保持と、雨・風等による不均一なセメントの硬化を防ぐために、二重養生を行う。

９．洗い出し作業

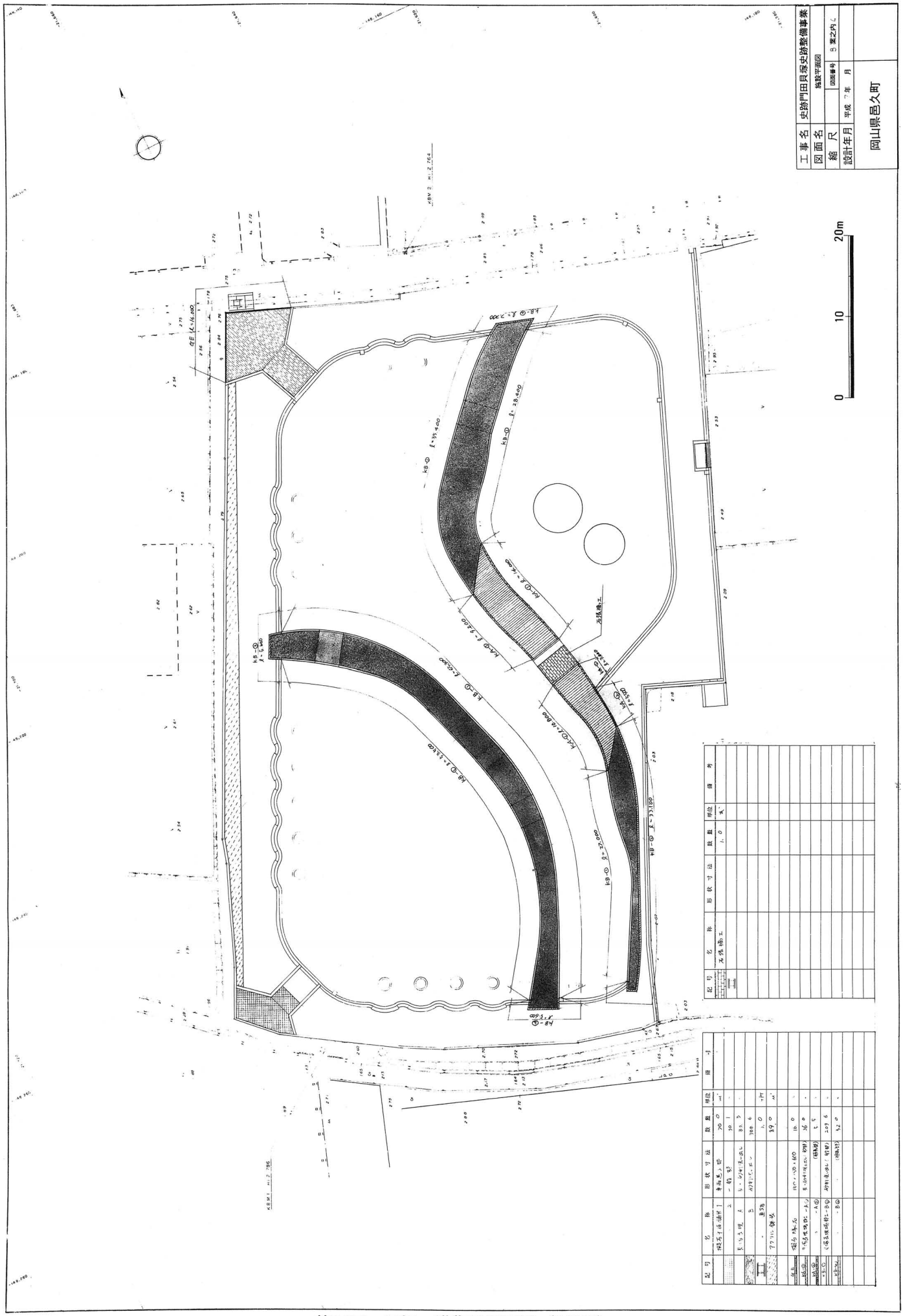
ａ）翌日または、翌々日（前日の外気温により左右する）洗い出し表面のモルタルペーストの状態を確認し、先ずシートを取り外して未硬化の表面をホースまたは、高圧洗浄機（50kg～80kg/㎠）にて洗い出し除去していく。一様に全面を洗い流して、もう一度洗い残しのないように、入念にチェックしながら仕上げ洗いをする。

ｂ）ノロの処理

現場設置の側溝に土のう袋にて堰き止めし、上澄水は排水し、ノロ分は、現場責任者の指示に従い所定の場所に廃棄する。

10．表面保護

洗い出し作業終了後、材令３日以上で、良く乾燥した状態の表面に、高性能浸透性撥水剤（デックガードＰ―20）を0.4㍑/㎡（２回塗）の割合で、エアスプレー等により均一に散布す



第14図　貝塚・溝復元平面図（1/600）

る。

仕上がりは無色透明で洗い出しされた貝殻の長期的な保護が可能である。

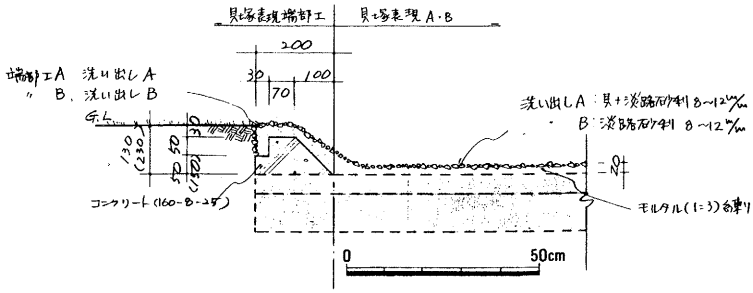
さらに、貝塚表面の硬化・防水・防カビ・防汚染のため透明艶消しの常温ガラスコーティング剤（ヒートレスグラス600）をエアスプレー等により均一に散布する。

11．溜まり水排水作業

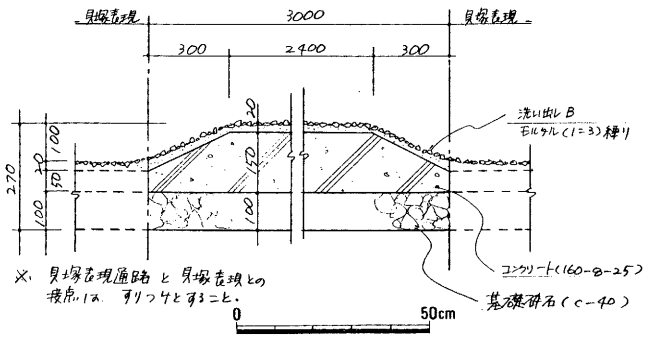
復元した溝2本内の雨水は、各3基の集水枡を設け排水し、復元貝塚部分に降った雨水についても集水枡へ排水するが、貝塚表面に凸凹を設けたため谷状にレベルの低い所に雨水が溜まるので基礎砕石部分まで表面から見にくい部位に10㎜φのドリルにて、水抜き穴を開ける。

12．復元貝塚保護柵

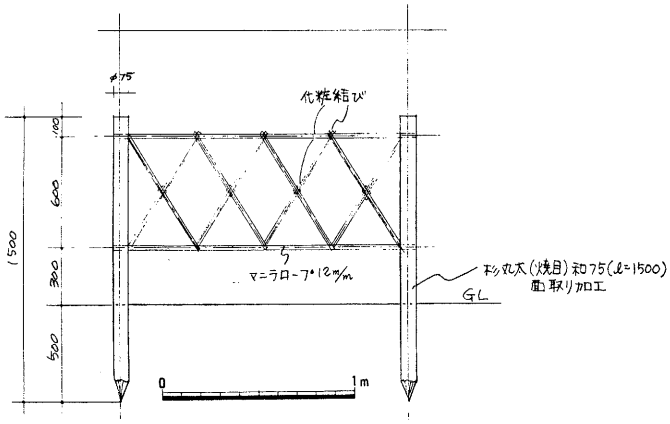
復元した貝塚内への人の進入防止のため、復元貝塚に平行し、（H）0.5m（W）0.2mのイヌツゲによる生け垣と復元貝塚端部と貝塚部分の通路南側に杉丸太2本の間にマニラロープを張った貝塚保護柵を設置した。



第15図　貝塚・溝復元断面図（1/20）



第16図　溝復元通路部断面図（1/20）



第17図　ロープ柵断面図（1/40）

図版15

１．貝塚復元施工前状況（南から）

２．コンクリート打設状況（南から）

３．調整モルタル打設状況（南から）

４．出土貝殻受取

５．骨材処理状況（リトリン処理１回目）

６．骨材処理状況（リトリン処理２回目）

７．混練り状況

８．ミキサー混合状況（石及び貝殻）

図版16

１．種石及び貝殻塗布状況（南から）

２．種石及び貝殻塗布状況（南から）

３．表面遅延剤散布状況（南から）

４．養生状況（南から）

５．洗い出し状況（南から）

６．表面保護剤塗布状況（南から）

７．貝塚復元完成状況（北から）

８．復元貝塚保護柵設置状況（北から）

2　溝復元

溝復元の検討

昭和41（1966）年の発掘により規模が確認された、門田貝塚の中心をなす幅４～５ｍで断面がゆるいＵ字形を呈する溝１（ＳＤ06）は、溝自体は曲折して延び、その始点・末点とも不明であり、人工的開削であるか、自然の河道であるか意見が分かれていた。

昭和57（1982）年、岡山県教育委員会の調査により溝１（ＳＤ06）の他に同規模の溝ＳＤ03・ＳＤ08がほぼ南北方向に流走すると考えれる溝が検出された。ＳＤ03検出時には、ＳＤ06と対になって、環濠を形成するのでなないかと思われたが環濠としては確認できず、用水としての可能性が考えられた。

平成４（1992）年度、邑久町教育委員会の確認調査では、過去の発掘調査により検出された溝１（ＳＤ06）・溝２（ＳＤ03）の流走方向を確認するためトレンチを設けた。その結果、溝１は南北方向に蛇行しながら史跡地外に延び、溝２（ＳＤ03）は、幅約２～４ｍで約80～90ｍの円弧を描き史跡地外に延びていることが確認された。さらに、溝１・２に直交する溝３も検出された。

これらの調査結果から整備方法として、溝は、貝塚と共に史跡門田貝塚の最大の特質であることを考慮して、溝の流走方向が確認された溝１・２の復元整備を検討した。

整備方法

	方　　法	問　題　点
Ａ案	溝の壁面に保存処理を行い、確認されている溝の露出展示を行う。	溝の保存上・防災上かなり問題が残ると共に、溝底に溜まる水が汚泥することが予想され、維持・管理上も困難が予想される。
Ｂ案	発掘調査の結果に基づき、復元整備を行う。整備にあたり、遺構盛土上に溝を復元する。	溝の本物の姿を示すことができない。
Ｃ案	基本的にＢ案であるが、一部Ａ案を取り入れ、溝の実物を示す箇所を設ける。Ａ案を取り入れる箇所には保存上覆屋を設けることを検討する。	視覚上、覆屋の箇所で溝のつながりが途切れ、遺構の広がりを有効に示せない。

上記の３案などが考えられるが、門田貝塚の場合、溝下層の湧水処理と露出面の保存上から検討が難しく、今後さらに検討・研究を進め最終的な案を採択する。

計画としては、貝塚の復元との係わりから検討し、保存上最も問題が少ないと考えられるＢ案を採択することにする。

整備実施にあたり、溝は貝塚との関係で形成されており、遺構保護を第一に考え遺構はすべて地下に保存し、造成土上に、溝の平面状態を復元し、溝の流走方向を視覚的に認識できる形で整備を行った。

さらに、２本の溝が史跡地外に延びていることを示すため、溝復元を史跡地造成平坦部から斜面部

まで延ばし表現した。

溝の表現としては、幅約４ｍの端部を10cm高くし溝状の基礎コンクリートに摩耗の少ない１分の白玉石（白大理）を使用し、骨材露出仕上げの洗い出し技法で行った。

溝復元の工程概要

１．基礎工事

溝１・２の流走位置に復元溝のベースとなる100mm厚の基礎砕石の上に、50mm厚のコンクリート（160－８－25）打ちと、溝端部を溝状に表現するため溝内部より100mm高くコンクリート打ちを行った。

２．下地処理

基礎工事後、骨材の洗い出しによる溝復元は次年度に行ったため、基礎コンクリートにクラックが生じ、幅1.5mm以上のクラックに対して表面より≒3.0mm斫り（Ｖカット）高強度無収縮セメント系プレミックスグラウト材（コンベクストラＧＰ）を流し込みクラック処理を行う。また、コンクリート表面にホコリ・ゴミ・油分等ないよう表面清掃を行い確認する。

３．下地調整

ベースコンクリートに、水１：左官用多目的接着剤（セボンド）２に混合された「セボンドプライマー」を水刷毛ローラー等にて、ベースコンクリートに擦り付けるように全面に塗布する。

４．調整モルタル

３．下地調整の「セボンドプライマー」が乾燥しないうちに追いかけで、粒度調整された、１：３モルタル硬目にセメント用防凍急結硬剤（クイックソークリートＤ）をモルタル使用水10に対して１混和し、よく撹拌の上、平均で≒10mm厚で、下地コンクリートの表面のレベルを調整しながら、木ゴテ・金ゴテで流し広げる。

５．骨材露出仕上げ用モルタル混練り

電動ミキサーに、指定された骨材白玉石（白大理）１分を100kg、海砂より取り上げた貝殻（塩分を水洗いし、乾燥した物）洗い出し工法用モルタル混和剤（プレグラウトＧ－14）の粉末を２kg/袋を入れよく混練りし、40kg/袋を投入し、程良く混和されたのを確認し、使用水10に対し防凍急結硬剤（クイックソークリートＤ）１の溶液を混練り水として使用。（Ｗ/Ｃ約50％）

均一なコンシステンシー（作業性）となるよう様４～５分間、混練りして≒20mm厚で流し広げる。

６．表面遅延剤の散布

上塗りモルタルの表面の水引きの状態を見て骨材露出仕上げ用表面遅延剤（プレコエクスポザールイエロー）原液５：水１の割合で調合し、エアレススプレー等を使用して、㎡/４～５㎡/200～250ccの使用量で表面に均等に吹き付ける。

散布量の目安は、イエローの色で下地モルタルの色が見えなくなり、水光りする程度とし塗布ムラのないように注意して吹き付ける。

７．養生

骨材露出仕上げ用表面遅延剤を吹き付け後、直ちに0.2mm厚程度のポリエチレンシートをかけて石土等で、両端を固定しその上からブルーシート等で養生掛けする。

薬品効果の保持と、雨・風等による不均一なセメントの硬化を防ぐために、二重養生を行う。

８．洗い出し作業

翌日または、翌々日（前日の外気温により左右する）洗い出し表面のセメントペーストの状態を確認し、シートを取り外して未硬化のセメントペースト（表面ノロ）を、高圧洗浄機にて（水圧㎠/80kg～120kg）除去していく。一様に全面を洗い流して、もう一度洗い残しのないように入念にチェックしながら仕上げ洗いをする。

９．表面保護

洗い出し作業終了後、材令３日以上で、良く乾燥した状態の表面に、高性能浸透性撥水剤（デックガードＰ―20）を0.4㌔/㎡（２回塗）の割合で、エアスプレー及びローラーで塗布する。

これにより、表面の防水撥水はもちろん、耐汚染性も大幅に向上する。

10．溜まり水排水作業

復元した溝２本内の雨水は、各３基の集水枡に排水するが、部分的にレベルの低い所に雨水が溜まる箇所に基礎砕石部分まで表面から見にくい部位に10㎜φのドリルにて、水抜き穴を開ける。

図版17

１．溝復元施工前状況（南東から）

２．下地処理状況（東から）

３．下地調整状況

４．調整モルタル打設状況（東から）

図版18

1．ミキサー混合状況

2．練り込み状況

3．種石塗布状況（東から）

4．表面遅延剤散布状況（東から）

5．洗い出し状況（南東から）

6．表面保護剤塗布状況（南から）

7．溝復元完成状況（南東から）

8．溝復元完成状況（南から）

3　竪穴住居復元

復元の意義

史跡門田貝塚は、弥生時代の貝塚を伴う初期農耕集落遺跡であり吉備地方を代表する遺跡である。環境整備にあたり遺跡の特色を踏まえ『弥生時代の門田ムラ』の復元をテーマに、代表的遺構の復元を行い、遺跡の姿を視覚的・総合的に往時の空間を創出していくために整備を行うものである。住居は、集落のイメージをもたせるように２棟復元する。住居の復元にあたり、発掘で確認した遺構を原位置に同規模の平面プランで復元することを原則とする。

さらに、住居は遺跡立地場所の地理的条件や気候条件の違い、文化的な地域差が構造へも反映すると考えられ、そのことも考慮して構造を検討する必要がある。

復元住居の設定

竪穴住居の復元に当たり、その資料は、昭和41（1966）年の発掘調査によって数棟検出された、弥生時代後期に属する平面が円形を呈する竪穴住居址である。さらに、昭和57（1982）年、岡山県教育委員会の範囲確認調査によって２棟検出された、平面が隅丸方形を呈する弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる竪穴住居址である。これら遺跡の中の限られた調査区では、弥生時代前期に属する竪穴住居址の検出がなく、環境整備事業にあたり復元を行う住居のみは、先の昭和41年の発掘区で約１/２のプランが検出された弥生時代後期に属する竪穴住居址を、復元住居の諸データとすべく全掘調査を行い、さらに、各地で復元されている竪穴住居を参考に構造を検討した。

平面形態

平面形すなわち住居の床面を作るために地表から掘り込んだ部分の形である周壁の平面形は、平成４（1992）年度に邑久町教育委員会によりトレンチ３の竪穴住居１として全掘した結果、南東部分が土壙により削平を受けているが、南北約4.6m、東西約4.5mを測り、ほぼ円形を呈した。

周堤の設定

竪穴住居の周壁外側に周堤がめぐらされていたことは、火山噴火の堆積物や立地上の好条件により残存した周堤の検出や[1]、発掘調査結果の再検討により、円形住居の周壁外側に同心円形の溝がめぐる例の解釈等により周堤の存在を想定されている。また、竪穴掘削時の廃土処理の問題からも、竪穴住居を掘削した廃土を周堤の盛土に利用し、壁体の上半部と化すことにより頑丈な高い壁体を比較的容易に獲得するという建築技術上の特質と考えた。[2]

門田貝塚の竪穴住居の周堤の高さは、竪穴掘削時の廃土量から単純に計算でききるものではないが、一つの目安として計算してみると次のような数値となる。ただし、半径以外の数値は、遺跡地の立地の良さから弥生時代以降中世にわたる遺構が検出され上層部の削平や遺構の重なりにより仮定した数値を用いた。

半径……r　　r＝2.25m（直径が4.5m）

地表からの深さ……d　　d＝0.50m（調査時では0.20mであったが0.50mと仮定する）

周堤の幅……w　　w＝1.00m（仮定する）

周堤の地表からの高さ……ｈとした場合

$$h\pi\{(r+w)^2-\}=d\pi r^2$$ であるから

$$h=\frac{dr^2}{2rw+w^2}$$ と表現され

$$=\frac{0.50\times2.25\times2.25}{2\times2.25\times1.0+1.0\times1.0}$$

$$=\frac{2.53125}{5.5}$$

$$=0.46022$$

$$\fallingdotseq0.46$$

ｄ＋ｈ＝0.96ｍとなり、住居床面から周堤上端までの高さの目安とした。

周堤の内側には、多くの竪穴住居址の周溝の検出から、この遺構を、周堤内側壁にそって杉割り板を立て並べ土留め用施設と理解し設置した。周堤外側の土留め用施設については、後世に地表面の削平により遺存しない可能性もあるが、復元にあたり設置しなかった。

柱の設定

発掘調査により、住居床面から10数基のピットを検出した。（第20図）それらすべてのピットが柱穴として機能したと考えられず、他の遺構に伴うピットも含まれていると思われた。約50㎝×80㎝の掘り方に、柱を設置する部分をさらに深く掘り込み二段掘り構造を呈する明らかに柱穴と思われるピットを手がかりに、Ｐ－１～６の計６本で主柱が構成される住居と考えた。６本の主柱の配置は、中央ピットであるＰ－７を中心として住居周壁近くに、ほぼ同一円周上に並ぶ。

棟の設定

棟の存在を考えることは、屋根形態と大きく関係し、入母屋造りの屋根形態と想定する。

棟方向の設定として、東日本の弥生時代の竪穴住居に見られる平面形態が隅丸長方形や小判型であれば長軸方向に棟方向を設定できるが、西日本の竪穴住居の平面形態が円形の場合、周堤の平面形態のみで棟方向を設定することができない。このことから、主柱に架けられる桁の長さを次のように比べ棟の方向を設定した。

桁ａと桁ｄが他の４本の桁に比べ長く、この桁方向に棟が平行するものと想定した。ただし、桁ａと桁ｄは他の相対する桁どうしの様に平行ではなく角度で2.15°振っている。そこで角の２等分線を引くとＮ線となりこれを棟方向と設定した。（第19図）

桁と梁の設定

住居の四主柱形式の構造は、棟木の方向から平行する材を桁、直行する材を梁として柱に架け渡すが、本例のような六主柱形式の構造では、柱間に架け渡す材はすべて桁として扱う。Ｐ－１～６の主柱の柱心での柱間は、Ｐ－１～Ｐ－２で1.57ｍ、Ｐ－２～Ｐ－３で1.55ｍ、Ｐ－３～Ｐ－４で1.91ｍ、Ｐ－４～Ｐ－５で1.89ｍ、Ｐ－５～Ｐ－６で1.14ｍ、Ｐ－６～Ｐ－１で2.05ｍを測る。主柱と桁の組み合わせ方は、多くの復元住居で採用されている上部が二又状になった柱に桁を架け渡すのでは

なく、門田貝塚で復元する竪穴住居は弥生時代後期のものであり、弥生時代の農耕社会の成立による新しい土木技術や金属製工具による多様な木製品に見られる高度な木工技術から考え、ほぞとほぞ穴で組み合わされたものと考えた。

桁と桁の組み合わせ方法は、四主柱形式の構造のように単純に配置出来ず（第21図）の桁配置図のように、まず桁ｂと桁ｅをＰ－２～Ｐ－３とＰ－５～Ｐ－６の柱に架け渡し、その上に、桁ｂと桁ｅにほぼ平行する桁ａと桁ｄをＰ－１～Ｐ－２とＰ－４～Ｐ－５の主柱上の桁に架け渡し、さらに、棟木と平行する桁ｃと桁ｆをＰ－３～Ｐ－４とＰ－６～Ｐ－１の主柱上の桁に架け渡した。桁の組み合わせ部分は互いに上下に相しゃくりとした。

垂木の配置

垂木は幅１ｍの周堤内側まで住居内部の有効利用を図るため、極力周堤外側に配置した。このため周堤内側で床面から垂木までの高さは約170cm、住居内の周堤上の幅を約50cm確保出来た。垂木配置の間隔は、桁から竪穴壁までの床面にほとんど間隔を開けずに密に列した状態で発掘された例が山陽地方に多く遺存し、桁から地面までは土葺きで、桁から上は草葺き屋根で有ることも推測されているが、[3]本例はすべて茅葺き屋根として想定し、住居規模から考え、垂木尻で65cm間隔で放射状に配し、周堤内に差込み固定した。

桁に乗る垂木の勾配は、多くの復元住居の勾配に矩勾配（45°）として設定されているが、門田貝塚復元住居では、６本の桁までの距離が一定でないが基本勾配として、邑久町平野部にある近世寄棟造茅葺き民家の降棟の角度を参考にし、垂木勾配を９寸５分（43.5°）とした。

屋根の形態

屋根の形態は、大きく切妻造・寄棟造・入母屋造があるが、屋根の妻部分は、竪穴住居内への採光の一番の箇所であり、住居中央の床面に「灰穴炉」といわれる炉からの煙出しの必要性、さらに、総社市横寺遺跡出土の竪穴住居を模した家形土製品[4]（第18図）を参考に、屋根形態を、桁から下は、垂木を円錐形の放射状配置に配す。桁から上の小屋組は、上部の屋根加重により柱１・３・４・６が外側に開かないよう桁ｆと桁ｃに梁ｇと梁ｈを配する「京呂組」の軸組を行う。[5]（第21図）その上に先端を交差させた斜めの部材の扠首を組んで棟を支えた切妻を乗せたいわゆる入母屋造と考えた。（第25図）このように、主柱とこの上に架した桁材によってできる立方体の骨格が上部を支える基礎枠組みと考えた構造を、都出比呂志氏は「主柱枠組骨格構造」と仮称し、弥生時代以降主柱穴が太くかつ、深いことから主柱は重力を支える基本枠組みと考えるべきで、弥生時代に全国的に定着する構造と考えた。[2]

入母屋の屋根の妻側端部である螻羽は雨や風で痛みやすいので外側に転びを設けた。（第27図）

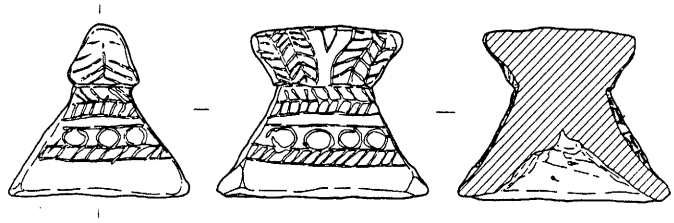
茅葺き

茅葺き材を固定するための部材としての「下地」あるいは「葺地」については、横方向に幅18cm間隔で「エツリ」または「小舞竹」をならベシュロ縄で結束し屋根下地を行う。

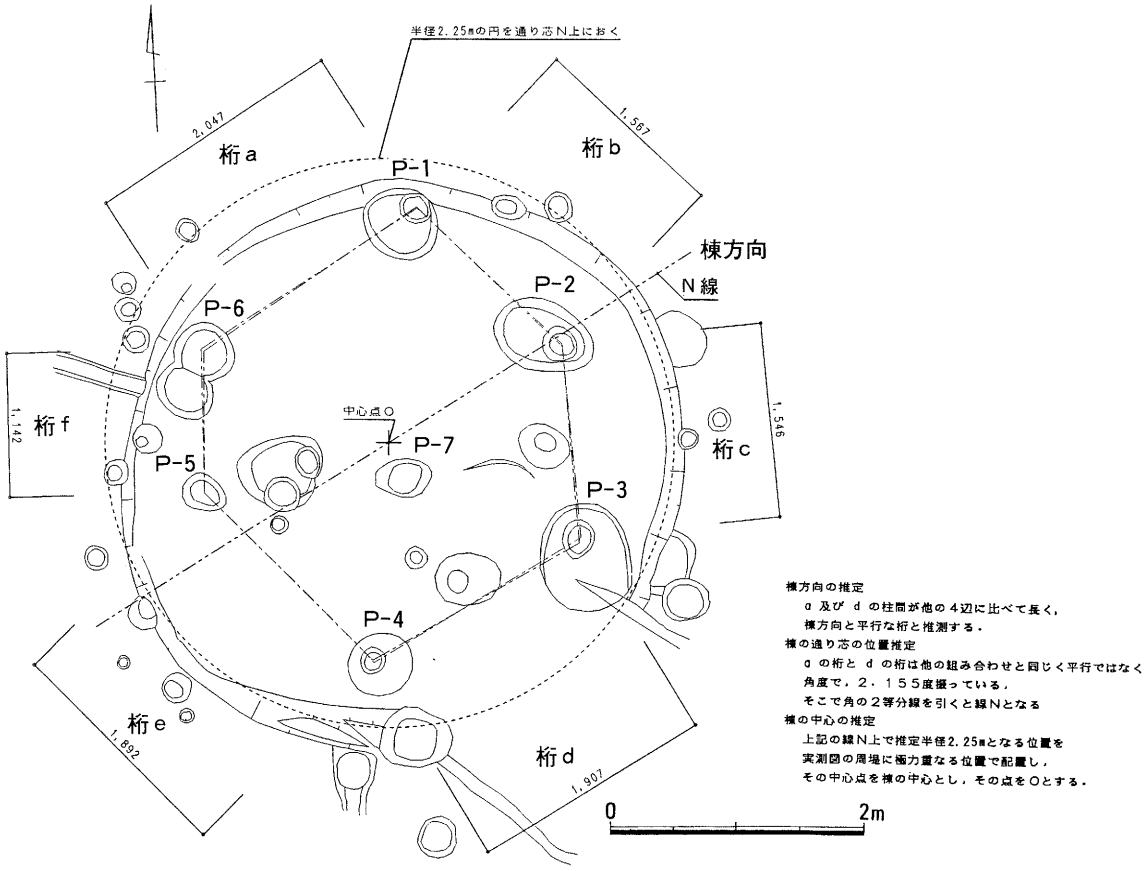
通常の葺き方と逆の方向で、茅の穂先を下にして葺く「逆葺き（さかぶき）」と呼ばれる葺き方がある。この茅葺きは、葺き茅の量が少なくてすむし、葺いた茅を押さえるための押さえ竹の間隔もまばらで済む、

さらに普通の茅葺きに必要な野地と茅の間に捨て茅（延べ茅）を挟み、茅葺き角度を調整しなくても良いという技法的に簡単な方法であり竪穴住居でも逆葺が行われたものと考えられるが、『日本書紀仁徳元年』に「茅茨の蓋い、切りととのえず」の一文から支配者層の住居では屋根面に茅の尻すなわち根元がでており茅を切りととのえていなかったようである。今回の復元では、茅の耐久性の問題から復元住居の茅葺き方法は、茅の根元を下にし、捨て茅を挟み込み固定するため密実な茅葺きができる通常の茅葺き方法で約40cm厚で葺くものとした。

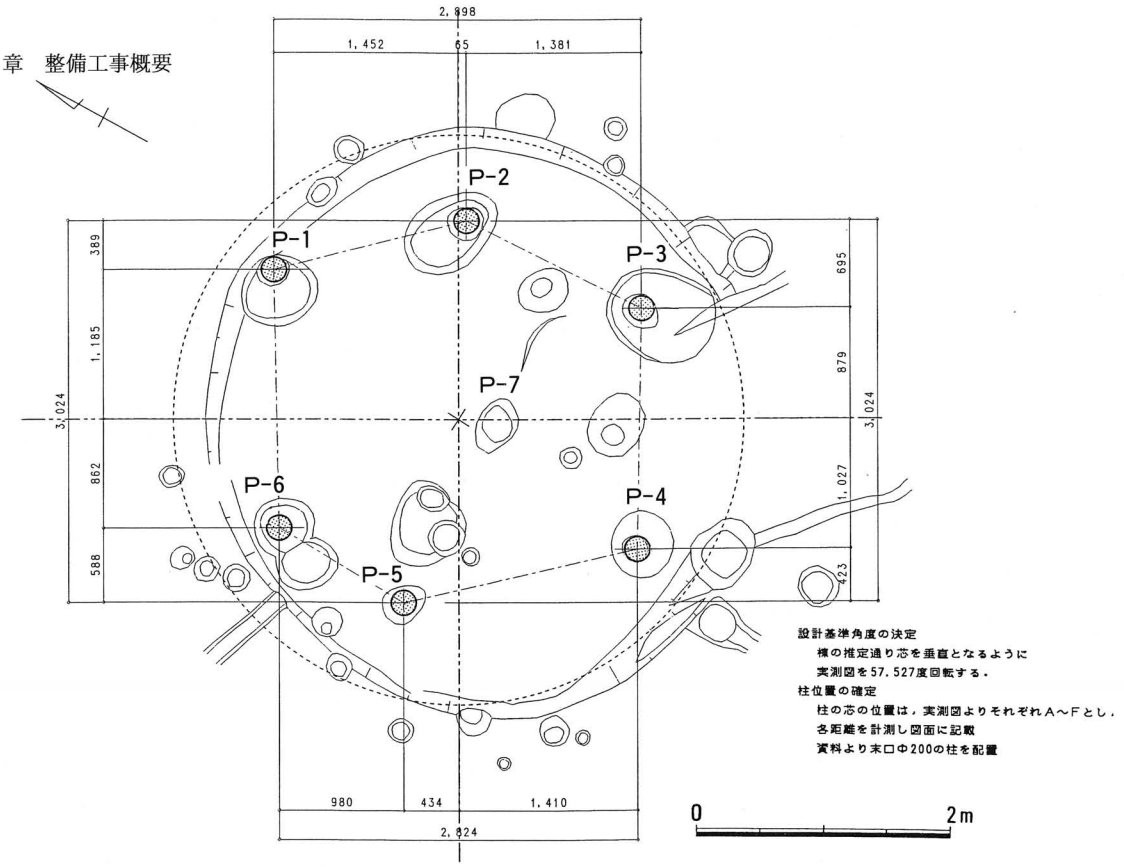
棟については、下からの積み茅に棟を跨ぐように「榲（しな）」とか「鞍茅（くらがや）」と言われる茅を掛け三、四重ねの杉皮で覆う。さらに杉皮を押さえるため棟と平行に６本の腹竹を並べ押え竹に結束する。棟の上には、木材を「X」状に組み合わせた「置千木」を並べ、重みで榲茅を押さえた。千木の数については、古墳・埴輪窯跡出土の家形埴輪の棟押さえとして並列した「堅魚木（かつおぎ）」の数を参考とするため調べると次表のとおりとなり、入母屋造の屋根は、棟部分の幅が広く、堅魚木の数は５・６本が多いようである。今回の復元では５本の置千木を設置した。



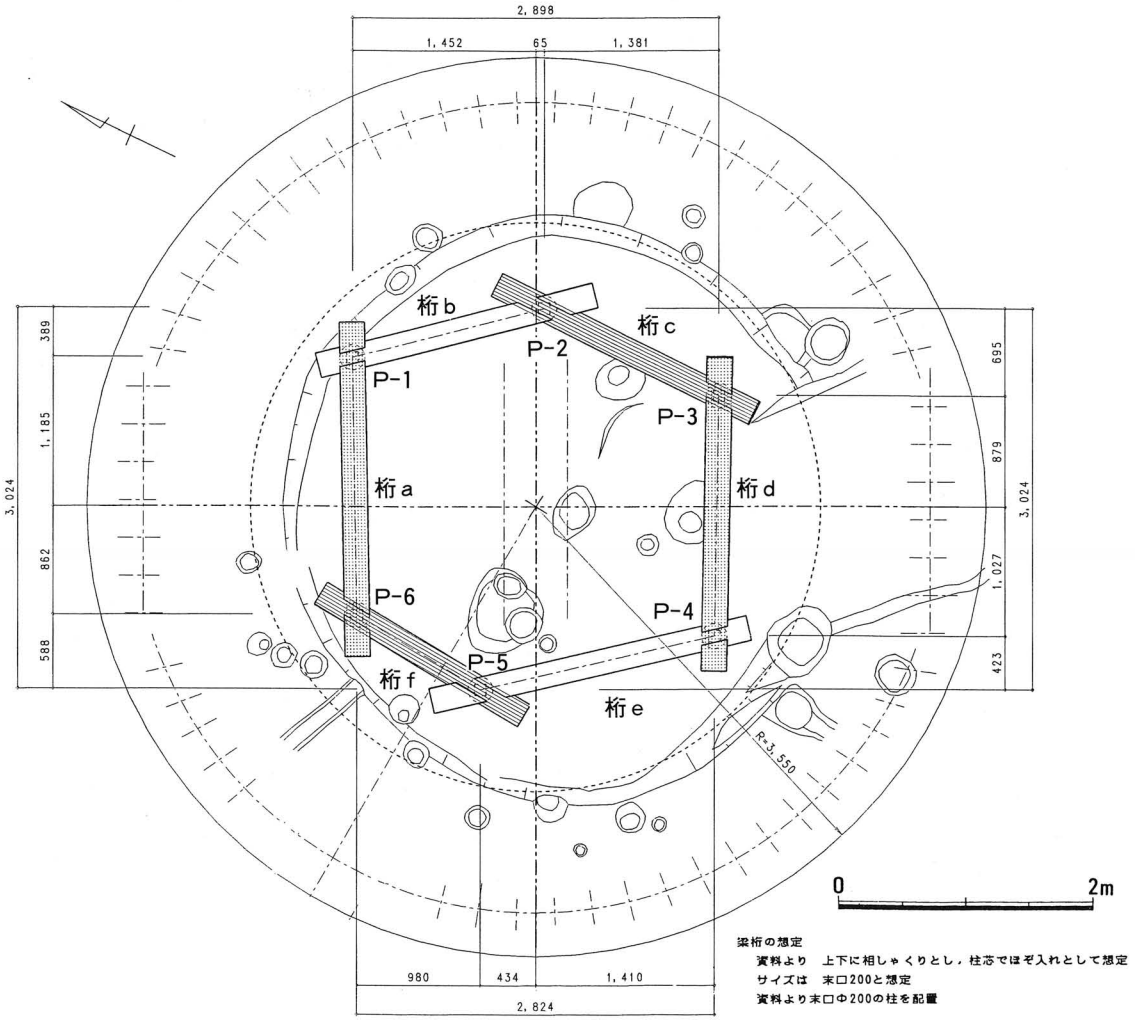
第18図　横寺遺跡出土家形土製品（1/2）



第19図　竪穴住居１平面図（1/60）



第20図　復元住居柱配置図（1/60）



第21図　復元住居梁伏図（1/60）

古墳・埴輪窯出土家形埴輪堅魚木（鰹木）数一覧表

堅魚木数	屋根形	遺跡名（出土地）	所在地	時期
3	寄棟造	野崎4号墳	京都府	6世紀前半
	寄棟造	殿部田1号墳	千葉県	6世紀前半
	寄棟造	経塚古墳	福島県	6世紀前半
	寄棟造	瓦塚古墳	埼玉県	6世紀
	寄棟造	勢野茶臼山古墳	奈良県	6世紀
	寄棟造	殖蓮村上植木	群馬県	
	寄棟造	杉ケ袋経ノ塚	宮城県	
4	寄棟造	長瀬高浜遺跡	鳥取県	5世紀後半
	寄棟造	常光坊谷4号墳	三重県	5世紀後半
	寄棟造	平所埴輪窯跡	島根県	古墳後期
	寄棟造	杉ケ袋経ノ塚	宮城県	
	寄棟造	松原町高萩	茨城県	
	寄棟造	殖蓮村上植木	群馬県	
	寄棟造	美土里村	群馬県	
	入母屋	経僧塚古墳	千葉県	6世紀後半
5	入母屋	宮山古墳	奈良県	5世紀前半
	入母屋	長瀬高浜遺跡	鳥取県	5世紀後半
	入母屋	不明	群馬県	6世紀後半
	入母屋	花園村上ノ城	埼玉県	
	寄棟造	韮川村	群馬県	
	切妻造	南金屋	埼玉県	
6	切妻造	古市村誉田	大阪府	
	切妻造	今井茶臼山古墳	群馬県	5世紀中葉
	切妻造	新沢281号墳	奈良県	5世紀
	入母屋	赤堀村今井	群馬県	
7	入母屋	四つ塚13号墳	岡山県	6世紀前半
	入母屋	今城塚古墳	大阪府	6世紀前半
	入母屋	古市村誉田	大阪府	
	形態不	強土村西長岡	群馬県	
8	切妻造	殖蓮村上植木	群馬県	
10	切妻造	ヤスミ古墳	鳥取県	古墳後期
	入母屋	舟塚古墳	茨城県	6世紀中葉
13	入母屋	富士山古墳	栃木県	6世紀後半

参考文献

- 後藤守一　「埴輪家聚成」『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』　帝室博物館学報六　帝室博物館　1933
- 伊達宗泰　『埴輪』　保育社　1978
- 猪熊兼勝　『埴輪』　日本の原始美術6　講談社　1979
- 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編　『古墳Ⅲ　埴輪』　古墳時代の研究九　雄山閣　1992
- 高橋克壽　『歴史発掘⑨　埴輪の世紀』　講談社　1996

出入口の位置と構造

出入口部分を遺構から確認できた例は、東日本の弥生時代の竪穴住居において、出入口用の梯子を埋めたピットや梯子の痕跡を検出した例があり、位置や構造までも確認されている。また、岡山県久米町の芦ケ谷遺跡からは、壁体溝内で検出された柱穴を出入口の下柱の柱穴と判断し位置を設定している。[6] 今回、門田貝塚で検出した竪穴住居では、住居内や周壁近くに小ピットが10数基検出されたが、それらの遺構から出入口の位置を設定すべきことはできなかった。多淵敏樹氏は、「竪穴住居という生活空間では、……室内全体が一体となったいわゆる一室空間であるから、どの位置へ出入口を持ってきても、室内の使い勝手としては基本的には大きな差がない」と考え、さらに、出入口の位置を棟の方向に対して同方向にある妻入りか直行する方向にある平入りとするかに対しても上記の考えから、「近世民家が棟に対して地域的に厳格な決定があるが、弥生時代の竪穴住居では、出入口の位置

を固定する必要がなかった」と考えた。[7] このため一般的に、出入口の位置は、冬場の住居内の保温問題と関係し、当地は冬場北からの風が強いので、反対側の南方向と考え、家屋文鏡や環頭太刀の家形装飾を参考に妻入りとし、Ｐ－４～Ｐ－５の部分に出入口の位置を設定した。

出入口の構造については、古墳時代の竪穴住居資料になるが、奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡や奈良県東大寺山古墳出土の環頭太刀の家形装飾[8]を参考に「突き上げ戸」とか「跳ね上げ戸」と言われる軽く開閉が出来る構造のものと考えた。具体的には、出入口の屋根として垂木に庇受けの横木を渡し３寸勾配で庇桁を掛け約10cm厚に茅葺きを行いさらに上部を杉皮葺きを行い雨対策を行う。戸板は杉皮張りで出入口屋根の柱に取り付ける。出入り口の幅は、人が土器等を持って出入りが出来る幅と考え周堤内側で約90cm、外側で約120cmの幅を設けた。また、住居内部へ出入りの際して梯子の使用が考えられるが、安全面も考慮し周堤部に３段の階段を設け出入り用とした。

灰穴炉

西日本の弥生時代の竪穴住居床面のほぼ中心部に炭や灰の堆積がある土壙が存在する。また、土壙の周縁部に加熱赤変の痕跡を確認することがある。これは、土壙内に灰を詰め、灰を媒介物として火が使われたことを示し「灰穴炉」と呼ばれている。

門田貝塚で検出した住居では、床面が削平を受けていたが長径45cm、短径30cm、深さ20cmを測るＰ－７がこの灰穴炉と考えられ、復元にあたり岡山県雄町遺跡第８号住居跡[9]で確認されている中央土壙の周囲に土堤をめぐらせた灰穴炉を参考に復元した。

防炎対策

各地の復元住居のいくつかのところで火災に見舞われれいる。発見時には消火は間に合わず数分の内に全焼している。この原因には、ほとんどが茅に覆われているという可燃性のある材料であるためと共に、環境整備したいわゆる門田貝塚史跡公園は、史跡地周辺にも少なからず宅地があり、地域住民の憩いの場所としての機能を果たすよう夜間も開放することから防火対策について検討する必要がある。

これまでの主な防火対策は、住居内に消火器を設置したり近くに消火栓を設置する。また、煙感知器を屋根の梁部分に取り付け管理施設で集中管理しスプリンクラーを設置するシステムを併設しているケースもまれに見受けられるが、設置コストが高くあまり浸透していなく決定的な解決策となっていないようである。

門田貝塚史跡公園では、近接した施設がなく煙感知器による集中管理が出来ないため、火災を早期発見しかつ初期の延焼を抑えることが重要であると考え、住居の建材に防火難燃剤（ファイヤープリペンダー）を塗布または含侵し、類焼を遅らせる工法を検討した。すなわち、火災では通常燃えやすい紙類、衣類、木材、ワラ類など引火しやすい物が発火するフラッシュオーバー（約750℃）状態になり不燃物質以外はすべて燃えてしまうが、この防火難燃剤は1300℃の熱を用いても炎を出さない。すなわち引火をしないため、フラッシュオーバー状態にならない。いわば着火物からの類焼をしないことになる。この防火難燃剤のその他の効果として、無色透明で無公害性の水容性薬剤であり、紫外線や気温による効果の損失がなく、雨に当たらないところでは半永久的に効果が持続する。さらに、復元住居完成後、屋根の内外面に噴霧された防火難燃剤や茅の維持のため、表面に常温ガラスコーティ

ング剤（ヒートレスグラス）の吹き付け作業を行い防水・防虫・硬質化を図った。

建築材

復元住居に使用する木工事での構造材及び造作材については、付載2建築材製品別樹種一覧表を参考に、外観・強度を考慮し次のとおり樹種及び等級を選定した。

なお、構造材については材の皮剝き。末口については鋸引きを無くすよう加工した。さらに、古色を出すため表面焼き処理を行った。

建築部材一覧

構造材　間伐丸太使用

部材部分名	材　　種	末　　口	長　　さ	本　　数
柱	栗丸太　皮剝き	150㎜	3,000㎜	6本
桁A	松丸太　皮剝き	150	2,700	3
桁B	松丸太　皮剝き	150	2,000	3
梁	松丸太　皮剝き	150	3,600	2
叉　首	桧丸太　皮剝き	90	2,000	4
棟　木	桧丸太　皮剝き	120	3,600	1
垂木（下部短）	桧丸太　皮剝き	60	2,700	14
垂木（下部長）	桧丸太　皮剝き	60	3,600	17
垂木（上　部）	桧丸太　皮剝き	60	2,700	16
垂木受け	松丸太　皮剝き	90	1,800	2
入口柱	桧丸太　皮剝き	60	2,700	4
入口桁	桧丸太　皮剝き	60	1,800	3
入口垂木	桧丸太　皮剝き	60	2,700	3

造作材　間伐丸太使用

部材部分名	材　　種	末　　口	長　　さ	本　　数
棟押え	桧丸太　皮剝き	100㎜	4,500㎜	1本
杉皮押え	桧丸太　皮剝き	60	4,500	6
千　木	桧丸太　皮剝き	60	1,500	10
煙出し	雑木小枝	30	900	40
周堤内部堰板下地	桧丸太　皮剝き	90	2,000	4

板　材　製材板でなく割板とする

部材部分名	材　　種	厚　　み	巾	長　　さ	枚　　数
周堤内部堰板	杉割り板	平均50	平均200㎜	1,200㎜	72枚
階段堰板	杉割り板	平均50	平均200	600	30
〃	〃	〃	〃	1,200	6
広小舞	杉割り板	平均24	平均210	1,200	45

竪穴住居復元の施工工程概要

竪穴住居の復元にあたり、上記の各検討内容を受け具体的施工工程概要は次のとおりである。なお、Ａ～Ｅ工程の一部については前後したり、平行して行うものもあるが基本的にはＡ～Ｅへの工程で施工を行った。

Ａ．準備

１．復元住居１の位置を竪穴住居１の確認調査時の実測図によりプランを現場に復元した。復元住居２については、復元住居１の周溝から５ｍ北側に復元住居１と同規模のものを現場に復元した。

Ｂ．基礎工事・土間工事

１．主柱布基礎部分を重機による掘削し、150㎜圧で砕石転圧。
２．鉄筋による配筋を行い、コンクリートの打設。
３．主柱位置の墨出しを行い、主柱型枠の設置。
４．布基礎埋め戻しと床・周堤部分に100㎜圧で砕石転圧。
５．床面のコンクリート打設し、棟方向・出入口の墨出し。
６．周堤内側に円形に周壁板・周堤・垂木の施工上、周堤と同規模の木製型枠を作成し設置した。
７．周堤型枠に添って周壁板を配し、裏面３ヶ所を角材で背面よりビス止めを行った。
８．周堤を真砂土による自然土舗装を周堤半分の高さまで打設。
９．垂木尻に１本置きにアンカーボルトを取り付け、周堤に埋め込む。
10．周堤の外側・天場・床の自然土舗装を行う。
11．周堤の天場と床の仕上げとしてセメント着色料を加え真砂土がセメントにより白色を呈するのを防ぎ黒褐色の土色を出した。
12．中央の炉穴の周囲に土堤を巡らせ、炉穴内部に灰を入れた。

Ｃ．小屋組工事

１．棟上まですべてクレーンで建築材を吊り下げ小屋組を行った。まず、柱を型枠の中に立柱し仮止めを行い、各柱に桁を渡し、棟方向に平行する桁に梁を２本渡す。柱・桁・梁の木組み部分はすべて六角ボルトにより固定。
２．梁の上に叉首を２ヶ所組み、その上に棟木を乗せコーチボルトで補強。

3．周堤設置部分で55.8cm間隔で垂木を桁と棟木に取り付けコースレットにて固定。
4．周堤中から垂木に沿い広小舞として21cm幅の杉板を3枚垂木に取り付け。
5．主柱根元、周壁板内外、広小舞への防腐処理剤の噴霧。

D．屋根工事

1．屋根面の骨格である垂木材までの小屋組みができると茅葺き作業に必要な仮足場を住居の周堤とほぼ同じ高さで幅一丈（約3m）で組み軒先から三尺（約90cm）のバタ板で通路を設ける。
2．柱と桁、桁と梁、桁と垂木、叉首と棟木、棟木と垂木の組み合わせ部分に化粧的に葛弦巻きを行った。
3．屋根下地の最後として垂木の上に横方向に最下段の「コジリ」とか「茅負」と呼ばれる長さ約3mの真竹を横たえる。次に5寸（約15cm）離し垂木に縫い付け竹を2本6寸（約18cm）間を開け横たえ平小舞に釘で固定しシュロ縄で結束する。それ以上の段は「エツリ」を6寸幅で配し釘で垂木に固定し、さらに、シュロ縄で結束する。
4．茅葺きのための茅を使用する部位別に仕分ける「茅すぐり」を行う。
5．出入口の屋根部分に茅を約15cm厚で葺き、さらにその茅を三枚重ねの杉皮で巻き込み上部は雑木で押さえる。側面については杉皮葺きを行った。
6．屋根下地が完成すると、屋根全体に化粧茅（ソグリ茅）と言われる茅の袴を取り除いた芯のみの茅を一列に敷き並べ2ヶ所を針金で「エツリ」に結束する。
7．軒付けとしてまず最初に長さ150～160cm、幅25cm、高さ22cmに束ねられた茅を「コジリ」に針金で結束し、茅の根元部分を「軒打ち」「叩き板」と呼ばれるオール状の道具で横殴りに叩き付けて茅の尻を斜めに揃える。次に3尺（約90cm）に切りそろえた切り茅を挟み、その上に長さ170～180cmの長茅を重ね「ハバコ竹」「押しボコ竹」「押え竹」と呼ばれる長さ約300cmの真竹を横たえ垂木に針金で結んで茅を挟み込む。
8．軒部分が終わると、屋根斜面部分の茅葺きである平葺きが行われる。切り茅を厚みと勾配を保ち重ね長茅を上に葺き、押え竹で留めるのを1工程として10工程で棟部分まで葺きあげていく。押え竹は1尺5寸（約45cm）から2尺（約60cm）間隔で配し、「針」呼ばれる葺いた茅に針金や縄を通すために金属の針を使い押え竹を垂木と針金で固定するために使用した。平葺きの過程で「カヤゴテ」「カヤウチ」「ガキ板」と呼ばれる屋根の勾配を整える道具が使用されながら平葺きが行われいく。

　平葺きで1工程終了後、上部の作業のため長さ約120～160cm、径約6～10cmの丸太を屋根の周囲に取り付けて棟まで8段に丸太足場が付けられた。
9．平葺きを終わると、棟部分の茅葺きが行われるが、作業用足場として棟の周囲に足場と妻部分の外側にバタ板で足場が作られる。先ず、長茅を棟と平行方向に横積みして積み上げられ断面が三角形を呈する芯が作られる。その上に、棟をまたぐように「樞」「鞍茅」と呼ばれる茅を2寸厚（約6cm）で二つ折りにかぶせ、棟頂部と斜面各3本計7本の押え竹で平葺きの押え竹と針金で結束する。
10．「樞」の上に棟の端部にあたる部分に6寸幅（約20cm）の板を挟み、3枚重ねの杉皮で覆い、その上に棟部分に屋根勾配に合わせ切り込みを入れた棟押さえの丸太材（長さ約430cm、径約10

cm）と杉皮部分の斜面に３本計６本の杉皮押さえの丸太材（長さ約390cm、径約６cm）である「棟竹」「からす押え」を取り付けて「樞」の押え竹と針金で結束する。

11．さらに、棟押さえとしての機能面と修景的に「置き千木」（長さ約90cm、径約10cm）を「X」状に５組棟方向に対して垂直に並べ釘で「からす押え」に固定し、シュロ縄でさらに結束した。

12．茅葺きの最終工程として、屋根面を刈り込んで平坦にする。刈り込みには、刃の幅が広く先端が上方に反っている専用バサミを使用し、棟の妻部分の螻羽の外側への転びの傾斜に合わせ揃え刈り揃える。刈り揃えの途中で「カヤゴテ」で茅端部を揃えながら刈り込みが行われる。

13．妻部分の刈り込みが終わると、煙り出し部分下に三枚重ねの杉皮が葺かれ雑木で押さえシュロ縄で結束される。

14．棟部分を茅葺きするため架けられた足場が外され、軒部分の刈り込みが行われる。軒の刈り込み線を水糸を張り決め、ハサミで刈り揃えていく。それと共に屋根の平部分が、丸太足場をはずしながら上方から刈り揃えていく。刈り込み時、一部の茅が屋根奥にある場合は、「ヌキ」と呼ばれる金属製の道具で茅を挟み、外に摘み出し、刈り込みが行われる。

　刈り込んだ切り茅は、竹箒や熊手で掻き降ろしながら刈り込みが行われる。

15．平葺き部分の刈り込みが終了すると住居周堤外側の足場を解体し茅葺き工事を終える。（屋根工事の内茅葺き作業の足場設置から解体までの実質日数は、茅葺き職人５人で北側住居が12日間、南側住居が10日間であった。）

Ｅ．保存処理

１．茅葺き終了後、防炎処理と防護処理として、防火難燃剤を屋根の内外面に噴霧しさらに、ガラスコーティング剤の吹き付けを行った。

註

（１）富山県福岡町下老子笹川（しもおいごささがわ）遺跡で検出された弥生時代終末期の３棟の住居には周堤が残存し、さらにその内の１棟は、周堤上に小穴が並んで検出され、垂木が差し込まれていた可能性が考えられている。

　上田尚美　「福岡町下老子笹川遺跡」『埋文とやま』第59号　富山県埋蔵文化財センター　1997

（２）都出比呂志　『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店　1989

（３）宮本長二郎　「住居」『岩波講座日本考古学４集落と祭祀』　岩波書店　1986

（４）武田恭彰　「新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査１」　『総社市埋蔵文化財調査年報４』（平成５年度）　総社市教育委員会　1994

（５）柱や桁の構造体の「軸組」の組み方で、柱の上に桁を載せ、その上に梁をまわす組み合わせ方を「京呂組」といい、柱・梁・桁の順番に組み合わせ方を「折置組」と呼ぶ。「京呂組」の方が柱配置の自由度が高い。

　石田潤一郎　『屋根のはなし』　鹿島出版会　1990

（６）村上幸雄　「芦ヶ谷復元住居の記録」『稼山遺跡群Ｉ』　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979

（７）多淵敏樹　「大中遺跡の竪穴住居址の建築史的意義」『播磨大中遺跡の研究』　播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館　1990

（８）金関　恕　「卑弥呼と東大寺山古墳」　『古代史発掘』６　講談社　1975

（９）正岡睦夫　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告―山陽新幹線に伴う調査』　岡山県教育委員会　1972

今回の竪穴住居復元にあたり註に記した以外に以下の文献を参考に検討を加えながら、史跡門田貝塚史跡整備委員会専門委員の近藤義郎・河本　清・岡田　博・臼井洋輔・柳瀬昭彦・高畑知功・平井　勝氏の他、渋谷泰彦・岡本明郎・村上幸雄・葛原克人の諸先生からの指導助言を受け、実際の茅葺きの施工工程や仕様等については山本屋根工事代表山本　勇氏の教示を得ました。

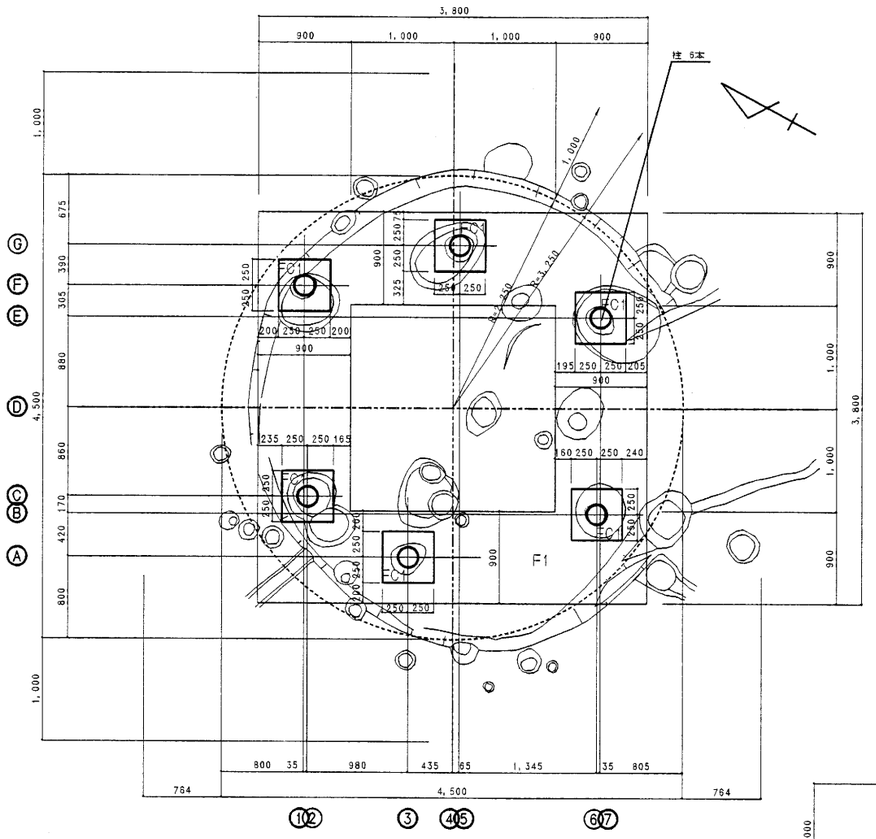
さらに、復元住居の参考例として、福岡県福岡市「板付弥生のムラ」、岡山県津山市沼遺跡・津山弥生の里文化財センター、岡山県総社市昔公園、岡山県倉敷市倉敷埋蔵文化財センター、岡山県美星町五万原遺跡、岡山県日生町鹿久居島古代体験の里「まほろば」、岡山県美甘村堂の前遺跡、岡山県八束村蒜山郷土博物館、鳥取県淀江町伯耆古代の丘公園、鳥取県米子市福市遺跡、兵庫県赤穂市東有年・沖田遺跡公園、兵庫県播磨町播磨大中古代村、大阪府和泉市大阪府立弥生文化博物館、愛知県清洲町貝殻山貝塚資料館、愛知県名古屋市見晴台考古資料館、静岡県静岡市登呂遺跡、千葉県千葉市加曽利貝塚を参考としました。

参考文献

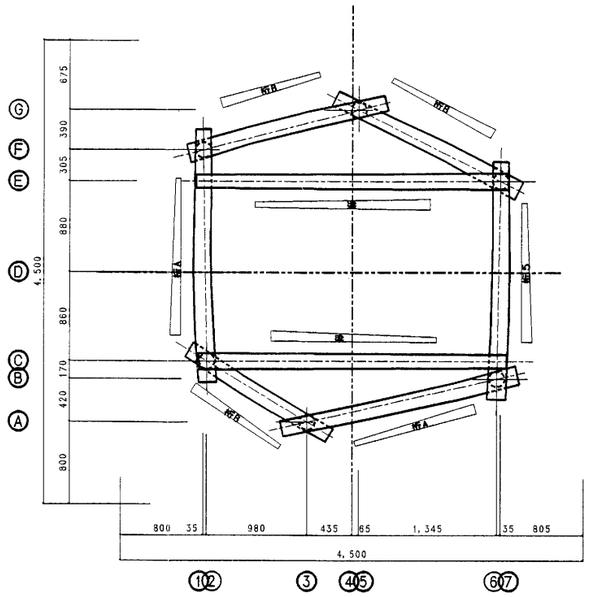
- 近藤義郎　「竪穴住居址」　近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』　津山郷土館考古学研究報告第2冊　津山市・津山郷土館　1957
- 渋谷泰彦　「竪穴住居址群の復元研究」　近藤義郎・渋谷泰彦編『津山弥生住居址群の研究』　津山郷土館考古学研究報告第2冊　津山市・津山郷土館　1957
- 間壁忠彦・間壁葭子　「岡山県美星町五万原遺跡」　『倉敷考古館研究集報』第5号　1968
- 間壁忠彦・間壁葭子　「女男岩遺跡」　『倉敷考古館研究集報』第10号　1974
- 石野博信　「考古学から見た古代日本の住居」　大林太良編『家』　社会思想社　1975
- 津山市教育委員会　『津山市沼弥生住居址群』　1977
- 津山市教育委員会　『沼弥生復元住居復旧工事報告書』　1979
- 渋谷泰彦　「竪穴住居の復元」　『津山弥生の里』　津山市教育委員会　1984
- 宮本長二郎　「住居と倉庫」　金関　恕・佐原　真編『弥生文化の研究』第7巻　1986
- 平井泰男　『堂の前遺跡』　美甘村教育委員会　1989
- 播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館　『播磨大中遺跡の研究』　1990
- 山本輝雄　「住居の上部構造と建築材」　『古墳時代の研究』第2巻　1990
- 大阪府立弥生文化博物館編　『弥生文化』　1991
- 岡本明郎　「家形埴輪と蒜山原の民家との比較」　近藤義郎『蒜山原四つ塚古墳群』(改訂版)　岡山県真庭郡八束村　1992
- 太田邦夫　「復元住居について」　『よみがえる太古うつのみや遺跡の広場―史跡根古谷遺跡保存整備事業報告書―』　宇都宮市教育委員会　1992
- 福岡市教育委員会　「史跡板付遺跡環境整備報告書」　『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第314集　1992
- 千葉市教育委員会　『史跡加曽利貝塚環境整備事業報告書』　1994
- 福岡市教育委員会　「史跡板付遺跡環境整備報告」　『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第439集　1995
- 高槻市教育委員会　「ハニワ工場公園1―新池埴輪製作遺跡整備事業報告書―」　『高槻市文化財調査報告書』第19冊　1995
- 三輪嘉六・宮本長二郎　「家形はにわ」　『日本の美術』第348号　至文堂　1995
- 臼井洋輔　「丸い柱痕は即丸い柱の証明になるであろうか」　『近藤義郎古稀記念考古文集』　考古文集編集

委員会　1995

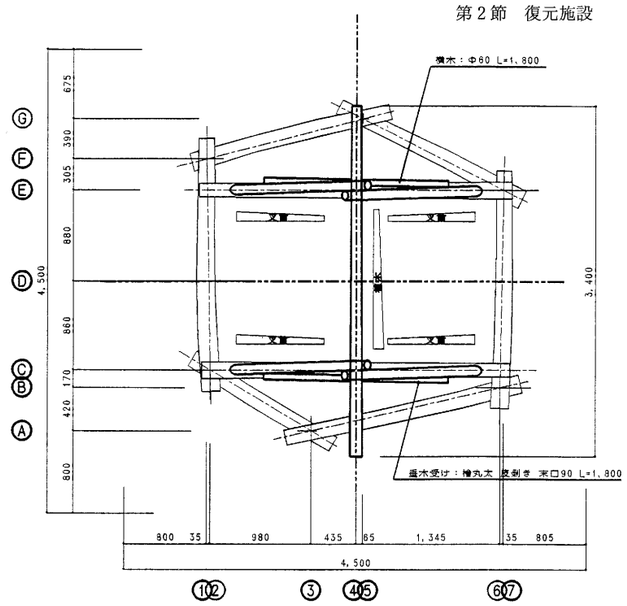
• ㈶桜井市文化財協会　「大和の高殿―渦巻飾から飛雲飾へ―」　『桜井市立埋蔵文化財センター展示収蔵室特別図録』第12冊　1997



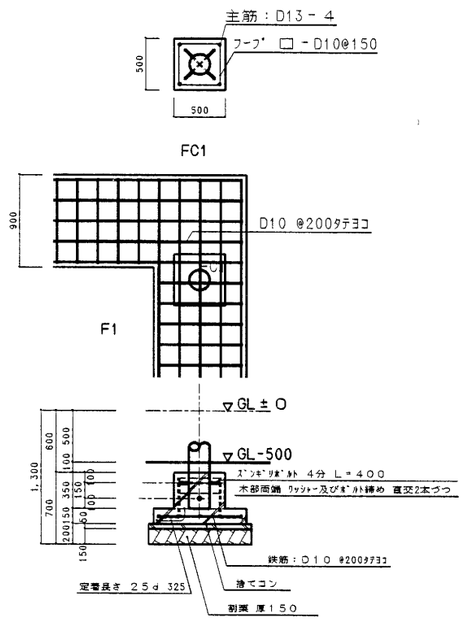
第22図　基礎伏図（1/60）



第24図　梁伏図（1/60）

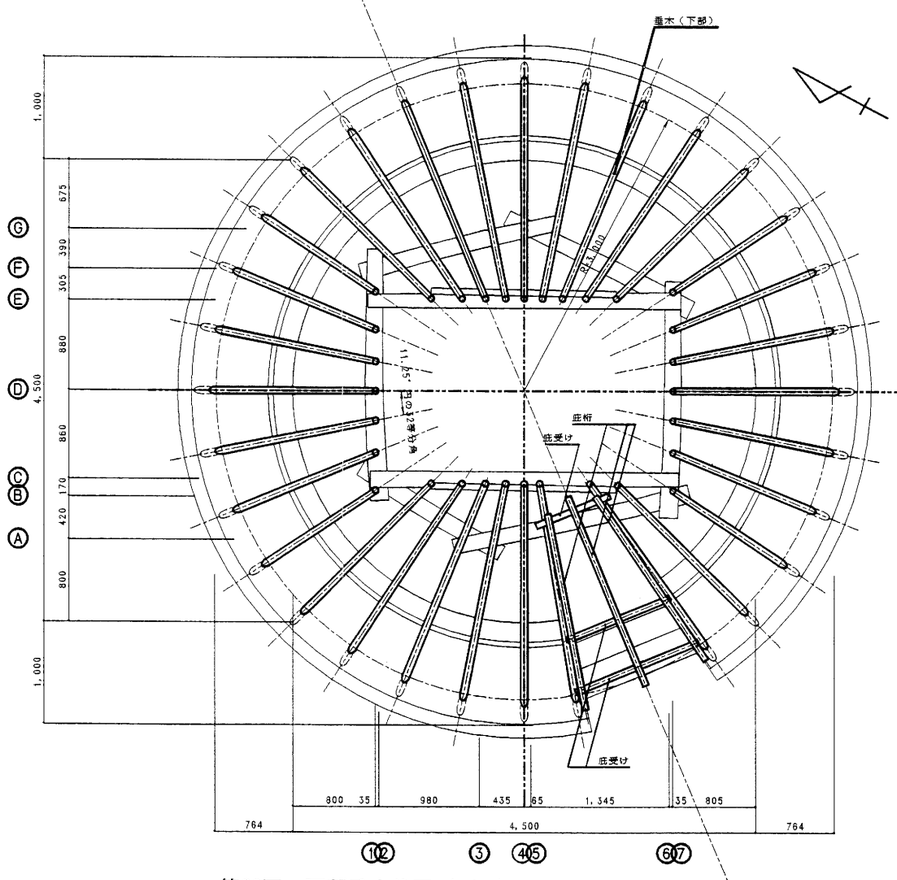


第25図　小屋伏図（1/60）

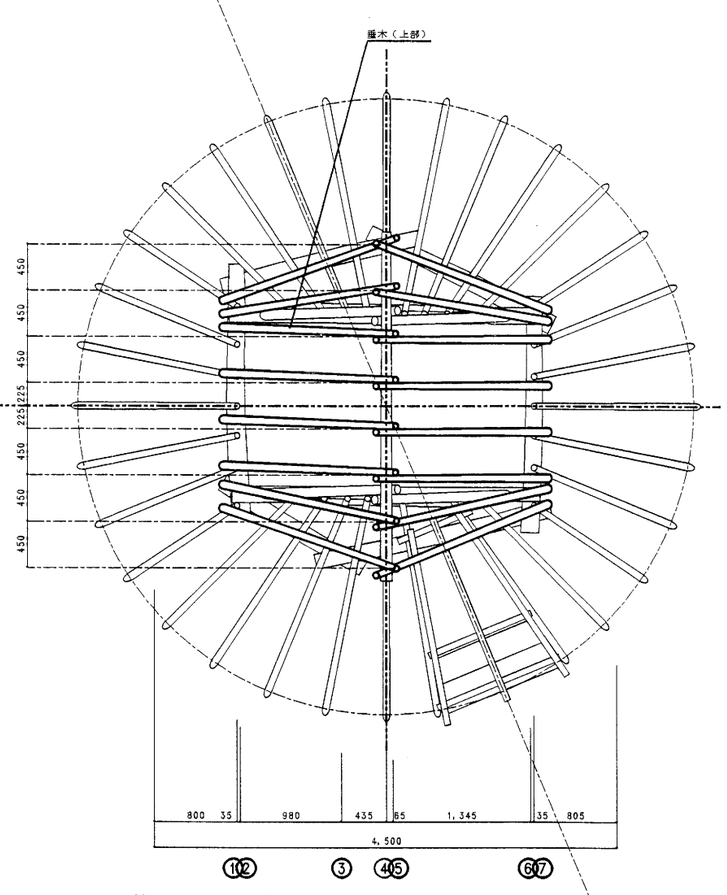


コンクリート：　FC 180 SL-15
鉄　　筋　：　SD295A

第23図　基礎配筋図（1/60）

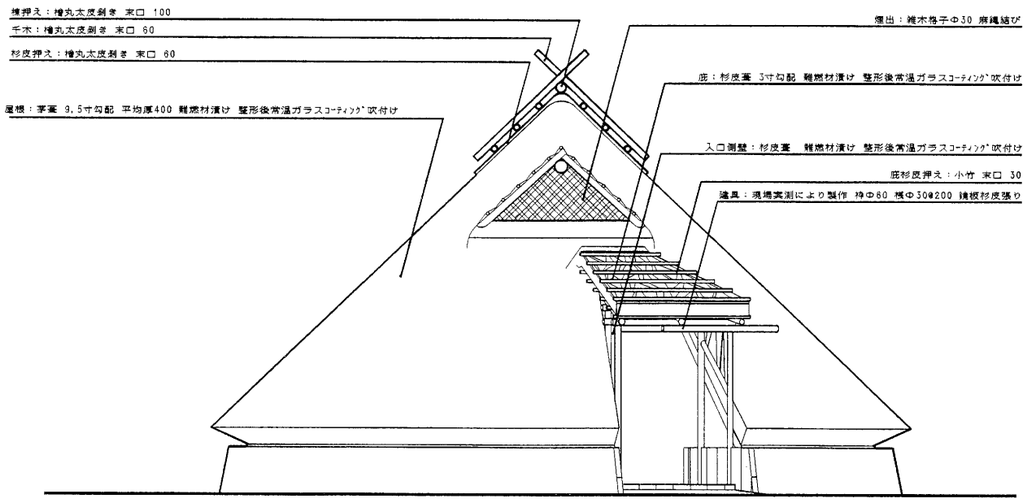


第26図　下部垂木伏図（1/60）

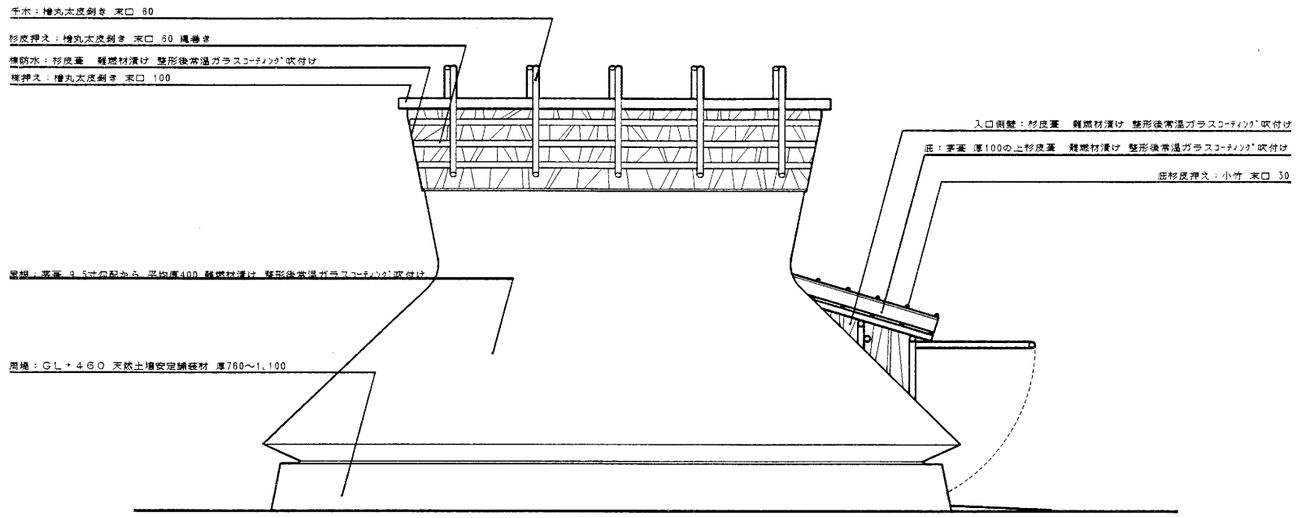


第27図　上部垂木伏図（1/60）

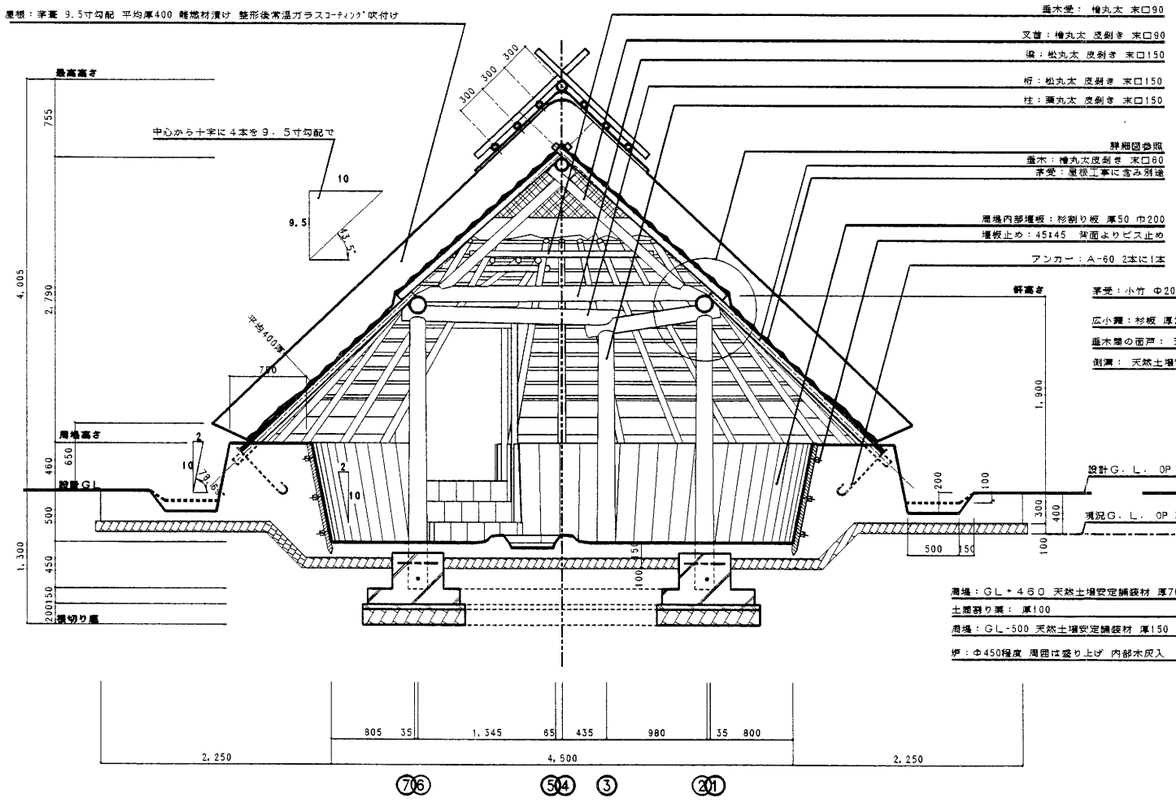
0　　2m



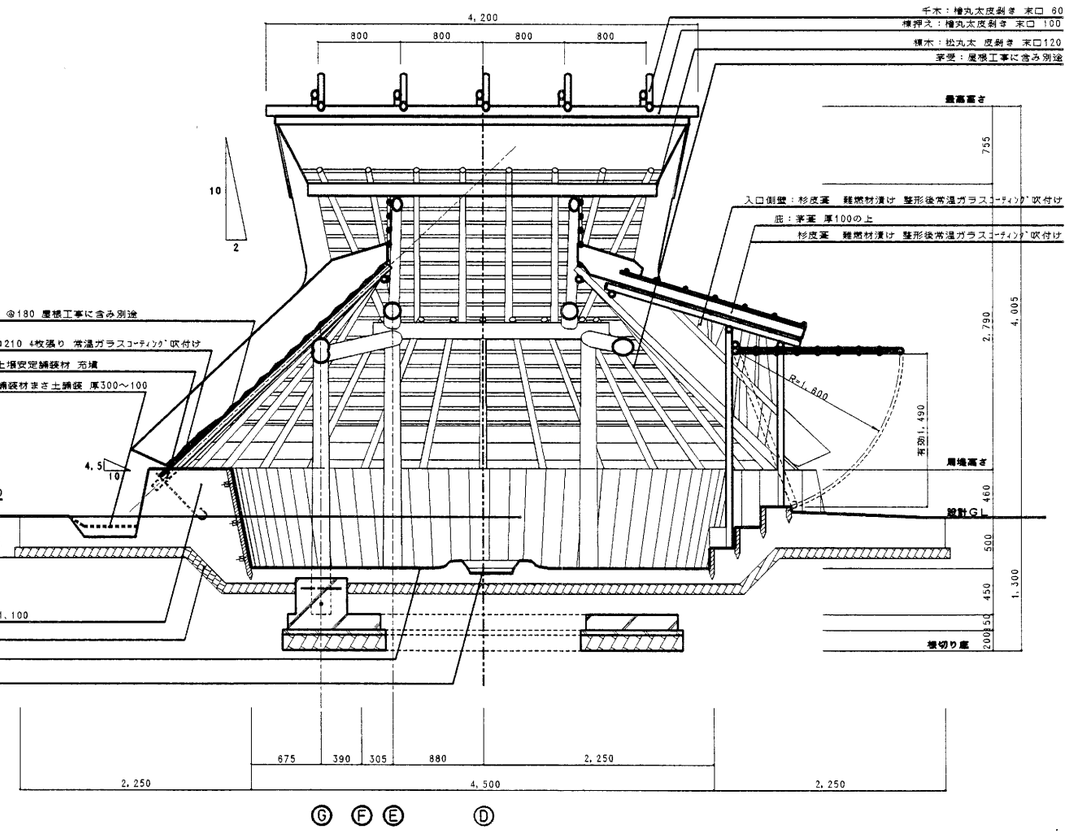
第28図　Ｄ通矩計図（1/60）



第29図　４通矩計図（1/60）

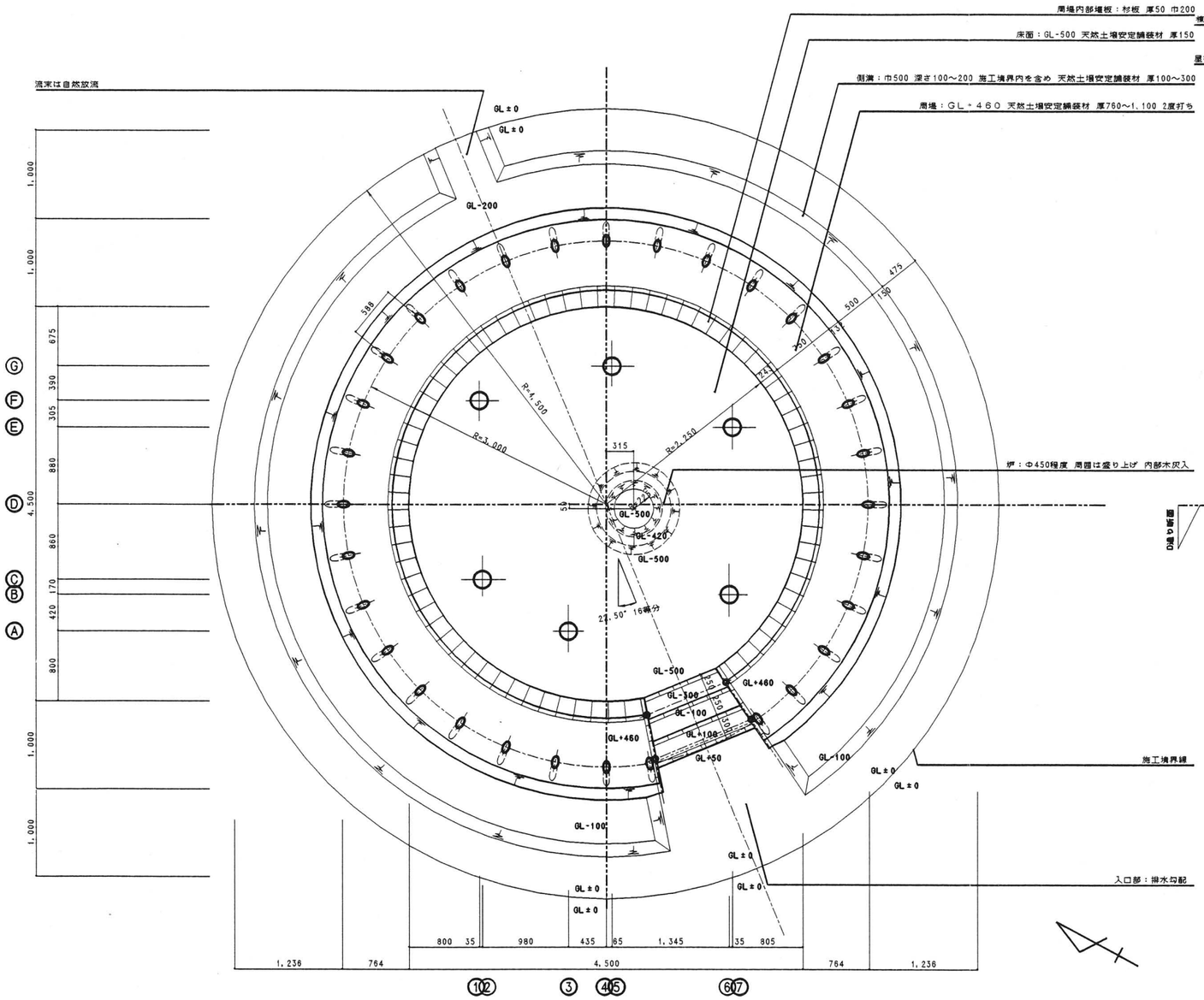


第30図　Ｄ通矩計図（1/60）

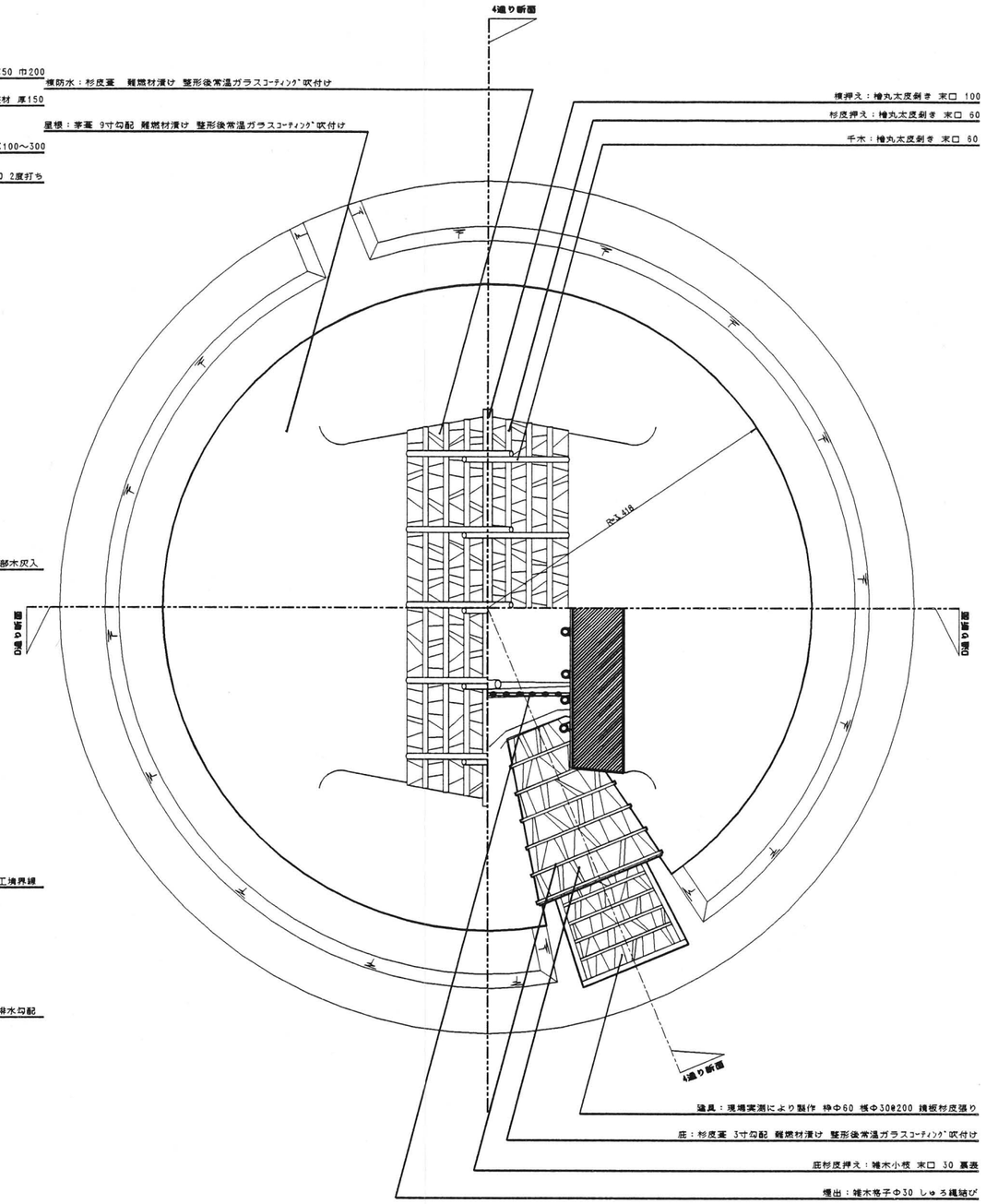


第31図　４通矩計図（1/60）

0　2m



第32図　復元住居床平面図（1/60）



0　　2m

第33図　復元住居屋根伏図（1/60）

図版19

１．建築材搬入状況

２．建築材搬入状況

３．建築材加工状況

４．表面焼き処理状況

５．柱の仕口

６．周堤壁板

７．施工前（南から）

８．床面コンクリート打設状況（南西から）

図版20

1．周堤型枠設置状況（南西から）

2．周堤壁板取付け状況（南西から）

3．柱の建て込み状況（南西から）

4．桁渡し状況（南西から）

5．棟木の取り付け状況（南西から）

6．垂木の取り付け状況（南西から）

7．周堤・小屋組み完成状況（南西から）

8．足場の仮設状況（南西から）

図版21

1．葛弦巻き状況

2．エツリの取り付け状況

3．屋根下地完成状況（北から）

4．茅すぐり状況

5．化粧茅結束状況

6．化粧茅が葺かれた状況（北東から）

7．軒付け状況

8．軒部分の茅葺き状況（北東から）

図版22

１．平葺き状況（北東から）

２．平葺き状況（南東から）

３．カヤゴテの使用状況

４．茅葺き道具（カヤゴテ・軒打ち・針）

５．棟部分の茅葺き状況（北東から）

６．棟部分の茅葺き状況（南東から）

７．茅葺きを終えた状況（北東から）

８．置千木取り付け状況（南東から）

図版23

１．茅の刈り込み状況（北東から）

２．妻部分の茅刈り込み状況

３．雪の中の復元住居（北から）

４．平部分の茅刈り込み状況

５．足場の取り外し状況（東から）

６．刈り込み道具（ハサミ・ハサミ・ヌキ）

７．茅葺きの完成状況（北東から）

８．茅葺き職人のみなさん

第３節　園路広場

園路広場としては、盛土造成平坦部及び・復元住居周堤・床面・側溝の自然土舗装、北・南の入口エントランス部分の擬石平板舗装、史跡地西側の管理用通路のカラー舗装のほか、縁石工として造成盛土と斜面境の雑割縁石・東側水田部との境界部分の擁壁工・復元溝を横断する橋工等を行った。

１　自然土舗装

史跡造成平坦分の溝―２の西側、溝―１と溝―２に挟まれた部分、復元住居周辺の園路部分については、遺構復元に調和し、自然の土色を生かして自然土に近い感触のものを基本となる。また雨水の表面排水の区間・勾配を配慮して、表面を硬化させ、仕上げ材料の流出を抑えるものがふさわしいため、セメント系硬化剤（パーフェクトクレイＬ）を使用し真砂土による自然色土舗装を行った。

また、復元住居の周堤・床面・側溝・周囲の園路部分については、セメント系硬化剤（パーフェクトクレイＬ）よりさらに均一でより硬化をさせようと土質改良材（ＳＬ―1900無機系特殊水溶液）とセメントを加え真砂土舗装を行った。（第34図）

施工工程（セメント系自然土舗装）

１．掘削

造成盛土をユンボにより必要深さまで鋤取り、不陸整正を行い、振動ローラーにより路床規正転圧を行う。

２．路盤工

15cm厚でクラッシャーラン（Ｃ―40）をグレーダーによる敷均しを行い、振動ローラーによる転圧。

３．表層工

路盤工の上に均一に真砂土とセメント系硬化剤を混合し10cm厚でアスファルトフィニッシャーによる敷均し行い、振動ローラーによる転圧後、散水し真砂土を安定硬化させる。

施工工程（モルタルソイルサンド）

１．掘削

造成盛土の不陸整正を行い、振動ローラーにより路床規正転圧を行う。

２．路盤工

10cm厚でクラッシャーラン（Ｃ―40）の敷均しを行い、振動ローラーによる転圧。

３．表層工

路盤工の上に真砂土、ＳＬ―1900、セメント、水をミキサーにて７分間以上均一に撹拌し10cm厚で敷均し行い、左官によるコテ仕上げ、箒目仕上げを行う。

２　擬石平板舗装

史跡地北西と南西側のエントランス部分は、史跡地内への出入口部分としてふさわしいものとして擬石平板ブロックによる舗装を行った。（第35図）

北西エントランス擬石平板面積70.0㎡、南西エントランス擬石ブロック面積39.0㎡。

施工工程

- 機械による必要深さまでの床掘。
- 砕石路盤として100mm厚のクラッシャーラン（C―40）敷石の敷均し、ランマーにて転圧。
- 100mm厚のコンクリート（160―８―40）打設。
- ３cm厚の敷モルタル（１：３空練り）打設後、擬石縁石平板ブロック（稲田）の据え付け。
- 擬石平板ブロックに砂目地込みを行い、ランマーにて転圧。

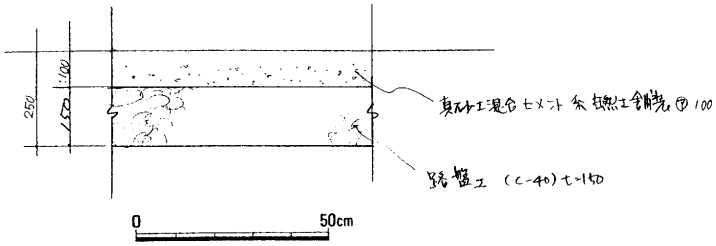
3　カラー舗装

史跡地西側は、境界を挟み農道と接している。史跡地西・南側の施設管理のための管理通路として整備を行った。

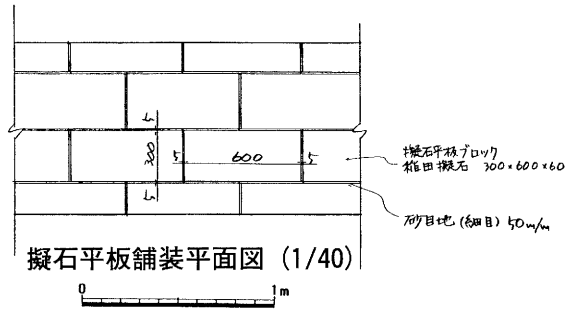
89.0㎡を自然土に近い色（タン）としてアクリル系のカラー舗装を行った。（第36図）

施工工程

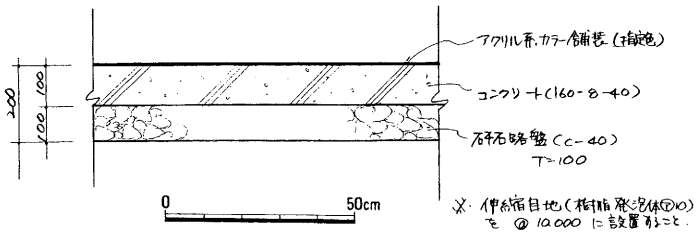
- 機械による必要深さまでの床掘。
- 砕石路盤として100mm厚のクラッシャーラン（C―40）敷石の敷均し、ランマーにて転圧。
- 100mm圧のコンクリート（160―８―40）打設。
- 吹き付け以外の部分のマスキングを行い、スプレーガンにより一度目（下吹）の吹き付け（スプレーイング）を行い、約15分間硬化させる。そして、二度目（ウエスペープ：タン色による上吹）の吹き付けを行う。
- カラー舗装乾燥後、仕上剤（トップコート）を吹き付ける。



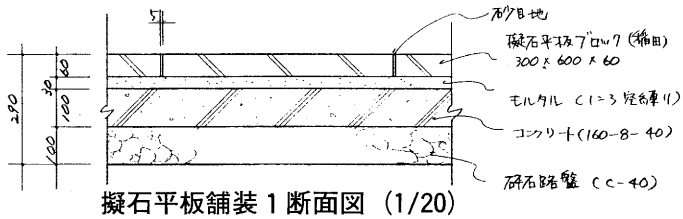
第34図　自然土舗装断面図（1/20）



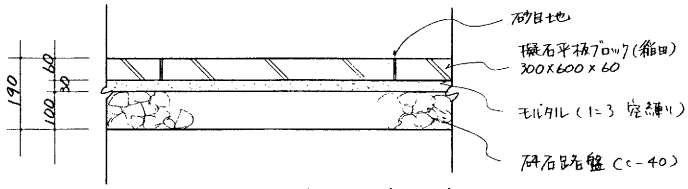
擬石平板舗装平面図（1/40）



第36図　カラー舗装断面図（1/20）



擬石平板舗装１断面図（1/20）



擬石平板舗装２断面図（1/20）

第35図　擬石平板舗装１・２平・断面図

図版24

１．自然土舗装路盤工施工状況（北から）

２．自然土舗装表層工施工状況（南東から）

３．自然土舗装表層工施工状況（北から）

４．自然土舗装表層工施工状況（南東から）

５．擬石平板舗装施工状況（北西から）

６．擬石平板舗装施工状況（北西から）

７．カラー舗装施工状況（南から）

８．カラー舗装施工状況（南から）

第４節　管理施設

管理施設としては、史跡地内の雨水の排出施設としての雨水排水施設、多目的利用者のための水飲み・手洗い場としての便益施設である水飲み。また、植栽樹木の管理のため必要な散水栓設置のための給水設備、夜間の防犯的な明るさをもつ照明灯設置の電気設備を設置する。

その他の施設として、北・南側の入口部分に固定式の擬石製車止めを設置、西・南側ベンチ近くに「燃えるもの」「燃えないもの」の分別式の屑入れを２セット設置した。

１　雨水排水施設工

雨水排水は基本的に敷地内で処理することとし、斜面植栽部分・造成平坦部分・溝復元部分・竪穴住居復元部分の４ヶ所に排水計画を行った。排水にあたり集水枡を設け鋼製グレーチング蓋（480×480×25）を掛けた。雨水排水の末端は北と南にある農業用水路とした。（第37図）

斜面植栽部分

- 北側（総延長49.4m）と西側（総延長74.5m）の史跡地境界部分は、擬石皿形側溝（300×110×600㎜）を設置した。北側部分は東から西へ水勾配をとり北側農業用水路へ排水し、西側部分は北から南へ水勾配をとり南側農業用水路へ排水した。
- 南側と南入口エントランス部分まで（総延長57.0m）の史跡地境界部分は、Ｕ型側溝（240×240×600㎜）を設置し、グレーチング細目蓋（997×225×19㎜）を掛けた。Ｕ型側溝は、集水枡（ＭＤ）に接続し南側農業用水路へ排水した。
- 西側（総延長99.5m）の史跡境界部分には史跡地と水田・畑地との高低差が大きいため擁壁を設置し、擁壁内側にＬ型側溝を設置した。Ｌ型側溝は、集水枡（ＭＣ－１・ＭＣ－２）に接続し排水管を通り北側農業用水路へ排水した。Ｌ型側溝の南半分の雨水は、Ｕ型側溝へ排水できるよう水勾配をとった。

造成平坦部

- 造成平坦部である自然土舗装と住居復元を行った部分は、水勾配をとり平面を流れた雨水は、雑割縁石で斜面との境界部分にＬ型側溝（総延長196.9m）を設置した。雨水は３ヶ所に区画された平坦部分に４ヶ所集水枡（ＭＡ－１・ＭＡ－２・ＭＡ－３・ＭＡ－４）に接続し、集水枡（ＭＡ－１・ＭＡ－２）は、排水管（VUφ 200）から南側農業用水路へ排水した。ＭＡ－３は、排水管（VUf 200）から集水枡（ＭＥ－３）へ接続し北側農業用水路へ排水した。集水枡（ＭＡ－４）は、排水管（VUφ 200）から復元溝－１内に設置した集水枡（ＭＢ－４）と接続し排水管から北側農業用水路へ排水した。

溝復元部分

- 溝１・２の復元は、自然土舗装面より10㎝低く溝状を呈するように復元し、溝を横断する通路を各２本づつ設けたため通路に分断される区間毎に排水枡を設置した。
- 復元溝－１は、貝塚復元を行った中央部分を境に北と南に水勾配を設け、北側に集水枡（ＭＢ－６・ＭＢ－４）を、南側に集水枡（ＭＢ－１・ＭＢ－７）の４基を設置した。集水枡（ＭＢ－７）は、排水管（VPφ 150）から復元溝－２の集水枡（ＭＢ－５）と接続し、排水管（VPφ 200）から集水枡（ＭＡ－１）と接続し、排水管（VUφ 200）からＵ型側溝へ排水した。集水枡

（ＭＢ－１）は、排水管（VUφ 150）からＵ型側溝へ排水した。集水枡（ＭＢ－６）は、排水管（VPφ 150）から集水枡（ＭＢ－４）に接続し、排水管（VUφ 200）から北側農業用水路へ排水した。

- 復元溝－２は、２ヶ所の通路により３区画され、水勾配をとり端部に集水枡（ＭＡ－２・ＭＢ－５・ＭＢ－３）の３基を設置した。集水枡（ＭＢ－５）は、排水管（VPf 200）から集水枡（ＭＡ－１）と接続しＵ型側溝へ排水した。集水枡（ＭＢ－２）は、排水管（VUφ 200）からＵ型側溝へ排水した。集水枡（ＭＢ－３）は、排水管（VUφ 200）から集水枡（ＭＥ－１）へ接続し、排水管（VPφ 200）から集水枡（ＭＡ－３）へ接続し、排水管（VUφ 200）から集水枡（ＭＥ－３）へ接続し北側農業用水路へ排水した。

竪穴住居復元部分

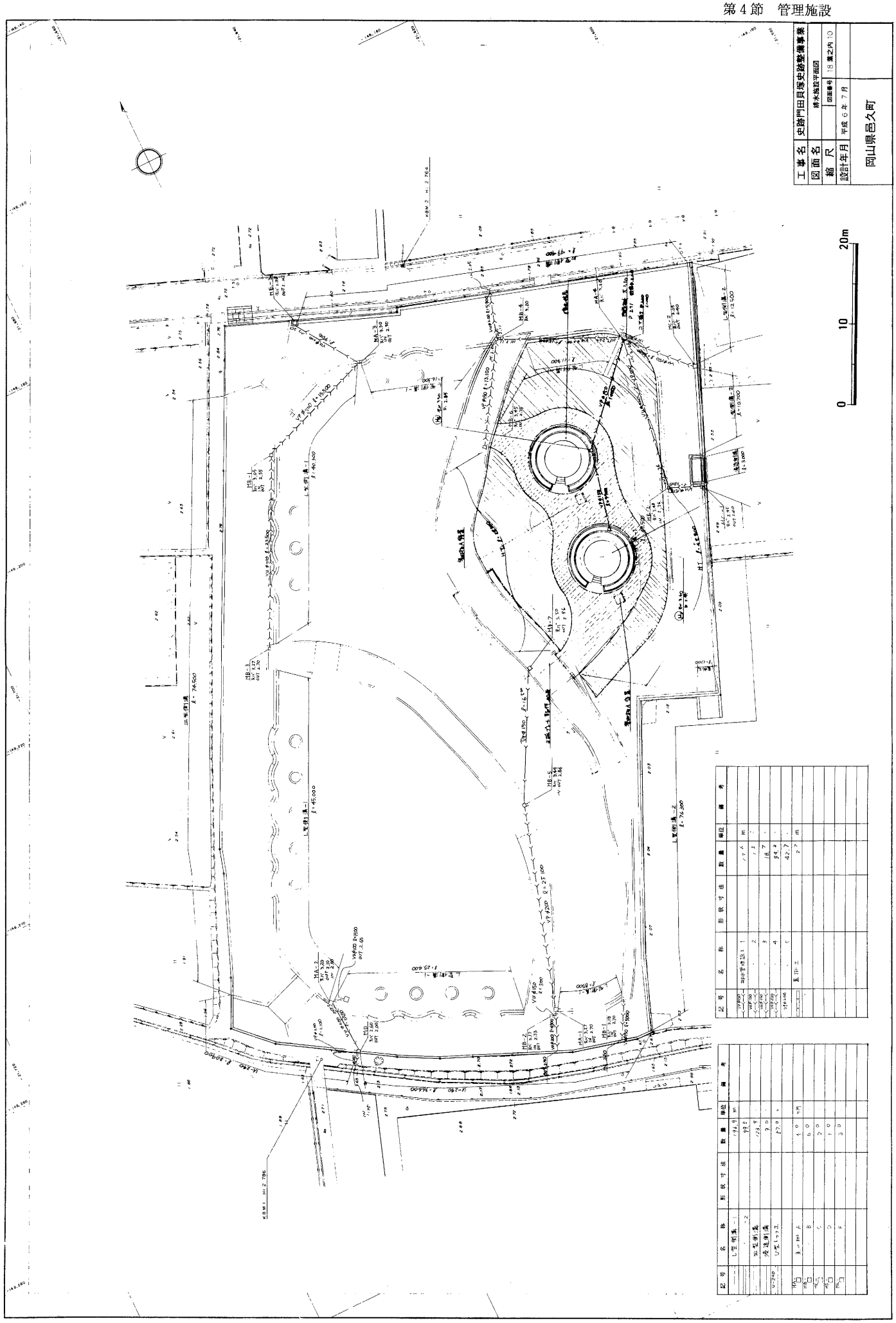
- 復元住居部分の雨水排水は、復元住居周囲に幅50cmの側溝を設け、出入口の反対側側溝内に集水枡を各１ヶ所設置した。復元住居の集水枡は排水管（VPφ 150）から造成平坦部北東隅の集水枡（ＭＢ－４）で接続し、北側農業用水路へ排水した。

2　給水設備工

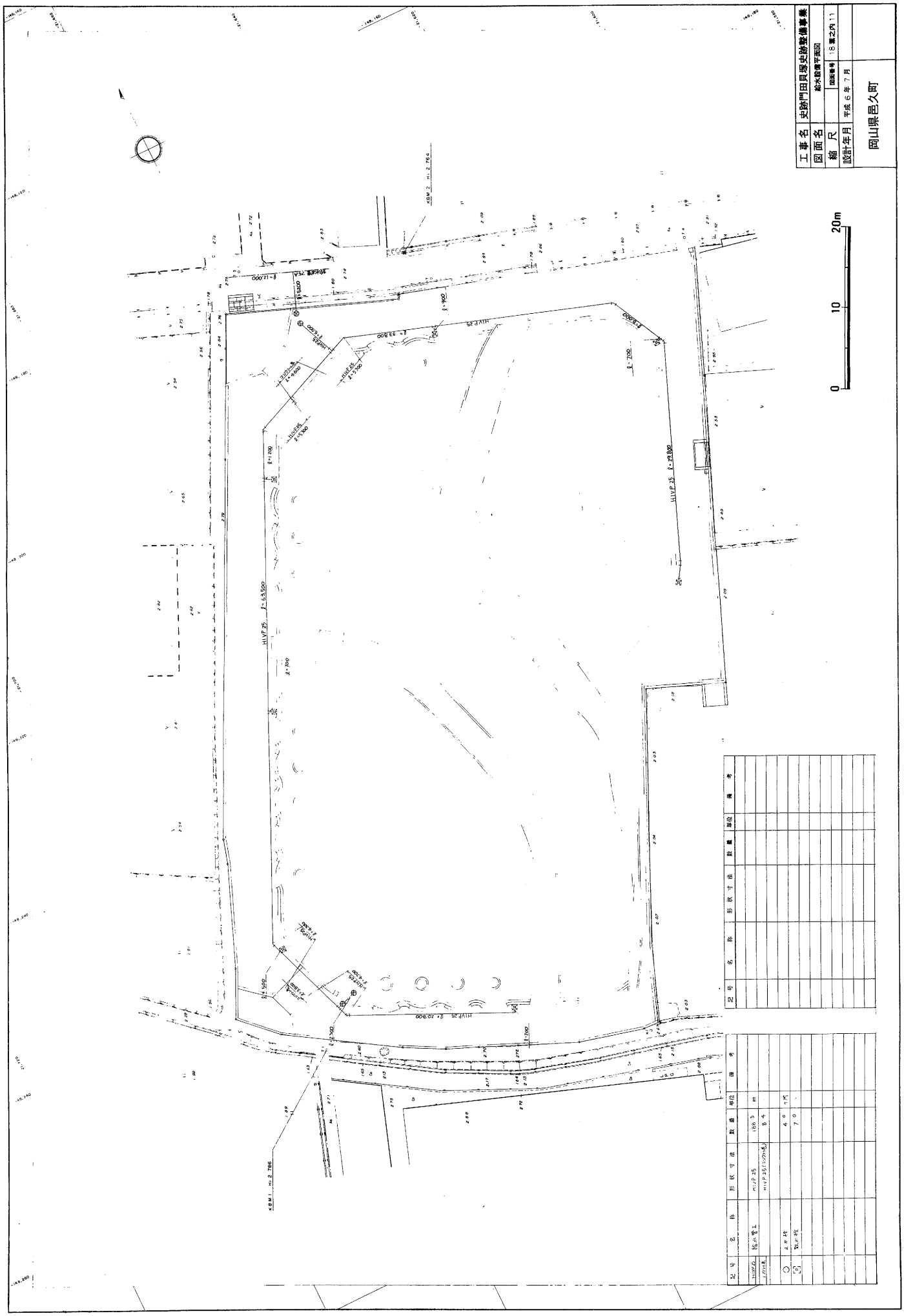
- 史跡地内への給水は、平成５年度で単町事業として、史跡地北側の町道地下に布設されている水道給水本管から史跡地内へ引き込みを行った。
- 給水設備は、斜面部分に植栽する樹木の維持管理用の散水栓と利用者の水飲みの施設のため設置する。
- 給水管（HIVP 25、総延長188.5m）は、引込管から北側から東側の植栽維持管理用と、西側から南側の植栽維持管理用に分岐し、斜面部分に埋設し地表下30cmに埋設表示テープ（W＝150）を布設した。
- 北入口は管理用車の進入のため、給水管の4.5m間を20×20cm角のコンクリート巻きで行った。
- 止水栓は４ヶ所、散水栓は約30m間隔で７ヶ所設置した。
- 水飲みは、南西入口近くで南側植栽枡の西側に、斜面植栽部分地下に配管した給水管（HIVP 25）から引き込み、人造石製の立飲用・足場用自閉式水栓の付いた水飲みを１基設置した。使用後の排水については、排水管（VUφ 100）から排水枡（ＭＡ－２）へ接続し、排水管（VUφ 200）から集水枡（ＭＤ）へ接続し南側農業用水路へ排水した。（第38図）

3　電気設備工

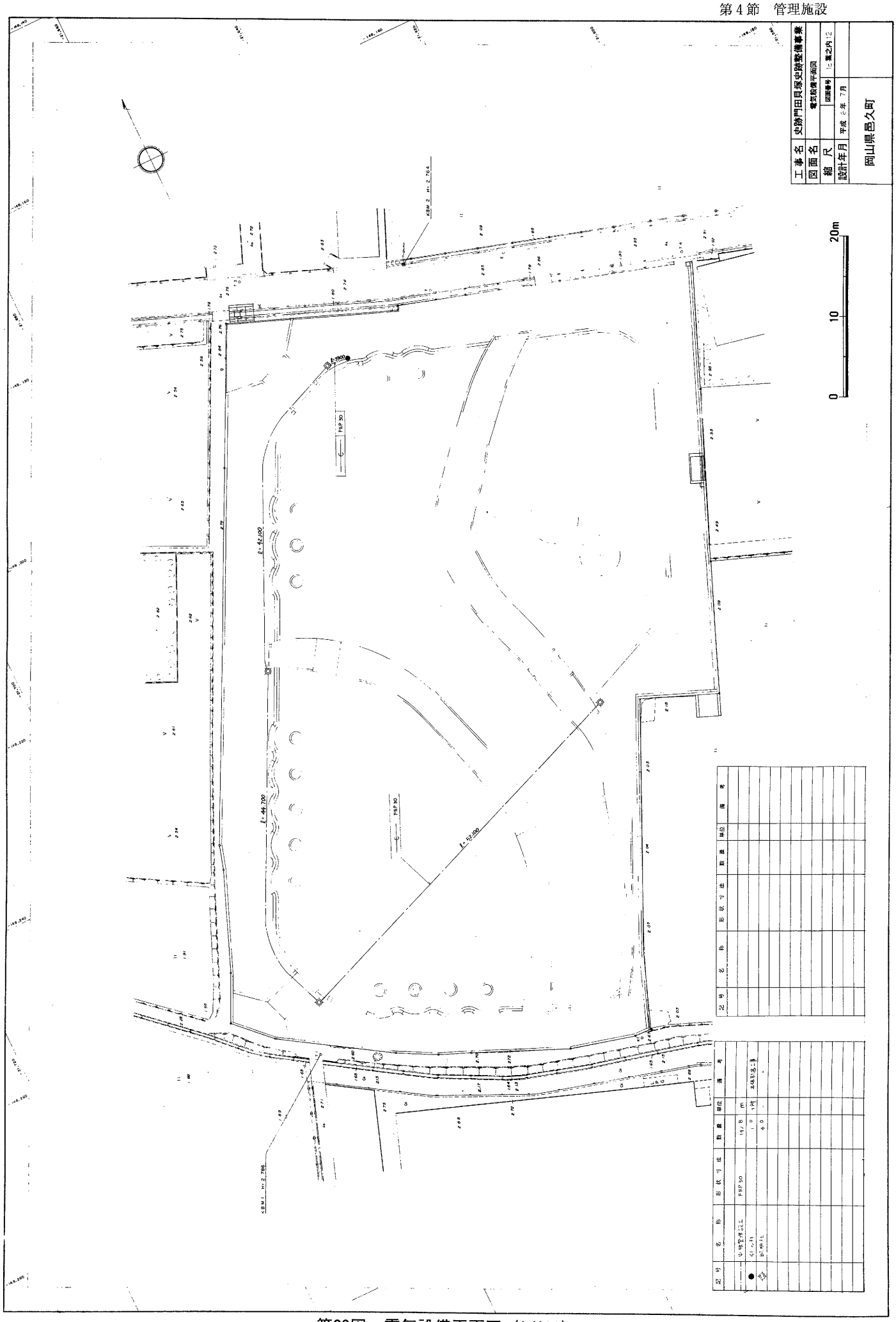
- 電気設備は、史跡地北側の町道に電線が引かれており、ここより史跡地内へ引込柱へ給電し、以降電線管類はすべて地下埋設とした。
- 電線管（FEP 30、総延長142.5m）は、引込柱から西側斜面植栽部分から南入口東部分をとおり貝塚復元の東側まで地下へ埋設し、地表下30cmに埋設表示テープ（W＝150）を布設した。
- 引込柱は、北側入口の東側の斜面植栽部分に設置し北側電線から引き込んだ。高さ5.5m、φ11.43cmのダークブラウン塗装で屋外共架式分電盤を接続した。
- 照明灯は施設内の防犯のため最低限の数とし４基設置した。高さ4.0mの照明ポールに250Wハロゲンランプとし、照明ポールの色彩については、落ち着きのあるダークブラウン塗装とした。（第39図）



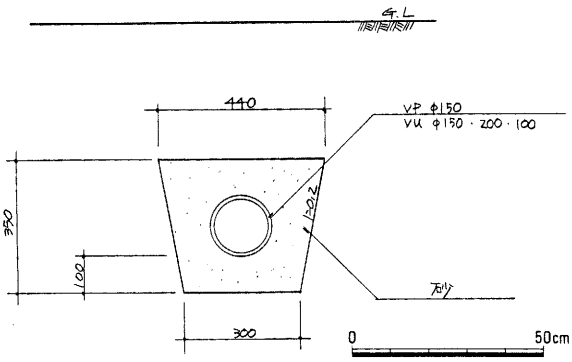
第37図　雨水排水施設平面図（1/600）



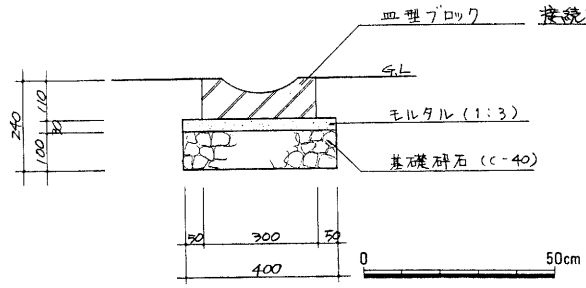
第38図　給水設備平面図（1/600）



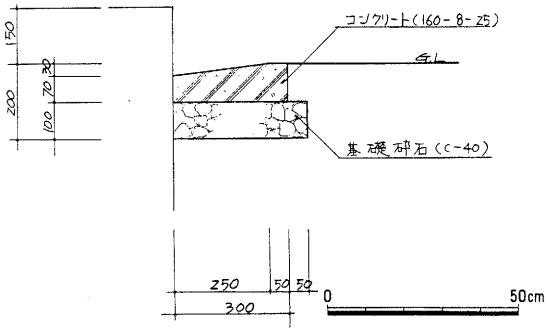
第39図　電気設備平面図（1/600）



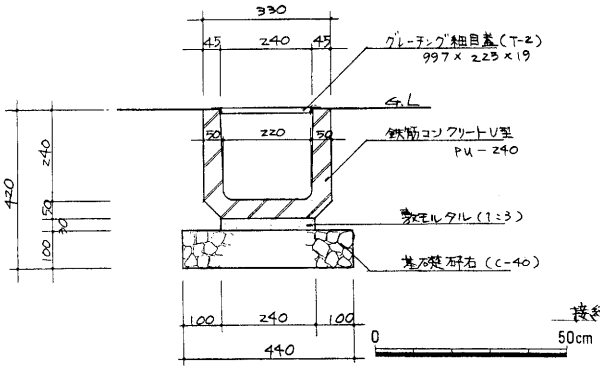
第40図　排水管埋設工断面図（1/20）



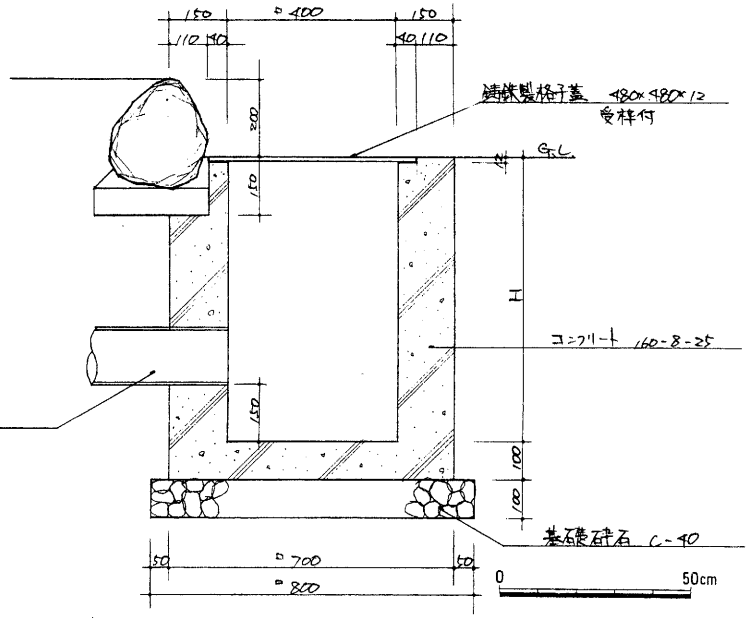
第41図　皿型側溝断面図（1/20）



第42図　Ｌ型側溝２断面図（1/20）

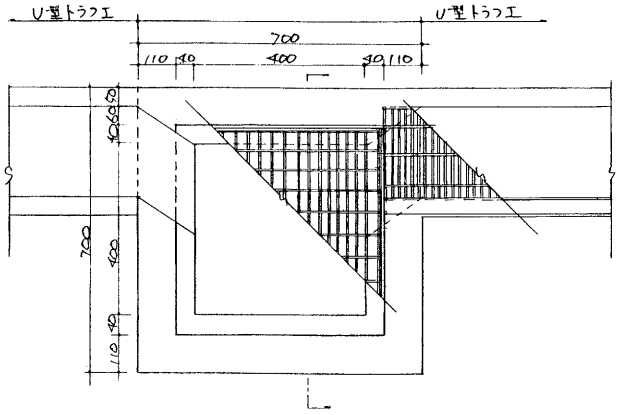


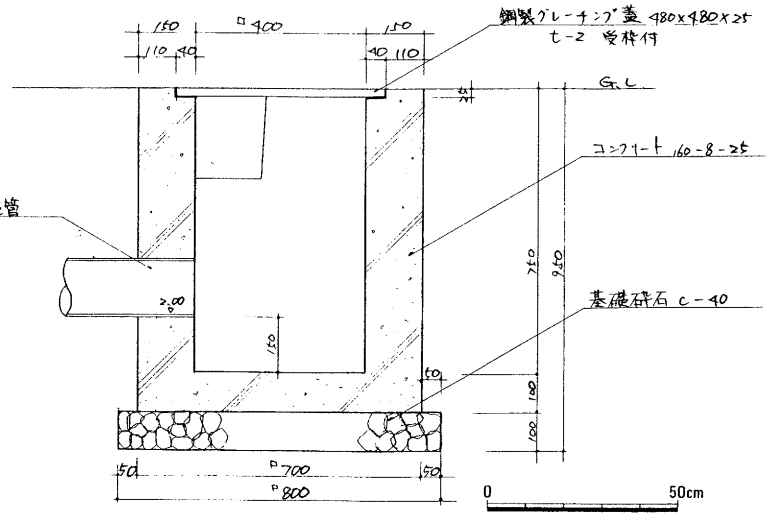
第43図　Ｕ型側溝断面図（1/20）



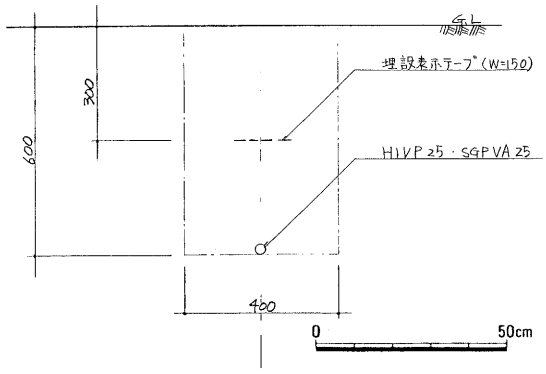
枠番号	天端高	H	流入管高	流出管高
MB-1	3.18	630	2.70	2.70
〃-2	3.17	590	2.73	2.73
〃-3	3.37	820	—	2.70
〃-4	3.20	650	2.70	2.70
〃-5	3.44	730	—	2.86
〃-6	3.45	850	—	2.75
〃-7	3.50	690	2.96	2.96

第44図　集水桝Ｂ断面図（1/20）

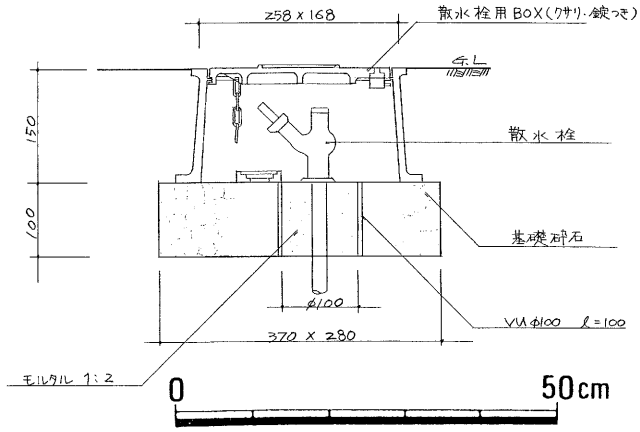




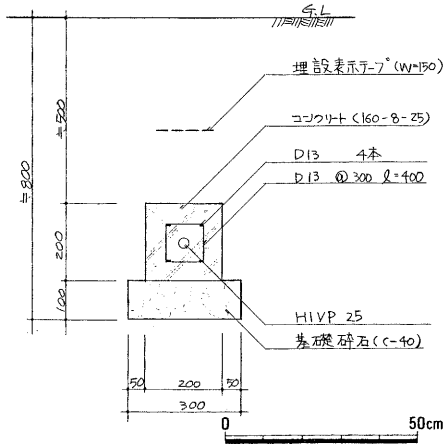
第45図　集水桝Ｄ平・断面図（1/20）



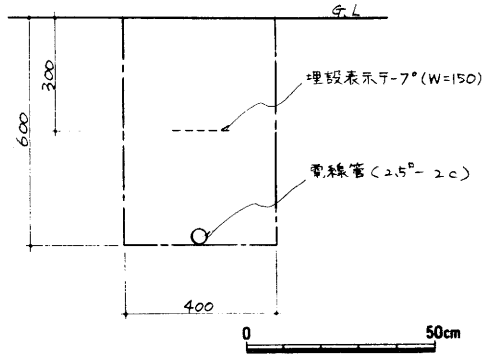
第46図　給水管埋設工断面図（1/20）



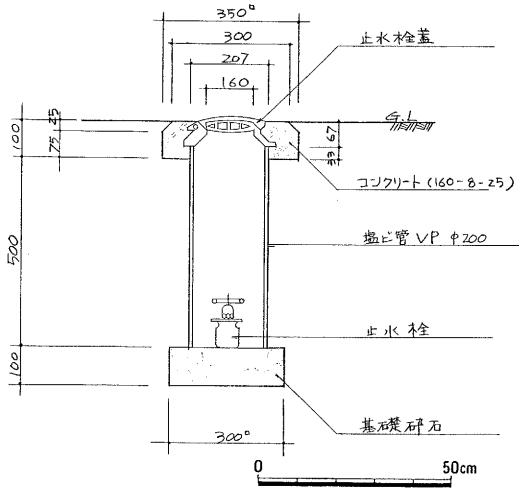
第49図　散水栓断面図（1/10）



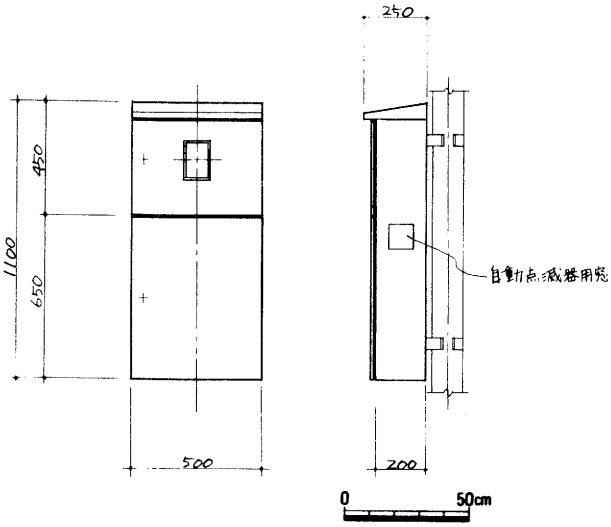
第47図　給水管（コンクリート巻）断面図（1/20）



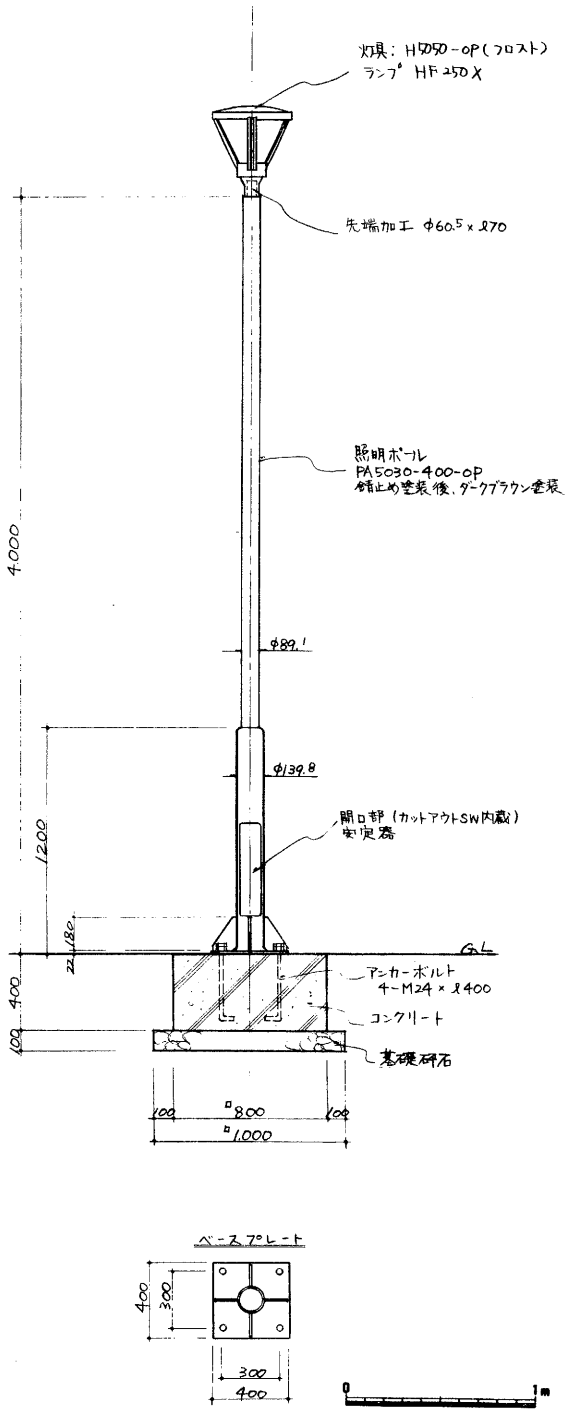
第50図　電線管埋設工断面図（1/20）



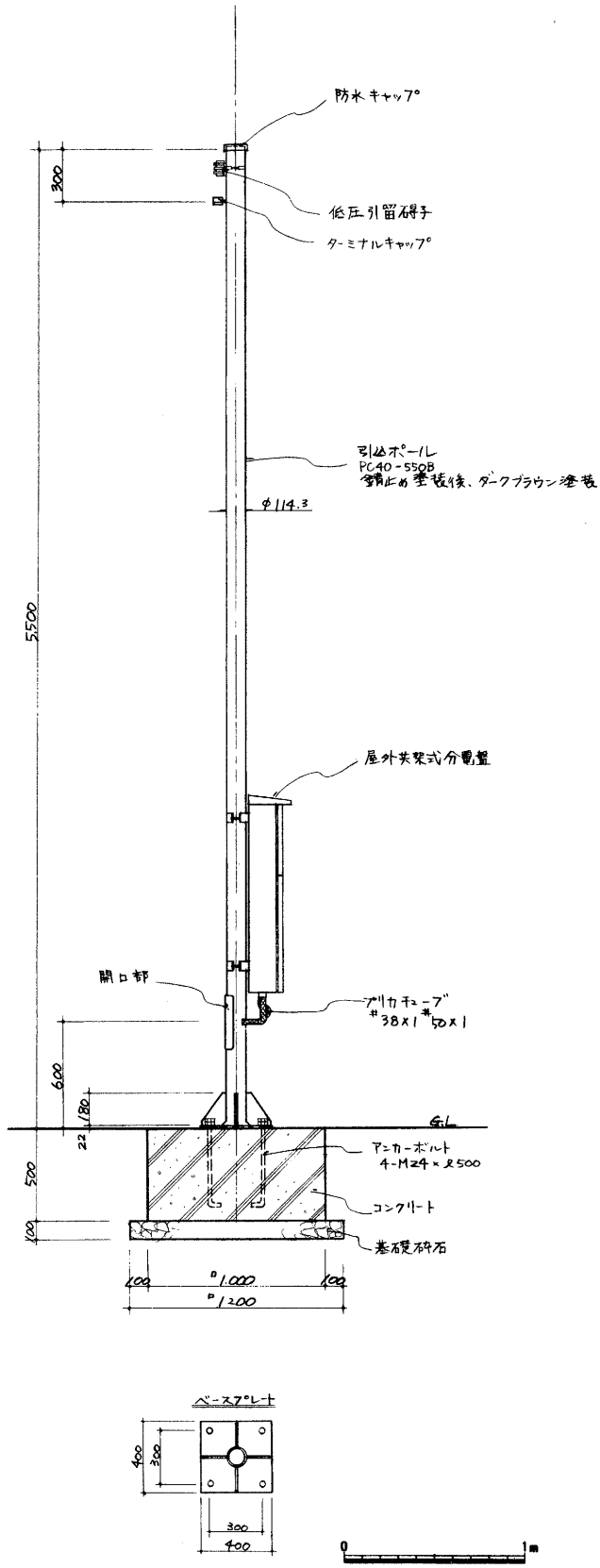
第48図　止水栓断面図（1/20）



第51図　分電板（1/30）



第52図　照明灯（1/40）

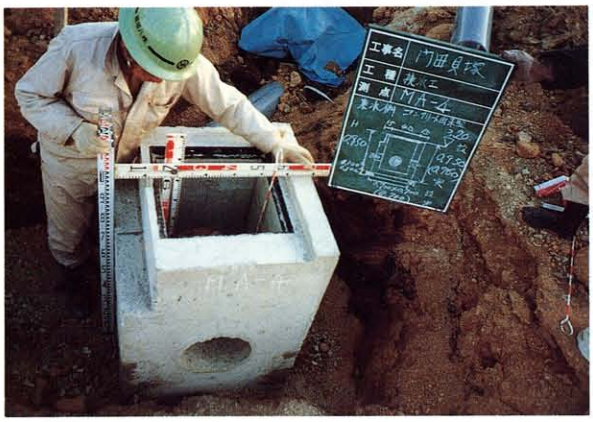


第53図　引込柱（1/40）

図版25

１．排水管布設状況

２．排水管基礎砂埋戻し状況



３．集水桝工施工状況

４．排水工管布設状況

５．皿型側溝施工状況（南から）

６．Ｕ型側溝施工状況（西から）

７．Ｌ型側溝施工状況（南から）

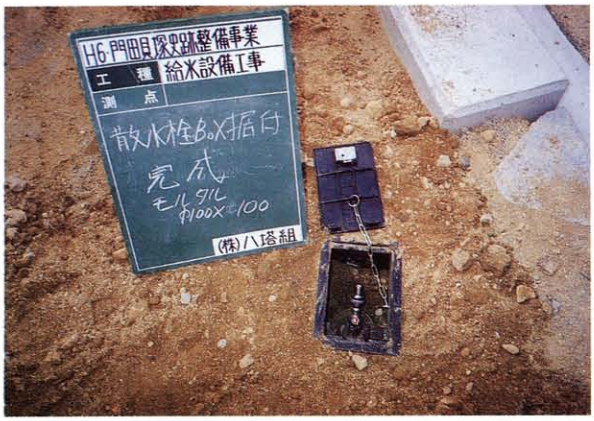
８．Ｌ型側溝施工状況（南から）

図版26

1．給水管埋設床掘状況（南から）

2．給水管埋設状況（西から）

3．埋設テープ布設状況（東から）



4．散水栓 BOX 据付状況

5．散水栓完成状況（南から）

6．水飲み自閉式水栓（西から）

7．水飲み完成状況（西から）

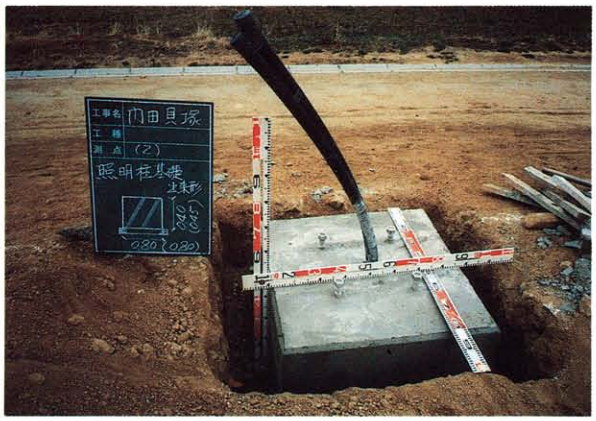
図版27

１．電線管埋設床掘状況

２．電線管埋設状況（北から）

３．埋設テープ布設状況（北から）

４．引込柱基礎



５．照明柱基礎

６．引込柱設置状況（南から）

７．照明灯設置状況（南東から）

第５節　休養・便益施設

休養・便益施設としては、利用者のための休養施設として北・西・南側に14基のベンチを設置した。

便益施設として、南西入口近くに水飲みを１基設置した。

1　ベンチ

ベンチの配置位置は、斜面植栽部分と平坦部自然土舗装の境となる位置に、高木植栽のための植栽枡を取り囲む形で設置した。このため、休憩時の見学方向は、史跡地内を向けるようとした。具体的には、植栽枡の中心からベンチ座板の内側でＲ＝3.05ｍで60°の角度で円弧を描く位置にベンチを設置した。

設置数は、北側に２基、西側に８基、南側に４基、計14基である。

施工工程

- 造成盛土を必要深さまで床掘り行う。
- 100㎜厚で基礎砕石（Ｃ―40）を敷均しを行い、振動ローラーによる転圧。
- 基礎砕石上に100㎜厚で基礎コンクリート打設。
- ベンチの基礎型枠を組みコンクリート（160―８―25）の打設。
- 基礎表面のハツリ仕上げ。
- 加圧式防腐処理を施した杉板（75×75cm、Ｌ＝450cm）41枚で構成されたベンチ座板が取り付けられたベンチ土台を、基礎コンクリート上部10ヶ所にスリーブ抜きを行いボルトで固定、スリーブ穴はコーキング剤を充塡した。

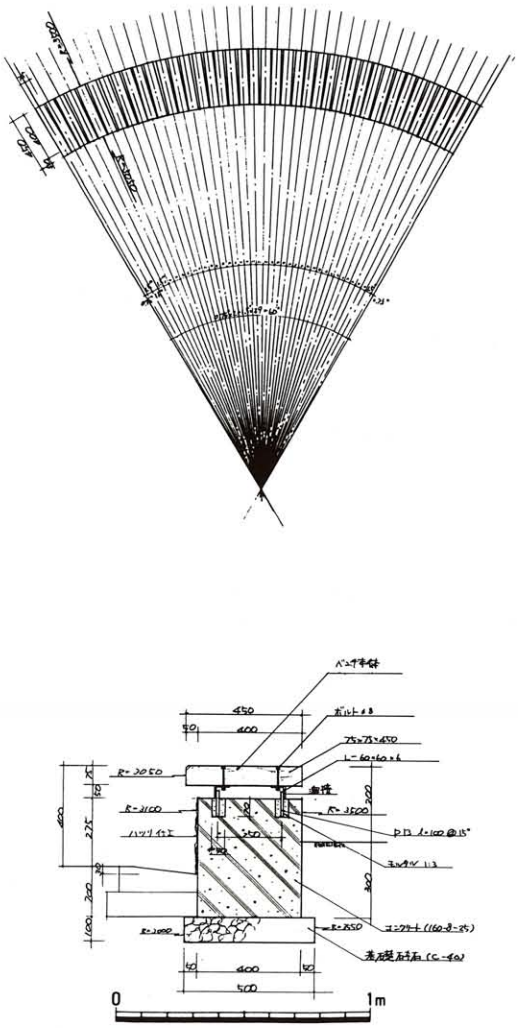
2　水飲み

水飲みは、南西入口近くで南側植栽枡の西側に、斜面植栽部分地下に配管した給水管から引き込み、人造石製の立飲用・足場用自閉式水栓の付いた水飲みを１基設置した。

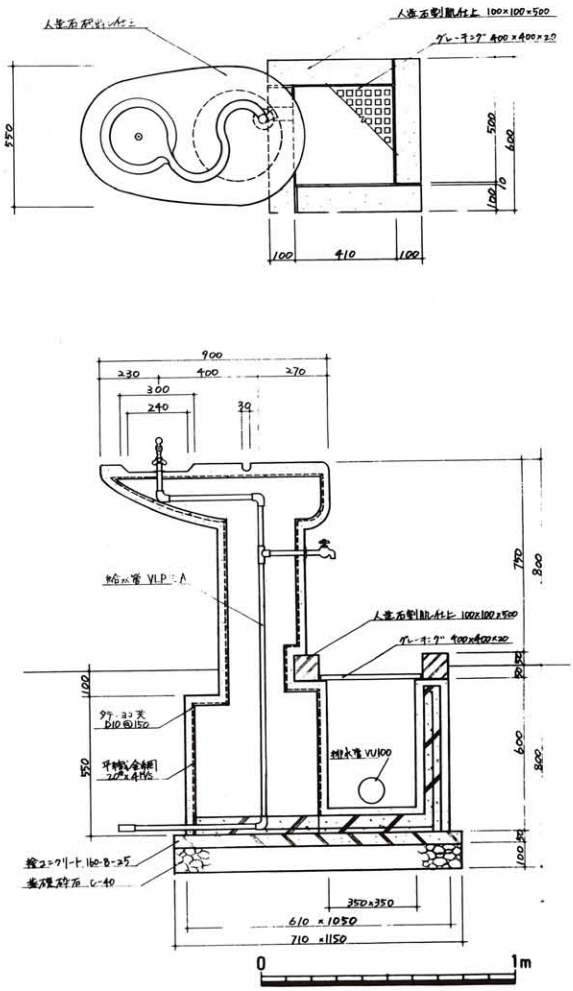
使用後の排水については、排水枡（ＭＡ―２）へ接続し南側用水へ排水した。

図版28　ベンチ設置状況（北から）

図版29　水飲み設置状況（北東から）



第54図　ベンチ平・断面図（1/60・1/30）



第55図　水飲み平・断面図（1/30）

第６節　教養施設

- 教養施設としては、史跡標柱１基、史跡公園案内板１基、史跡総合説明板１基、貝塚説明板１基、住居説明板１基、弥生土器説明板１基、植栽樹木説明柱４基、樹木ラベル40枚を設置した。
- 材質については、将来的な維持管理や耐久性・耐気候性を考え、史跡標柱は花崗岩、説明板関係をコンクリート本体に磁器磁製陶板を組み合わせた。

1　史跡標柱

史跡地北西入口のエントランス東にエントランス方向へ向け史跡標柱を設置した。標柱は、花崗岩御影石製（白色）ビシャン仕上げで、（W）50cm×（D）30cm×（H）210cmの本体を据え、標柱の四隅に（W）20cm×（D）20cm×（H）70cmの柵柱を建てステンレスチェーンを巡らせた。

標柱の三面には、史跡の名称、指定年月日、設置年月日、整備主体者名を彫り込んだ。（第57図）

正　面　　史跡門田貝塚

左側面　　昭和六十年三月六日指定

裏　面　　文部省

　　岡山県教育委員会

　　邑久町教育委員会

2　説明板

史跡公園案内板

（W）146cm×（D）92cm×（H）137cmの表面ハツリ仕上げしたコンクリート本体の斜め前面に29．5cm角の磁器製陶板を３段５列の計15枚使用し史跡公園案内板を、史跡北西のエントランス東側に設置した。

（W）120cm×（D）90cmの板面には、史跡公園全体図と復元遺構の名称を記した。（第58図）

史跡総合説明板

（W）226cm×（D）83cm×（H）140cmの表面ハツリ仕上げしたコンクリート本体の斜め前面に39．5cm角の磁器製陶板を２段５列の計10枚使用し史跡総合説明板を、史跡北西のエントランス西側に設置した。

（W）200cm×（D）80cmの板面には、門田貝塚全体の説明と貝塚検出写真、「弥生時代前期」「弥生中期～古墳時代」「奈良～平安時代」「鎌倉時代」の遺構・遺物の解説と写真、門田貝塚調査年表を入れた（第59図）

貝塚説明板

（W）426cm×（D）115cm×（H）60cmの表面ハツリ仕上げしたコンクリート本体の斜め前面に39.5cm角の磁器製陶板を２段10列の計20枚使用し貝塚説明板を、復元した貝塚を横断する位置に設置した。

（W）400cm×（D）80cmの板面に、中央に貝層断面写真、「門田遺跡の貝塚」の解説と貝塚断面図、「貝塚とは」「狩猟について」の解説と土器の出土状況・イノシシの下あご骨写真を入れた。

本体の高さについては、説明板の貝層断面写真と共に前面に復元した貝塚の最終堆積状況が広が

る視野を遮らないよう低く抑えた。（第60図）

竪穴住居説明板

（W）106cm×（D）115cm×（H）60cmの表面ハツリ仕上げしたコンクリート本体の斜め前面に39.5cm角の磁器製陶板を２段２列の計４枚使用し竪穴住居説明板を、復元住居前に設置した。

（W）800cm×（D）800cmの板面に、「竪穴住居について」の解説と弥生後期の竪穴住居址の検出写真、復元住居の構造イラストを入れた。

本体高さについては、復元住居の景観を考え低く抑えた。

弥生土器説明板

（W）106cm×（D）115cm×（H）60cmの表面ハツリ仕上げしたコンクリート本体の斜め前面に39.5cm角の磁器製陶板を２段２列の計４枚使用し弥生土器説明板を、復元住居前に設置した。

（W）800cm×（D）800cmの板面に、「弥生土器について」の解説と壺・甕・鉢の写真を入れた。

本体高さについては、復元住居の景観を考え低く抑えた。（第61図）

樹木説明柱

（W）20cm×（D）20cm×（H）75cmの磁器製本体上に「花粉の化石が見つかった樹木」「農具の材料となった樹木」「住居の材料となった樹木」「木の実がとれる樹木」の解説と、どんぐり・くわ・すきのイラストを入れた４基の説明柱を制作し、ゾーニングした植栽箇所に設置した。（第56図）

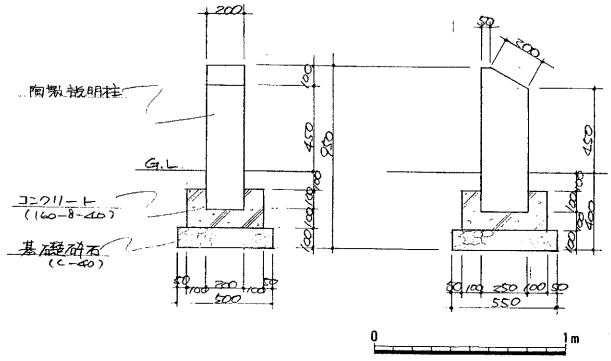
3　樹木ラベル

弥生時代の植生の理解を一層深めるため、史跡造成斜面部分に用途に応じゾーニング植樹した樹木の名前の由来や社会との係わりなどをわかりやすく解説した樹木ラベルを40枚取り付けた。

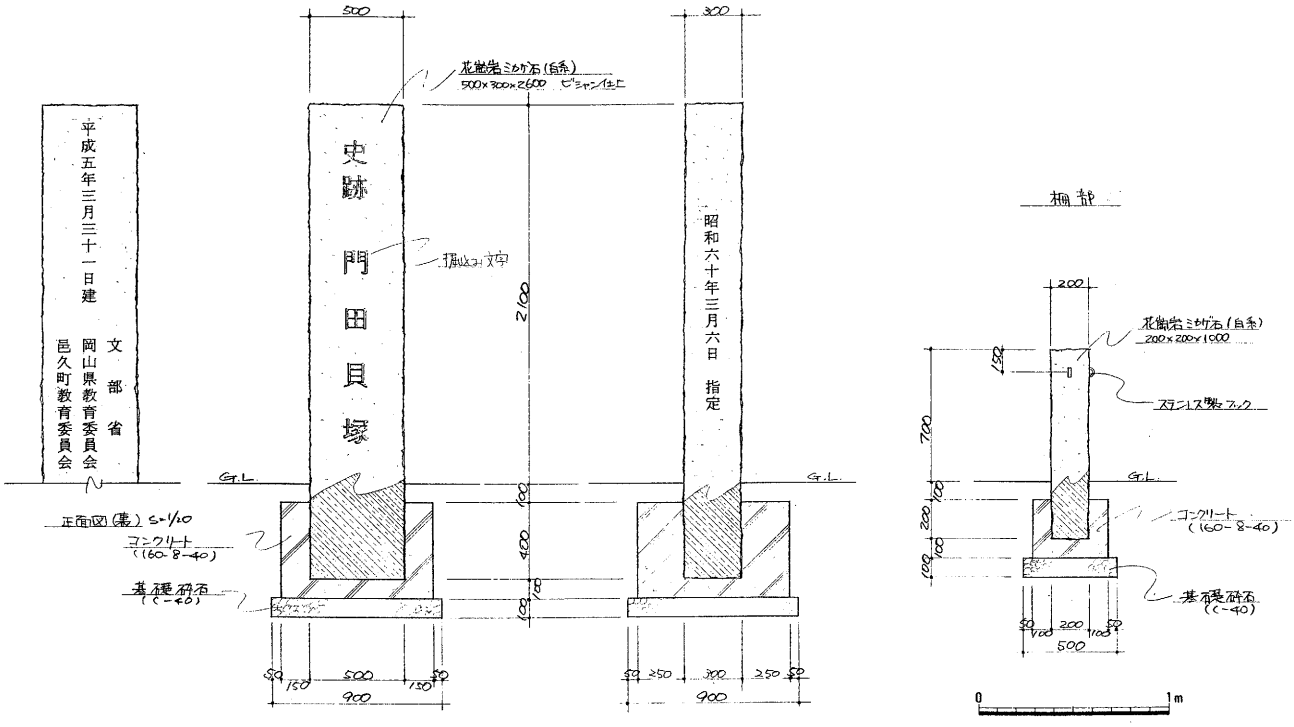
樹木ラベルは、（W）21.9cm×（H）16.4cm×（T）1.2cmの樹脂製ベースに耐酸性アルミ板に解説を表示したものでラベルを樹木に、ステンレススプリング２本を使用し取り付けた。

樹木ラベルの内訳

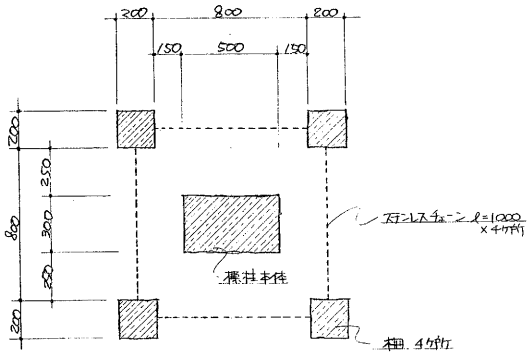
樹　種　名	枚数	樹　種　名	枚数	樹　種　名	枚数		
ケヤキ	7	コナラ	4	ハンノキ	2		
ウバメガシ	5	トチノキ	3	アベマキ	2		
エノキ	5	イチイガシ	2	アラカシ	2		
ツガ	4	アカマツ	2	シラカシ	2	合　計	40

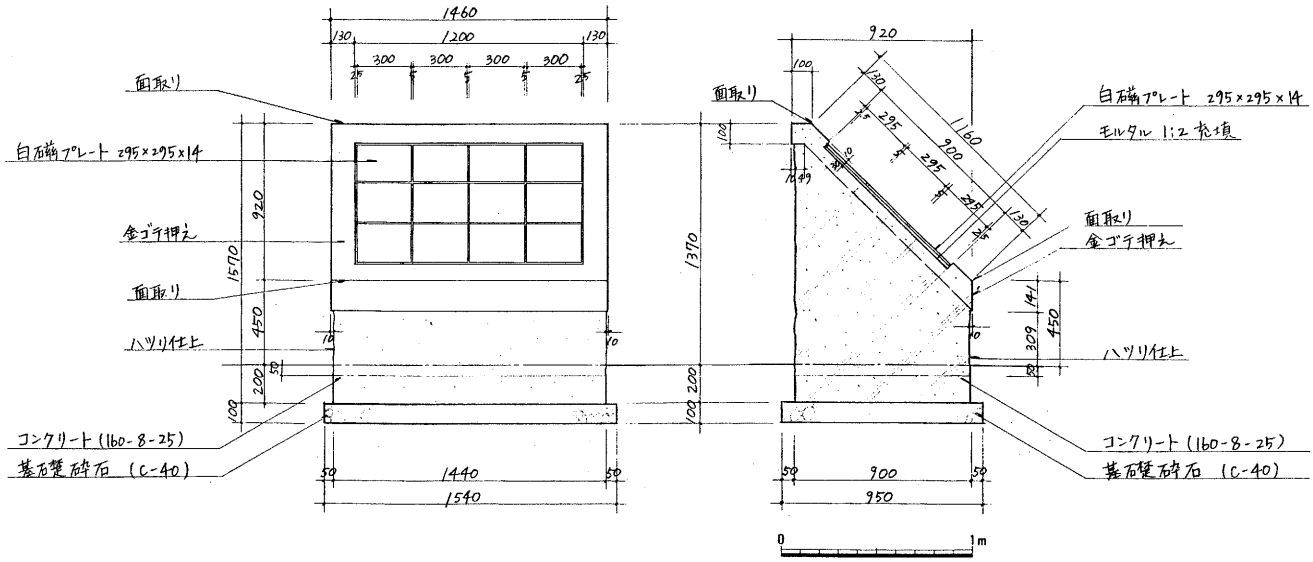


第56図　樹木説明柱正・断面図（1/40）

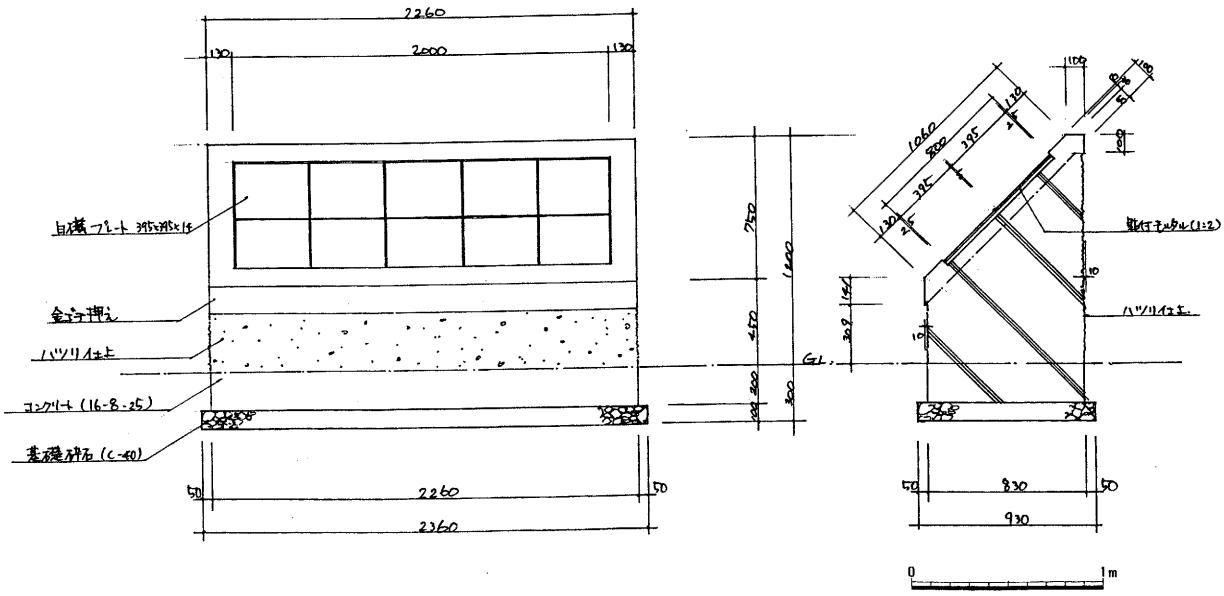


第57図　史跡標柱（1/40）

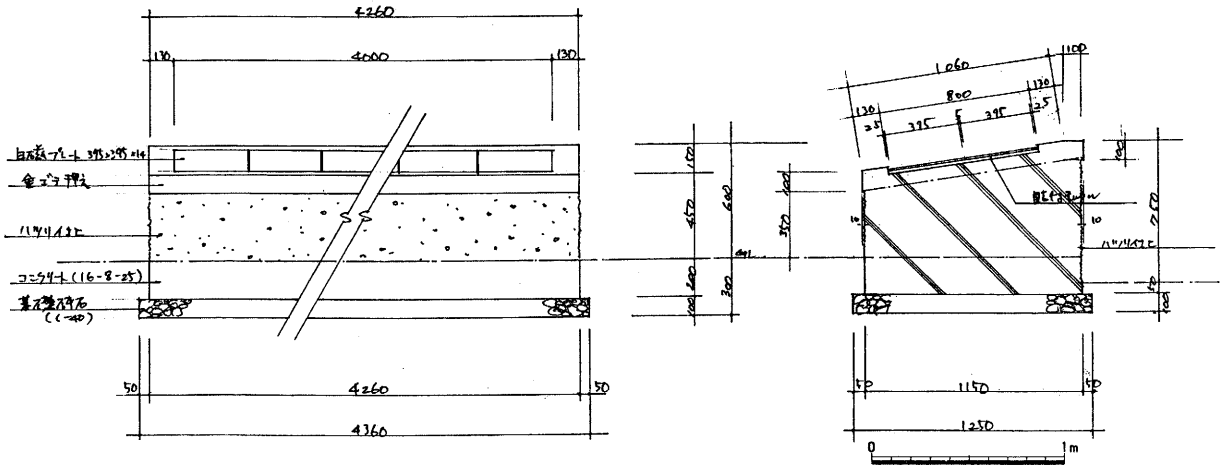




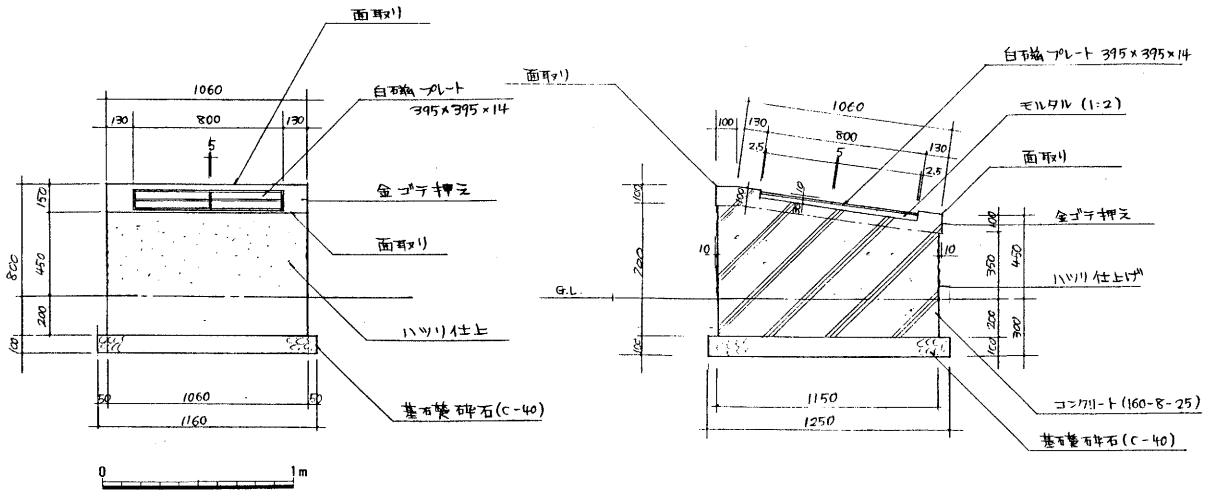
第58図　史跡公園案内板正・断面図（1/40）



第59図　史跡総合説明板正・断面図（1/40）



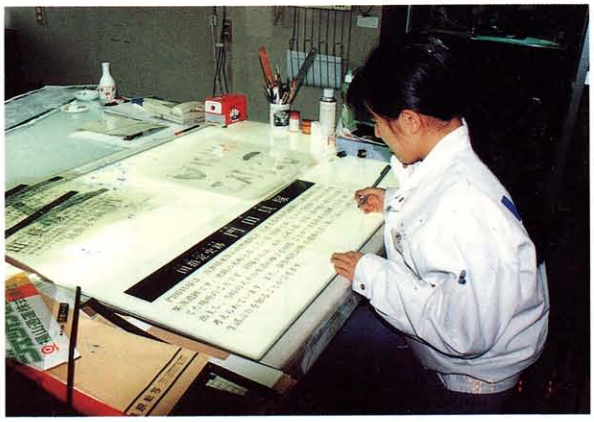
第60図　貝塚説明板正・断面図（1/40）



第61図　住居・土器説明板正・断面図（1/40）

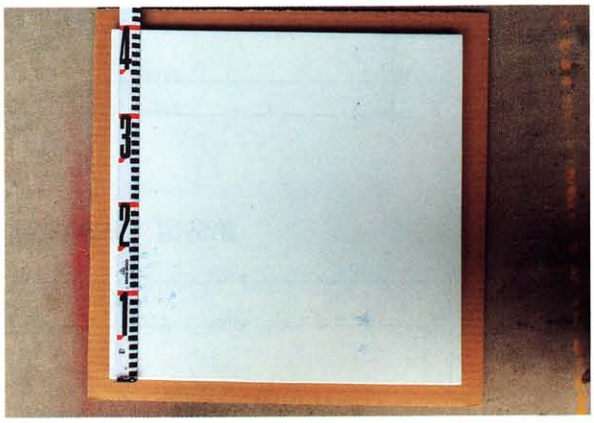
図版30

１．図面上で
レイアウト作業



２．版下フィルムのチェック

３．白磁陶板焼成



４．白磁陶板寸法チェック

５．イングレ転写紙貼込み

６．イングレ窯焼成

７．焼成後完成品

８．焼成後完成品

第７節　修景施設

１　植栽工

植栽は「弥生時代の門田ムラ」の環境を創出する重要な素材であり、遺構復元と共に当時遺跡周辺部に植生していた樹木を系統的に植栽することにより野外ミュージアムとしての機能を果たすよう、植栽の実施にあたり基本計画を受け、遺構保護、導入樹種、配植の面から検討した。

遺構保護

遺跡の保護について、現況地盤に盛土を行いを樹木を植栽し、高木のエノキ・トチノキについては植栽ポット内に植栽した。また、移植樹木も直根は切断された状態で植樹するため地下遺構に影響を及ぼさないとと考えられた。今回さらに、樹根が地下遺構に影響しないよう、植栽が行われる範囲800㎡に耐水性、耐腐蝕性、耐候性に優れた耐根シートを現況地表面に施し、造成を行った。（第62図）

導入樹種

導入樹種選定にあたり、平成4(1992)年度遺構確認調査時、弥生時代前期後半の溝１・２の最下層の土壌を採取し土壌花粉分析を実施した。

（付載１門田貝塚土壌花粉分析報告参照）

分析結果を踏まえて、樹種の特定を行った。

特定方法は、以下の４つの条件を満たすものとした。

土壌花粉分析結果表

種類（Taxa）	トレンチ	T－5	T－6	T－10
	遺構名	溝－1	溝－1	溝－2
	試料番号	1	2	3
木本花粉				
マキ属		1	—	—
モミ属		2	—	—
ツガ属		3	—	5
トウヒ属		1	—	—
マツ属		8	2	3
ハンノキ属		—	1	—
コナラ属コナラ亜属		—	—	1
コナラ属アカガシ亜		1	—	3
ニレ属—ケヤキ属		—	—	1
草本花粉				
イネ科		3	—	31
サナエタデ節—ウナギツカミ節		1	—	—
ヨモギ属		6	1	—
オナモミ属		—	1	1
シダ類胞子				
シダ類胞子		41	10	10
合　計				
木本花粉		16	3	13
草本花粉		10	2	32
不明花粉		0	0	0
シダ類胞子		41	10	10

特定条件

①日本に自生していること
②中国地方（山陽）に自生していること
③自生海抜高が０ｍに近いもの
④現在でも造園樹種として入手可能なもの

花粉分析で検出された樹種名に①～④の特定条件を満たさないものを樹種名に番号を示すと以下のとおりとなる。

マツ類（綱）

マキ科

イヌマキ……

ナギ……②

ナギは中国地方に自生しない。
そのためマキ属として検出された花粉はイヌマキである可能性が高い。

マツ科

モミ属

モミ……

ウラジロモミ……②③

オオシラビソ……②③

アカトドマツ……②③

シラビソ……②③

モミ属として検出された花粉は、他の品種が高山種であるため、モミである可能性が極めて高い。

ツガ属

ツガ……

コメツガ……②③

カナダツガ……①④

ツガ属として検出された花粉は、ツガ以外の品種は、高山種。日本に自生しないものであるため、ツガである可能性が高い。

トウヒ属

イラモミ……②③④

アカエゾマツ……②③

エゾマツ……②③

トウヒ……②③

ヤツガタケトウヒ…②③④

ヒメバラモミ……②③

ハリモミ……②③

ヒメマツハダ……②③

オウシュウトウヒ…①④

トウヒ属は概ね高山種であるものが多くトウヒ属として検出された花粉は、どの樹種であるかは特定できない。一番可能性として高いものは、ハリモミである。（海抜400ｍ以上）

ニレ科

ケヤキ属

ケヤキ

ケヤキ属として検出された花粉は、樹種特定までされており、保存状態が良好であったと考えられる。

マツ属

アカマツ……

アカクロマツ……

クロマツ……

ゴヨウマツ……

ヤクタネゴヨウ……②③

チョウセンゴヨウ……②③

ハッコウダゴヨウ……②③

リュウキュウマツ……②

ハイマツ……②③

バンクスマツ……①②

エチナータマツ……①②

スラッシュマツ……①②

ヒマラヤゴヨウ……①②

タイワンアカマツ……①②

カイガンショウ……①②

ダイオウマツ……①②

リギダマツ……①②

ストローブマツ……①②

オウシュウアカマツ…①②

テーダマツ……①②

マンシュウクロマツ…①②

バージニアマツ……①②

マツ属として適正のあるものは、アカマツ、アカクロマツ、クロマツ、ゴヨウマツの４種類である。一般的に、アカマツは北方性でかつ内陸地方に多く、クロマツは南方性で海岸地方に多いため。マツ属として検出された花粉はクロマツである可能性が高い。

ブナ目

カバノキ科

ハンノキ属

ハンノキ……

ヤシヤブシ……

ケヤマハンノキ……②

タニガワアハンノキ…②③

ヤハズハンノキ……②③

ミヤマハンノキ……②③

ヒメヤシャブシ……②③

オオバヤシジャブシ…②

ハンノキ属として検出された花粉は、上記よりハンノキ、ヤシヤブキである可能性が高い。

ブナ科

コナラ属

アカガシ

ウバメガシ

コナラ

アラカシ

ハナガガシ

シラカシ

イチイガシ

ウラジロガシ

ツクバネガシ

クヌギ

ナラガシ

カシワ

ミズナラ

アベマキ

アカガシワ

コルクガシ

ピンオーク

コナラ属として検出された花粉は、樹種特定までされており、保存状態が良好であったと考えられる。

以上の検討結果とさらに、参考資料として、当遺跡北西約８kmに位置する山陽町南方前池遺跡の縄文時代晩期の貯蔵穴と包含層で採集された植物遺存体の分析結果[1]をふまえ導入樹種をシラカシ・ウバメガシ・エノキ・コナラ・トチノキ・アラカシ・アベマキ・イチイガシ・ケヤキ・ツガ・ハンノキ・アカマツの12種類の樹種とした。

配植（ゾーニング）

（高木）

遺構復元にあたり、史跡地が２本の溝により３つのゾーンに分かられる。ドングリ類を中心とした堅果樹木を中心とした食用樹種植栽ゾーン・農耕具や生活用具として利用された有用樹木を中心とした農耕具用樹種植栽ゾーン・住居の建築用材として利用された建築用樹種植栽ゾーンの３つのゾーンによって構成した。

ゾーニングは、南西入口付近から南側の植栽範囲の一番多いゾーンを食用樹種植栽ゾーン、北西入口付近を農耕具用樹種植栽ゾーン、竪穴住居が復元される北東付近を建築用樹種植栽ゾーンとした。（第63図）

（低木）

北・南のエントランス部分にサツキツツジとシモツケを植栽、エノキ・トチノキの植栽枡内にシモツケを植栽、遺跡地境界部分にヤマブキを生垣状に配植した。

（地被類）

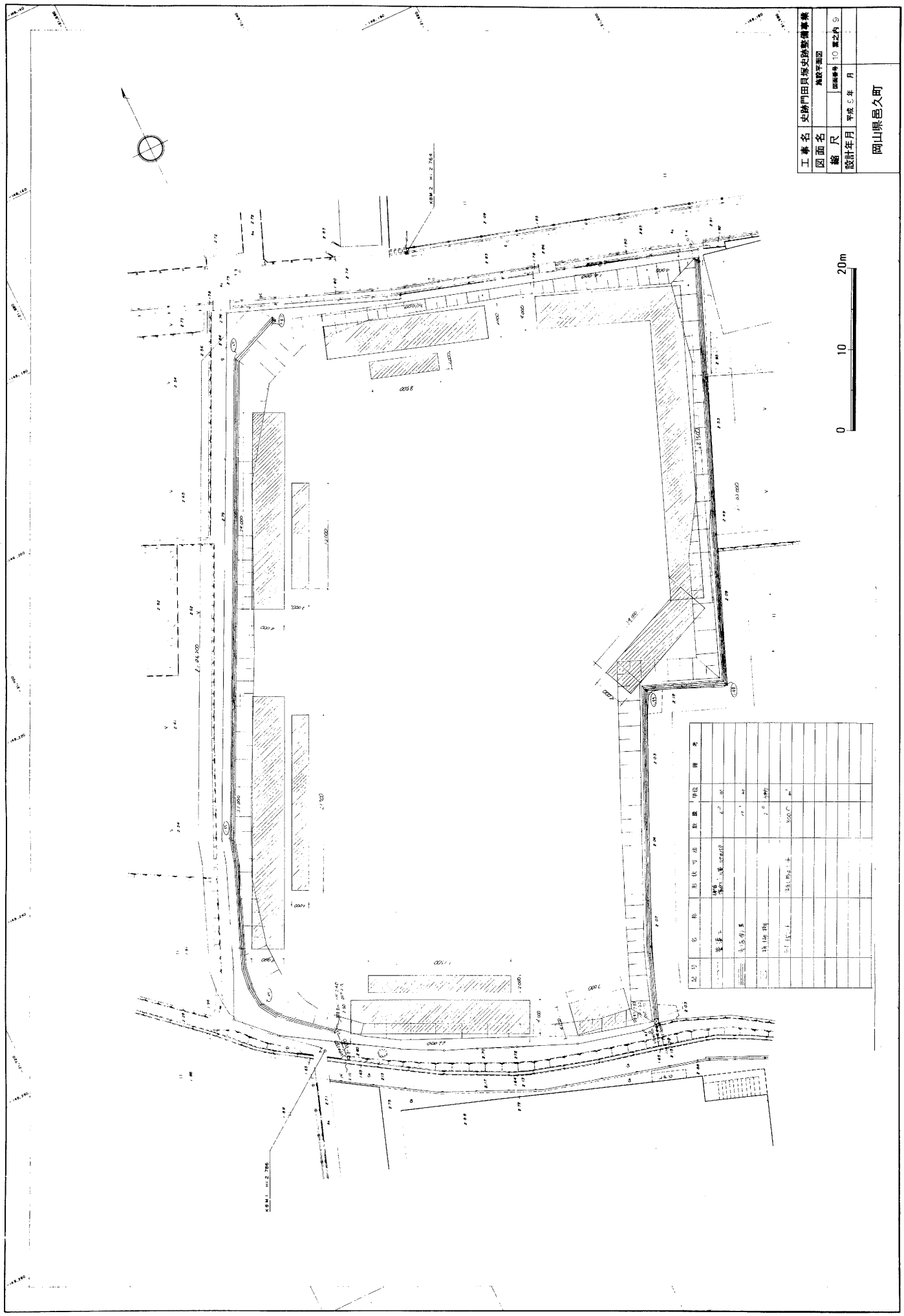
造成地北・西・南側の斜面部分に斜面土砂流出保護のため野芝を施した。

ゾーン別樹種分類表

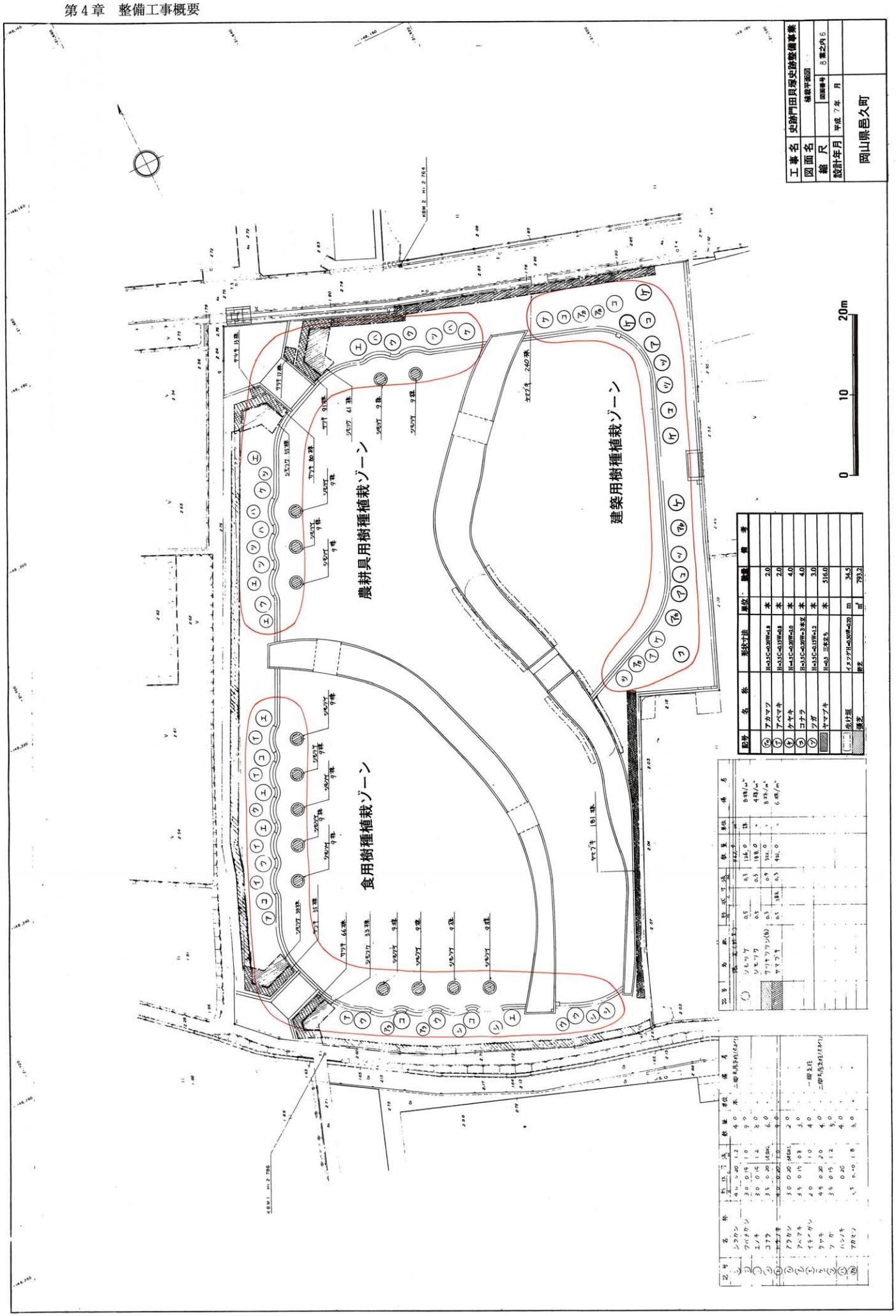
	常緑樹						落葉樹					
	シラカシ	ウバメガシ	アラカシ	イチイガシ	ツガ	アカマツ	エノキ	トチノキ	ハンノキ	ケヤキ	コナラ	アベマキ
食用	○	○	○	○			○	○		○	○	○
農耕具	○	○	○		○		○		○	○		
建築用材					○	○				○	○	○

註

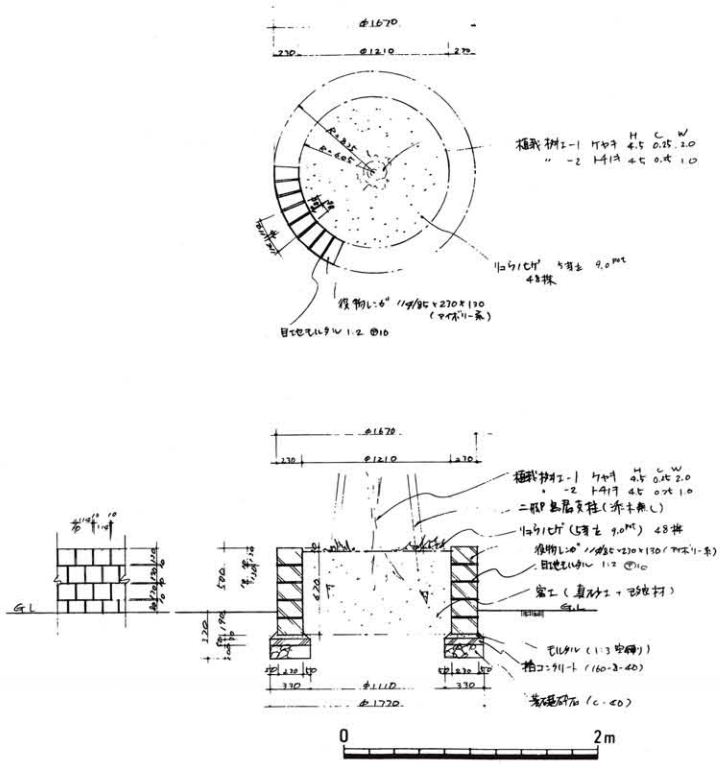
（１）三木　茂　「貯蔵穴内外の植物」　近藤義郎編『南方前池遺跡』―縄文時代木の実貯蔵穴の発掘―　山陽町教育委員会　1995



第62図　耐根シート設置平面図（1/600）



第63図　植栽平面図（1/600）



第64図　植栽桝平・断面図（1/60）

図版31

１．植栽桝完成状況（北東から）

２．パーク堆肥施肥混入状況

３．ケヤキ植栽状況

４．植栽桝植栽完成状況（北東から）

第５章　確認調査概要

第１節　調査経過

調査に至る経過

門田貝塚は、昭和８（1933）年の長瀬　薫氏による発見以降、昭和57（1982）年岡山県教育委員会の確認調査に至るまでの数次に亘る発掘調査により弥生時代前期前半から中世の遺物の出土や遺構の存在が確認されてきた。特に、貝塚から出土した多くの弥生時代前期後半の土器は「門田下層式」または「門田式」として命名・呼称され注目された。このことにより門田貝塚は、特に遺物中心に注目されてきた。遺構については、主となる弥生時代前期の遺構群と出土土器の広がりが、貝塚を伴う溝の東方、西方でも変わらず「三日月」形を呈する畑地全面に居住区が広がることが分かった。しかし、竪穴住居や井戸は検出はされず、居住地の中心部や環濠もしくは用水の可能性が指摘された数本の幅約４ｍに及ぶ大溝の性格や始点や末端についても不明であった。

『史跡門田貝塚環境整備基本計画・基本設計説明書』にも示されたように「弥生時代の門田ムラの復元」を基本テーマに貝塚・溝・住居の復元整備を図るため各遺構の規模・方向の資料を得るため平成４（1992）年度、史跡門田貝塚の環境整備事業として確認調査を実施することとなった。

調査の経過

（調査経過）

平成４（1992）年６月４日付けで岡山県教育委員会教育長から門田貝塚史跡整備事業の内定通知を受け、６月18日付けで文化庁長官あてに交付申請書を提出した。

その後、確認調査実施にあたり、平成４（1992）年10月１日付けで文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査通知を提出。併せて10月15日付けで文化庁長官あてに史跡現状変更許可申請書を提出した。調査期間については、平成４（1992）年10月26日～平成５（1993）年３月22日まで行った。

（調査区の設定）

貝塚・溝・竪穴住居の遺構確認調査には、過去の調査結果をふまえ当初全10ヶ所の調査区（トレンチ：略称Ｔ）を設定したが、調査段階で遺構検出状況により調査区の変更が生じ最終的に全９ヶ所（228.7㎡）の調査区となった。このため、計画段階でＴ９として設定した調査区は欠番となっている。

貝塚については、堆積状況の確認のため昭和41年調査区内にＴ６（27.7㎡）を設定した。溝については、昭和57年調査結果から溝１（ＳＤ06）と溝２（ＳＤ03）の規模、方向の確認を目的として溝１にＴ４（20.0㎡）・Ｔ５（21.9㎡）・Ｔ７（30.0㎡）・Ｔ８（51.7㎡）を設定し、溝２にＴ７（30.0㎡）・Ｔ８（51.7㎡）。Ｔ10（22.5㎡）を設定した。竪穴住居については、従来の調査において弥生時代前期の住居の検出がなく新たに竪穴住居を検出する期間もないため、昭和41年調査区内に一部重複し竪穴住居の完掘による平面構造確認を目的にＴ３（48.9㎡）を設定した。さらに、環境整備や周辺整備計画にあたり地下構造を把握するためＴ１（1.1㎡）・Ｔ２（4.9㎡）を設定した。

（調査の方法）

遺構の掘り下げは、最低限での面積や遺構の破壊を極力避けることとしたが、重層的な遺構状況から弥生時代前期の遺構検出でやむなく上層遺構の記録した後、掘り下げを行った。特に大溝の堆積状況や形状を確認するため必要な調査区では、一部を下層まで掘り下げた。また、土壙・柱穴の一部は半裁し時期推定の手掛かりとした。

（発掘作業協力者：敬称略）

大河原成善・梶原君子・川口保子・黒田弘子・土屋静子・福島　馨・真黒嘉代子・政田佑子・六車藤吉・森岡清士

（遺物実測協力者：敬称略）

仲井光代・大久保雅子

現地での電気使用では史跡地東隣の三宅昭博氏のご協力を賜った。

（調査体制）

確認調査は平成４年度国庫補助事業として、文化庁、岡山県教育委員会、邑久町文化財保護委員会、史跡門田貝塚史跡整備委員会の指導、助言を受けながら邑久町教育委員会（調査担当：馬場昌一）が実施した。

（日誌抄）

平成４（1992）年

10月26日（月）

邑久幼稚園内に発掘調査調査の器材置き場としてテントを設置。また、史跡地内に作業員休憩用テントを設置し器材の搬入。発掘区（Ｔ４・５・６）の設定作業。

10月27日（火）～30日（金）

発掘区（Ｔ４・５・６）の発掘調査を開始する。基準杭及び測量用レベルの設定作業を行う。Ｔ６の西端部で、昭和41（1966）年調査の貝層断面部分の一部を確認する。

11月２日（月）～６日（金）

発掘区（Ｔ５・６）の遺構検出作業。Ｔ６で溝１（ＳＤ06）の北端部を確認する。

11月10日（火）～13日（金）

発掘区（Ｔ４・５・６）の掘り下げ作業。Ｔ６で溝１（ＳＤ06）の南端部を確認し、北側端部と南側端部の幅は520cmを測った。Ｔ５で溝１（ＳＤ06）の東端部と考えられる落ちを確認し、西側に調査区を拡張する。４層において古墳時代前半の土器だまりを検出。写真撮影。遺構実測。

11月16日（月）～19日

Ｔ５の土器だまり土器実測、溝１（ＳＤ06）の西端部を確認し、幅を480cmと測る。発掘区（Ｔ７）を設定し遺構検出作業。11月16日・19日邑久小学校６年生約100名、調査状況の見学とＴ６の貝塚埋土掘下げ体験。11月18日、文化庁文化財調査官加藤允彦氏来跡、現地指導を受ける。11月19日、邑久小学校教諭約20名見学。

11月24日（月）～11月27日（金）

Ｔ４の４層で小型丸底壺の集中する土器だまりを検出し、写真撮影。実測作業。Ｔ６の貝層埋土

掘り下げ作業。Ｔ７の東端部で溝１（ＳＤ06）と考えられる西端部を確認する。11月24日、邑久小学校６年生約30名見学。

11月30日（月）～12月４日（金）

Ｔ４の小型丸底壺の集中する土器だまりの実測と取り上げ。Ｔ７の古代の井戸状遺構検出、実測。

発掘区（Ｔ10）を設定し、遺構検出作業。12月１日、裳掛小学校６年生約30名見学。

12月８日（火）～10日（木）

Ｔ４で溝１（ＳＤ06）と考えられる平面プランを確認する。Ｔ10の遺構検出作業。

12月15日（火）～18日（金）

Ｔ４の遺構全体実測。Ｔ８遺構検出作業。Ｔ10で奈良時代掘建柱建物柱穴、溝１（ＳＤ06）の北側端部を検出。12月15日、史跡門田貝塚史跡整備委員会を開催、調査方法・調査区の設定について助言を受ける。

12月21日（月）～25日（金）

Ｔ６の貝塚埋土掘り下げ。Ｔ８東側へ調査区を拡張し溝１検出作業。Ｔ10で溝２（ＳＤ03）の平面プランを確認。遺構実測。

平成５（1993）年

１月８日（金）

Ｔ６の貝塚埋土の掘り下げ。Ｔ８で溝２（ＳＤ03）の東側端部を検出するため、調査区を拡張。

１月11日（月）～16日（土）

昭和37年（1962）調査で検出された弥生時代後期の竪穴住居を確認するためＴ３を設定。Ｔ６の貝塚埋土掘り下げ作業を行うが、下層からの湧水のため作業難航するがほぼ貝層の下層まで検出する。Ｔ８で溝２（ＳＤ03）の両端部をほぼ確認する。

１月18日（月）～21日（木）

Ｔ３の掘り下げ作業。Ｔ６の貝層断面及び溝１（ＳＤ06）の断面を検出し全体写真撮影、実測。Ｔ８の全体写真撮影。

１月25日（月）～30日（土）

Ｔ３で竪穴住居１の平面プランを検出し、全体の写真撮影。Ｔ６の貝塚断面の清掃作業、写真撮影。貝層の下層で前期土器片が集中して出土する。１月29日、邑久中学校生徒17名見学。１月30日、史跡門田貝塚史跡整備委員会を開催し現地指導を受ける。

１月31日（日）

Ｔ６の貝層断面図作成。

２月１日（月）～６日（土）

Ｔ６の貝層断面の剝ぎ取り作業。Ｔ３・５・８遺構検出作業、写真撮影、実測作業。Ｔ８の溝１（ＳＤ06）の底部を検出。

２月８日（月）～２月19日（金）

Ｔ３で竪穴住居１全体プラン検出。５層包含層中より磨製石鏃出土。Ｔ５の溝１（ＳＤ06）の掘り下げ作業、全体写真撮影。Ｔ10の溝２（ＳＤ03）の掘り下げ作業。発掘区（Ｔ１・２）を設定する。２月19日、文化庁文化財調査官井上和人氏来跡。

２月23日（火）～27日（土）

Ｔ１・２の掘り下げ作業。Ｔ３の竪穴住居２プラン検出。史跡全体の写真撮影。

２月27日、現地説明会を開催約120名見学。

３月２日（火）～５日（金）

Ｔ２・５埋め戻し作業。Ｔ３竪穴住居１土層断面実測。Ｔ８の溝３掘り下げ、土層断面実測。

３月８日（月）～11日（木）

Ｔ３竪穴住居１全体プラン検出。Ｔ10の溝２（ＳＤ03）完掘、土層断面実測、写真撮影、埋め戻し作業。

３月16日（火）～19日（金）

Ｔ３竪穴住居１完掘、実測、写真撮影。Ｔ６・８埋め戻し。

３月22日（月）

Ｔ６埋め戻し完了。器材を撤収し確認調査の全工程を終了する。

図版32

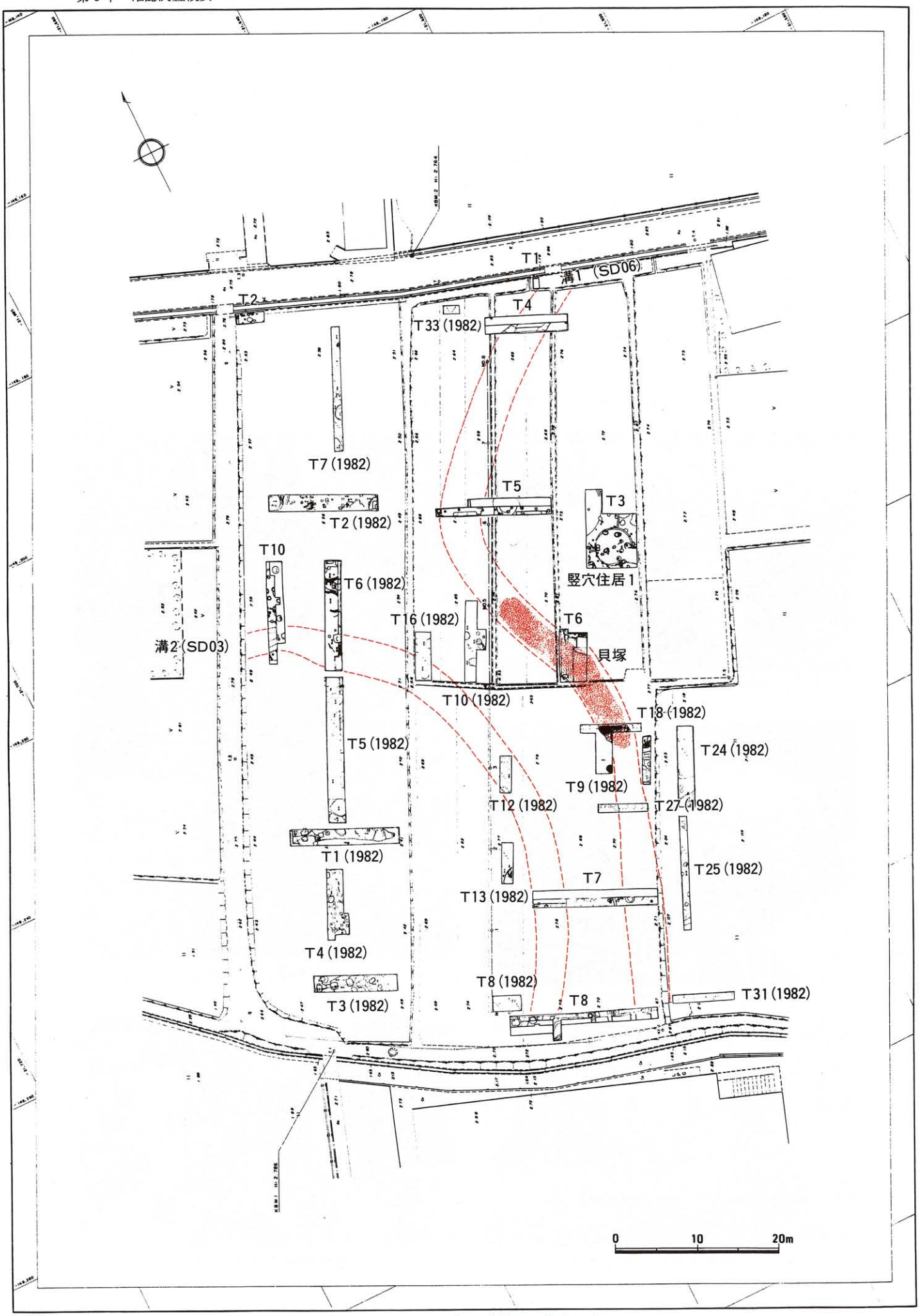
１．現地指導状況

２．Ｔ６貝塚調査状況

４．調査作業員のみなさん

３．Ｔ10調査状況（南から）

５．現地説明会状況（西から）



第65図　発掘調査区全体図（1/600）

第２節　調査区の概要

Ｔ１（第66図）

史跡指定地の北端で農業用水に接し、この農業用水に蓋掛けし町道を拡幅する周辺整備計画もあり遺構確認のため設定した調査区（1.1㎡）である。上層の基本的層序と遺構の有無について確認したが、３層は、用水のコンクリート壁が整備されるまでは、用水の川掘り時の土砂置き場として使用されており攪乱を受けていた。以下はＴ４と同様な層序を示した。史跡周辺整備計画予定の深さまで掘り下げたが遺構は確認されなかった。

Ｔ２（第67図）

史跡地北西隅で史跡地内への通路としての床板工に伴い地下遺構の状況について確認するため設定した調査区（4.9㎡）である。農業用水の壁側約50㎝幅では壁の裏込めとして長さ40～50㎝の破礫が詰め込まれていた。表土から約１ｍで基盤面に達し、柱穴・土壙を検出した。６層は弥生時代後期の土器を含む包含層である。７層は弥生時代の包含層を切り込む中世の溝状遺構であろう。

Ｔ３（第68図）

今回の環境整備事業で遺構復元を計画している竪穴住居の基本データを得るため設定した調査区（48.9㎡）である。昭和41（1966）年調査時一部確認されていた竪穴住居１（Ｊ住居）の全体プランを検出し、規模、柱穴数を確認した。

さらに、竪穴住居１の北側約１ｍで竪穴住居２を検出した。規模を確認するため調査区を北側に拡張すると竪穴住居２の外側に壁体溝が確認され２度以上の建て直しが行われたものと思われる。推定直径は約８ｍに及ぶ。覆土内には焼土、炭片を多量に含み焼失住居と考えられる。時期については、住居内の調査をしていないが、プラン検出時、弥生時代中期中葉の土器が出土している。

この調査区は面的に調査したためか遺構の密度が高く、時期も弥生時代を中心としている。

Ｔ４（第69図）

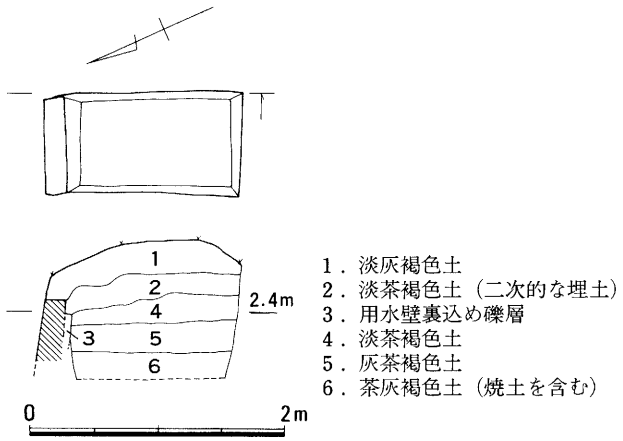
Ｔ５の北側20ｍの史跡地北側で、溝１（ＳＤ06）を確認するため設定した調査区（20.0㎡）である。調査区中央やや西寄りで５層を掘込む形で小型丸底壺を中心とする約20数点の土器群を検出した。土器群は幅約１ｍの不正円形の土壙内にやや浮いた状況で出土した。時期は古墳時代前半に比定される。

溝１（ＳＤ06）は、調査区の中央部で東西の肩部分を検出した。基盤面での幅は約4.1ｍを測る。断面観察によると溝の断面形は緩やかな肩部分から底部分へかけてやや角度をもつことが確認できた。遺物は弥生時代前期後半の土器が中心とするが、上層において弥生時代中期初頭に比定される土器も出土し溝の埋没時期を伺わせる。貝層面は検出しなかった。

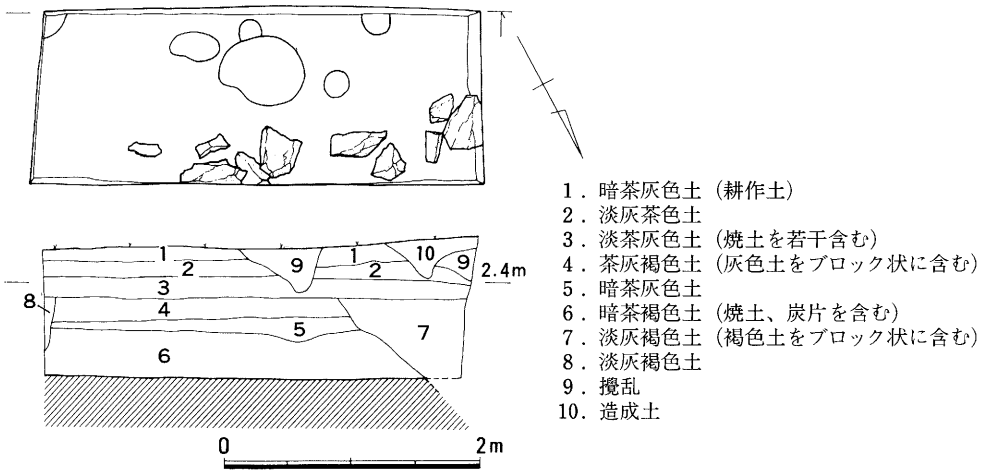
Ｔ５（第70図）

Ｔ５は、溝１（ＳＤ06）の方向を追求するため、昭和57（1982）年岡山県教育委員会調査のＴ32とＴ14の間に設定した調査区（21.9㎡）である。調査区の中央部で平面プランが円形で径約4.0ｍ、深さ約35㎝を測る土壙を検出した。土壙内には小柱穴群が認められる。出土遺物から時期は中世である。また中世の掘立建物の柱穴群が検出された。第８層では完形の甕形土器を含む古墳時代前半の土器だまりが認められた。

調査区西側で溝１（ＳＤ06）のプランを検出したため西へ調査区を拡張し西端で溝の肩部を検出し



第66図　Ｔ１平・断面図（1/60）



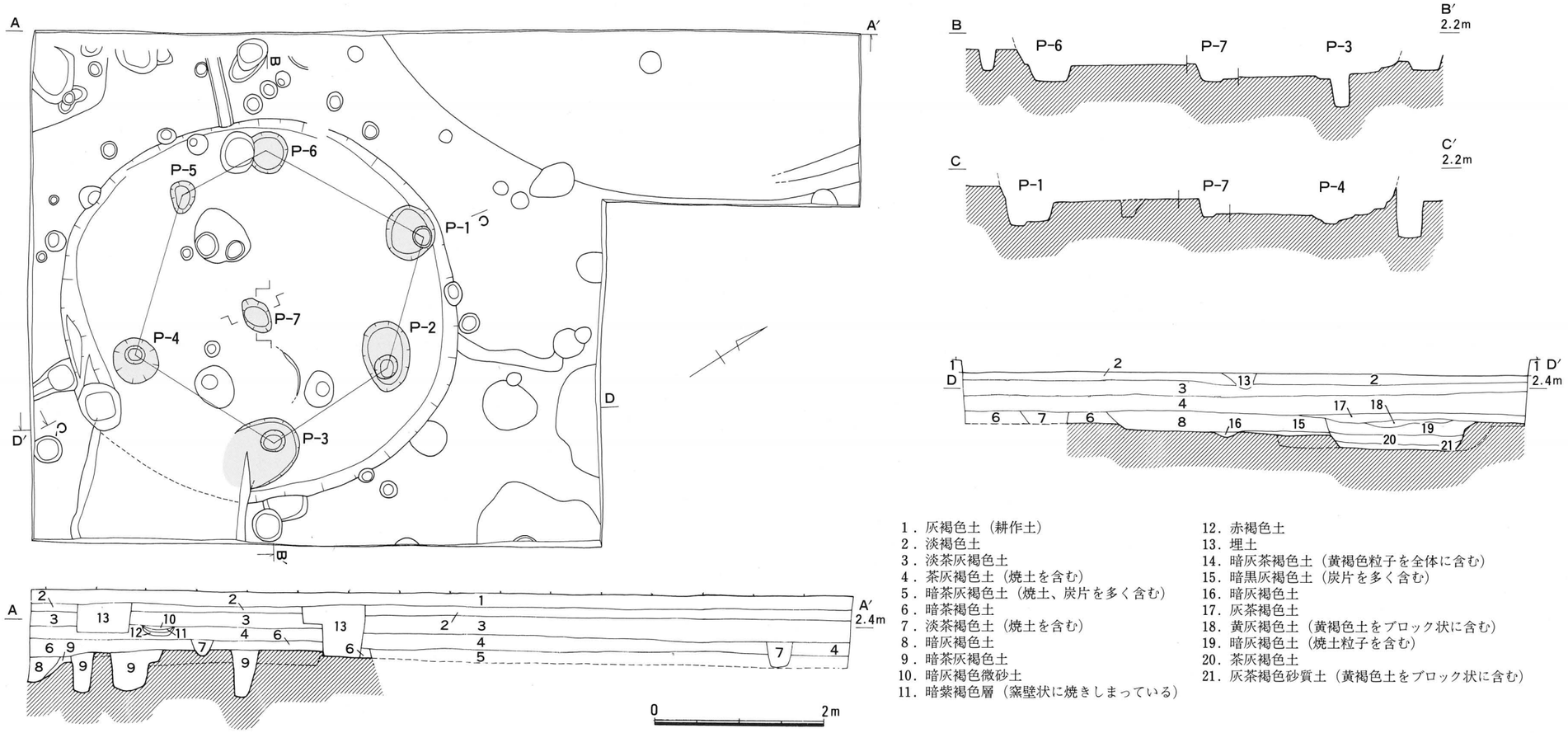
第67図　Ｔ２平・断面図（1/60）

た。検出した溝１は、蛇行する溝の曲折部分にあたり西側の断面が間延びし左右同様の溝の断面形を示さないが、緩やかな弧を描くＵ字溝で溝底部分は一段深くなっている。溝幅は約5.0m、深さ約1.1mを測る。遺物は弥生時代前期後半の土器を中心とする。貝層面は検出しなかった。

Ｔ６（第71図）

Ｔ６は、昭和25（1950）年長瀬　薫氏による第５次調査の中心部である。その後、昭和41（1966）年の発掘調査により貝塚貝層の形成状況が明らかにされた地点にあたる。貝塚の断面確認を主とし、また、貝層断面の転写加工資料を得るために設定した調査区（27.7㎡）である。地番では字門田224番地と字門田221番地の土地境部分にあたる。

貝塚・溝１（ＳＤ06）に対して斜めに断面を確認することになったが、昭和41（1996）年調査時と同じ溝１の規模と共に溝１を埋めて形成した貝層を検出した。溝１は幅約5.0m、深さ約1.2mを測る。貝塚は、溝１底部が砂質土で堆積が行われた後、ハイガイを中心とし数次の貝層形成段階を経て、溝の中央部は厚さ約1.1mに及び盛り上がる程の最終堆積を示す。Ｔ６を中心にボーリング調査の結果、溝１直上までの貝塚の形成範囲はほぼ南北方向に長さ約23m、幅2.5～3.0mを測った。



第68図　Ｔ３竪穴住居１平・断面図（1/60）

Ｔ７（第72図）

Ｔ７は、溝１（ＳＤ06）と溝２（ＳＤ03）の流路確認のため、昭和57（1982）年調査区であるＴ13とＴ25の間に設定した調査区（30.0㎡）である。

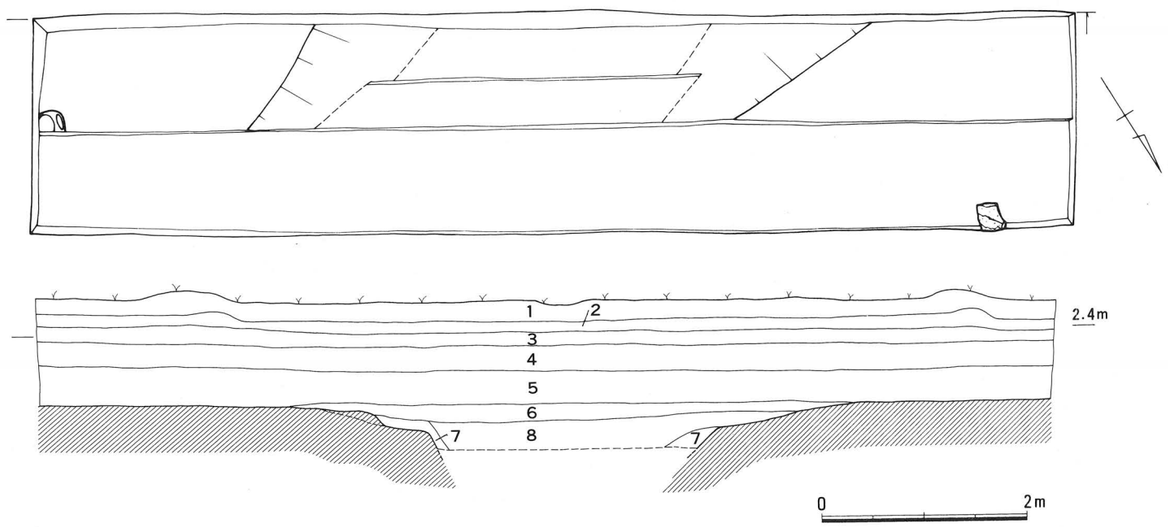
調査区東端部で溝１の西掘方を検出し、緩やかなＵ字を描く断面を確認した。東肩は指定地外に想定される。溝２は調査区西寄りで掘方を検出した。断面は緩やかなＵ字形を示し、幅は約2.7ｍを測った。溝１・２共平面的な位置確認のため底部分までは掘り下げなかったため深さについては不明である。調査区中央部で、二次焼成を受けた握り拳大の川原石と共に須恵器杯片を含む井戸と考えられる遺構を検出した。検出面での平面プランは円形で径約3.6ｍを測る。時期は古代に比定される。さらに、溝２の上層において炭材や焼土、地床炉的な焼土の集中した箇所を検出した。断面から竪穴住居の可能性が考えられる。出土した土器から弥生時代末から古墳時代初頭の時期に比定される。

Ｔ８（第73図）

Ｔ８は、Ｔ７と同様溝１（ＳＤ06）と溝２（ＳＤ03）の流路確認のため、昭和57（1982）年調査区であるＴ11とＴ31の間でＴ８の南側に設定した調査区（51.7㎡）である。

溝１・２の検出に伴い上層において中世の建物柱穴や弥生時代の小ピットが多数検出され溝の平面

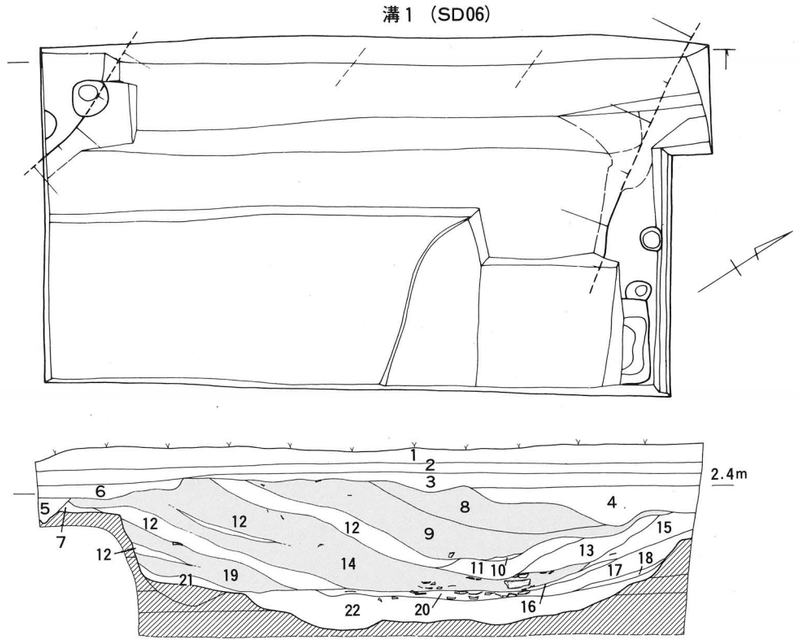
溝１（SD06）



第69図　Ｔ４平・断面図（1/60）

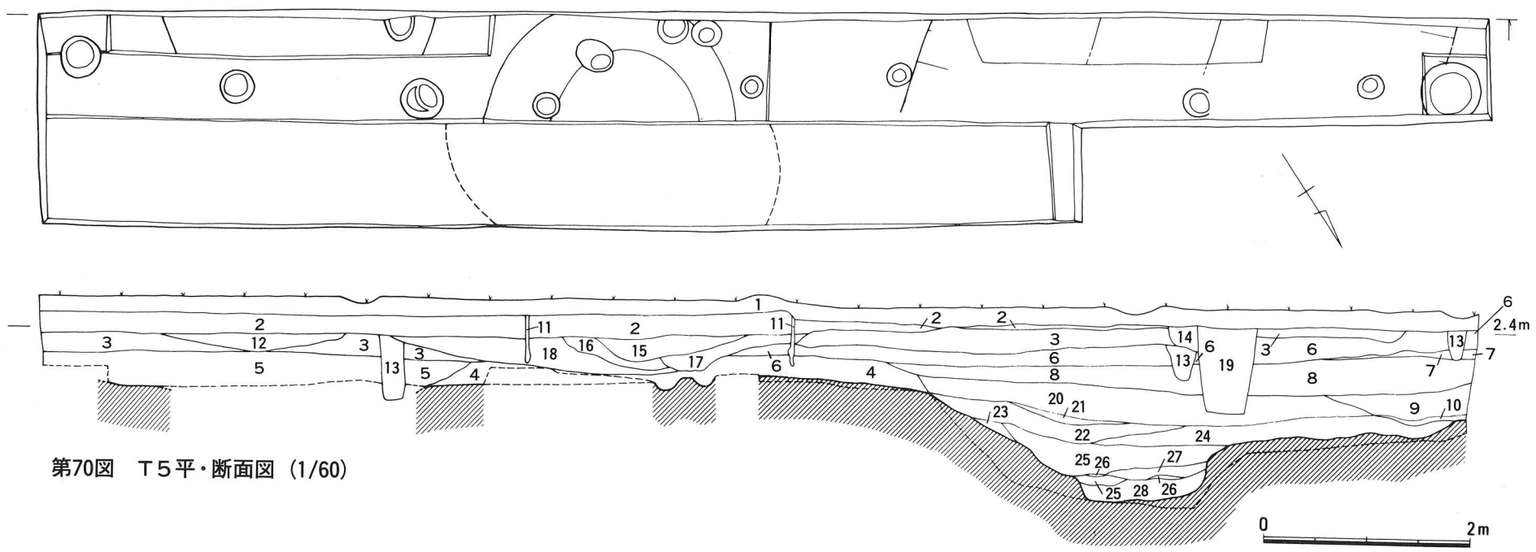
１．淡灰褐色土（耕作土）
２．淡褐色土
３．灰茶褐色土（焼土を若干含む）
４．淡灰茶褐色土
５．茶褐色土
６．灰茶褐色微砂質土
７．黄灰色微砂質土（基盤土を含む）
８．淡灰茶色微砂質土（砂質がやや強い）

溝１（SD06）



第71図　Ｔ６貝塚平・断面図（1/60）

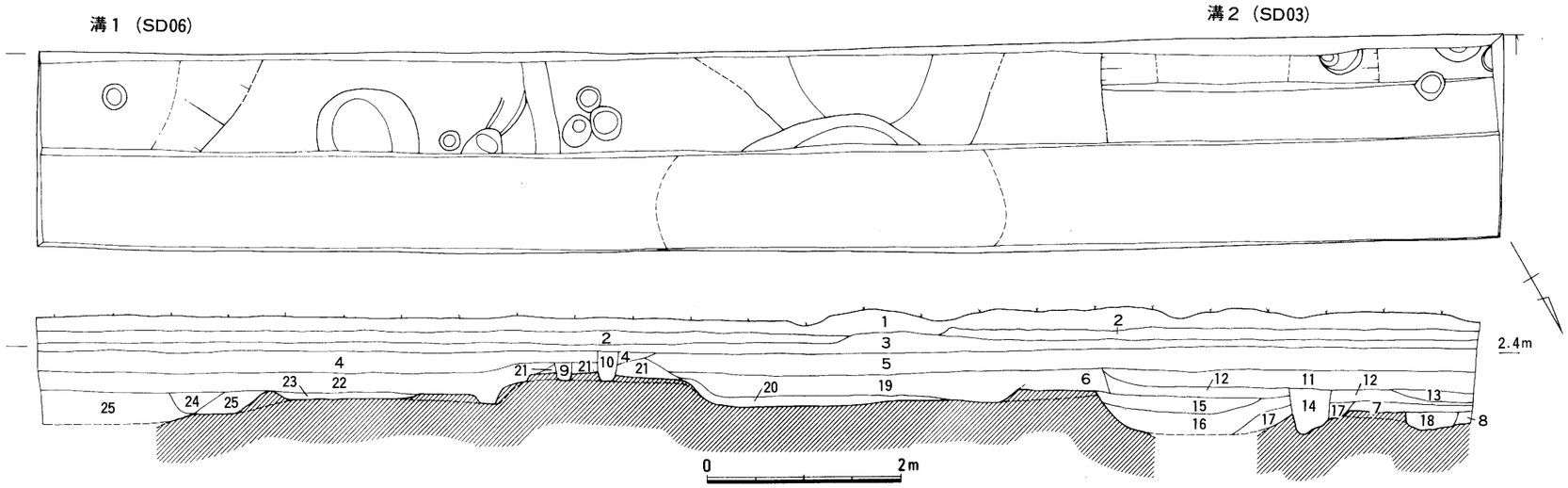
溝１（SD06）



第70図　Ｔ５平・断面図（1/60）

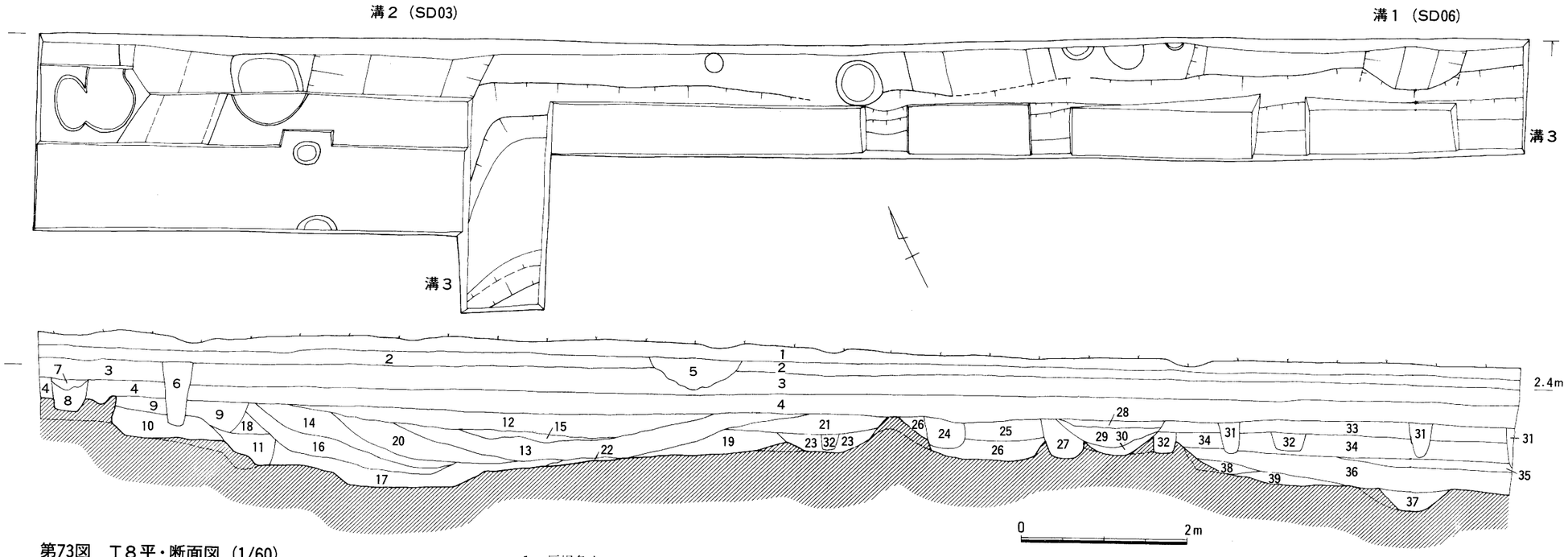
１．灰褐色土
２．淡褐色土
３．淡灰褐色微砂土
４．茶灰褐色微砂土（焼土粒子を全体に含む）
５．暗茶灰褐色土
６．暗灰褐色土
７．茶褐色粘質土
８．暗茶灰褐色混土貝層（貝の密度の高い箇所が部分的にあり、炭・焼土を含む）
９．暗赤茶褐色貝層（第３次貝層。下層に土器片の集中が見られる。炭・焼土粒子を全体に多く含んでいる）
10．黄灰褐色粘質土（黄褐色粘質土をブロック状に含む）
11．暗黄茶灰色粘質微砂土（黄褐色粘質土をブロック状に含み、炭・焼土片を含む）
12．赤褐色粘質土（炭・焼土を多く含む）
13．黄茶褐色粘質微砂土（下層で比較的大きな焼土・炭片を含む）
14．暗茶灰褐色貝層（第２次貝層。第３次貝層に比べ赤褐色が少なく黒っぽい、下層で多量の土器片を含んでいる）
15．暗灰褐色土（焼土・炭片を全体に含む）
16．黒灰色炭層
17．茶灰褐色粘質土
18．暗灰色粘質土
19．暗赤茶灰褐色貝層（第１次貝層。貝層は第２・３次貝層と比べ密でない。下層において炭・焼土を多く含む）
20．暗灰色粘土（多量の土器片を含む）
21．茶褐色粘質土
22．暗黄灰色粘質微砂土（粘性が高く、炭片・灰色粘土を部分的に含む）

１．灰褐色土
２．淡茶灰褐色土
３．暗灰色土
４．茶灰褐色土
５．暗茶褐色粘質土（焼土・土器片を含む）
６．茶灰色土
７．淡茶褐色土
８．暗茶灰褐色土（焼・炭片を含む）
９．暗灰褐色粘質土（焼土・炭片を含む）
10．暗灰色粘質土（焼土・炭片を多く含む）
11．淡灰褐色土
12．灰茶褐色土（焼土を若干含む）
13．淡灰褐色微砂土
14．灰褐色土
15．暗灰色微砂土（焼土・炭を全体に含む）
16．淡茶灰色土
17．暗灰茶色土
18．灰茶褐色土
19．埋土（T32(1982調査区)埋土）
20．暗灰褐色土（焼土を含む）
21．暗灰褐色微砂土
22．黄灰褐色微砂土（黄褐色土をブロック状に含む）
23．黄灰色土
24．灰茶褐色微砂土
25．灰茶褐色粘質土（炭片を若干含む）
26．黄灰茶色粘質土
27．青灰色粘質土
28．暗灰色粘土



第72図　Ｔ７平・断面図（1/60）

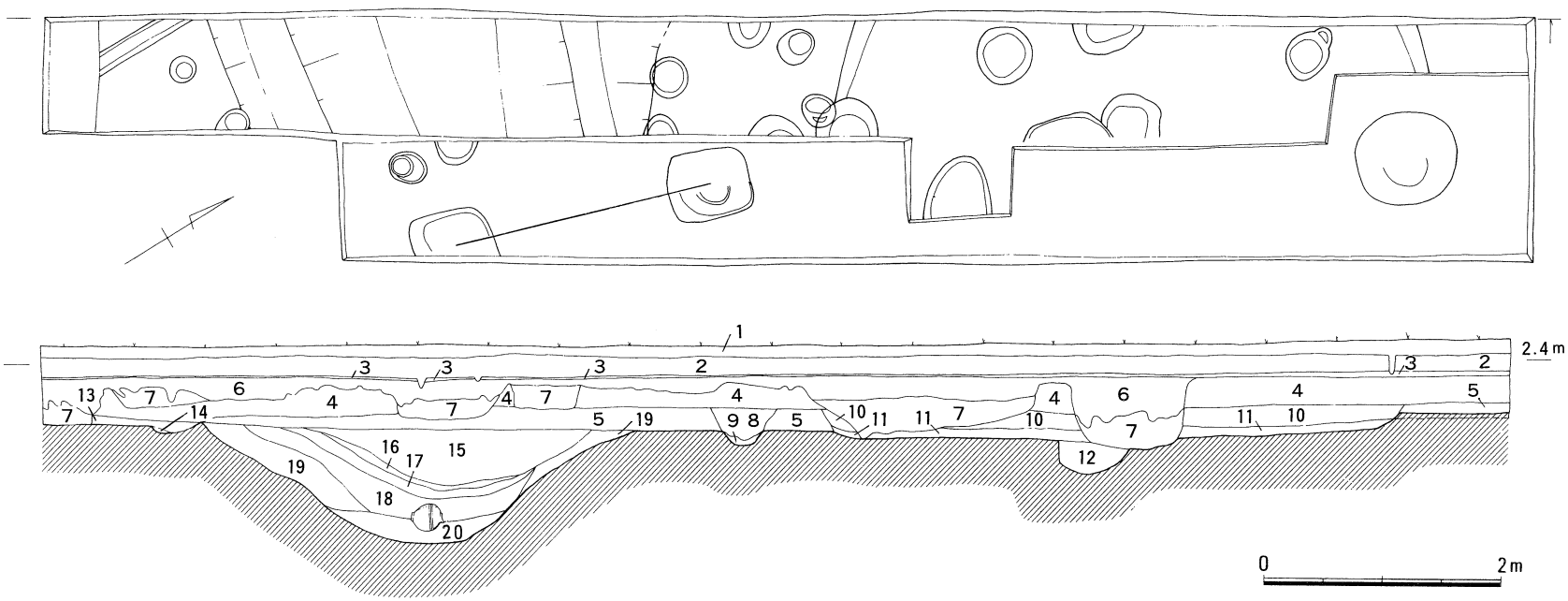
1．灰褐色土
2．淡褐色土
3．淡茶褐色土
4．暗灰茶褐色土（焼土を含む）
5．暗茶灰褐色土
6．暗茶褐色土
7．暗黄灰色土
8．暗灰黄色土
9．黄灰色土
10．淡灰色土
11．暗灰褐色土（焼土を多く含む）
12．暗茶褐色土（炭片・焼土塊を含む）
13．暗赤褐色土（焼土塊をブロック状に含む）
14．暗茶褐色粘質土
15．暗灰褐色土
16．灰褐色砂質土
17．灰茶褐色砂質土
18．暗黄灰色微砂土
19．暗灰茶褐色土（焼土を含む）
20．暗黄灰色土（基盤土をブロック状に含む）
21．淡黄灰色土
22．暗灰茶褐色土（焼土を含む）
23．淡黄灰色土
24．暗灰色粘質土
25．暗灰茶色微砂土（土器片を含む）



第73図　Ｔ８平・断面図（1/60）

1．灰褐色土
2．淡褐色微砂土
3．暗灰褐色土
4．暗茶褐色土（焼土・炭片を全体に含む）
5．攪乱層
6．淡茶褐色微砂土
7．灰褐色微砂土
8．暗灰褐色土
9．暗灰褐色土（炭片を含む）
10．淡黄灰色砂質土
11．暗黄灰褐色粘質土（基盤土をブロック状に含む）
12．暗茶褐色粘質土（焼土・炭片を多く含む）
13．暗灰褐色粘質微砂土（炭片を含む）
14．茶褐色微砂土（下層は砂質が強い）
15．黄灰褐色微砂土（黄褐色土粒子を含む）
16．黄褐色粘質微砂土
17．青褐色粘質土（粘性が強い、土器片を含む）
18．黄灰色微砂土
19．黄灰褐色微砂土（黄褐色土粒子を全体に含む）
20．黄灰茶褐色土（基盤土をブロック状に含む）
21．暗茶灰褐色土
22．黄灰褐色微砂土
23．淡灰色土層（黄褐色土粒子をブロック状に含む）
24．灰茶褐色土（焼土片を含む）
25．灰褐色土
26．黄灰褐色土（黄褐色土粒子をブロック状に含む）
27．暗灰茶褐色粘質土（黄褐色土・焼土を含む）
28．暗灰褐色土
29．灰褐色粘質土
30．黄灰褐色粘質土（基盤土をブロック状に含む）
31．暗茶褐色土
32．灰茶褐色土
33．暗褐灰色土（焼土・炭片を含む）
34．黄茶灰褐色土（焼土を多く含む）
35．黄茶灰褐色土
36．淡灰褐色微砂土
37．淡黄灰褐色粘質微砂土
38．黄灰褐色土（黄褐色土粒子をブロック状に含む）
39．暗灰茶色粘質土

溝2（SD03）



1．黄茶褐色真砂土（造成土）
2．淡灰茶色土
3．淡茶灰褐色土（焼土を全体に含む）
4．茶褐色土（焼土を含む）
5．茶褐色土（焼土を含む）
6．淡灰茶色土
7．暗茶灰褐色土（灰色土をブロック状に含む）
8．暗黄茶褐色土
9．黄灰茶色土（基盤土をブロック状に含む）
10．暗灰茶褐色土
11．暗灰茶褐色土
12．暗茶灰褐色土
13．暗黄灰褐色土（焼土を多く含む）
14．黄灰褐色土
15．暗灰褐色微砂土（焼土・炭片を含む）
16．暗黄灰褐色粘質土（黄褐色土を多く含む）
17．暗赤茶褐色粘質土（焼土・炭片を多く含む）
18．茶灰茶褐色土
19．黄灰茶褐色土（黄褐色土をブロック状に含む）
20．灰褐色粘質土（炭片を全体に含む）

第74図　T10平・断面図（1/60）

的なプラン検出が難しく、土層断面を中心とした調査となった。

溝１は、調査区の東端部において溝底部を検出した。上層は溝１に対して直交する形で、今回の確認調査で新たに検出した溝３により削平を受けている。溝２は、溝１から約15m西で検出した。断面は緩やかなＵ字の弧を描き、底部分についてはさらに一段深く掘り込まれている。中層の黄褐色粘質微砂土層が西から東にかけて流れ込む形で堆積しており溝の埋没状況が伺える。幅約4.0m、深さ約1.0mを測る。

溝３は、調査区の南半分で基盤面を掘り込んだ北側溝肩を検出した。南側の溝肩については調査区外に及んでいる。溝３は、溝２と切り合うことなく溝２の手前で流路を南西側に替えている。流路変換部分での幅は約2.5mを測る。調査区東端部で溝底部の断面から溝１・２と同様に緩やかなＵ字形を呈した。土層観察から溝２を溝５が削平しているようである。遺物としては、弥生時代前期後半の土器が出土している。溝の流走方向については、流路変換部分で溝底部と調査区東端部での溝底部を検出し海抜差は、東側が約20cm低いことから西から東への流れが考えられる。

他の遺構として溝２を一部切り込み平面プランが円形で、径約0.9m、深さ約1.4mを測る井戸を１基検出した。遺物として口縁部が「く」の字で外面に平行タタキを施す甕形土器、壺形土器が出土した。時期として古墳時代前半に比定される。

Ｔ10（第74図）

Ｔ10は、昭和57（1982）年調査で検出されていたＳＤ03の流路確認のため（1982）調査区Ｔ６の西側に設定した調査区（22.5㎡）である。溝２は調査区の南端部で北肩部を検出したが南肩部については調査区外であったため拡張区を設けプランを確認した。調査区でほぼ溝２に直交する形でプラン・断面を観察することができた。溝の幅は約3.7m、深さ約1.0を測る。断面は溝底まで緩やかな弧を描くＵ字形溝であることが確認された。遺物としては、下層近くでほぼ完形の弥生時代前期後半の壺形土器をはじめ多くの土器片と共に磨製石包丁・石鏃等の石器が出土した。

他の遺構としては、（1982）調査で検出された奈良時代の大規模な掘立柱建物の一部を構成すると見られる遺構と同様な隅丸方形の掘方を持つ柱穴列を検出した。柱どおりは（1982）調査区Ｔ４のＳＢ02と同様の南北を示し、柱間心心距離は2.2mを測る。

第３節　遺構の概要

貝塚

Ｔ６で確認した貝塚断面から、貝塚は溝１（ＳＤ06）が掘削されて比較的早い段階で下層部分の暗灰褐色粘質砂質土による埋没後形成されていったもので第１次貝層や第２次貝層内でいくつかの赤褐色土の堆積が見られるが、大きく２条の赤褐色土層により３分されている。貝殻の堆積状況から第１次・第２次の貝殻投棄方向は、西から溝内に投棄している様相を呈した。第３次貝層の最終堆積面は従来の調査見知と同様に局部的に小マウンド状を呈した。貝塚を形成する貝は、ほとんどが大型のハイガイで他にシジミ・カキ・ハマグリ・アカニシなどである。遺物の中心である多量の弥生時代前期後半の土器は、第２次貝塚形成前の溝中央部分である暗灰色粘土層に集中しており出土遺物の半数以上を占めている。

溝１（ＳＤ06）

溝１（ＳＤ06）は、門田貝塚の名称となっている貝塚が形成された溝であり、今回の調査と従来の調査結果から溝の流路をほぼ確認することができた。これによると、Ｔ４からＴ５をとおりＴ６にかけて西に弧を描き、Ｔ７をとおりＴ８にかけて東に弧を描き南に流走する方向が想定される。溝の規模は、調査区でやや異なるが、幅約4.0～5.0ｍ、深さ約1.2～1.4ｍを測る。断面形態は、緩やかなＵ字形を呈し、溝底部は一段深くなっていた。出土遺物は、弥生時代前期後半の土器が中心で、獣骨・磨製石包丁・打製石包丁・石鏃等が出土した。Ｔ４の溝上層部で弥生時代中期初頭に比定される土器が出土しており溝の埋没時期が想定される。

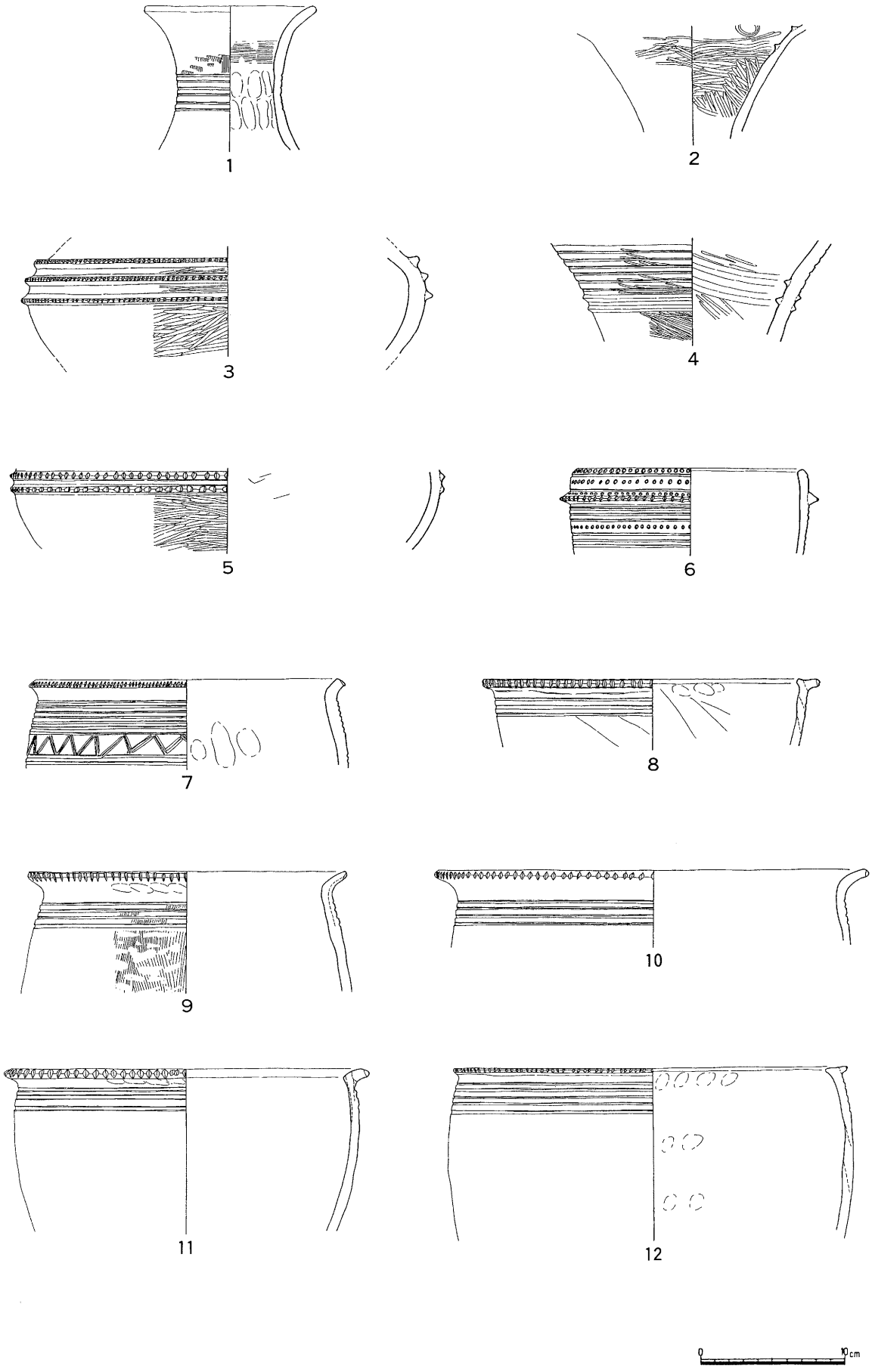
溝２（ＳＤ03）

溝２（ＳＤ03）は、昭和57（1982）年調査で検出されていたＳＤ03でＴ10・７・８で溝の流路を検出した。この結果、約80～90ｍの円弧を描く環状を呈した。溝の規模は、調査区でやや異なるが、幅約2.0～4.0ｍ、深さ約1.0ｍを測る。断面形態は、溝１と同様、緩やかなＵ字形を呈し、溝底部は一段深くなっており、溝底面は平坦である。出土遺物は、甕形土器のヘラ描き沈線の多条化が著しい弥生時代前期後半の土器が中心で、獣骨・磨製石包丁・石鏃等が出土した。

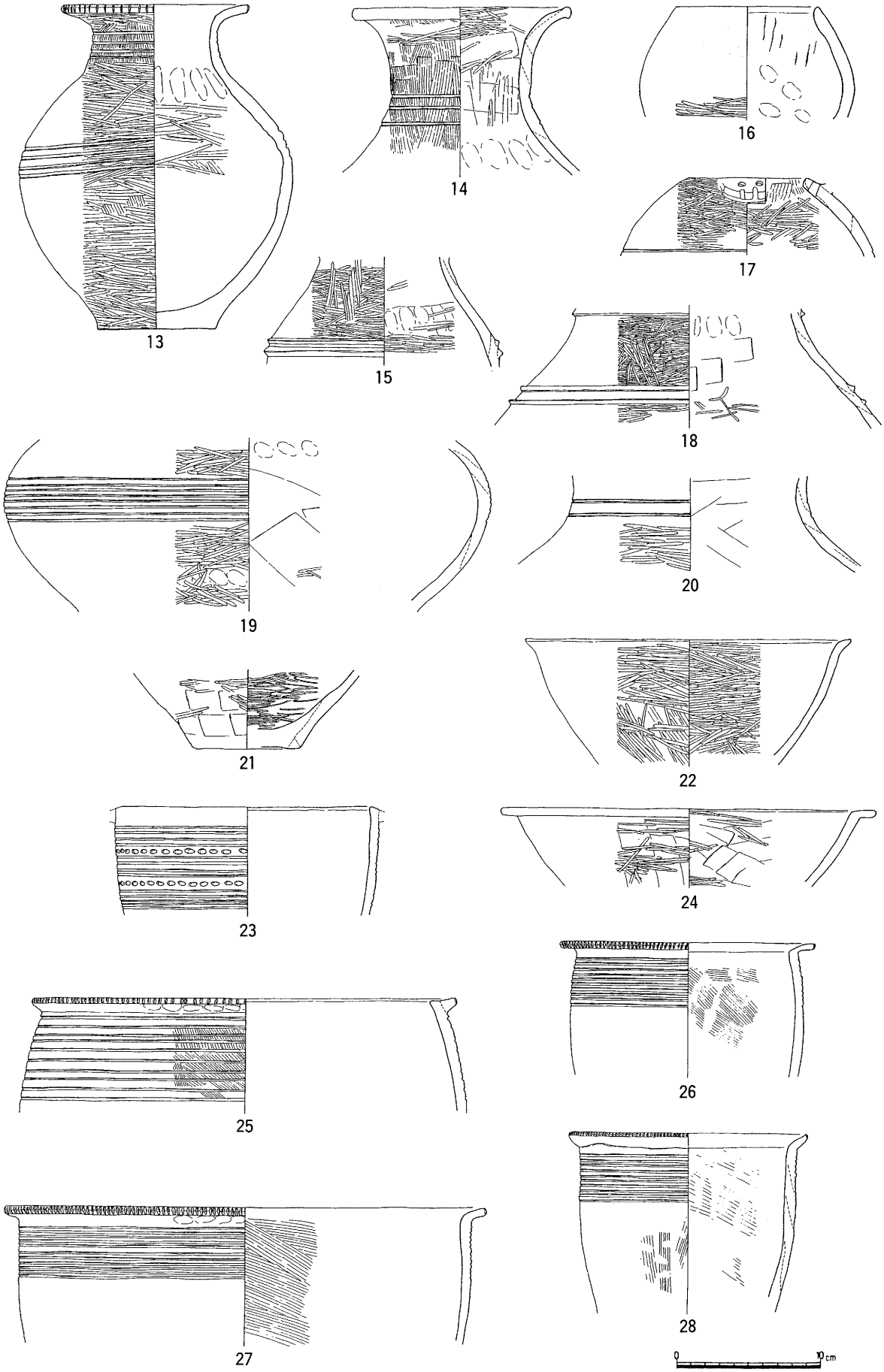
竪穴住居１

竪穴住居１は、環境整備事業で遺構復元の資料を得るため、昭和41（1966）年調査区と未調査区を含め住居全体を検出した。調査の結果、南東側が別遺構により床面まで削平を受けていた。平面形はほぼ円形を呈し、径約4.5～4.7ｍ、床面までの深さは検出面から約25㎝を測り、床面積は約16.6㎡である。壁体溝は検出されなかった。周壁の切り合い関係が認められないが、床面にいくつかの柱穴を検出したことから、建て替えの可能性が考えられる。主柱穴は、周壁近くにほぼ同一円形状に並ぶ径約50～80㎝の掘り方に、柱を据え付ける部分を一段深く彫り込んだ柱穴を中心に周壁近くのほぼ同一円周上に並ぶ６本と考えた。各主柱穴間の長さに約1.1ｍ～2.0ｍと差があり不正六角形を呈する。中央穴は、ほぼ中央に位置し長径45㎝、短径30㎝、深さ約20㎝を測った。

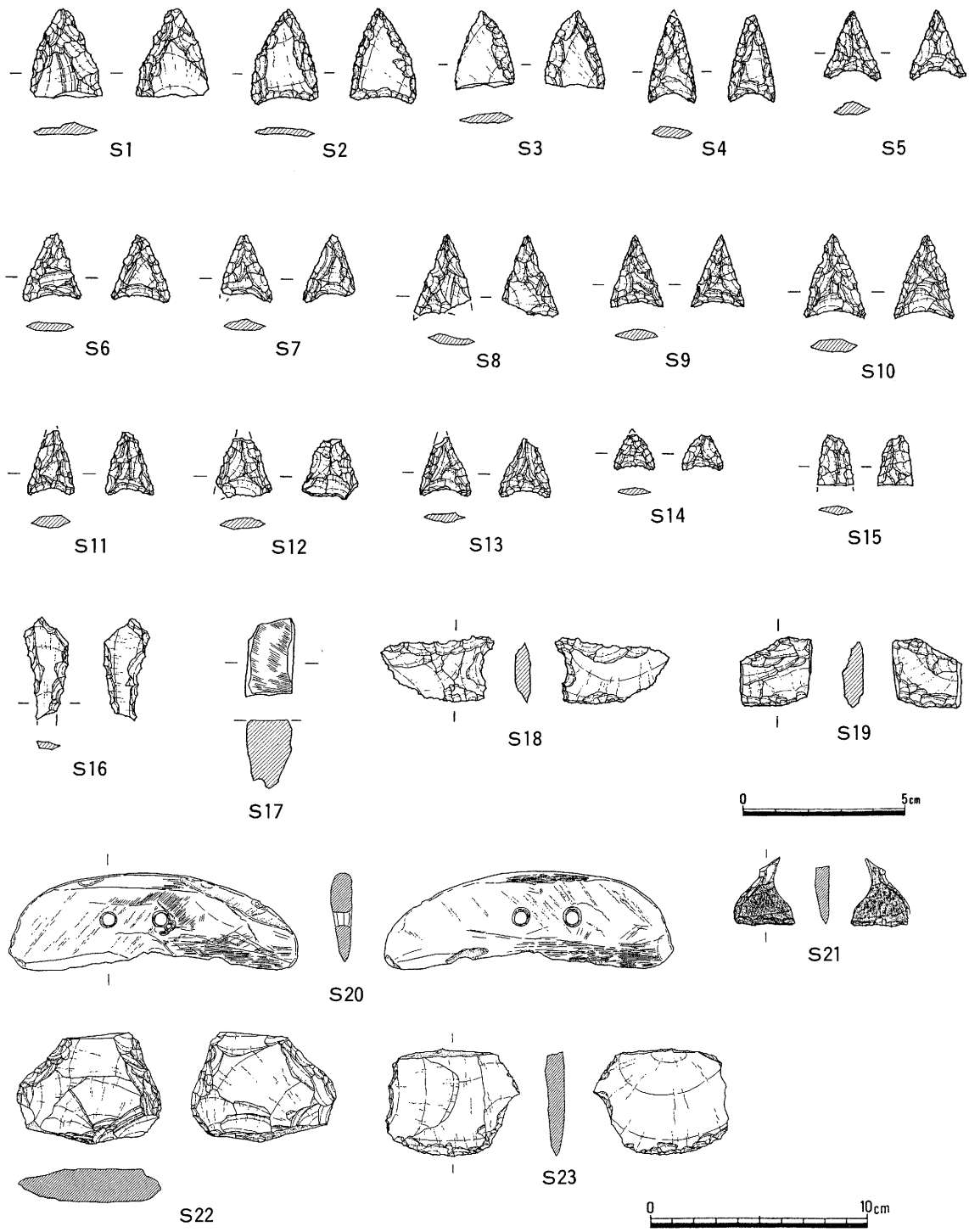
出土遺物は、少なく床面での原位置に存在するものもなかった。また、サヌカイト片と共に石鏃の出土があった。時期として弥生時代後期中葉に比定される。



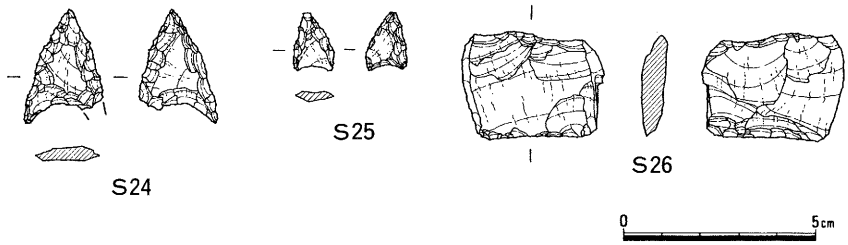
第75図　Ｔ６貝塚・溝１出土土器（1/4）



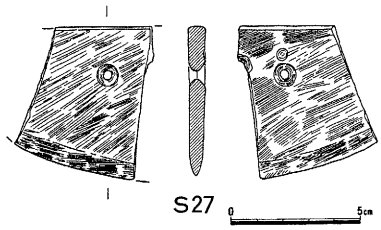
第76図　Ｔ10溝２出土土器（1/4）



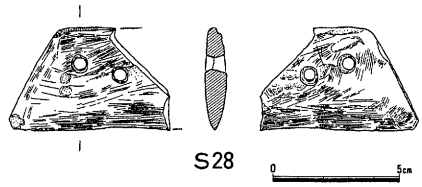
第77図　Ｔ６貝塚・溝１出土石器（1/2・1/3）



第78図　Ｔ10溝２出土石器（1/2）



第79図　T10溝２出土石器（1/3）



第80図　T５溝１出土石器（1/3）

土器観察表

遺物番号	器　種	手法・形態の特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
1	壷形土器	頸部に６条のヘラ描き沈線を施す。	淡橙色	砂粒含	良好	第２次貝層
2	壷形土器	口縁内側に波状と円弧の貼付け突帯をめぐらす。	淡褐色	砂粒多	良好	
3	壷形土器	体部中央に３条の貼付け突帯を飾り、刻み目を施す。	暗赤褐色	砂粒含	良好	第１次貝層
4	壷形土器	口縁内部に２条の貼付け突帯。外側に２条の貼付け突帯とヘラ描き沈線を施す。	暗赤茶褐色	砂粒含	良好	第１次貝層
5	壷形土器	体部中央に２条の貼付け突帯を飾り、刻み目を施す。	暗赤褐色	砂粒含	良好	
6	甕形土器	口縁部やや下に貼付け突帯を飾り、端部に刻み目、上部に連続竹管文を施す。突帯を境に上部に２段の連続竹管文、下部に３条のヘラ描き沈線と連続竹管文と３条のヘラ描き沈線を施す。	淡褐色	砂粒含	良好	溝１埋土
7	甕形土器	口縁端部に刻み目を施す。体部上部に７条のヘラ描き沈線と２本１組でヘラ描きによる山形文とヘラ描き沈線を施す。	白褐色	砂粒含	良好	第１次貝層
8	甕形土器	口縁部内側がやや突出する。３条のヘラ描き沈線文を施す。	淡茶褐色	砂粒含	良好	第２次貝層最下層
9	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。４条のヘラ描き沈線文を施す。	淡茶褐色	砂粒含	良好	第２次貝層
10	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。４条のヘラ描き沈線文を施す。	暗赤褐色	砂粒含	良好	第２次貝層最下層
11	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。３条のヘラ描き沈線文を施す。	白褐色	砂粒多	良好	第２次貝層
12	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。４条のヘラ描き沈線文を施す。	暗赤褐色	砂粒含	良好	
13	壷形土器	口頸部・胴部に平行沈線４条を施す。口縁に刻み目を施す。外面はヘラミガキで仕上げる	淡赤褐色～白褐色	砂粒多	良好	口縁部を一部欠くがほぼ完形 溝２下層
14	壷形土器	頸部下位に３条のヘラ描き沈線を施す。	暗茶褐色～白褐色	砂粒多	良好	溝２下層
15	壷形土器	胴部に貼付け凸帯２条をめぐらす。	白褐色	微砂含	良好	第２次中層
16	無頸壷形土器	外面ヘラミガキ後ヨコナデ	白褐色	砂粒多	良好	溝２下層
17	無頸壷形土器	口縁上部に２ケ所の穿孔と把手の剝離が認められる。胴上部に沈線が１条施される。	暗茶褐色	砂粒多	良好	溝２下層
18	壷形土器	頸部と胴部に貼付け凸帯２条をめぐらす。	淡黄褐色	砂粒多	良好	溝２下層
19	壷形土器	胴部に８条のヘラ描き沈線を施す。	白橙色	微砂含	良好	溝２中層
20	壷形土器	頸部に２条のヘラ描き沈線を施す。	赤褐色	砂粒多	良好	溝２最下層
21	壷形土器	外面はヘラ状工具によりヨコナデ後、粗いヘラミガキを施す。	淡茶褐色	砂粒多	良好	溝２下層
22	鉢形土器	内外面とも粗いヘラミガキを施す。	茶褐色	砂粒多	良好	溝２下層

23	甕形土器	逆Ｌ字形貼付け口縁。体部上位には３段にわたる４条のヘラ描き沈線と２段にわたるヘラ状工具による刺突文を施す。	白褐色	砂粒含	良好	溝２最下層
24	鉢形土器	内外面とも粗いヘラミガキを施す。	乳褐色	砂粒多	良好	溝２上層
25	甕形土器	逆Ｌ字形貼付け口縁に刻み目を施す。体部上部に10条のヘラ描き沈線を施す。	乳赤褐色	砂粒多	良好	溝２下層
26	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。体部上部に10条のヘラ描き沈線を施す。	淡茶褐色	砂粒多	良好	溝２上層
27	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。体部上部に11条のヘラ描き沈線を施す。	黄茶褐色	砂粒含	良好	溝２下層
28	甕形土器	口縁部に刻み目を施す。体部上部に10条のヘラ描き沈線を施す。	淡茶褐色	砂粒多	良好	溝２上層

石器観察表

遺物番号	器　種	出土地点	石　材	最大長（mm）	最大幅（mm）	最大厚（mm）	重　量（g）	備　考
Ｓ１	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	27.25	22.00	4.20	2.23	未製品
Ｓ２	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	28.60	20.25	2.80	1.59	凹基
Ｓ３	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	23.65	18.45	3.40	1.33	未製品
Ｓ４	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	26.50	14.65	3.05	1.16	先端欠、凹基
Ｓ５	石鏃	Ｔ６貝層１	サヌカイト	21.15	17.55	4.00	0.80	凹基
Ｓ６	石鏃	Ｔ６第２層	サヌカイト	20.40	18.15	3.50	0.96	先端欠、凹基
Ｓ７	石鏃	Ｔ６第２層	サヌカイト	20.75	14.65	3.10	0.76	片方の基部欠損、凹基
Ｓ８	石鏃	Ｔ６第２層	サヌカイト	24.60	15.50	3.00	0.99	凹基
Ｓ９	石鏃	Ｔ６貝層埋土	サヌカイト	10.70	12.40	2.00	0.28	先端欠損、凹基
Ｓ10	石鏃	Ｔ６貝層２	サヌカイト	25.85	18.55	4.15	1.39	凹基
Ｓ11	石鏃	Ｔ６貝層２	サヌカイト	19.60	14.15	4.40	1.07	凹基
Ｓ12	石鏃	Ｔ６第２層	サヌカイト	18.00	15.45	3.55	1.02	先端及び片方の基部欠損
Ｓ13	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	18.15	15.80	3.55	0.70	先端欠、凹基
Ｓ14	石鏃	Ｔ６貝層埋土	サヌカイト	10.70	12.40	2.00	0.28	先端欠、凹基
Ｓ15	石鏃	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	15.85	10.95	3.25	0.51	先端部片
Ｓ16	石鏃	Ｔ６第５層	サヌカイト	31.65	12.75	3.85	1.67	
Ｓ17	砥石	Ｔ６溝１埋土		23.50	14.20	21.50	12.82	細かな擦痕があり表面は滑らか
Ｓ18	石匙	Ｔ６貝層１	サヌカイト	21.40	34.80	4.95	3.00	
Ｓ19	スクレイパー	Ｔ６溝１埋土	サヌカイト	21.45	21.75	6.50	4.34	
Ｓ20	磨製石包丁	Ｔ６溝１埋土	粘板岩	134.00	39.90	10.05	71.92	刃部刃こぼれ
Ｓ21	打製石包丁	Ｔ６貝層埋土	サヌカイト	31.40	27.25	6.80	4.37	両面共に摩滅
Ｓ22	スクレイパー	Ｔ６第３層	サヌカイト	50.45	67.00	16.80	73.60	両端が刃潰状になっている
Ｓ23	スクレイパー	Ｔ６貝層２	サヌカイト	60.80	49.15	8.90	31.10	剝片の刃部にそって２次加工を施す
Ｓ24	石鏃	Ｔ10溝２中層	サヌカイト	30.50	19.20	4.00	1.94	片方の基部欠損、凹基
Ｓ25	石鏃	Ｔ10溝２下層	サヌカイト	15.50	10.60	3.40	0.42	凹基
Ｓ26	楔形石器？	Ｔ10溝２上層	サヌカイト	28.00	36.90	9.20	10.01	
Ｓ27	磨製石包丁	Ｔ10溝２上層	粘板岩	59.70	47.20	5.95	30.82	中央部破片、刃部は摩滅により光沢あり
Ｓ28	磨製石包丁	Ｔ５溝１中層	粘板岩	40.35	61.75	7.30	28.20	穿孔の位置が片寄っているので破損後再度穿孔し研磨し直している

第４節　まとめ

今回の確認調査では、遺構復元にあたり貝塚・溝・竪穴住居の遺構規模・位置等の基礎資料から従来の知見をさらに補強するものでありまた、新たな遺構の検出により遺跡の性格を再考しなければならない資料も得た。限られた調査であったが、これまでの調査成果をふまえ溝１・２の性格について考えまとめとしたい。

門田貝塚の貝塚が形成された溝（ＳＤ06）については、平面形についてやや弧状を呈したことから瀬戸内地方では数少ない環濠と考えられた。また、人工的掘穿でなく自然河道の残存とも考えられた。さらに、1982年の遺跡範囲確認調査において発見されたＳＤ03を含めそれぞれの東方、西方において弥生前期土器の出土量が変わらないことより環濠でなく用水路としての可能性が指摘されている。

今回の確認調査では溝１・２の東西において弥生前期土器の出土量の差について比較できる調査を行っていないが、Ｔ６において溝１（ＳＤ06）へ貝殻が廃棄され形成された第１次貝層・第２次貝層の堆積状況やＴ８において溝２（ＳＤ03）の土砂の埋没方向から西方から東方へ埋没していることが確認できた。このことから、当時の遺跡中心地である生活空間の方向を想定できよう。

環濠の目的については従来の各論考によると大きく３つに分けられる。第１に集団間の抗争を背景として防御・防衛施設である。第２に沖積地に築かれた集落内の防水・耐水施設や害獣進入対策施設である。第３に実用的な施設でなく集団間の象徴的施設である。多くの考えとしては第１の集団間の抗争を背景として環濠集落が成立したとの見解が主導的である。

日本列島の環濠集落の出現から古墳時代初頭までの推移、時期的な形態・規模変遷から環濠集落を論じた吉留秀敏氏は、弥生時代の環濠に４回の画期を認め各画期において多様な性格や背景を予測した。門田貝塚の溝１・２について考えると、２条の溝は、ほぼ同様な規模を呈し、溝２については平面プランは環濠状を呈した。投棄された土器から溝２の方が新しい様相を呈し、２つの溝の掘穿時期差もあろうが機能の終了時期を示すものである。門田貝塚の立地する地点は、いわゆる「千町平野」の中心地であり弥生時代初期農耕集落の拠点集落であった門田貝塚の集落内に幅４～５ｍの人工的な溝を開削することは門田集落の構成員のみでなく周囲の小集落の集団が参加して行われたものと考えられる。機能としては、沖積地に築かれた集落内の防湿防水施設が第１であり、開削後比較的早い時期に埋没が行われたことも、溝が防御・防衛施設として築かれていない原因と考えられる。

参考文献

1　岡田　博　「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1984

2　近藤義郎　「門田貝塚」『岡山県史』第十八巻考古資料　岡山県　1986

3　都出比呂志　「環濠集落の成立と解体」『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店　1989

4　春成秀爾　『弥生時代の始まり』　東京大学出版会　1990

5　吉留秀敏　「弥生時代環濠集落の変遷」『牟田裕二君追悼論集』　牟田裕二君追悼論集刊行会　1994

6　吉留秀敏　「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』第33集　九州古文化研究会　1994

図版33

1．調査区全景（南西から）

2．調査区近景（南から）

1．T6貝塚断面（東から）

2．貝塚断面近景

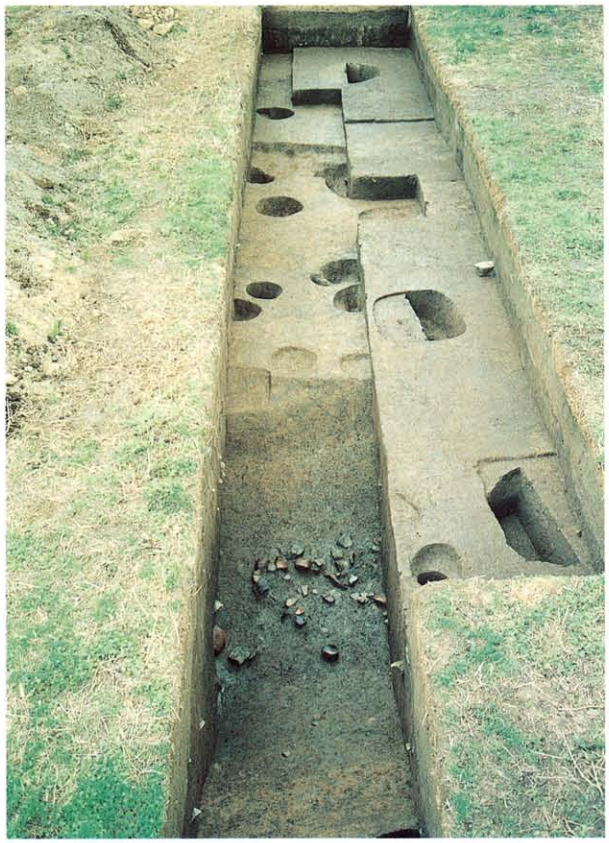
3．遺物出土状況

図版35

1．T4溝1検出状況
（西から）

2．T5溝1断面
（北東から）

3．T8溝1断面
（南西から）



1．T10溝２遺物出土
状況　　（南から）

2．T７溝２断面
（北から）

3．T８溝２断面
（南東から）

図版37

1．Ｔ３竪穴住居１
検出状況（北から）

2．Ｔ３竪穴住居１
完掘状況（北から）

3．Ｔ３竪穴住居１
完掘状況（西から）

第６章　環境整備事業のまとめ

史跡門田貝塚は、昭和８（1933）年地元研究者の長瀬　薫氏により発見され、65年後の平成10（1998）年に弥生時代の遺構を復元し「門田貝塚史跡公園」として邑久町では初めての史跡環境整備が行われたものである。しかし、今回の環境整備完成に至るまで65年間の間では、長瀬　薫・川崎務両氏の発掘による資料収集、邑久考古館での資料紹介展示、鎌木義昌氏による弥生時代前期後半の土器型式である「門田式」の設定、邑久町教育委員会・岡山県教育委員会・近藤義郎氏等による貝塚の形成状況の調査等が行われ、門田貝塚は弥生時代前期の瀬戸内沿岸地域を代表する遺跡であると学会での位置付けや地元住民や地権者により遺跡が地下に保護保存されてきた。さらに、昭和57（1982）年から16年間の文化庁・岡山県教育委員会の指導と助言を受けた遺跡範囲確認調査、史跡指定、史跡地の公有化、環境整備基本計画の策定等の取り組みにより門田貝塚が現代の生活空間に学習の場、憩いの場として活用できるよう生命が吹き込まれ文化財保護の新しい事業結果として「門田貝塚史跡公園」が生まれたものである。本章で今回の整備事業の特色、問題点、今後の課題について述べまとめとしたい。

整備事業の特色

史跡門田貝塚の環境整備事業は、遺跡の保護を第一に考え、現段階では遺構はすべて地下に保存し、弥生時代前期前半から鎌倉時代まで続く門田遺跡の中で、名称にもある貝塚を伴う弥生時代の農耕集落「門田ムラ」の一部を現代に創出することを基本とし、発見された遺構に今日的な新しい価値を与えたものである。このために以下の創出を目指した。

①原風景の創出

遺跡の特色である貝塚・大溝・竪穴住居の復元を遺構の確認調査による資料データを基に造成した遺構上に行い往時の空間を創出した。貝塚については、確認調査時採取した実物の貝殻を使用し、大溝を埋めて堆積した貝の最終堆積状況を平面的に復元した。

造成斜面の周囲には周辺の近代的構造物の視界遮断を兼ねて中高木を植栽した。

②学習できる空間の創出

遺構復元と共に見学者が文化財に親しめ学習出来るようにサインを確認調査時の写真、解説、図面を添えて施設の効果的活用できる空間を創出した。

特に貝塚復元したサインは貝殻の堆積状況の写真と背後の復元貝塚と一体化するよう配置位置やサインの高さに配慮した。

史跡地周囲に植栽した中高木は、確認調査時、大溝の土壌花粉分析の結果をもとに、食用樹種・農耕具用樹種・建築用樹種の３つのゾーンに分け配植し、往時の自然環境を復元した野外ミュージアムとしての機能をもたせた。

③遺跡への愛着心の創出

「門田貝塚史跡公園」は、遺構復元を通じ、遺跡に親しみ、重要性を理解すると共に人々の憩い

の場として広く一般に開放し広場を自然土に近い感触としての自然土舗装、樹木の系統的植栽・配植に合わせたベンチを配置し景観に配慮した空間を創出した。

整備事業の問題点

今回の史跡環境整備は、約2,200年前からの残された地下遺構の保存を第一に考え、造成土上に遺構を復元した。しかし、整備初年度の平成４（1992）年度に行った確認調査では、貝塚の貝層断面の再検出を行い現地説明会を開催し、その後、貝層断面を現地で見られる形で整備ができないかの意見を聞いた。このため、遺跡の活用として貝層断面を現地で見られる方法を模索したが、貝塚が地表や丘陵斜面に形成されたものでなく、幅約４～５ｍ、深さ約１ｍの大溝を埋める形で形成された貝塚であり溝下層からの湧水・貝層の保存維持・見学者の防災問題から現段階では、現地での露出展示は出来なかった。

史跡門田貝塚は、弥生時代前期から鎌倉時代に亘る複合遺跡であるが、遺構復元では遺跡の代表的時期に限り復元を行い、説明板で他の時期を解説したもので、遺跡の限られた遺構のみしか復元出来なかった。

史跡環境整備で、古墳・窯跡・寺跡・城跡などと比べ集落遺跡の整備の難しさを感じた。集落遺跡は現地表にほとんど遺構の存在がわからないため、環境整備をして遺跡の特徴をいかに地表に表現するかが集落遺跡の整備の難しさがあろう。

さらに、遺跡の規模、遺構、出土遺物が一体となり史跡の学術的価値が評価されるが、出土遺物を展示するようなガイダンス施設を現地に設けることが出来なく、遺跡の約300ｍ南に位置する邑久町立郷土資料館に「門田貝塚資料室」を設け展示した。史跡地での遺構と遺物の一体的活用は出来なかった。

今後の課題

門田貝塚の史跡地内の環境整備事業については６ヶ年の事業で行ったが、遺構の検出位置や特色を生かし従来の都市公園や児童公園整備には見られない史跡整備としての工法を取り入れたため今後の維持管理にも課題が残されている。

復元住居については、建築材の防虫・防炎・表面コーティングを施したが現状維持のため定期的な補修や茅の葺き替え、自然土舗装部分の表面の削れや土砂の流れによる補修、植栽樹木の管理、張芝の刈り込みや除草、史跡地内のゴミ問題等の管理体制を整える必要がある。

さらに、今回の環境整備事業は、門田遺跡の一部であり、さらに邑久町内約300ヶ所の遺跡の一つにすぎないものである。その後の歴史学習や地域コミュニティの利用を考えた時、施設として周辺整備の必要性があげられる。史跡地周辺部の宅地化が進む中で門田遺跡としての遺跡範囲の確認や保護、史跡公園へのアクセス道や駐車場の整備、管理施設やトイレを含めたガイダンス施設の整備、地域コミュニティ活動の一施設としての位置付け等地域と行政と共に門田貝塚史跡公園が利用されるようにならなければならない。

今後、邑久町の歴史の原点ともいえる門田貝塚を中心とした町内の遺跡や歴史遺産とのネットワーク作りを行い史跡門田貝塚の活用と文化財保護活動を行っていきたい。

付載

付載１　門田貝塚土壌花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

門田貝塚（岡山県邑久郡邑久町尾張字門田所在）は、縄文時代後期以降の旧吉井川の沖積作用により形成された、南北約４km、東西約1.5kmの自然堤防上に位置する（図１）。これまでの発掘調査では、ハイガイやシジミなどの貝殻で埋積された弥生時代前期の溝が確認された。この溝内から伴出した弥生時代前期の土器は、「門田下層式」あるいは「門田式」と命名され、本遺跡は瀬戸内海沿岸の弥生時代前期の標式遺跡として著名である。

今回、門田貝塚の史跡整備事業として、弥生時代前期の貝塚を伴う溝の範囲確認と貝塚および集落の規模を確認するための発掘調査が邑久町教育委員会により実施された。弥生時代前期の溝の性格は、①集落防衛のための環濠、②集落を区画するための溝、③水捌けに必要な施設、④水田に伴う用水路などが考えられているが、今回の発掘調査でも結論は得られていない。

今回、弥生時代前期の溝埋積物を対象にして、遺跡周辺の古植生を推定するために花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。また、同溝埋積物を対象にして、溝の水域状況や埋積過程を推定するために珪藻分析を実施する。

１．試料

試料は、Ｔ－５溝－１（ＳＤ－06）、Ｔ－６溝－１（ＳＤ－06）、Ｔ－10溝－２（ＳＤ－03）の溝埋積物最下部より採取された試料番号①～③の合計３点である（図２・３）。試料の土性は、３試料とも黒褐色を呈する砂混じり粘土質シルトからなる。表１に分析試料表を示す。

表１．分析試料表

試料番号	調査区地点名	遺　溝　名	層名	土　性
①	Ｔ－５	溝－１（ＳＤ－06）	9	黒褐色砂混じり粘土質シルト
②	Ｔ－６	溝－１（ＳＤ－06）	15	黒褐色砂混じり粘土質シルト
③	Ｔ－10	溝－２（ＳＤ－03）	6	黒褐色砂混じり粘土質シルト

２．分析方法と結果の表示法

（１）花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10ｇの試料についてＫＯＨ処理、重液分離（$ZnBr_2$：比重2.2）、ＨＦ処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは、種類間の区別が困難なものであ

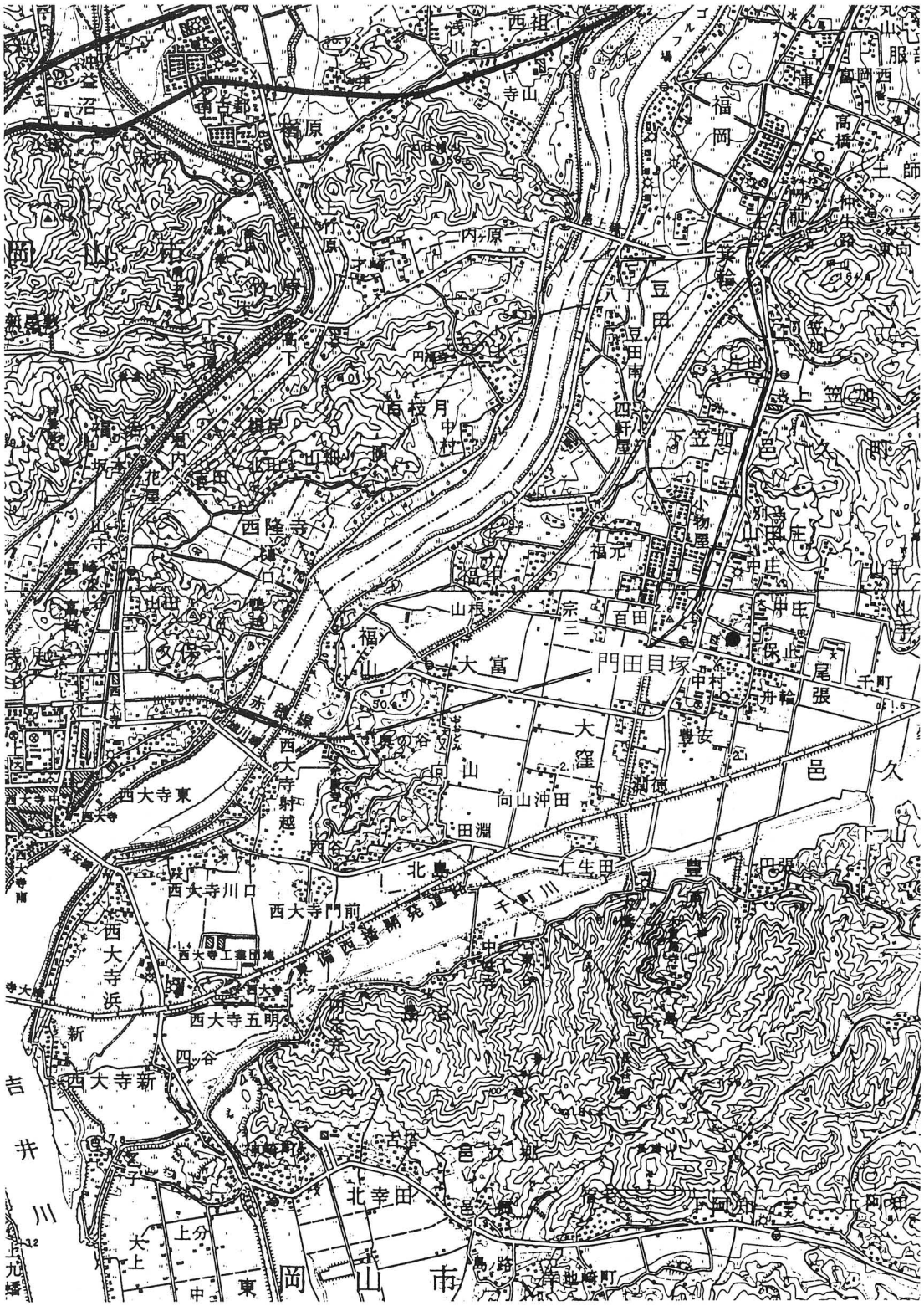

福岡
豆田
下笠加
上笠加
久
邑
西隆寺
福田
大富
門田貝塚
大窪
向山
向山沖田
田淵
北島
仁生田
西大寺東
西大寺川口
西大寺門前
西大寺五明
西大寺新
四谷
北幸田
邑久郷
岸地崎町
東岡山市
0
1km

図１．遺跡の位置

溝－1（SD－06）
溝－2（SD－03）
溝－3
宅地
宅地
貝塚
住居－1
住居－2
岡山大学発掘調査区
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T16
T18
T24
T25
T27
T31
T32
T33
SD05
SD04
SE04
SX06
SD02
SB04
SK03
SE01
SK02
SE02
SX05
SX04
SP03
SX03
SD03
SP02
SP01
SX02
SK05
SK01
SE03
SX01
SD01
SB02
SB03
SH01
SK04
SB01
SE05
SX10
SE06
SP05
SP07
SP04
SP06
SD06
SX07
SX11
SD03
SX08
SD07
SP08
SK09
SX12
SX09
2.3
2.5
2.75
2.25
2.4
1.8
2.2
1.7
2.6
確認調査区
弥生時代前期溝想定部分
貝層想定部分
0
20m

図２．遺構平面図

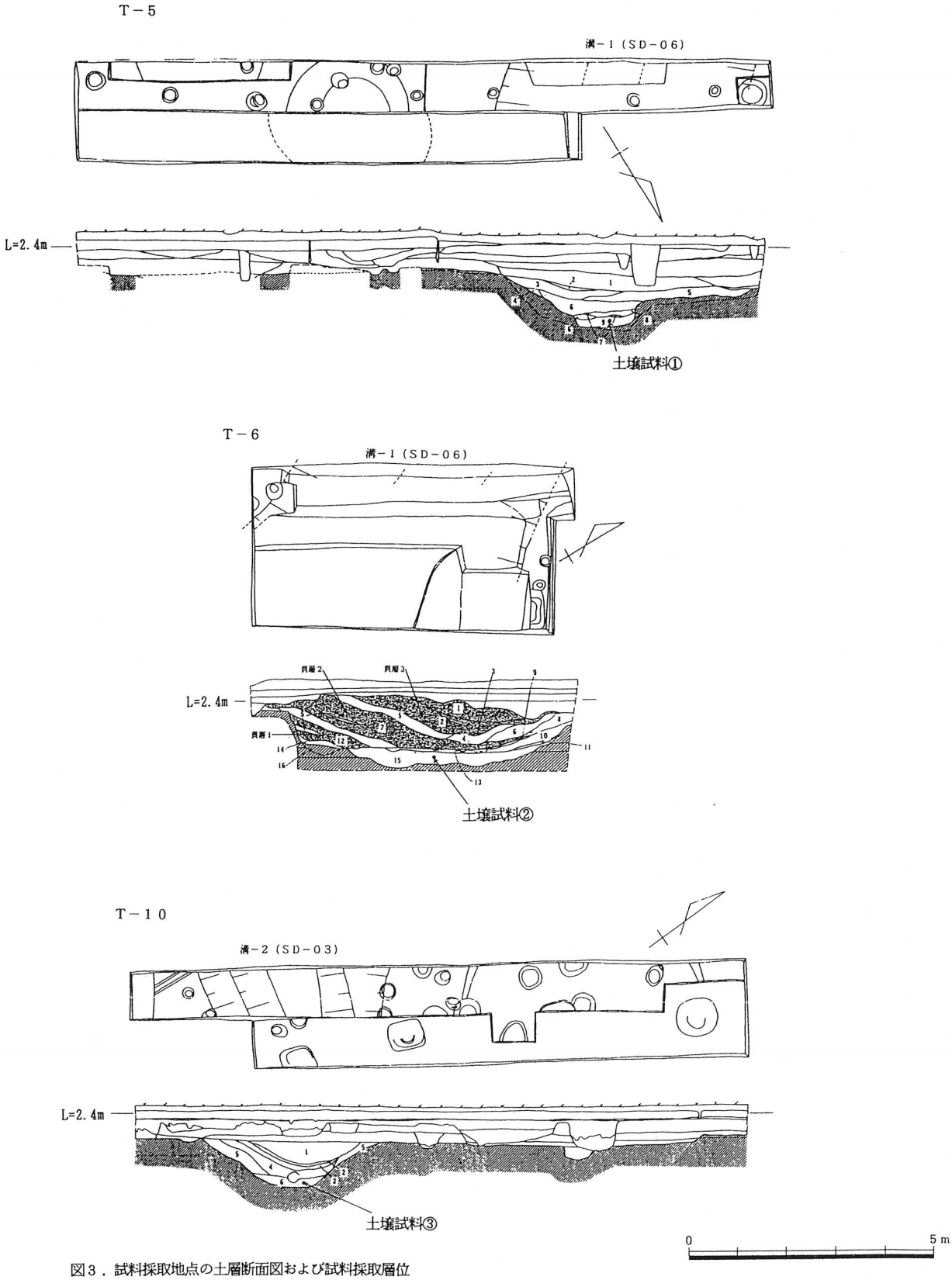


図3．試料採取地点の土層断面図および試料採取層位

図3．試料採取地点の土層断面図および試料採取層位

る。

（２）植物珪酸体分析

植物珪酸体は、試料約５ｇについて過酸化水素水と塩酸により有機物と鉄分の除去、超音波処理により試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に物理手・化学的な処理を行い、試料から分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現するイネ科の植物珪酸体を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。そのなかで、イネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の書類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料については、組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を＋で示す。

（３）珪藻分析

試料を湿重で約７ｇ秤量し、過酸化水素水（H_2O_2）、塩酸（ＨＣ１）の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂泊を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪酸殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（なお、珪酸殻数の少ない試料はこの限りでない）。この際、破損のない完形殻と破損のある非完形殻とを区別して計数し、珪酸殻の保存度（完形殻数／総数×100）を求める。種の同定は、K. Krammer & Lange-Bertalot（1986・1988・1991）などを用いる。珪藻の生態性の解説を表２に示す。

各試料から産出した珪藻化石は、産出個体数で表し一覧表に示す。また、産出率２％以上を示す主な珪藻化石については、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。

表２．珪藻の生態性

塩分濃度に対する区分		塩分濃度に対する適応性	生育環境（例）
海水生種：	強塩生種（Polyhalobous）	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種（Euhalobous）	海底性種、塩分濃度40.0～３０．０パーミルに出現するもの	一般海域（ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域）
汽水生種：	中塩生種（Mesohalobous）	塩分濃度30.0～0.5パーミルに出現するもの　強中塩生強（－Mesohalobous）　弱中塩生強（－Mesohalobous）	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種：貧塩生種（Oligohalobous）		塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの	一般陸水域（ex 湖沼･池･沼･河川･沼沢地･泉）
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性	
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種（Halophilous）	少量の塩分があるがよく生育するもの	高塩類域（塩水遡上域・温泉・耕作土壌）
	貧塩－不定性種（Indifferent）	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域（湖沼･池･沼・河川・沼沢地など）
	貧塩－嫌塩性種（Halophobous）	少量の塩分にも耐えることができないもの	湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種（Euryhalinous）	低濃度から高濃度までの広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種（Acidobiontic）	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖（酸性水域）
	好酸性種（Acidophilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沢地
	pH－不定性種（Indifferent）	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水域（ex 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種（Alkaliphilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの	
	真アルカリ性種（Alkalibiontic）	pH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域
流水に対する適応性	真止水性種（Limnobiontic）	止水域にみ出現するもの	流水の少ない湖沼・池沼
	好止水性種（Limnophilous）	止水域に特徴的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種（Indifferent）	止水域にも流水域にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種（Rheophilous）	流水域に特徴的であるが、止水域にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
	真流水性種（Rheobiontic）	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	好気性種（Aerophilous）	好気的環境（Aerial habitats） 水域以外の常に大気に閉された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育かる陸生珪藻を土壌珪藻という	• 土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 • 木の根元や幹に生えたコケに付着 • 濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 • 滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 • 洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

註　塩分に対する区分はLowe（1974）、pHと流水に対する区分は Hustedt（1937－38）による。

３．微化石の産状

（１）花粉化石

結果は、表３に示す。花粉化石は、３試料とも保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、あるいは壊れている。また、検出個体数・出現種類数ともに少ない。検出される種類は、木本花粉９種類、草本花粉４種類、シダ類胞子の合計14種類である。

（２）植物珪酸体

結果は、表４・図４に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体、３試料とも短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の保存状態が悪く、表面に小孔（溶食痕）が認められる。また、３試料とも短細胞珪酸体の検出個数が少なく、試料番号１では機動細胞珪酸体も検出個数が少ない。以下に各試料ごとに植物珪酸体の産状を述べる。

• 試料番号①：溝－１（ＳＤ－06）

表３．花粉分析結果

種類（Taxa）	トレンチ 遺構名 試料番号	Ｔ－５ 溝－１ 1	Ｔ－６ 溝－１ 2	Ｔ－10 溝－２ 3
木本花粉				
マキ属		1	－	－
モミ属		2	－	－
ツガ属		3	－	5
トウヒ属		1	－	－
マツ属		8	2	3
ハンノキ属		－	1	－
コナラ属コナラ亜属		－	－	1
コナラ属アカガシ亜属		1	－	3
ニレ属－ケヤキ属		－	－	1
草本花粉				
イネ科		3	－	31
サナエタデ節－ウナギツカミ節		1	－	－
ヨモギ属		6	1	－
オナモミ属		－	1	1
不明花粉		－	－	－
シダ類胞子				
シダ類胞子		41	10	10
合　計				
木本花粉		16	3	13
草本花粉		10	2	32
不明花粉		0	0	0
シダ類胞子		41	10	10
総花粉・胞子数		67	15	55

表４．植物珪酸体分析結果

種類（Taxa）	試料番号	T－5 溝－1 ①	T－6 溝－1 ②	T－10 溝－2 ③
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属		－	－	1
タケ亜科		1	3	11
イチゴツナギ亜科		－	1	－
不明キビ型		－	4	7
不明ヒゲシバ型		1	3	9
不明ダンチク型		－	1	6
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属		－	10	17
キビ族		－	1	4
タケ亜科ネザサ節		－	3	1
タケ亜科（その他）		－	106	81
ヨシ属		－	5	5
ウシクサ族		－	19	19
不明		4	60	78
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体		2	12	34
イネ科葉身機動細胞珪酸体		4	204	205
検出個数		6	216	239
組織片				
不明機動細胞列		－	1	1

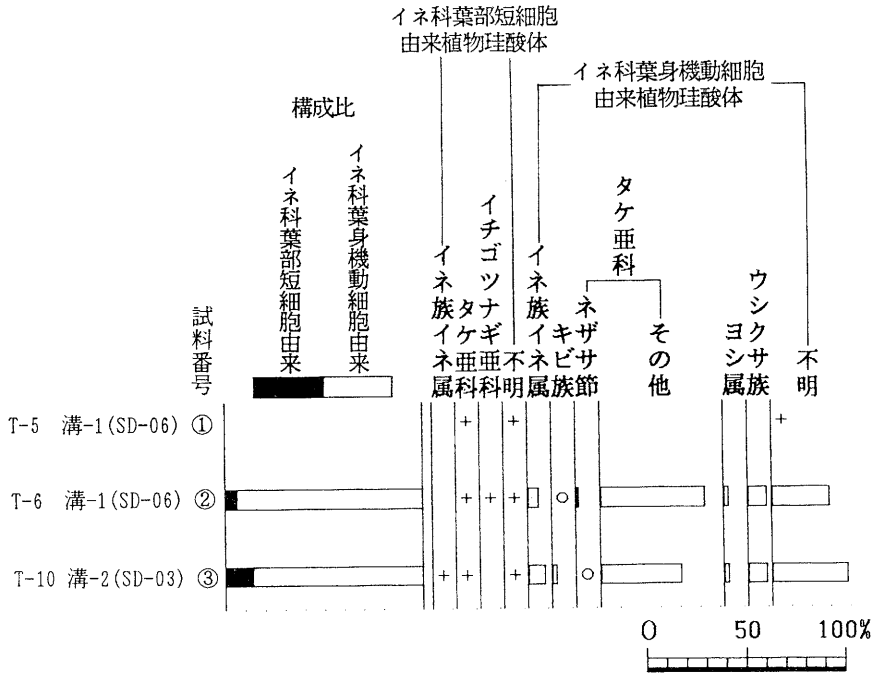


図４．溝埋積物の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、○は１％未満、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において検出した種類を示す。

表５．珪藻分析結果

Species Name	Ecology H.R.	Ecology pH	Ecology C.R.	T-5 溝-1 ①	T-6 溝-1 ②	T-10 溝-2 ③
[C1]Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			1	1	-
Coscinodiscus rudolfii Bachmann	Meh			-	1	-
[E2]Nitzschia lorenziana Grunow	Meh			-	1	-
Nitzschia spp.	Meh			-	1	-
##Achnanthes convergens A.Mayer	Ogh-hob	al-il	r-ph	-	6	1
##Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-hil	al-bi	ind	1	-	-
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	6	49
Achnanthes inflata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
##[J]Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	2	-
[K]Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	5	-
[K]Achnanthes lanceolata var. elliptica Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	1	-
##Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	-	1	-
[･A]Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	4	10	50
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	-	5	-
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-hil	al-bi	l-ph	-	2	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	4	-
##Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	2	-
#[L]Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-hil	al-il	ind	-	1	-
##[K]Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	-	1	-
##Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
##[K]Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	1	-
##[K]Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	-	4	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	3	-
[O]Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
Eunotia lunaris var. subarcuata (Naeg.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	2	-
[O]Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-
[O]Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	2	1	-
[･B][O]Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
[･B][O]Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
##Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	1
##Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	-	2	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	ind	ind	-	1	2
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	4	-
[O]Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	1	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	2	1
#Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	2	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	2	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	1	-
[･A]Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	10	3	6
Navicula bacillum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
Navicula capitata Ehrenberg	Ogh-hil	al-il	r-ph	-	29	-
#[･B]Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	3	19	6
##[･A]Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	2	1	2
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	4	35
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	3	6
[O]Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	-	-
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	4	-
Navicula hasta var. gracilis Skvortzow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	1	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	4	-
##[･A]Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	2	4	2
[･]Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	1	-
#Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	8	1
Navicula rhychocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	1
#[･B]Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1
Navicula subnympharum Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-
[J]Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	-	-	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	1
[K]Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	18	1
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	2	-
[･A]Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	1	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	1
[･B]Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	1	-	-
[･B]Nitzshia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-hil	al-bi	ind	-	-	24
#Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	5
Nitzschia umbonata (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	2
[･A]Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-
[O]Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	3	1
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
Pinnularia gibba var. mesogongyla (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
[･A]Pinnularia intermedia (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
#Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	-	2	-
#Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	1	1
Pinnularia rivularis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	-
[･]Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	3	4
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
[･B]Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	2	-	1
[O]Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	1	-
[O]Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	2	1
Synedra parasitica (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	-	2	-
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-
##Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	1	-
Marine Water Species				0	0	0
Marine to Brackish Water Species				1	1	0
Brackish Water Species				0	3	0
Fresh Water Species				36	210	208
Total Number of Diatoms				37	214	208

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
- Euh-Meh:海水生種-汽水生種
- Meh :汽水生種
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi:真アルカリ性種
- al-il:好アルカリ性種
- ind :pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- unk :pH不明種

C.R.:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種群

[C1]:海水藻場指標種　[E2]:汽水泥質干潟指標種（小杉，1988）
[J]:上流性河川指標種　[K]:中～下流性河川指標種　[L]:最下流性河川指標種
[O]:沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
#:好汚濁性種　##:好清水性種（渡辺ほか，1986）
[･]:陸生珪藻（[･A]:A群,[･B]:B群、伊藤・堀内，1991）

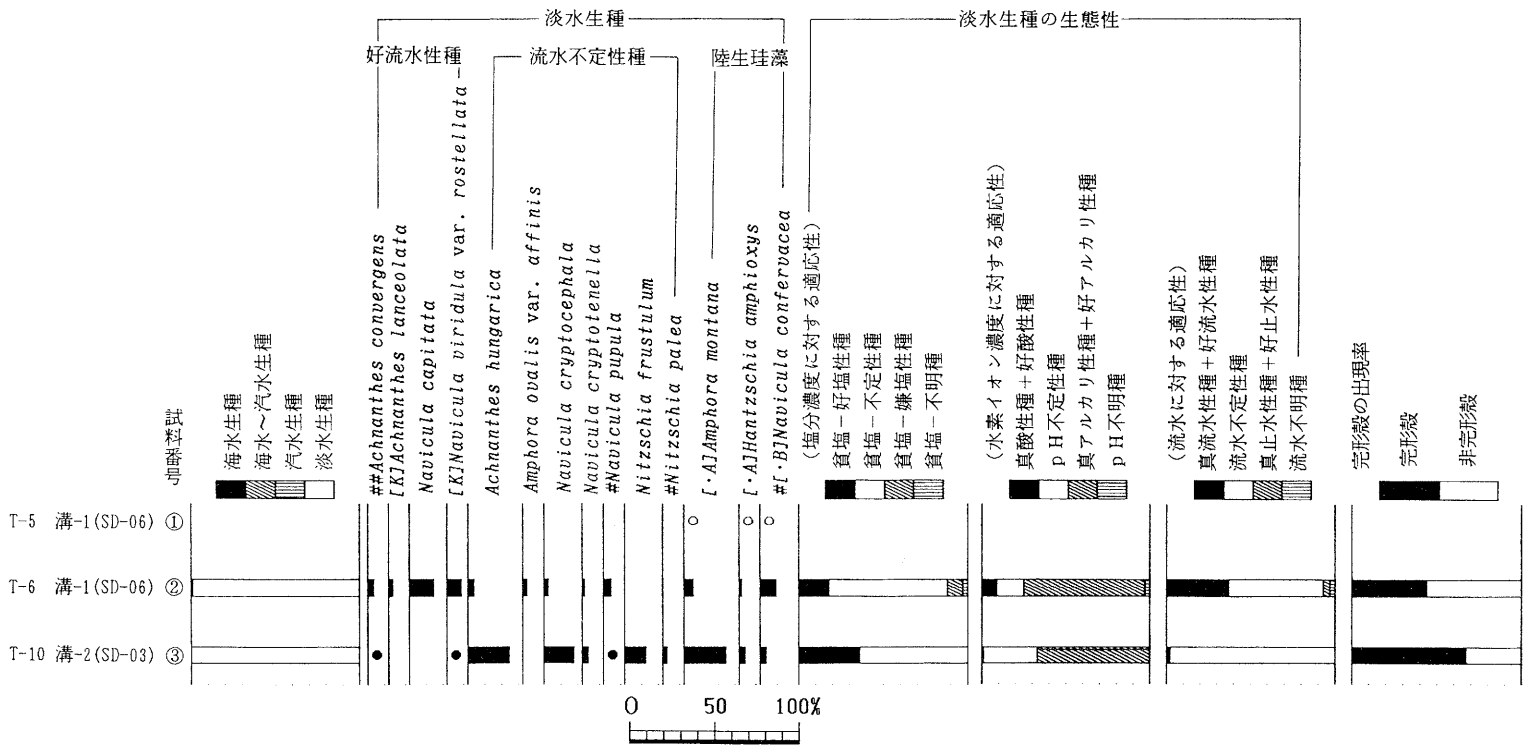


図５．溝埋積物の主要珪藻化石群集

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完成殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出する。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は１％未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。

環境指標種　〔K〕：中～下流性河川指標種（安藤、1990）

＃：好汚濁性種　＃＃：好清水性種（渡辺ほか、1986）

〔•〕：陸生珪藻（〔•A〕：A群、〔•B〕：B群、伊藤・堀内、1991）

本試料からは、植物珪酸体がほとんど検出されず、わずかにタケ亜科が検出されるのみである。

・試料番号②：溝－１（ＳＤ－06）

本試料では、タケ亜科機動細胞珪酸体が多産し、ウシクサ族・ヨシ属・キビ族・イチゴツナギ亜科などを伴う。栽培植物とされるイネ属が短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも検出される。

・試料番号③：溝－２（ＳＤ－03）

本試料では、タケ亜科機動細胞珪酸体が多産し、ウシクサ族・ヨシ属・キビ族・イチゴツナギ亜科などを伴う。また、イネ属が短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも検出される。

（３）珪藻化石

結果を表５・図５に示す。珪藻化石の産状は、試料番号①で産出した珪藻化石が37個体と非常に少ないが、これ以外の２試料から豊富に産出する。産出種の大部分は淡水生種により構成され、産出分類群数は、23属88分類群（69種・14変種・１品種・種不明４）である。以下に、各試料ごとの珪藻化石の産状を述べる。

・試料番号①：溝－１（ＳＤ－06）

前述したように珪藻化石の含有が極めて少ない。産出種の多くは Hantzschia amphioxys、Amphora montana、 Navicula mutica などの特に乾いた環境にとくに耐性の強い陸生珪藻のＡ群（伊藤・堀内，1991）に相当するものである。

・試料番号②：溝－１（ＳＤ－06）

塩分に対しては、貧塩－不定性種、水素イオン濃度に対しては、真・好アルカリ性種、流水に対しては好流水性種と不定性種が優占する。

産出種は、流水不定性で好塩性の Navicula capitata、 好汚濁性種でもあり陸生珪藻のＢ群（伊藤・堀内，1991）でもある Navicula confervacea、 中～下流性河川指標種（安藤，1990）の Navicula viridula var. rostellata が多産し、好流水性の Achnanthes convergens、 好汚濁性種の Navicula pupula、 中～下流性河川指標種の Achnanthes lanceolata、 陸生珪藻のＡ群の Amphora montana を伴う。

・試料番号③：溝－２（ＳＤ－03）

塩分に対しては、好塩性種と不定性種が多産する。水素イオン濃度に対しては、真・好アルカリ性種、流水に対しては、不定性種が優占する。

産出種は、流水不定性で富栄養水域に一般的な Achnanthes hungarica、 Navicula cryptocephala、 陸生珪藻のＡ群の Amphora montana が優占し、流水不定性で好塩性の Nitzschia frustulum、好汚濁性種の N. palea を伴う。

４．弥生時代前期の古植生について

３試料とも花粉化石は、ほとんど検出されなかった。わずかに検出された花粉化石は、当時周辺に生育していた母植物に由来している可能性がある。しかしながら、花粉化石の保存状態が悪いことを考慮すると、堆積物中に含まれていた花粉化石は堆積時あるいは堆積後に何らかの要因により分解・消失したと推定される。一般的に花粉化石は、落葉広葉樹に由来する花粉に比べ、針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が分解し難いとされている（中村，1967）。また、徳永・山内（1971）も同様なことを述べ、落葉広葉樹に由来する花粉の半数以上が風化の痕跡をみせていたら、その試料は花粉分

析に不適であるとしている。今回、花粉化石の検出個体数が少なく、わずかに検出された花粉化石の保存状態が悪い。そのため、弥生時代前期の頃の周辺植生については、花粉分析の結果により検討することを差し控え、植物珪酸体の産状をもとにして、周辺のイネ科植生に関する検討を行うこととする。

分析試料は溝埋積物であるため、周囲から流れ込んだ可能性がある。したがって、ここで得られた植物珪酸体組成は、広い範囲での植生を反映している可能性がある。また、3試料で多く検出されたタケ亜科植物珪酸体は、他のイネ科植物と比較して風化に強く、生産量が多いとされており（近藤，1982：杉山・藤原，1986)、植物珪酸体の残留しにくい土壌中でもタケ亜科の植物珪酸体が多く残留することが考えられる。今回、植物珪酸体の保存状態が悪いことから、植物珪酸体が溶解しており、タケ亜科が過大に評価されている可能性がある。これらのことを考慮すると、溝周辺にはタケ亜科以外にもヨシ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと考えられる。とくにヨシ属は、現在湿潤的な場所に生育することから、当時も溝周辺の湿った場所に生育していたと推定される。

また、栽培種とされるイネ属の産状については、試料番号②で機動細胞珪酸体が検出され、試料番号③で短細胞・機動細胞珪酸体の2形態が検出された。これは、先に述べたように試料採取層位が溝埋積物であることを考慮すると、周辺から流れ込んだ可能性がある。しかし、本遺跡周辺では弥生時代前期の水田址がこれまでの発掘調査で検出されていないことから、当時の稲作の有無については今回の分析結果のみで判断するわけにはいかない。今回の結果は、今後の発掘調査成果などを踏まえて再評価したい。

5．溝内の水域環境

珪藻分析の結果、水生珪藻が多産することにより、溝－1（ＳＤ－06）および溝－2（ＳＤ－03）には、水が存在していたことが推定される。溝－1（ＳＤ－06）では、好流水性種が多産して好止水性種が少ないことから水が滞水していた状態でなく、水が流れていたと推定される。また、好汚濁性種も多産することが水質は富栄養であったと考えられる。なお、試料番号①は、珪藻化石がほとんど産出せずに、陸生珪藻が多く産出することを考慮すると、付近の乾いた場所から溝内へ土壌が流れ込んだ可能性がある。一方、溝－2（ＳＤ－03）は、流水性の珪藻化石がほとんど産出せず、流水域にも止水域にも一般的にみられる流水不定性種が優占することから、溝内の水の流動については不明である。ただし、好汚濁性種や富栄養種が多産することから水質は富栄養であったと考えられる。

こにように溝－1（ＳＤ－06）・溝－2（ＳＤ－03）とも、水質的には富栄養化していたことが明らかにされた。これは、両溝が居住域内に存在することを考慮すると、人的な影響と考えることもできる。ただし、人的影響のない自然状態でも富栄養化することが知られており、一概に人的影響だけとは限らない。今後、居住域以外で同じような溝が検出された場合に汚濁の状態がどうであるか、また溝埋積物と基本土層で珪藻化石群集にどのような差がみられるかなどの平面的な調査を実施することで、富栄養化の原因についてさらに詳細な検討が可能であると思われる。

6．まとめ

今回花粉分析を行った結果、わずかにマツ属やコナラ属アカガシ亜属などが検出された。これらの

種類が周辺に生育していた可能性があるが、花粉化石の保存状態・検出個体数が悪いことから弥生時代前期の周辺の森林植生について充分に検討することはできなかった。ただし、植物珪酸体分析の結果より、当時遺跡の周辺低地には、タケ亜科・ヨシ属・キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと推定された。また、この溝の水域は富栄養化しており、少なくとも溝－1（ＳＤ－06）では水の流れがあったと推定された。

岡山県南部の瀬戸内海沿岸地域では、岡山市の津島遺跡（藤，1969)、倉敷市の上東遺跡（三好・臼井，1977)、玉野市八浜の児島湾を干拓した水田地帯（藤木ほか，1991）から採取された堆積物を対象に花粉分析が行われ、植生史の研究がなされているが、その調査例は未だ少ない。したがって、今後は花粉化石などの微化石が比較的良好に保存されている後背湿地・沼・湖などの水成堆積物を対象に自然科学分析調査を実施して、古環境の復元に関する資料を蓄積することが重要である。

なお、溝埋積物中からイネ属が検出されたが、弥生時代前期頃の本遺跡周辺の稲作の消長については、今回の分析結果のみで評価することを避けた。今後の低地部の発掘調査成果や時空的な分析調査結果の蓄積を待って再検討すべきである。

〈引用文献〉

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42, p. 73-88.

藤　則雄（1969）岡山家津島遺跡の花粉学的研究．考古学研究，16, p. 46-65.

藤木利之・三好教夫・田中　元（1991）玉野市八浜（岡山県）45m堆積物の花粉分析．日本花粉学会第32回大会講演要旨集，日本花粉学会，p. 43.

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrodiol. Suppl., 15:p. 131-809, 16:p. 1-155, 274-394.

Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen Deutschlands. 2. Teil. Rabenhorst's Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Bd. 7. p. 845.

近藤錬三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書，32p.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25, p. 31-64.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27, p. 1-20.

Krammer, K., and H. Lange-Bertalot. (1986・1988・1991) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2 (1・2・3) :p. 1-876, p. 1-585, p. 1-576.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻，6, p. 23-45.

三好教夫・臼井洋輔（1977）上東遺跡（岡山県）の花粉分析．特定研究古文化財，昭和51年度報告，稲作の起源と伝播，p. 30-35.

Lowe, R. L. (1974) Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. p. 1-334. In Environmental Monitoring Ser. EPA-670／4-74-005. Nat. Environ-mental Res. Center. Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

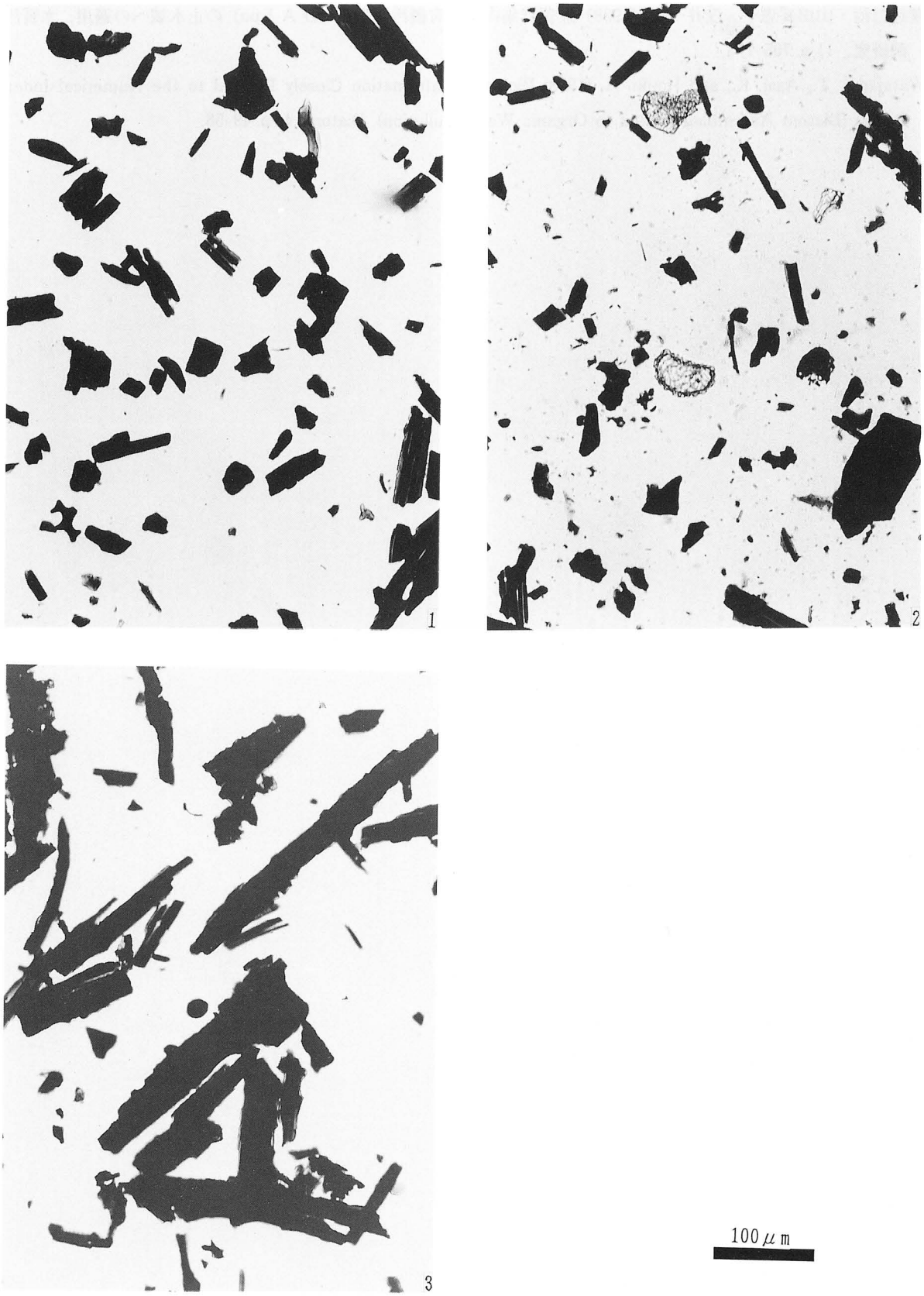
中村　純（1967）花粉分析．古今書院，232p.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定―古環境推定の基礎資料として―．考古学と自然科学，19,p. 69-84.

徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子．化石の研究法，化石研究会編，共立出版株式会社，p. 50-73.

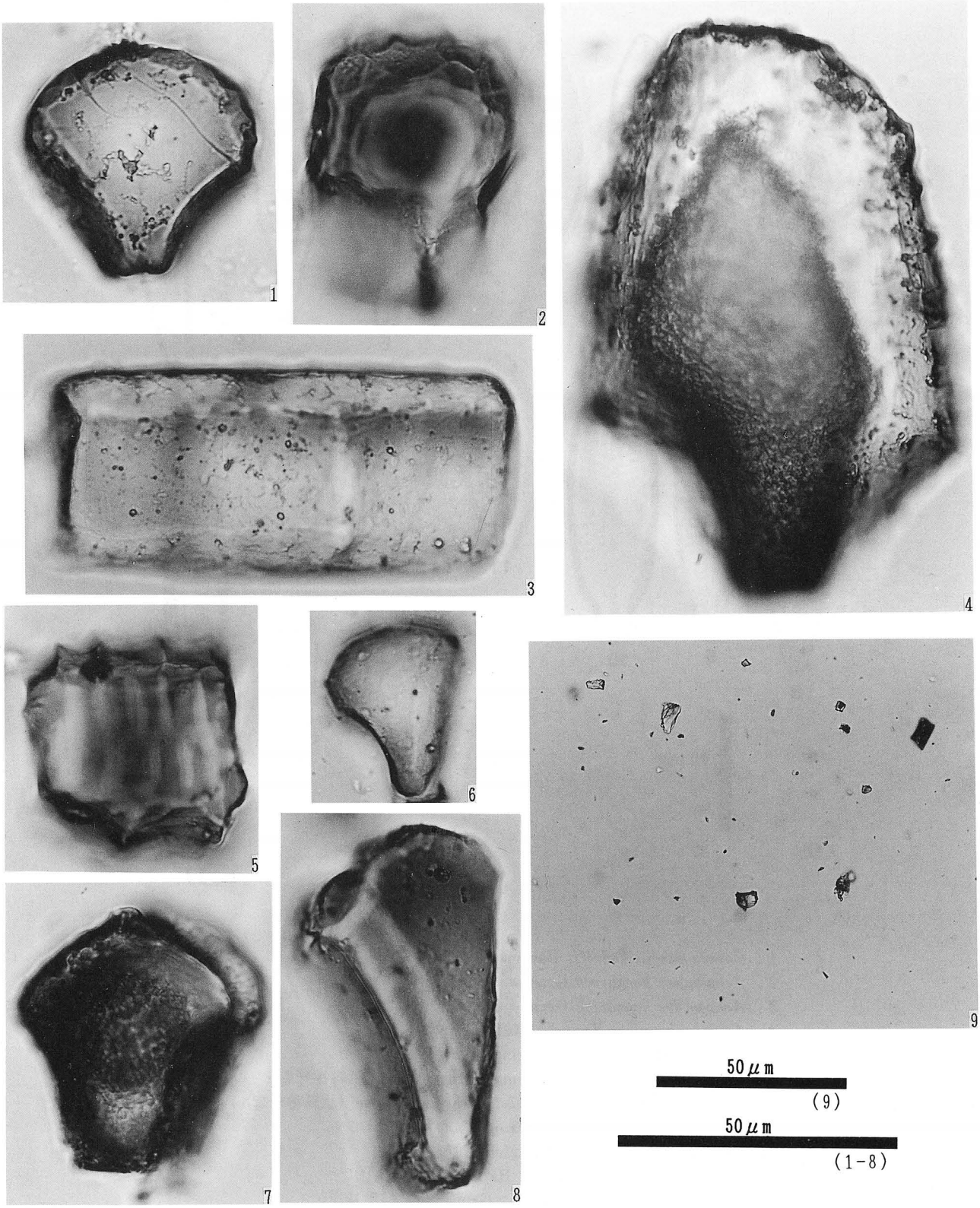
渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視（1988）珪藻群集による有機汚濁指数（D A I po）の止水域への適用．水質汚濁研究，11,p. 765-773.

Watanabe, T., Asai, K., and Houki, A. (1988) Biological Information Closely Related to the Numerical Index DAIpo (Diatom Assemblage Index to Organic Water Pollution). Diatom, 4, p. 49-58.



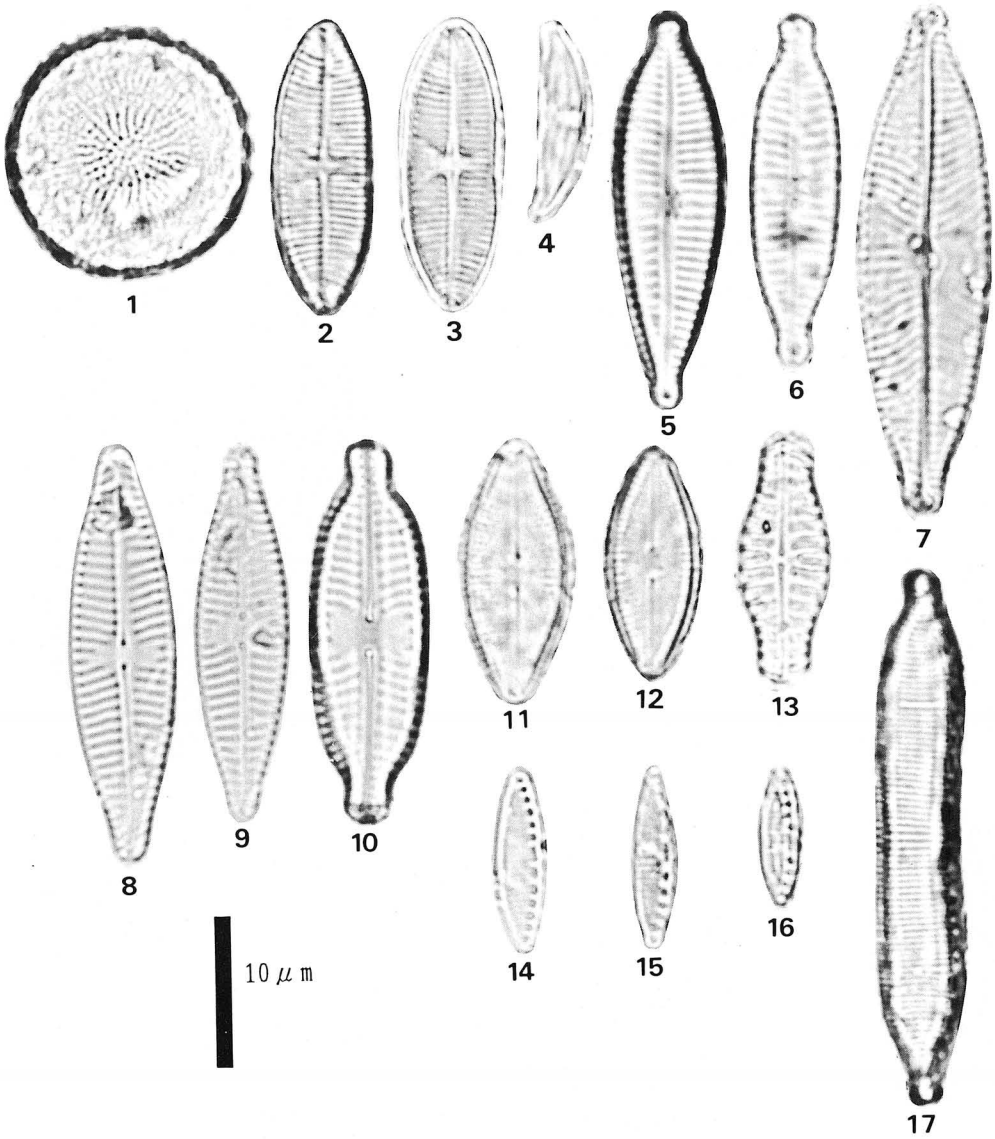
1．状況写真（試料番号①）　　2．状況写真（試料番号②）
3．状況写真（試料番号③）

図版1．花粉分析プレパラート内状況写真



1．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号③）
2．イネ属機動細胞珪酸体（試料番号②）
3．キビ族機動細胞珪酸体（試料番号②）
4．ヨシ属機動細胞珪酸体（試料番号②）
5．ネザサ節機動細胞珪酸体（試料番号②）
6．ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号③）
7．タケ亜科機動細胞珪酸体（試料番号②）
8．ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号②）
9．状況写真（試料番号①）

図版２．植物珪酸体



1．*Coscinodiscus rudolfii* Bachmann（試料番号②）
2．*Achnanthes hungarica* Grunow（試料番号③）
3．*Achnanthes hungarica* Grunow（試料番号③）
4．*Amphora montana* Krasske（試料番号②）
5．*Gomphonema parvulum* Kuetzing（試料番号②）
6．*Gomphonema angustatum*（Keutz.）Rabenhorst（試料番号②）
7．*Navicula viridula var、rostellata*（Kuetz.）Cleve（試料番号②）
8．*Navicula cryptocephala* Kuetzing（試料番号③）
9．*Navicula cryptocephala* Kuetzing（試料番号③）
10．*Navicula elginensis*（Greg.）Raifs（試料番号①）
11．*Navicula confervacea*（Kuetz.）Grunow（試料番号②）
12．*Navicula confervacea*（Kuetz.）Grunow（試料番号②）
13．*Navicula capitata* Ehrenberg（試料番号②）
14．*Nitzschia frustulum*（Kuetz.）Grunow（試料番号①）
15．*Nitzschia frustulum*（Kuetz.）Grunow（試料番号③）
16．*Nitzschia frustulum*（Kuetz.）Grunow（試料番号③）
17．*Hantzschia amphioxys*（Ehr.）Grunow（試料番号③）

図版３．珪藻化石

付載２　建築材製品別樹種一覧表

史跡門田貝塚環境整備事業で復元住居を行う上で、使用建築材検討のため以下の条件で遺跡出土の建築材の製品別樹種一覧表を作成した。（1997年８月作成）

１．建築材として建物柱根、丸材、角材、板材、梯材、杭等を対象とした。

２．遺跡は、九州・中国・近畿地方の西日本を対象とした。

３．時代は、弥生時代と古墳時代の遺構から出土した建築材を対象とした。

４．一覧表作成にあたり島地　謙・伊東隆夫編『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版　1988を基本に、その後の岡山県下での焼失住居出土の炭化材や建築材の樹種同定資料を加えたものである。

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
ほぞのある角材	エノキ	1	古墳	長越遺跡	兵庫県	1
ほぞのある角材	ヒノキ	?	古墳前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
ほぞ穴板状木製品	スギ	1	古墳	長越遺跡	兵庫県	1
ほぞ穴板状木製品	ヒノキ	2	古墳	長越遺跡	兵庫県	1
ほぞ穴付建材	イヌマキ	1	弥生前期	菜畑遺跡	佐賀県	3
ほぞ穴付建材	ゴンズイ	1	弥生前期	菜畑遺跡	佐賀県	3
ほぞ付板	カシ	1	弥生前期	菜畑遺跡	佐賀県	3
ほぞ板状木製品	ヒノキ	1	弥生中期末	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
ほぞ板状木製品	ヒノキ	1	古墳初頭	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
加工痕のある板材	モミ	1	弥生中期	西岩田遺跡	大阪府	2
加工痕のある板材	ヒノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
角板材	ヒノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
丸太	マツ（二葉）	2	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	スダジイ	2	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	シラカシ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	コナラ属	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	ビワ属	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	アカメガシワ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太	ミズキ属	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸太（半割）	ツバキ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
丸柱	ヒノキ	1	古墳	平城京跡	奈良県	6
桁	マツ（二葉）	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
建築材	サカキ	1	弥生前期～中期	恩智遺跡	大阪府	7
建築材	モミ？	1	弥生前期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モミ？	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モミ	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モミ	1	古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	マツ	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	スギ？	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	スギ	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	スギ？	1	弥生	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	サルグルミ？	1	弥生後期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	クリ	1	弥生前期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	クリ	2	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	シイ	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	シイ	6	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	シイ	1	古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	カシ	1	弥生後期初頭	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
建築材	クムクノキ	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	クムクノキ？	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	ヤマグワ？	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	クスノキ？	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	ヤブツバキ？	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	サカキ？	1	弥生前期～後期	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	サカキ	1	古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	ユズリハ？	1	弥生前期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	ユズリハ	2	古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ？	1	弥生前期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ	1	弥生前期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ？	3	弥生前期～後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ？	1	弥生前期～後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ？	1	弥生後期初頭	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	モチノキ？	1	弥生後期～古墳	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
建築材	キリ	1	弥生後期	上東遺跡	岡山県	9
建築材	スギ	1	古墳時代前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
建築材	ハンノキ	1	弥生後期～末期	大萩遺跡	宮崎県	10
建築材	シイノキ	9	弥生後期～末期	大萩遺跡	宮崎県	10
建築材	コナラ	6	弥生後期～末期	大萩遺跡	宮崎県	10
建築材	ヒサカキ	1	弥生後期～末期	大萩遺跡	宮崎県	10
建築材	クサギ	3	弥生後期～末期	大萩遺跡	宮崎県	10
建築材	ウラジロモミ	1	弥生中期～後期	辻田遺跡	福岡県	11
建築材	スギ	1	弥生中期～後期	辻田遺跡	福岡県	11
建築材	スギ	5	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
建築材	クリ	2	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
建築材	シイ	2	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
建築材	モミ	1	古墳前半	百間川沢田遺跡	岡山県	32
建築材	シイノキ属	1	弥生～古墳	窪木遺跡	岡山県	38
建築材片	イチイガシ	1	弥生後期	上東遺跡	岡山県	9
建築部材	ヒノキ属	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	スダジイ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	カシ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	フサザクラ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	クスノキ	2	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	クスノキ属	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	シロダモ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	マンサク	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	ユズリハ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	チシャノキ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	サンゴジュ	2	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
建築部材	ツガ属	1	弥生～古墳	窪木遺跡	岡山県	38
建築用材	アカガシ	1	古墳後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	30
住居構築材	クリ	6	古墳中期	津寺遺跡	岡山県	35
住居構築材	クリ	9	弥生後期	大木遺跡	岡山県	36
住居構築材	アカガシ亜属	1	弥生後期	大木遺跡	岡山県	36
住居構築材	サクラ属	2	弥生後期	大木遺跡	岡山県	36
住居構築材	エノキ属	2	弥生後期	大木遺跡	岡山県	36
住居構築材	シイノキ属？	1	弥生後期	大木遺跡	岡山県	36
杭（建築部材）	シイノキ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
杭（建築部材）	サンゴジュ属	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
杭	ヌルデ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
杭	コナラ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
杭	ネズミサシ	3	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
杭	ニガキ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
杭	アベマキ	2	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
杭	アラカシ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
加工材・杭	コナラ	1	古墳	百間川沢田遺跡	岡山県	33
加工材・杭	ムクノキ	1	古墳	百間川沢田遺跡	岡山県	33
加工材・杭	イチイガシ	1	古墳	百間川沢田遺跡	岡山県	33
加工材・杭	ヒノキ	1	古墳	百間川沢田遺跡	岡山県	33
縦杭	コナラ節	2	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
縦杭	ヒサカキ	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
縦杭	モッコク	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
縦杭	クヌギ節	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	マツ属	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	アカガシ亜属	3	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	クスノキ	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	コナラ節	1	弥生後期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	ナバノトネリコ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	エゴノキ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
横木	クスノキ	1	弥生中期	百間川沢田遺跡	岡山県	33
構造材	モミ	1	弥生前期後半～中期	四箇周辺遺跡	福岡県	14
構造材	サクラ類？	1	弥生前期後半～中期	四箇周辺遺跡	福岡県	14
構造材	ユズリハ？	1	弥生前期後半～中期	四箇周辺遺跡	福岡県	14
構造材	エゴノキ	1	弥生前期後半～中期	四箇周辺遺跡	福岡県	14
根がらみ	ヤマグワ	2	弥生中期後半	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
根がらみ	ヒノキ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
根がらみ	クリ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
根がらみ	クヌギ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
根がらみ	コナラ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
根がらみ	ヤマグワ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
妻覆い？	ヒノキ	1	弥生中期～古墳後期	和爾・森本遺跡	奈良県	16
三角板	スギ	1	古墳後期	池ノ内遺跡	鳥取県	17
受け柱	コナラ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
受け柱	ヤマグワ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
垂木	モミ？	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
垂木	コナラ	3	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
垂木	コナラ	2	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
垂木	アラカシ	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
垂木	サワグルミ	?	弥生末期～古墳	道添遺跡	福岡県	19
垂木	シイノキ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
組合せ角材	モミ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組合せ角材	ケヤキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組合せ式板状木製品	スギ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組合せ式板状木製品	ヒノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組合せ木製品	ムクノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組合せ有孔木製品	スギ	1	古墳前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
側木	ムクノキ	1	弥生中期後半	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
柱	カヤ	4	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	モミ	24	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	マツ（二葉）	4	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	ヒノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	シイノキ属	6	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	クヌギ	2	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	コナラ	13	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	カシ類	12	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	エノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
柱	クスノキ	5	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	タブノキ	2	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	ヤブツバキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	サカキ	8	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	バクチノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	サクラ属	4	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	ニガキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	トチノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	ケンポナシ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	シャシャンボ	3	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	イボタノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱	スギ	1	弥生中期後半	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
柱	クスノキ	1	弥生中期後半	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
柱	ケヤキ又はコナラ	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
柱	モミ？	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
柱	イヌマキ	1	弥生中期	土生遺跡	佐賀県	19
柱	スダジイ	2	弥生中期	土生遺跡	佐賀県	19
柱	バリバリノキ	2	弥生中期	土生遺跡	佐賀県	19
柱	マツ	3	古墳	平城宮跡	奈良県	6
柱	ヒノキ	2	古墳	平城宮跡	奈良県	6
柱	コナラ亜属	2	古墳	平城宮跡	奈良県	6
柱	シキミ	1	古墳	平城宮跡	奈良県	6
柱	リョウブ	1	古墳	平城宮跡	奈良県	6
柱	クヌギ節	1	古墳	百間川兼基遺跡	岡山県	57
柱	コナラ節	1	古墳	百間川兼基遺跡	岡山県	57
柱	クリ	1	古墳	百間川兼基遺跡	岡山県	57
柱又は杭	カヤ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	モミ	2	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	ヤナギ属	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	シイノキ属	7	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	クヌギ	4	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	コナラ	3	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	カシ類	13	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	フサザクラ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	クスノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	タブノキ	2	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	サカキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	ヤマウルシ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	シャシャンボ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	カキノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
柱又は杭	イボタノキ	1	弥生中期～後期	鬼虎川遺跡	大阪府	20
杭又は垂木	ケヤキ又はコナラ	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
杭又は垂木	クリ	1	弥生末期～古墳前期	五万原遺跡	岡山県	18
橋脚の柱	ヤナギ属	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	カシ属	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	コナラ	2	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	クヌギ類	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	ヤマグワ	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	カゴノキ	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の柱	ヤブツバキ	8	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	ヒヨウマツ	1	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	カシ類	3	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	コナラ	3	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	クヌギ類	1	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
橋脚の杭	クスノキ	1	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	モッコク	1	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
橋脚の杭	ヒサカキ	1	弥生後期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
柱穴内	マツ	1	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
柱根	クヌギ	2	弥生中期	瓜生堂遺跡	大阪府	21
柱根	コナラ	1	弥生中期	瓜生堂遺跡	大阪府	21
柱根	マツ	1	弥生中期後葉	若江北遺跡	大阪府	22
柱根	マツ	2	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	ヒノキ？	1	弥生中期後葉	若江北遺跡	大阪府	22
柱根	クリ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	クヌギ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	コナラ	15	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	カシ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	ヤマグワ？	1	弥生中期後葉	若江北遺跡	大阪府	22
柱根	ヤマグワ	2	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	サクラ	3	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
柱根	コウヤマキ	6	古墳	松野遺跡	兵庫県	23
柱根	チシャノキ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
柱根	スギ	1	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
柱根	シイ	1	弥生中期～後期	板付遺跡	福岡県	12
柱根	クスノキ	1	弥生中期	目久美遺跡	鳥取県	17
柱根	コウヤマキ	2	古墳前期	纒向遺跡	奈良県	24
柱根	クリ	1	古墳前期	纒向遺跡	奈良県	24
柱根？	モミ	1	弥生中期	瓜生堂遺跡	大阪府	21
柱根	アラカシ	1	弥生中期中葉	百間川今谷遺跡	岡山県	31
柱根	クスノキ	1	弥生中期中葉	百間川今谷遺跡	岡山県	31
柱根	ネズミサシ	1	弥生中期中葉	百間川今谷遺跡	岡山県	31
柱根	カヤ	1	古墳前半	百間川沢田遺跡	岡山県	32
柱材	カヤ	1	弥生前期	山賀遺跡	大阪府	25
柱材	ヤマグワ	1	弥生前期	山賀遺跡	大阪府	25
柱材	カツラ	1	弥生前期	山賀遺跡	大阪府	25
柱材	タブノキ	1	弥生前期	山賀遺跡	大阪府	25
柱材	タブノキ	1	弥生	山賀遺跡	大阪府	25
柱材	シイノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
組み柱	シイノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
梯子	モミ	1	弥生中期後半	巨摩廃寺遺跡	大阪府	4
梯子	スギ	1	古墳	桂見遺跡	鳥取県	26
梯子	シイノキ	1	弥生～古墳	原深町遺跡	福岡県	13
梯子	タブノキ	1	弥生中期	若江北遺跡	大阪府	15
梯子	クスノキ	1	弥生後期後半	拾六町ツイジ遺跡	福岡県	8
梯子	ヒノキ	1	古墳前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
梯子	サカキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
梯子	クスノキ	1	弥生	池上遺跡	大阪府	27
梯子	クリ	1	古墳	布留遺跡	奈良県	28
梯子	ヤマザクラ型	1	古墳	布留遺跡	奈良県	28
梯子	コナラ亜属	3	古墳	平城宮跡	奈良県	6
梯子（丸木）	スダジイ	1	弥生後期	池ノ内遺跡	鳥取県	17
梯子（板）	スダジイ	1	弥生後期	池ノ内遺跡	鳥取県	17
梯子	コナラ	1	古墳前半	百間川今谷遺跡	岡山県	32
梯子	ｶｺﾞﾉｷ属類似種	1	弥生前期	百間川原尾島遺跡	岡山県	34
梯子	ツガ属	1	弥生後期	窪木遺跡	岡山県	38
板	モミ	1	弥生中期	土生遺跡	佐賀県	19
板	クスノキ	2	弥生中期	土生遺跡	佐賀県	19
板	シイノキ	3	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5

製品名	樹種名	件数	時代	遺跡名	所在地	文献
板	スダジイ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
板	クスノキ	1	弥生後期	湯納遺跡	福岡県	5
板	イヌマキ	1	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板	ヒノキ	3	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板（ほぞ穴付）	イチイ	1	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板（ほぞ穴付）	スギ	1	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板（ほぞ穴付）	ヒノキ	10	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板（ほぞ穴付）	コナラ亜属	4	古墳	平城宮跡	奈良県	6
板材（建築部材）	マツ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
板材（建築部材）	スギ	2	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
板材（建築部材）	コウヤマキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
板材（建築部材）	ヒノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
板材（建築部材）	シイノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
板材	ツガ	1	古墳初頭	川入遺跡	岡山県	29
双孔板材（椅子？）	ヒノキ	1	古墳初頭	百間川沢田遺跡	岡山県	32
その他の板材	ヒノキ	1	古墳	長越遺跡	兵庫県	1
扉	ヒノキ	3	弥生中期～古墳後期	和爾・森本遺跡	奈良県	16
扉？	モミ	1	弥生中期～古墳後期	和爾・森本遺跡	奈良県	16
面取りのある角材	スギ	1	古墳	長越遺跡	兵庫県	1
有孔板材（建築部材）	スギ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
有段柱材	シイノキ	1	古墳前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
有頭組み柱	サカキ	2	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
有頭組み柱？	シイノキ	1	古墳前期前半	西岩田遺跡	大阪府	2
有頭抉入組み柱	カキノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
枠板	ヒノキ	1	古墳前期	纒向遺跡	奈良県	24
抉りのある角材	ヒノキ	1	古墳前期	長越遺跡	兵庫県	1
抉入組み柱	シイノキ	4	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
抉入組み柱（横架材）	シャシャンボ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2
抉入有頭組み柱	シイノキ	1	弥生後期	西岩田遺跡	大阪府	2

製品別樹種構成

柱材

樹　種	件数	樹　種	件数	樹　種	件数	樹　種	件数
コナラ	38	カヤ	7	カキノキ	2	アラカシ	1
モミ	28	タブノキ	6	バクチノキ	1	ネズミサシ	1
カシ類	26	ヒノキ	5	ニガキ	1	カツラ	1
シイノキ	24	シャシャンボ	5	トチノキ	1	ユリキ	1
マツ類	11	ヤマグワ	5	ケンポナシ	1	ヤブツバキ	1
サカキ	11	クリ	4	イボタノキ	1	ヤナギ	1
クヌギ	10	スギ	2	イヌマキ	1	フサザクラ	1
クスノキ	9	スダジイ	2	シキミ	1	ヤマウルシ	1
コウヤマキ	8	バリバリノキ	2	リョウブ	1		
サクラ属	7	ケヤキ	2	チシャノキ	1		
						合　計	231

角材

樹　種	件数
エノキ	1
モミ	1
ケヤキ	1
ヒノキ	1
スギ	1
合　計	5

丸太

樹　種	件数
マツ（二葉）	2
スダジイ	2
シラカシ	1
コナラ属	1
ビワ属	1
アカメガシワ	1
ミズキ属	1
ツバキ	1
合　計	10

垂木

樹　種	件数
コナラ	6
モミ	1
アラカシ	1
ケヤキ	1
クリ	1
シノキ	1
合　計	11

板材

樹　種	件数
ヒノキ	22
スギ	6
シイノキ	4
コナラ	4
クスノキ	3
モミ	2
モミ	2
カシ	1
スダジイ	1
イヌマキ	1
イチイガシ	1
マツ	1
コウヤマキ	1
ツガ	1
合　計	50

製品不明の建築材・構築材

樹　種	件数	樹　種	件数	樹　種	件数	樹　種	件数
シイノキ	22	サカキ	3	ヤマグワ	1	フサザクラ	1
クリ	20	ムクノキ	2	ヤブツバキ	1	シロダモ	1
スギ	10	アカガシ	2	キリ	1	マンサク	1
モチノキ	9	サクラ属	2	ハンノキ	1	チシャノキ	1
モミ	6	エノキ属	2	ヒサカキ	1	エゴノキ	1
コナラ	6	イヌマキ	1	ウラジロモミ	1	ツガ	1
ユズリハ	5	ゴンズイ	1	イチイガシ	1		
クスノキ	4	マツ	1	ヒノキ	1		
クサギ	3	サルグルミ	1	スダジイ	1		
サンゴジュ	3	カイ	1	カシ	1		
						合　計	120

- 柱材の樹種は、針葉樹としてモミ28点、マツ類11点、コウヤマキ８点などである。広葉樹としてコナラが最も多く38点、カシ類26点、シイノキ24点、サカキ11点、クヌギ11点、クスノキ９点などで重さに耐えうる重硬な樹種が使われている。
- 板材の樹種は、堅さが中庸で木目が通直なため割裂性が大であり板を取るのに優れているヒノキの利用が最も多く22点、次に同じ針葉樹であるスギ６点、広葉樹ではシイノキ４点、コナラ４点などが使用されている。
- 製品不明の建築材としては、広葉樹としてシイノキ22点、クリ20点と圧倒的に多く利用されており、強度が高く、耐朽性もあるため構築材に適した樹種として使われている。

文献

1．嶋倉巳三郎　「播磨・長越遺跡Ⅰ・Ⅱ」『兵庫県文化財調査報告第12冊』兵庫県教育委員会　1978

2．松田隆嗣　「西岩田」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1983

3．嶋倉巳三郎　「菜畑遺跡」『唐津市文化財調査報告書第５集』唐津市教育委員会　1982
4．松田隆嗣　「巨魔・瓜生堂」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1981
5．松本　昺・林　弘也　「福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集』福岡県教育委員会　1976
6．奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査報告Ｘ（古墳時代Ｉ）」『奈良国立文化財研究所学報第39冊』　1980
7．嶋倉巳三郎　『恩智遺跡Ｉ』瓜生堂遺跡調査会　1980
8．嶋倉巳三郎　「六町ツイジ遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集』福岡市教育委員会　1983
9．畔柳　鎮　「川入・上東遺跡出土木器類樹種鑑定綜合所見」『埋蔵文化財発掘調査報告書第２集』岡山県教育委員会　1974
10．大塚　誠　「大萩遺跡（２）」宮崎県教育委員会　1975
11．松本　昺・林　弘也　「辻田遺跡から出土した木材資料の樹種同定について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第12集』福岡県教育委員会　1980
12．嶋倉巳三郎　「板付」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第３集』福岡市教育委員会　1976
13．林　弘也・松本　昺　「福岡市西区原深町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集』福岡市教育委員会　1982
14．嶋倉巳三郎　「福岡市四箇Ｊ－10地区出土杭材の樹種について」『福岡市埋蔵文化財調査報告№47』福岡市教育委員会　1978
15．松田隆嗣　「若江北」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1983
16．嶋倉巳三郎　「天理市和爾・森本遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45集』奈良県立橿原考古学研究所　1983
17．古野　毅　「目久美遺跡および池ノ内遺跡出土木製品の樹種鑑定」『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1986
18．石川達芳　「小田郡美星町三山五万原遺跡から発掘された炭化木について」『倉敷考古館研究集報５』　1968
19．松本　昺・堤　壽一・林　弘也・北原龍士　「北部九州の遺跡から出土して木材及び木製品」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究』東京プレス　1980
20．伊藤隆夫・林　昭三・島地　謙　『鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種」『鬼虎川遺跡第７次発掘調査報告３』財団法人東大阪市文化財協会　1984
21．嶋倉巳三郎　「瓜生堂遺跡から出土した木製品の樹種」『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会　1981
22．嶋倉巳三郎　「東大阪市若江北遺跡ＳＢ501の炭化材と柱根」『若江北』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1983
23．松田隆嗣　「松野遺跡より出土した杭材の樹種について」『松野遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1983
24．嶋倉巳三郎　「纒向遺跡出土植物質遺物の調査」『纒向』奈良県立橿原考古学研究所　1976
25．嶋倉巳三郎　「山賀（その３）」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1984
26．嶋倉巳三郎　「桂見遺跡発掘調査報告書」『鳥取市文化財報告書Ｖ』鳥取市教育委員会　1978

27. 松田隆嗣　「木質遺物の樹種しについて」『池上遺跡・四ツ池遺跡発掘調査報告書第6冊自然遺物編』大阪府教育委員会・大阪文化財センター　1980
28. 嶋倉巳三郎・金原正明　「出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ」『奈良県天理市布留遺跡・三島（里中）地区』布留遺跡天理教発掘調査団　1981
29. 畔柳　鎮　「上東・川入遺跡出土木器の樹種鑑定」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会　1977
30. 畔柳　鎮　「旭川放流路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1980
31. 畔柳　鎮　「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1982
32. 松田隆嗣　「百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1993
32. 畔柳　鎮・パリノサーヴェイ株式会社　「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1993
34. パリノ・サーヴェイ株式会社　「百間川原尾島遺跡出土の木器樹種同定、種子同定」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1995
35. パリノ・サーヴェイ株式会社　「津寺遺跡中屋調査区出土の炭化材について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1996
36. 能城修一　「大木遺跡竪穴住居4から出土した炭化材の樹種」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113』日本道路公団広島建設局高梁工事事務所・岡山県教育委員会　1996
37. パリノサーヴェイ株式会社　「百間川遺跡群出土木製品の樹種」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会　1997
38. パリノサーヴェイ株式会社　「窪木遺跡出土木製品の樹種」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120』岡山県教育委員会　1997

1．整備竣工状況全景空中写真（堀家純一氏撮影）

2．整備竣工状況全景空中写真（堀家純一氏撮影）

図版39

1．整備竣工状況全景（南西から）

2．整備竣工状況全景（西から）

1．竪穴住居・貝塚復元状況空中写真（堀家純一氏撮影）

2．竪穴住居・貝塚復元状況空中写真（堀家純一氏撮影）

図版41

1．竪穴住居復元状況全景（南西から）

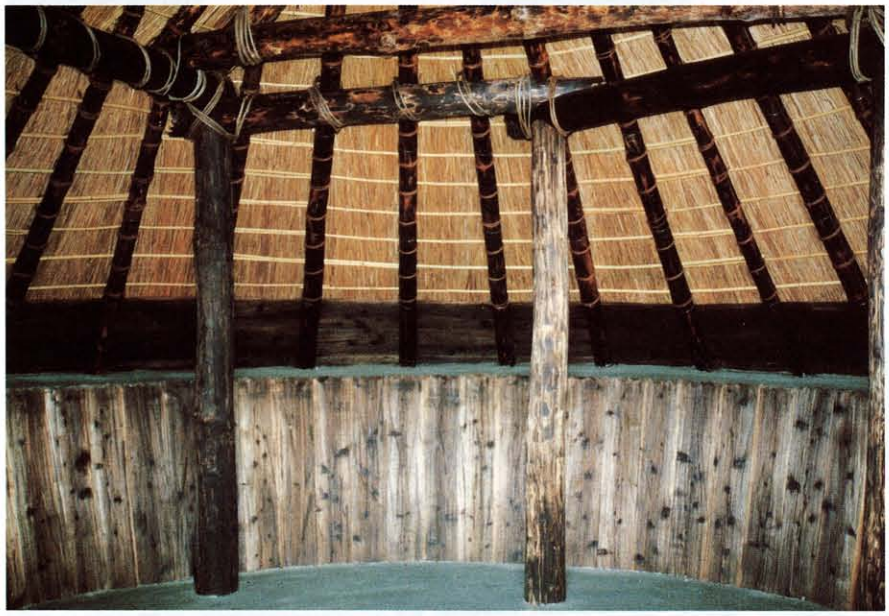
2．竪穴住居復元状況近景（南西から）

1．竪穴住居復元　外観（南西から）

2．竪穴住居復元　外観（南東から）

図版43

1．竪穴住居復元　内部



2．竪穴住居復元　内部

3．竪穴住居復元　入口部分（南西から）

1．貝塚復元状況（南から）

2．貝塚復元状況近景（南から）

図版45

1．貝塚復元状況近景（北から）

2．溝1・2復元状況全景空中写真（堀家純一氏撮影）

1．史跡標柱・案内板設置状況（北西から）

2．史跡標柱正面

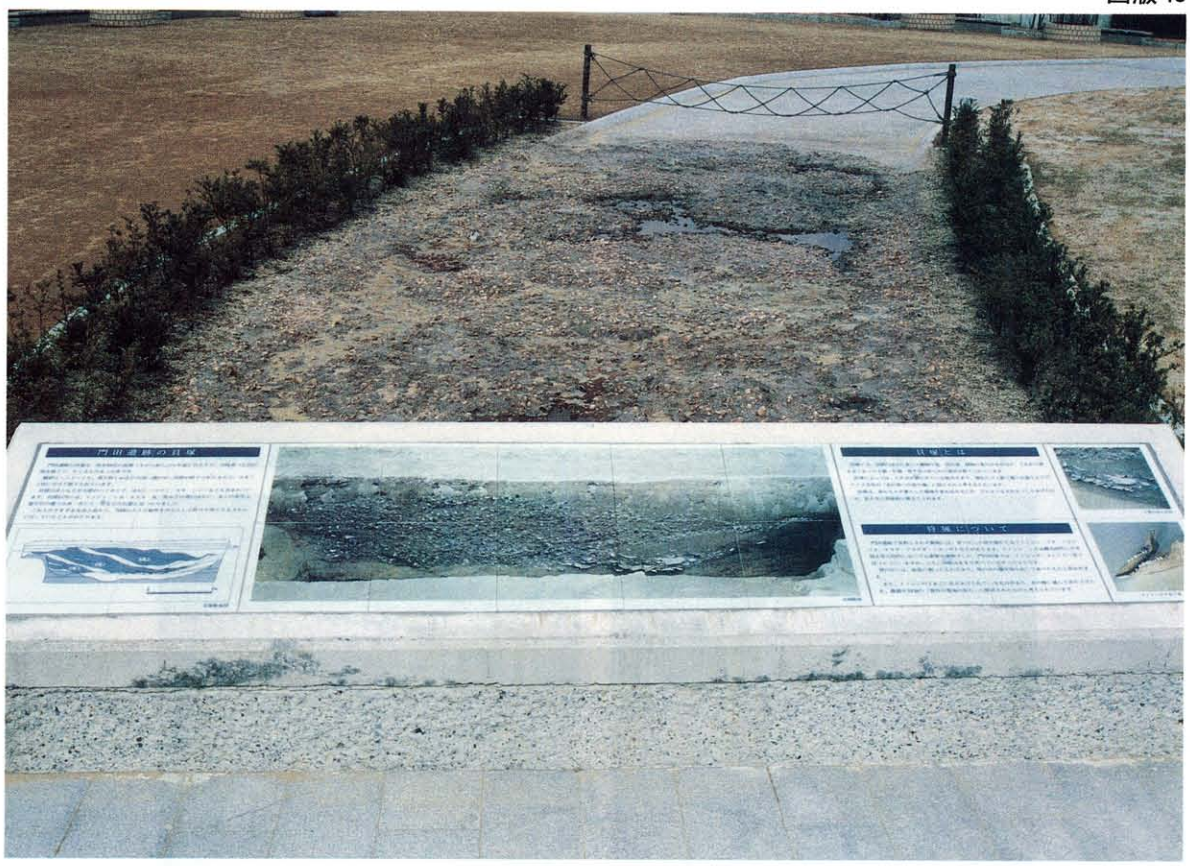
3．史跡標柱左側面

4．史跡標柱裏面

図版47

1．史跡総合説明板

2．史跡公園総合案内板



1．貝塚説明板

2．貝塚説明板

図版49

1．竪穴住居説明板

2．弥生土器説明板

3．樹木説明柱

4．樹木説明柱

5．樹木説明柱

6．樹木説明柱

報告書抄録

ふりがな	しせきかどたかいづかかんきょうせいびじぎょうほうこくしょ
書名	史跡門田貝塚環境整備事業報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬場昌一
編集機関	邑久町教育委員会
所在地	〒701-4221　岡山県邑久郡邑久町尾張300-1　℡　08692-2-1215
発行機関	邑久町教育委員会
所在地	〒701-4221　岡山県邑久郡邑久町尾張300-1　℡　08692-2-1215
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	史跡門田貝塚（しせきかどたかいづか）
ふりがな 所在地	岡山県邑久郡邑久町尾張字門田217番地ほか（おかやまけんおくぐんおくちょうおわりあざかどた）

コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
33362		34 39 47	134 5 50	1992.10.26 ～ 1993.03.22	228.7	記念物保存修理（一般）事業

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門田貝塚	集落遺跡	弥生時代～中世	貝塚・溝・竪穴住居	弥生土器・石器・骨角器	貝塚断面の確認

ふりがな 所収遺跡名	史跡門田貝塚（しせきかどたかいづか）（史跡整備工事）
ふりがな 所在地	岡山県邑久郡邑久町尾張字門田217番地ほか（おかやまけんおくぐんおくちょうおわりあざかどた）

コード		北緯	東経	調査期間	整備面積	整備目的
市町村	遺跡番号	°′″	°′″		㎡	
33362		34 39 47	134 5 50	1992.07.01 ～ 1998.03.31	5,219.0	記念物保存修理（一般）事業

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
門田貝塚	集落遺跡	弥生時代	貝塚・溝・竪穴住居	弥生土器・石器・骨角器	遺構復元・植生復元・説明板等

史跡門田貝塚環境整備事業報告書

―史跡保存修理（一般）事業―

平成10年３月20日　印刷
平成10年３月31日　発行

編　集　邑久町教育委員会
発　行　邑久町教育委員会
印　刷　西日本法規出版株式会社